第二節 對 英 交

六九 明治十三年一月九日 非上外務卿宛

駐獨公使ノ人選ニ付意見具申ノ件

五信第二號

明治十三年一月九日

倫同 森 有 神

井上外務卿殿

一七〇 明治士三一月十七日 森駐英公使宛

條約改正交渉ニ關スル件

内信

候生等無事消日候間御放慮被下度候年内モニ十七日迄ハ日新年之慶賀御同喜此事ニ御座候定テ船中ニテ御越年ト奉祭

溜ト推察候滯留罷在候三條山縣モ熱海行ナリ何レモ當月中ハ同所ニ滯淵配罷在候三條山縣モ熱海行ナリ何レモ當月中ハ同所ニ滯出足實ニ辭閑けル新正ヲ迎ヘ過ル十日歸京候尤伊藤ハ未夕出足質ニが開済で、湯治ノ爲參リ申候伊藤モ同日ヨリ熱海へ向

- 奉拜讀候 一番港ラ初メ「ポイントデゴール」共二三通ノ尊書難有
- 分御地ニ於テ調印云々ノ儀ハ不起事ト奉存候等モ御無異ト奉慶賀候御書中ニ於テ倫敦調印之事英政府等モ御無異ト奉慶賀候御書中ニ於テ倫敦調印之事英政府ト云場合ニハ至リ銀且元來於東京調印ト相定有之候事多ト云場合ニハ至リ銀月では、一四日御無事御着英之由先以御安心且尊婦人竝ニ御愛兒

知候氣味ニテ僥倖ト奉存候

其上ニテ當地在留各公使へ相渡シ可申候然ル上ハ先ツヲ 左候へハ各之三冊共二老兄竝鮫島迄ハ至急差出シ可申候 條取調中二御座候大概ハ來月中二整調可致見込二御座候 當時粗出來揚リ又稅關規則モ英譯最中ニ候外ニフレンド = 申込候處此儘ニテハ双方前途調和難被行點ハ皆克ク相分 ナル廉又從來各公使等ト談判上ノ面倒且將來可起ケ條等 シ就テハ今日迄實際困難多ク當時ノ條約書ニテハ 諸規則等外國人內國人同樣關係アル諸規則月々年々增加 議論ニ渉ル而 ル分ハ裁判ニ屬スル則舊條約ノ五六七ケ條ニ代ルベキケ シップ、ト、ジユーリスヂクションヲ一纒メニ成編シタ コンメルシャルネビゲーション一纏メニ成立タル へ渡シ不中候今一週間見合候テ相渡シ可中覺悟ニ 不承知故當節ハ ペンリーニ是非得失議論相始リ可申只今ニテハ無形ノ 此度ハ精密ナルタリフ差出シ申候尤此分ハ未タ各公使 候處彼ノ制限ニ至リテハ充分不同意ト申居候別テケネ ハメキ スト | 已尤タリフ相渡候節旣ニ各公使へハ行政上 相止 - ヲ屢々説 メ申候蘭公使モ其難澁ナル キ盡シ候得共生ニ於テ更 不充分 約條ハ 御座候

開キ候共其害ハ有之間敷ト存候 別は得共矢張其制限ハ異論多シ尤右ノ中露伊白西等ハ 本ル氏ハ格別異論ハ不申候得共東京大阪ヲ開キ度見込ニ へル氏ハ格別異論ハ不申候得共東京大阪ヲ開キ度見込ニ の日本之法律ニ依テ之ノ裁判ヲ受ル等ノケ條承知ノ上ハ い日本之法律ニ依テ之ノ裁判ヲ受ル等ノケ條承知ノ上ハ の日本之法律ニ依テ之ノ裁判ヲ受ル等ノケ條承知ノ上ハ の日本之法律ニ依テ之ノ裁判ヲ受ル等ノケ條承知ノ上ハ

傳報奉待候(以下省略)

進候折角時下御自愛奉祈候 頓首為致候覺悟ニ御座候先ハ要件而已內啓候餘ハ期後信可申為致候覺悟ニ御座候先ハ要件而已內啓候餘ハ期後信可申

明治十三年一月十七日

井上

森有禮閣下

井上外務卿時代 劉英交渉 **ーセー ーセニ** 主 1 一月十七日附鮫鳥公使宛二七三同文尚五文書參照

老院ノ江木ヲ任シ申候
と完了、江木ヲ任シ申候
と完了、江木ヲ任シ申候

ヲ旨トシ則イクヲール・フーチングニテ西洋各國へ係ハウ無事ニ赴クノ形ヲ顯シタリ極密ニ候得共伊藤トモ内談候外ニ竹添氏李鴻章トノ筆談寫ニテ之ヲ思考スル時ハ漸候外ニ竹添氏李鴻章トノ筆談寫ニテ之ヲ思考スル時ハ漸リンペンセーションニハ條約改正ヲ望ミ其大旨趣ハ平等中來ラズ併別紙宍戸公使總理衙門へ行談話ノ寫差出シ申申來ラズ併別紙宍戸公使總理衙門へ行談話ノ寫差出シ申申來ラズ併別紙宍戸公使總理衙門へ行談話ノ寫差出シ申申來ラズ併別紙宍戸公使總理衙門へ行談話ノ寫差出シ申申來ラズ併別紙宍戸公使總理衙門へ行談話ノ源を関する

2及3 | | 附屬書七及六參照

七一明治士至一月十三日 森駐英公使宛

獨逸國駐剳公使派出ニ關スル件

別信

註 別紙甲、乙號略ス 一六九文書参看

一七二 明治士三年一月十六日 非上外務卿宛

歐洲情勢囘報ノ件

去月三日付貴書今朝相通シ難有捧讀仕候今日ハ郵便差立取三月二日付

一付テハ貴諭ノ通リ先ツポンスホルト氏へ内談ヲ遂ケ後チ日御差立ノ分定テ右書類ナルヘクト屈指俟居候海關稅一件 海關稅一件航海通商條約書類御高案ハ去月二十日頃御差立 會二於テ悉ク除キ去リ實地ノ進步ヲ謀ルハ甚タ緊要ナリ 籍改方規程外漫行車馬止場所暴行等ノ如キハ此度改正 從來存在セル不便利乃チ犯罪捕縛ノ手續或ハ車稅取立方戶 御取極相成候方ト存候尤何策タリトモ銀テ御同案ニ有之候 由ヲ促カスノ氣味有之様ニ存候間寧ロ第二策ヲ以テ上策ト 際甚夕難ク且ツ爲メニ方今佛獨等所望ノ內地旅行雜居ノ自 座候裁判權一件ニ付鮫島公使へ御内諭ノ三策中第一策ハ實 改正一條ニハ不相替非常ノ御勉勵有之段欣喜實ニ此 急キ候ニ付細詳ノ報答仕兼候得共先以御清安御奉職且 可相成旨敬承候處本月十四日御電報中ニ相見へ候一月十八 時機ヲ見テ外務卿へ開談可仕候 事 一ノ機 =

管整力ニテ諸事都合宜ク幸ニ候同氏ノ言ニ從前東京ニ於テ キ日不政府深ク之ヲ責メス又後證ト爲ルヘキ書翰ノ往復ヲ リード氏先日兩度來訪一度ハ緩話ヲ得候不相替我カ爲ニ只 パアクス及ヒ其他ノ外國公使等暴言ヲ吐キ暴行ヲ働キシト シニ由リ後ニ至リ為事ノ便利ヲ失ヒ我志ヲ自由

> (中略) 文才アリテ倫同タイムス記者等ト交ル故ニ Elgar ト申スリード氏ノ選ニテ日本へ遣ハシアル者ハ頗 同氏ョリ老臺へ傳言ニ現今河村海軍卿ノ手ニ屬 レーン氏ハ依舊相勤メ今能ク働キ居候間御安心有之度候警 伸張スルニ由ナシト此言甚夕適切ナリ 御試用有之度ト セ n 英

ñ 人

不便利ノ事多カル 務卿フレシネ氏ト 鮫島公使病體ハ目今大ニ宜ク候乍去佛政府内閣變更シ新 ヘクト ハ未夕熟知セサ 存候 ル由ニ付我改正事件ニ ハ

强クスル 英政黨ノ鬪爭ハ近時頗ル過激ニ陷リ就中反對黨ノ頭領等 置キ被下度奉願候(下略) N ハ甚タ不便利ナルヲ以テ怠ラス時勢ニ注意仕居候在東京英 ハ格別關スル所爲シ但タ其力偏ニ强大ナルハ我事ヲ爲スニ 言論ハ惡ロヲ極メ却テ爲ヌニ自己ノ黨力ヲ損シテ政府黨ヲ 丈ケ御通示被下度且ツ此儀ハ本局公信局共ニ御下命成シ |談判及ヒ御往復ノ書翰類ハ事ノ大小ニ拘ハラス成 ノ景況ナリ固ヨリ何黨カ政權ヲ占ルトモ我ニ於 テ

十三年一月十六日

有

非 Ŀ 賢 臺 閣 下

註 1 五文書

2 省略セリ

明治士生月二十 日 森肚英外 使卵

ン氏へ謝狀送致ノ件

其ノ規則ハ在日本英國裁判所ニ於テ實際施行スヘキモ 進置候通り其接遇方ニ因り將來更ニ我便益ヲモ可謀出人物 趣ハ特ニ本件地方規則結果ノ爲ノミナラズ同氏儀ハ兼テ申 本地方規則中英國臣民ニ關スル條件ニ付我論旨ヲ至當ナリ モ多小同氏ノ媒介盡力ニ因リ斯ル好結果ヲ得候儀ニ有之候 ニシテ彼方二於テ之ヲ了諾セサルヲ不得事柄トハ存候得ト ン氏ョリ上野少輔迄及内報候然處右ハ因ヨリ我論旨ノ至常 ルコトヲ英國法律顧問ニ於テ評決相成候趣此頃貴館雇レ トシ且右規則ヲ設ルニハ在日本英公使ノ認可ヲ要セス而テ 今般別紙 付其邊ヲ慮リ右様相認候儀ニ有之候條閣下御一 、啓爾來倍御安淸可被成御鞅掌扑賀此事ニ御座候然ハ日 ノ通り同氏へ謝狀可差遣存候尤此書翰差遣候旨 プ上別 ノナ 1

> 邊モ御座候ハ、充分御示シ被下度候此段得貴意候也 成废候 其爲メ別書ハ披封ニテ差進候儀ニ候尚閣下御考慮糊封相 其爲メ別書ハ披封ニテ差進候儀ニ候尚閣下御考慮 ニ御異存モ無之候ハ、同氏へ御渡附被下度 共御渡之節ハー申迄モ無之候に

上

井

森 有 禮閣 <u>F</u>

明治十三年二月二十日

七四 明治士至月十 =日 井森 上駐 外英 務健 処ヨ

草案輸入稅率ニ關ス ル 件

聞候依テ本使答テ條約重修草案回送時期本使ニモ不確 處貳割五分(廿五ポルセント A 大要決着候ハ、至極ノ好都合也因テ速ニ該草案御囘送ヲ望 相濟セ候後同氏之内話ニ條約重修議案何頃御指出(マトン) リ所勢尚未夕出省無之ニ付次官ポンスホート氏へ出會公務 昨十二日本使公務アリ 別信第十六號 所ナリ此頃在東京我代理公使ヨリタリフ草案遞送一覽候 クス氏モ歸英中故貴官トパークス氏小生ノ間ニ於テ議案 英外務省へ出頭候外務卿先達中 已上增税ノ品物モアリ 三月十九日 日カ當節パ 知然 ŀ 盽

五九二

森 有 禮

井 上 外 務 卿 殿

七五 明治士至月子七日 井上外務卿

宛ョ

改正條約案丼ニタリフ草案送付方ノ件

信十八號

四月十四日

案到達致候ハ、先以テ右草案ョリ談判ニ取懸リ候方好都合 判モ現今三四月間ノ如クニハ捗トリ申間敷依テハタリ 扨五月初メヨリハ交際彌々繁忙ノ時期ニ臨ミ外務官員ト談 == IJ 取懸り候へハ萬事好機會ト存過ル廿五日別紙寫第十號ノ通 所追テ快方來月初旬ョリ出省ノ模様旁々此間ニ於テ談判 ___ 相達哉確知不致候テハ諸事不都合且又別信十六號ヲ以テバ 條約重修案丼ニタ ヨレハタリフ草案ハ三月初メ條約草案ハ五月ニ落手可致 在レハ同氏出發遲延爲致方モ有之只英外務卿久敷所勞ノ 存候就而 電信指出候所翌廿六日寫第十一號ノ返電正ニ領承右返電 クス氏去就近況報導候通リニ付該草案御指囘シノ期日近 ハ條約草案モ可成速ニ御郵送相成度候 リフ草案何頃御指立ニテ幾日頃本使迄可 フ草 =

合ナリ永ク滯在ハ致間敷尤條約重修決議濟ノ上ハ任地ニ於 卒出立歸鄉候事直一時任地ニ歸リ事務取繼メ再ヒ歸英ノ都 永ク休暇ヲ取リ得ラル可キ筈ナレトモ妻女ノ急病ニ臨ミ早 之哉ノ事由相尋候處該次官ノ答ニパークス氏久々ノ歸英直 條約重修一件ニ金權ヲ被任可キヤ又爾後任地滯在ノ期限有 了解滿足ノ旨中間候次テパークス氏再度日不二赴ク可 障碍ヲ生スル恐レ無之見込也ト單一ニ說明候同氏ニモ大ニ 築ハ我政府ニ於テ尤注意ヲ盡シ取調候モノニ付商業上決テ 決テ需用ヲ減スルノ恐レ無之ハ明白ニ候今般ノタリフ改正 需用日ニ盛大ニ赴キ縱令四五拾ポルセント 石油ハ米國ヨリ輸入候之レ等ノ品物 テ只今高話ノタリフ草案ト レトモ不遠事ト信用致候タリ テ調印候事ニ可相成只今度歸英候ハ、多分永久休暇ヲ得ル 巳上增税ノ品物ハ砂糖石油ノ類ナリ 中居候其口氣パークス氏全ク事務引繼メノ爲メ 留リ決シテ滯在不致事ニ曉察致候右夫々申進候 同種 フノ草案ハ本使 ナラン然ラハ廿五ポル ハ内國必需ニシテ且其 砂糖ハ重ニ支那厦門 ノ増税ニ上 とモ所持 キャ セ ル E

明治十三年二月十三日

右中進候 也

明治十三年二月廿七日

森 禮

井 上 外 務 殿

七六 明治士差三二十七 Ħ 并森 上 外 英 務便

仮ヨ

IJ

關稅改正ノ儀ニ付英國聯合商業會議所副會頭ト內談

十三年二月十九日森公使英人ベーレンス對話

信第廿二號

四月十四日到

嚮ニ第廿二號信ヲ以テ不使去ル十八日聯合商法會議所 所中主幹ノ有力家ニテ先年コ 會ニ招カレタル顚末ヲ報道セシ節右商法會議所ノ招ニ 帝ト通商條約ヲ結ヒ遂ケタル 談二及ヒタル一件ナリ抑モベー ルカ爲ニ早ク已ニ多少ノ利益ヲ實際ニ見出シタリト ハ即チ其會員ベーレ ンス氏ニ面會シテ私ニ我カ關稅改正 フデン氏ト共二三世ナポレ 人ナリ今ヤ我カ條約改正 v ンス氏ハ聯合商法會議 中置 應シ オ

> 從價法ヲ主張致シ居候間不使ノ意見ハ兼テ開陳致候通リ尚 得共獨リ課税ノ方法ニ至デハ痛ク從量法ヲ排駁シテ頻リニ 海關稅額ノ多少ニ付テハ左マテ異見アル體ニ祭セラレ 政府ハ必ス强ク從價法ヲ主張致スヘクト相考ラレ候條此儀 水從量法ヲ可ト致シ候得共前途改正ノ談判ノ實際ニ於テ英 卜知スヘキニ付談話ノ際熟々同人ノ意見ヲ相試ミ候ニ我カ 人ノ議論ヲ聞カハ以テ當國商賈社會ノ衆論ノ歸着スル所 付テハ尚更御注意有之度候 意見ヲ諮詢シタル事ハ本使能ク之ヲ探知セリ 概略御承知有之度候敬具 紙會話筆記和英二通差進候間是二 ニ付テハ巳ニ當國外務省ヨリ 同 人ノ手ヲ經テ商法會議所 テ べ 1 ν ン 要スル ス 氏 F ス候 二此 私談 ヺ

二月廿七日

有 禮

外務卿

於テ森公使英人ベーレンス及ヒダーリ 千八百八十年(明治十三年)二月十九日日不公使館 十三年二月十九日森公使英人ベー レンス對話筆記譯文 ント ン ノ兩氏

私話セラレタル問答ノ筆記

雙方禮詞交換ノ後チベ Œ. 他事一 キ乃チ今日來テ閣下ノ謁ヲ乞ヒタルナリ 談ヲ開ク事 ノ事ニ關シテ緊要ナル會話 - 來ラハ閣下必ス余ニ面會ヲ許シ且ツ私ニ條約改正 非ス先夜閣下ノ書記官レ ヲ肯ゼラルベキ旨レイン氏ョリ話 1 V ンス氏 ヲナセシトキ異日余自ラ公 日 1 今日兹 ン氏ト貴國ノ條約改 ニ参館シタ サレ シ ニ ル

條約ノ改正ヲ今日ニ望ムノ原因ヲ演説ス為メニ日不ノ利益ヲ實際ニ失ヒタル事情ヲ略陳シ併セテ不政府ガ前年不十分ナル條約ヲ不得已ノ場合ニ締結シテ公使 ベーレンス氏ニ向テ其望ニ從フヘキ旨ヲ答ヘ且ツ日

ニ關税ヲ課賦スルヲ今日ニ必要トスル旨ヲ陳述ス公使 又タ日不ノ租税ノ事ヲ槪説シ且ツ國庫ニ充ンガ爲メ

蓋シ輸入税ハ實際ニ於テ全ク輸入國民ヨリ拂出スモノナ、1レンス氏日 輸入品ニ税ヲ課スルノ法ハ甚タ不可ナリ

旨ヲ說ク
「は、輸入稅ヲ課スルノ今日ニ必要ナル所以ヲ陳へ諸國ニ投・輸入稅ヲ課スルノ實證ヲ擧テ之ヲ示シベーレンス氏がテ輸入稅ヲ課スルノ實證ヲ擧テ之ヲ示シベーレンス氏

トノ區別ヲ立テン事ヲ說クベーレンス氏 要用品ニ課スル租稅ト不要品ニ賦スル租稅

ス健田 其説或ハ然リト雖トモ甲國ニ於テハ不要品ナルモス健 又タベーレンス氏ガ設令ヒ國庫ニ充ンガ爲メニスルが、下三の其可不可ハ蓋シ稅金ノ用ヒ方ニ由ルノミ夫レ輸入がフ不要品ニ課スルトキハ其納稅者ハ重ニ富民ナルガ故のヲ不要品ニ課スルトキハ其納稅者ハ重ニ富民ナルガ故ニ實際ノ苦情鮮ク且ツ其稅金ヲ 再 産ノ方向ニ用ルトニ實際ノ苦情鮮ク且ツ其稅金ヲ 再 産ノ方向ニ用ルトニ實際ノ苦情鮮ク且ツ其稅金ヲ 再 産ノ方向ニ用ルトニ實際ノ苦情鮮ク且ツ其稅金ヲ 再 産ノ方向ニ用ルトニ質際ノ苦情鮮ク且ツ其稅金ヲ 再 産ノ方向ニ用ルトニ質際ノ苦情鮮ク且ツ其稅金ヲ 再 産ノ方向ニ用ルトニ質際ノ苦情鮮ク且ツ其稅金ヲ 再 産ノ方向ニ用ルトニ質際ノ苦情鮮ク且ツ其稅金ヲ 再 産ノ方向ニ用ルトニ質際ノ苦情鮮ク且ツ其稅金ヲ 再 産ノ方向ニ用ルトニ質際ノ苦情鮮ク且ツ其稅金ヲ あった。

辨スルヲ可トス 一如是ノ費用ハ寧ロ外國債ヲ募リテ之ヲ支

公使 容易ニ國債ヲ募テ之ヲ費消スル危險ナルヲ痛論ス

論及セズ只商法會議所ニ於テハ各國ノ關稅法及ヒ課稅ノ 易ヲ强迫スル 於テ之ヲ否ムヘカラズ且ツ英國人民ハ復タ軍艦ヲ以テ貿 ンス氏レイ 、條約ノ事 :方ヲ知ラン事ヲ要スルノミ夫ノ日本ト英國ト ス (前 ンス氏 ハ我外務省ニ於テ公明ノ處分ヲ行フベシ 日 日 ハ我外務省ノ擔任スル所ナレハ余ハ敢テ之ニ ン氏ニ向テ日本政府ノ要求スル所ハ德義上 ν ガ如キ處分ヲ可諾セザルベシト云ヘリ)凡 イン氏ト日 余ハ今日 日 本條約ノ事ヲ私話セシ時ベー :本ノ條約權ニ論及スル ノ條約 Ť = ν 1

ニシテ彼我ノ貿易ヲ盛ニセン事ヲ欲スルノミ 公使日 日不政府ノ今日ニ要求スル所ハ卽チ其條約ヲ公明

忘ルベカラズ 而シテ兩國ノ間タ相五ニ「且ツ與へ且ツ取ル」ノ主義ヲノ定約ニシテータヒ之ヲ定ムレハ復タ之ヲ破ルベカラズノ定約ニシテータヒ之ヲ定ムレハ復タ之ヲ破ルベカラズベーレンス氏曰 夫レ貿易條約ハ寔ニ契約ト同ク卽チ商賣

貿易條約ヲ締結セシ時ニ當リテヤ日 寒ニ是ナリ然リト雖ト テ不十分ノ條約ヲ行ハセラレ ジ許 ラ得 テベ モ嘗テ -] ν ンス氏 H 今ヤ歐洲 不卜歐 二向 本ハ不得已ノ 諸 洲 テ 諸國ト 日 國 1 日 場合 · ノ 間 本 ラ言 = =

> 五ニー歩ヲ關税ニ讓ル事ヲ務メサルニ非スヤ· 蓋シ歐洲諸國ノ間 入税ヲ課シテ只「取ル」事ヲ是レ務メ未タ嘗テ日不ト相見ヨ日本ノ産物ナル茶煙草ノ如キ英國ハ現ニ之ニ重キ輸 = 其輸入税ヲ減下セン事ヲ望ムト雖ト ヶ 一歩ヲ其關稅ニ讓ルヲ例トスレトモ其日不ニ於ケルハ 輸入スル物品ノ輸入税ヲ減スル チ然ラズ例へハ英國ノ日本二於ケル日不二向テハ頻 ル 取了 ルレノミニシテ毫モ ニ締結スル貿易條約 ルノ企アル モ未タ日本ヨ ルナ ハ年限ヲ定 レナキ アヲ開 ノ カズ試ニ リ英國 テ相互 様ナ

公使日 ヲ諸 且ツ外國ヨリ不公正ノ取扱ヲ受ル事ヲ好 日 不政府ヨリ ヲ課スルモノアリト雖ト 日 不政府 シ IJ 又曰ク今ヤ歐洲諸國ニ於テハ往 入スル物品 要求スル改正關稅ハ蓋シ大抵諸 |八固ヨリ其關稅ヲ二三ニスル事 = 課スル事ヲ好 モ日本政府ハ敢 ~ ~ ザルガ故 ・ザ × ル 日 で禁止 ラ好 ガ 木 國 ノ産 故 樣稅 今 = 7 物

日我關税ヲ改正スル 一割以下ノ税 ヲ課スルニ止マルベシ 1 モ英國ヨリ輸入スル物品ニハ大概

ツ其税則ヲ改正セント欲スルトキハ六ケ月乃至九ケ月前 敢テ差支ナカルベキニ付須ク豫メ其課税ノ年限ヲ定メ且ーレンス氏曰 假令其税額ハ一割若クハ一割五分ニテモ ニ其旨ヲ豫告スベシ

公使日 セシムル事勿ルベシ 日不政府八固ヨリ右等ノ事ノ爲メニ貿易者ヲ迷惑

公使日 カラズ敢テ問フ目不政府ハ孰レニ依ラント欲スルヤ ヲ課スルノ目的ナラバ英人ハ敢テ其改正談判ヲ峻拒スル 其關稅ヲ課スル寧ロ從價稅ニ由ルベシ從量稅ニ由ル ノナク到底公明ナル改正ヲ實際ニ行フニ至ルベシ又曰 レンス氏日 **之ヲ今日ニ斷答シ難シ** 日本政府ノ改正關稅果シテ只至當ノ關稅 べ

由ルトキハ余ガ輸送スル羅紗類(英國製ノ低價羅紗) ν ンス氏目 從量税ハ甚々公正ナラズ其實際ニ弊アル

常ニ佛朗西羅紗ヨリモ凡ソ五倍ノ重稅ヲ拂ハザルベカラ 大ナリ試ニ余ガ商賣ニ就テ之ヲ云ハンニ若シ從量税ニ

ラズト雖モ爲メニ其費用ヲ要セス商人ヨリ收納スル手數 港ノ外カ工業ノ最モ盛ナル地方ニ駐在セシメザルベカ

ル意見書ヲ草呈スベシ レンス氏日 公使若シ之ヲ許サハ余ハ私ニ前顯ニ

ハ之ヲ政府ト領事トノ間ニ兩分スル事ヲ得ベシ

公使曰 貴下若クハ或ル他ノ商法會議所ヨリ前顯 意見ヲ示サル、事アラバ余ハ大切ニ之ヲ聞クベシ = ス ル

べり 公使日 スルノ權利ヲ有スベシ云々」ノ明文ヲ加ヘザ スルノ權利ヲ有スベシ云々」ノ明文ヲ加ヘザルベカラズ「日不政府ハ商品原價ノ僞稱ヲ防グガ爲メニ商品ヲ買取 レンス氏日 敢テ他國ノ關稅法ヲ問フ 前顯ヲ實行スル ニハ 勿論ソノ條約中 =

ベーレンス氏日 量税從價税ヲ混用シ白耳義日耳曼ハ從價稅ヲ用 佛朗西ハ一般ニ從量稅ヲ用ヒ合衆國ハ從 ルモ 1

Memorandum

tion on the 19th of February 1880 between private conversation at the Japanese Lega-

> 公使問 ルガ故カ 從量税ニ異見アルハ最上等諸商品ノ輸入ヲ獎勵 ス

責罰スベシ」トノ明文ヲ加フベシ 從價稅ニ由レハ上等ノ商品ラ買取スル富民ハ自ラ低價ノ 低價商品ハ常ニ貿易ノ重ナル部分ヲ占メ國民ノ爲メニ甚 ルニ於テハ諸商法會議所ニ於テ議定スル法則ニ從テ之ヲ 條約中ニ「商品ノ原價ヲ僞稱スベカラズ若シ之ヲ僞稱ス ラズ今マ日不政府ニ於テ此稅法ヲ行ハント欲セハ其改正 法寧ロ公正ナリヌ曰ク從價稅ヲ採用スル 商品ヲ消費スル貧民ヨリ多分ノ稅ヲ拂出ス割合ニテ其稅 夕要用ナルモノ レンス氏日 ナレハ其輸入ヲ妨クハ甚タ不利ナリ 其低價商品ノ輸入ヲ妨クルガ故ナリ ノ方法甚タ難カ 迫ツ

1 サルニ於テヲヤ 比例アルヲ見ズ況ンヤ商法會議所ハ萬國一般ノモ ・ン氏日 、見ズ況ンヤ商法會議所ハ萬國一般ノモノニを國ノ貿易條約ヲ察スルニ未ダ嘗テ右ノ如

スレハ則チ可ナリ若シ領事ニ之ヲ委任スルトセハ領事ヲ 又夕日ク凡ソ商品目錄ヲ支配スル事ハ之ヲ各領事ニ委任 ノ比例ナシト雖トモ日不政府ニ於テ先ツ之ヲ試ミハ如何 レンス氏日 夫レ然リ各國ノ貿易條約二於テ未タ

Chambers &c.) lington is the merce of the United Kingdom. dent of the Associated Chambers of Com-Chambers of Commerce and the Vice-Presi-Behrends and Mr. Darlington. (Mr. J. Behhis Excellency Mr. Mori and Mr. the Chairman of secretary of the Bradford the Mr. Dar-Bradford Jacob

question of the Revision of the sation he had had on the previous evening on the what had transpired during an interesting converfurther discuss the question with him. lency would Kindly and privatey receive with Mr. Lane who had assured him that his Exceltold Mr. Mori that he had called in consequence of After the customary compliments Mr. Behrends Japanese him, and

sity on the part of Japan to revise the treaties inquiries, proceeded at Behrends' wishes, and in answer to that gentleman's which had been made under Mr. Mori expressed his readiness to meet Mr. causes which led to the desire considerable length to trace very different circumand neces-

stances from the present ones and had in many ways, which he described, operated unfavorably to the interests of his country.

Mr. Mori explained generally the incidence of taxation in Japan, showing that indirect taxation by fiscal duties had become necessary.

Mr. Behrends observed that duties on imports as a rule were objectionable, and were always in reality paid by the importing nation.

Mr. Mori urged their necessity, and the recognition of this fact by their adoption by all countries and observed that Mr. Behrends argument would tend to abolish import duties universally.

Mr. Behrends endevoured to draw a distinction between duties charged on necessaries and those charged on luxuries.

Mr. Mori replied that to some extent this might be true, but that it must be remembered that luxuries in one country were necessaries in another, and illustrated this in the case of sugar brought into Japan &c &c.

In reply to Mr. Behrends' argument as to the

general objection to even fiscal duties (for he said protectionist duties did not enter into the Japanese scheme) Mr. Mori said that much depended on the use made of the revenue thus procured. It had the advantage of being obtainable from the richer classes, if collected mainly on luxuries, and it was but little felt, while if it was used in reproductive directions, it was eminently useful.

Mr. Behrends urged that foreign loans might effect this better; but Mr. Mori clearly showed that there were grave objections to using this source of obtaining money too freely.

Mr. Behrends then opened the more practical point of the discussion by saying that he did not propose to enter into the question of the treaty rights of Japan. (He had previously in a private conversation with Mr. Lane, freely admitted that the Japanese claims on the subject were morally unanswerable and that the English people would never again permit trade to be forced on by gunboats &c.) He said that all questions connected with the form and interpretation of Treaties be-

longed to the Foreign Office, and that what interested the Chambers of Commerce was to know what the tariffs and the system of collecting duties was in all foreign countries. As regarded Japan he was sure the foreign office would do what was fair.

Mr. Mori said that Japan would ask only for what was fair and likely to promote commercial intercourse.

Mr. Behrends said that it must not be forgotten that Commercial Treaties were really like contracts, and were a matter of bargain, which once made should not be broken. He added that as between nations they should be framed on the principle of "give and take".

Mr. Lane, with the permission of his Excellency pointed out that Mr. Behrends' maxim was quite true, but there were very peculiar circumstances connected with the negociation of a Commercial Treaty between Japan and the Western Powers;—that on the side of the latter it was all "take" and no "give" that between European countries

such treaties provided for tariff concessions to last for a definite time on both sides, but that England for instance now expected Japan to fix a low tariff for Imports into that country and offered no similar stipulation as regards imports into Great Britain, and that some articles of Japanese produce such as tea and tobacoo, were very heavily taxed; and no commercial return.

Mr. Behrends had to admit that this was so, but tried to point out compensating advantages arising from the civilizing effects of trade &c; but the pretension that these formed any quid pro quo as against tariff concessions was soon disposed of.

Mr. Mori observed that it must also not be lost sight of that the treaties which Japan now proposed to make in the foreign countries were all almost if not entirely identical in substance as Japan had no inclination for a system of differential duties in the expectation of equally fair treatment to wards her even while many of these countries imposed high import duties on Japanese products. But he added that Japan had no wish to charge prohibi-

tory duties and that nearly all the English staples would not be subjected to higher duties than about 10 per cent.

Mr. Behrends expressed great satisfaction at this statement and said that whether these duties were 10 ever 15 per cent did not so much matter so that these were fixed for a definite period, and proper notice to prevent disturbance of trade were given if the alteration proposed. He did not think 9 or at least 6 months too long notice.

Mr. Mori said that the Japanese Government was well aware that traders wished for such fair notice and has already stated that it would be acceded.

Mr. Behrends said that he felt justified in promising that if only such reasonable duties were suggested, that there would be no opposition in England, and that a fair treaty might be concluded without any obstacles, always provided that such duties were fairly collected. He should be glad to hear that they were chargeable on the ad valorem principle and not as specific duties.

Mr. Mori was not prepared to speak definitely on this point. Mr. Behrends then proceeded at some length to contend that specific duties were unfair and worked badly. He adduced instances from his own business as to cloth. He said that a specific duty on cloth would weigh several hundred per cent more heavily on cheap English cloth than on French cloth worth perhaps five times as much and made exclusively of wool.

Mr. Mori inquired if the objection to specific duties was not that they might be considered to encourage the import of the best kinds of each class of goods.

Mr. Behrends answered, it tended to check the import of cheap goods which would form the bulk of the trade, and were most important for the masses that rich people could afford to pay a higher duty proportioned to the class of goods they wanted. He urged that there were no real difficulties in adopting the ad valorem plan, as under the new treaty it should be stipulated that declarations of value should be properly made and vouched for

and that false declarations should be punishable as perjury and compensations adjusted on the decision of the various chambers of Commerce.

Mr. Lane ventured to point out that he thought he was acquainted with most of the Commercial Treaties and that he had not yet met with any such conditions in any of them and that moreover Chambers of Commerce were not universal.

Government. able should be divided between the Consul and the no expense be appointed at the chief centres of industry not starting a precedent, and that a machinery might but urged that that was no reason for Japan not etiquett permitted. Mr. Mori his views on the subject in writing, easily be established for controlling invoices—that the shipping ports. Behrends could do —that on the contrary the fees charge-He added that he would submit to acknowledged that this was so, this, .but that He said this would involve they should if

Mr. Mori said that any remarks from him or from any of the Chambers of Commerce would

receive every attention.

Mr. Behrends said of course a clause might be inserted as usual in the Treaties, claiming the right of Emptions by the Government as an additional check on declarations.

Mr. Mori asked if Mr. Behrends had any information as to the views of other nations as to the way of assessing duties.

Mr. Behrends replied that he believed France would generally prefer specific duties. He thought the United States would like a mixture of both systems, but that Belgium and Germany would prefer ad valorem duties.

一七七 明治士三三月十二日 非上外務卿宛

從量稅ニツイテ英人ノ意向通達ノ件

別信第二十五號

四月廿七日到

トル南法會議所ヨリ其意見ヲ外務卿へ陳セント欲シ重立タキ旨申進候後去六日英佛ノ貿易條約改正ニ關シマンチェス前便我條約改正談判ニ付キ英人ハ必ス從價稅ヲ主張致スペ

商議ヲ盡スモ恐クハ無用ニ屬スベシトノ一句ハ我自今ノ改 尚兹ニ及報告候但大輔答說中ニ從價稅ヲ外國政府ニ强說シ 氏ニ開陳シテ頻ニ從量税ノ不公平ヲ相 正事件ニ係リテモ大ニ益スル所アルベシト信候又答説中ニ ル者數名外務省へ出頭ノ 見エタルバーレン氏ハ卽公信第二十二號ヲ以テ及報告置 紙新聞切抜差進シ以テ英人ガ從量税ヲ喜バザルノ實況ヲ 不使ト内話ヲ親通シタル同人物ニ有之候此段甲添候敬具 十三年三月十二日 處同卿病氣引ニ付外務大輔ポ 論シ同大輔ノ答説 1 共 I

全權大使 有

外務卿 井上 馨殿

註 新聞切拔省略

七八 明治芸芸月十九 曰 井森 上 外 英 務與使 宛ョ

關稅改正ノ儀ニ付英國外務次官ト會談ノ件

五月三日到 記

改約談判ノ地步着手ノ心得ヲ以不月十五日外務省へ出頭候 十三年三月十五日森公使英外務次官會談筆

處外務卿事ハ過般來病氣ニテ引籠リ且養生ノ爲頃日大陸へ

間青木公使へ八着次第直 端ヲ鼎キ候方須要ト存シ密談ヲ遂ケ候處同氏引受方至テ宜 異存モ無之樣子ニ付先稅則制定ノ體裁ヨリシテ我目 出發ニ付不得止次官ポンスホ 敷)ト存シ前文筆記寫取リ鮫島公使心得ノ 獨リ英國外務省ノミナラス佛獨等外務省へモ開示候方 之候右對話ノ實況ハ別紙筆記ニテ御賢察可被下候尤此事ハ ク我發意ニ對シ異議ナキノミナラス容易ク同意スルノ色有 旨ヲ遵奉シ且當國内閣ニ於テハ別紙第廿七號信 我ヨリ前方申入ノ考案ニ頗ル考ヲ附ケ之ニ對シテハ = |同様ニ可 1 ŀ 氏へ面 取計候此段及報告候敬 會銀テ御指 爲既二差廻置候 三陳述 宜 ノ談

三月十九 日

有

森

上外

一千八百八十年三月十五日英國外務省ニ於テ森氏ポンス 氏トノ面談筆記 水 1

森氏 因テ養生ノ爲メ不日大陸ニ赴カル 日 拙者之ヲ聞クサリ 、スボリ ー侯ハ未夕全快 ベシ ŀ 至ラズ

シ足下至急侯ニ面晤スル ン ホ 1 1-1 氏 日 がり侯 ヲ要スル乎 ハ五六週間 大陸 = 逗留セ ラ N べ

森氏 税則ヲ制定スルノ方法ニ關スルモノナリ拙者ハ今之ヲ之我條約改正ノ議ニ係ル所ノ一事件ニシテ卽チ日本海 V. ・侯ニ面會 目 拙者ヨリ早速侯ニ通知致度一事件アリ餘ノ義ニテモ 日 否ナ至急面晤セ = 陳言スルモ妨ナカルベシト 下ニ於テ十分タルベシ 1ノ節拙者ノ爲メニ該事件ヲ侯ニ陳說シタ ストモ格別不都合ノ事ハアラズ スルモノナリ拙者ハ今之ヲ足 存ス足下幸ニサ リス 7 ボ ij 無 ハ

ン スホー 、所ハ何事ニ寄ラズ之ヲ侯ニ通知スルヲ得ベシ ·卜氏曰 諾、謹テ命ニ從フベシ總テ足下 ノ 望 ~

森氏 自ラ共海關税則ヲ管理スベキ十分ノ權理アリ 我 目 ニ之ヲ熟考シ條約各國ヘノ照會ヲ少シク改更スル 政府初メテ現行條約ノ改正ヲ發言セシ時ニ當 政府初メテ現行條約ノ改正ヲ發言セシ時ニ當テ日不多謝然者拙者今該事件ニ就テ足下ニ陳示スベシ嚢 先チテ其草案ヲ各國 意見アラハ之ヲ問 セリ是レ足下ノ能ク記スル所ナラン カン 政府ニ示シ若シ之ニ就テ各國 我政府ハ新定海關稅 事ヲ欲ス ルナリ 爾後我致 我政府 Įij. 1 ラ質施 - ノ意見 事 府 ノハ

ノ爲メニ 然之ヲ制定シテ日本内國法律ノ一部分タラシメン事ヲ緊 所 V == ル所ノ税率ヲ變更セザルベキ旨ヲ布告スベシ拙者敢テ玆 ス先ツ年限ヲ定メ該年限内ハ決シテ其税則ニ於テ確定ス 要ナリト思考セリ然レトモ其新定税則ヲ實施スル 我外交條約ノ一部分若クハ其約定中ノ一事項ト アラントス抑我政府ハ海關稅則及ヒ海關諸則ヲシテ復タ セント ス 又敢テ反復陳説セン我政府ニテ其新定税則ヲ實施セ 税率ヲ制定セント テ 一言セン右新税則制定ノ方法ハ之ニ關涉スル所 ナリ兹ニ拙者ハ我新税則制定ノ方法ニ就テ開陳スル所 ルモノハーニ ノ主 ナリ ノ 主意ハ常ニ 分 欲スルノ趣意ニシテ決シテ此趣意ヲ變更セザル 如 ・ス其或ハ 夫ノ新 凡ソ外國人ハ皆宜シク之ヲ以テ自ラ安心滿足ス最モ故障少カルベキヲ以テ我政府擇ンテ之ヲ取 最モ故障少カル キ手續 = グテハ - 其財政上 定華盛頓約定ノ如キハ之ニ抵觸 以テ財政調理ノ爲メニ必要ナル事情 ラ為 全ク然ラザ 聊カ不都合ナ 欲スルニ在ル事自ラ明瞭ナル ス ヲ見レハ元 ノ需要ニ ・キ事明ナ Ŧ 該約定中不件 來其海關稅則 テ成ルベ IJ 且 為サ ベシ = ス ク至當 ラ新定 ニハ必 ル ノ各國 スル ズ確 ナ ント = Æ

ヲ以テカ之ニ信憑スルヲ得ベキヤ ノ布告ノ如キ若シー朝貴國ノ政府ノ變革アルニ遇ハヾ何ポンスホート氏曰 然レトモ請フ試ニ足下ニ問ハン謂フ所

本氏日 我國ニ於テハ決シテ政府ノ變革アルマジキナリ若 を選す得ントナラハ乃チ我政府ハ之レト公書ヲ交換シ以テ が電モ之ニ關シテ危懼スルヲ須ヰザルナリタトヒ我國政 所ニ於テ變革アルモ其レガ為メ布告ノ無効ニ屬セザルハ 推者ガ保證スル所ナリ若シ一條約國ガ是ニ就テ十分ノ確 批者が保證スル所ナリ若シ一條約國ガ是ニ就テ十分ノ確 はカントナラハ乃チ我政府ハ之レト公書ヲ交換シ以テ 十分ニ右布告ヲ保證セント欲スルナリ

> 森氏日 ンス 侯ハ本件ニ關シテ他ノ條約諮國ニ照會スルヲ要スル事モ 如何程ノ時日ヲ費スベキヤ拙者ハ之ヲ豫言スル 侯ニ開中ニ及バントス尤侯ガ之ニ就テ觀察ヲ爲スニ ンスホート氏日 テ侯ノ所見如何ヲ知ン專ヲ冀望スルナリ 通知スルヲ得ベキ乎拙者ハ切ニ前顯我政府ノ希望ニ關シ セリ乃テ直チニ之ヲサリスボリー侯ニ申通スベシ 足下ハサリスボリー侯ノ大陸二赴カル、前二之ヲ ト氏日 誠ニ然ラン拙者ハ直チニサリス 拙者ハ今明ニ足下ノ陳述セラル、所ヲ ア得ズ又 朩 IJ

事ヲ切望スルナリ 本件ニ關シテ成ルベク速ニ其意見ヲ拙者ニ開示セラレン 本件ニ關シテ成ルベク速ニ其意見ヲ拙者ニ開示セラレン 本兵日 我政府ハ本議ニ關係スル所ノ草案ヲ作ルニ於テ必森氏日 我政府ハ本議ニ關係スル所ノ草案ヲ作ルニ於テ必

議ヲ決定スベキ切要ノ大不ニ關スルニ於テヲヤ

ハナリ況ンヤ右貴國政府ノ希望ハ條約改正

タル事アレ

正ニ着手スルニ於テハ前以テ之ニ關スル所ノ事々ヲ他ノ

我海外貿易上ノ關係尤大ナリン若シ我國ニテ日本條約改アルヘシ何トナレハ(足下モ知ラル、如ク東洋ニ於テハ

條約諸國へ通知スベキ様既ニ該條約國ヨリ我國ニ依賴

スル事ヲ得ン果シテ然ラハ直チニ之ヲ足下ニ告知スベシポンスホート氏曰 侯ハ時日ヲ移サズ其自己ノ意見ヲ開陳

校內膝類次郎

畔 渡 部 恒 吉

一シ置キタルモノナリfote 次官ノコトナレハ 編者ニ於テ ポンスホートニ統証 ポンスホート、本文ニハパンセホートトアルモ Pauce

(右英文)

Conversation

between

Mori and Pauncefote

at the

Foreign Office on the 15th

March 1880.

Mori. I Hear Lord Salisbury is still not quite recovered, and that he is soon going to the Continent for his health.

Pauncefote. Yes. He may have to stay on the Continent for five or six weeks. Do you particularly want to soon see him?

Mori. No. not inconveniently. But I have one thing, of which I should like to soon inform him.

It refers to a matter connected with our Treaty Revision questions. Namely, in regard to the *form* of establishing the Japanese Customs Regulations. I think it can be stated to you; and if you would kindly assist me in explaining the matter to Lord Salisbury when you should see him, it would be sufficient for the present.

Pauncefote. Yes. I will do it with great pleasure. At all events, I can do so by communicating to him whatever wished for.

Mori. various governments the draft of the new Customs government is now willing to exhibit before munication to the various found it desirable to modify somewhat its government since then reconsidered it, and has gulations entirely under her own control. Japan is fully entitled to place her customs remy government first proposed about the matter. You may remember that when Tariff before adopting it, I thank you. Treaty, it expressed its thought that Then I will now explain to you and to receive Treaty Powers. a revision of the

upon it. This course of my government manifests Now I shall state about the form of establishing object than that of intention to adopt a new Tariff with no other requirements for fiscal purposes. My Government in its fairest possible rate compatible with its the government for establishing the new Tariff by itself the original and constant intention of them any suggestions they may desire to make so established. I may add here that this form, period no alteration shall be made in the rates of again making them a part of our foreign Customs regulations so established as to constidesirable to have the Tariff, as well as all the the state necessity for its has—allowed me to repeat—never for the establishment of our new Tariff, is prefera declaration fixing a term of years during which The Tariff is, however, to be accompanied with Treaties or things of conventional arrangement. tute a part of the Imperial internal laws, instead our new Tariff. My Government considered it meeting, as far as possible, fiscal arrangements. changed its

into its reconsideration. Powers, my Government is willing to take them met by any just objections from the less if this form for fixing our Tariff were to be and indignation would be very great. Neverthestyled one-sided arrangement, their disappointment settlement of the question again in the old sotrary to their expectation, they were to find the ment will firmly adhere to it. position made by my government to the various well acquainted with the nature of the first prowith a large number of our intelligent press are any serious objections. above all my countrymen will submit to it without of that Convention relating to the subject. found not to conflict with it, at least the portion feel themselves perfectly safe and satisfied with parties concerned. All the foreigners ought to deemed to be the least objectionable to all the red by my government to any other, as it is Treaty Powers; and fully believe that the Govern-The recent Washington Convention will be My countrymen together If however con-

Pauncefote. But allow me to ask how such a declaration could be relied upon, if any changes were to take place in Your Government?

able, but I will allow myself for a moment to imagine them to take place. Even then there ought to be not the slightest fear on the part of the Treaty Powers. I can assure you that no official declaration can in my country, be annulled in consequence of any change in the government. If any Treaty Power should desire to satisfy itself about it, my Government is quite willing to exchange with such a Power, official despatches by which this declaration should fully be guaranteed.

Pauncefote. I now quite understand. I shall immediately inform Lord Salisbury of all you have expressed.

Mori. Can you do it before Lord Salisbury, departure for the Continent? I much desire to know how he may regard this desire of my Government.

Pauncefote. Yes. I shall attend to it immediately, though I can not say how long it will take for him to make his observations upon it. He might be obliged to communicate with the other Treaty Powers upon the subject, as they have already desired us (You know our commercial interests out there in the East are the largest) to let them know of any thing connected with the Japanese Treaty Revision affairs before we take steps in them. Besides this desire of your government involves important basis on which the Revision question is to be settled.

Mori. I hope it will be possible for Lord Salisbury to indicate to me his views upon this matter as early as possible, as my government has to prepare it papers connected with the question according to the form in which our new Tariff is to be established.

Pauncefote. Lord Salisbury might be able to soon express his own views, but at any rate as soon as he does, you should at once be informed of it.

九 明治主篇月十六 日 井上外務卿宛

法權囘復問題ニ關スル

判權ノ一件ハ後機ヲ待ツヲ可ナリトシ現今ノ廟議ニテハ法 期ヲ相待居候有様ニ候へハ我ョリ談判ヲ開クノ期餘リ遲延 若クハーケ月位ハ條約改正ノ談判ヲ實際ニ開ク事ヲ得サル 政府 只々改正案ノ達スルヲ佇望致居候へ共今以テ改正案御差立 權稅權ヲ同時 ニ相成候テハ實際ノ都合如何アラント心配致シ候却說先前 ベシト雖トモ現ニバークス公使ノ出發ヲモ見合セテ開談ノ モ常國今囘ノ選擧ニ於テ改進黨十分ノ勝利ヲ得タレ ノ電報モ之レ無ク實際如何ノ御都合ヤト竊ニ顧慮致居候尤 我條約改正ノ義ニ 別信三十二號 付本使在國ノ日旣ニ法權進取ノ業ハ實際ニ行ハレ難ク假 ニパークス公使ノ出發ヲモ猶豫致サセ居候有様ニテ日 ヲ待チ當國政府ニ於テモ亦々現ニ其開談ノ期ヲ相待 一定ノ後改正事件着手ノ眼目 ノ更代之レアルハ必然ノ義ニ候へハ之レガ爲メニ半月 付 |本使 ハ勿論手ヲ空ウシテ改正案ノ達ス ハ専ラ海關税

'ニ 進取スルヲ以テ尚ホ可ナリト御一定相成候 六月一日 三止マリ裁 ハ不日 チ爲 外務卿 八〇

成タル 煙草ニ國産税五割以上ヲ課スレハ其價ノ輸入煙草ヨリ高マ サレト 之ニ五割以上ヲ國産税ヲ課スルトモ敢テ不適當ノ稅額ニ非 例へハ ヲ課スルヲ必要ナリトスル時ニ當リ内國産出ノ割合ニテハ 國産税ヲ課スルコトアルトモ實際ニ差支ナキ程ノ限額ヲ量 ルガ故ニ若シ將來內國ノ産物ニ多少ノ國産稅ヲ課スル ヲ國産煙草ニ課スルコトヲ得ズシテ多少ノ差支ヲ實際生ス 國產稅其他 ア 其輸入税ヲ 制定 ベキ 的那邊二有之候中承知致度前顯具陳二及比倘 アラバ其海關稅額ヲ外國ト議定スルノ前ニ於テ豫メ後ニ N 嚮後我國内ニ煙草ノ産出著シク增進シテ之ニ國産稅 省二候 ハ蓋シ自然ノ理勢ナルヲ以テ到底五割以上ノ國産稅 モ若シ煙草ノ輸入税五割以下ノ條約ナル時ハ國産ノ コトアルトモ實際ニ差支ナキ程ノ限額云々ト ノ税表原譯文共ニ供御參考度差進候敬具 7 心得 セザルベカラズ右ハ關稅改正案御制定ノ ノ爲メ一應御示諭ヲ請ヒ候右國産税ヲ 的ナク只關稅ノ度程ヲ量テ御制定相 赤紋 申ス = ノ目

十三年四月三十日

公使 森 有

外務卿 非上 馨殿

升上外務卿時代 對英交涉 八

> 度致期望候敬具 雖トモ其業タルヤ甚タ難ク或ハ數年ヲ經ルニ非ザレ 置キタリ兎モ角 テハ未ダ廟議ノ果シテ那處ニ在ルヲ知ラズ速ニ御埀諭有之 税件ハ爲メニ妨ゲラレテ動ク事ヲ得ザルベシ此點ニ至リ 局ヲ實際ニ結フニ至ラザルベシ其間ハ目今我レニ最要ナ ۲ モ進メ得ル丈ケハ勿論之ヲ進ルニ如 モ僅少ノ步ヲ進メ ルニ止 ベキ旨ヲ述 バ談判 カ ズト

十三年四月十六日

全權公使 森 有

非 Ĺ 馨殿

明治三番月三 十日 井森駐外 務公 卵使 宛ョ

改正稅額ニツイテ質議ノ件

將來我內國ニ國産稅若クハ其他ノ稅ヲ課スルコトモ實際ニ 過日御廻付相成候海關稅改正案ノ稅額ニ付テハ固ョ 差支ナキ程ノ限額ヲ量テ御制定相成タル者ニ候ヤ又ハ國産 周到ノ商議ヲ盡サレタル事トハ確信致シ候へ共右ノ稅額ハ 別信第三十六號 六月十五日到 リ精密

註 八三文書七月八日外務卿回答參照

八 明治士奉青二 目 森駐英公使 宛ョ

條約改正關係書類取扱方ニ就キ内訓ノ件

内信

程運上所規則幷内訓狀等差進候此内訓狀ノ義ハパー 置候過今便靑木公使ニ付托シ修好條規裁判權限草按貿易章 テ彼方へ御示無之様致度候 分シ來リタル事件上ニ付强ク攻撃ヲ爲シタル廉モ有之素ヨ 拋念可被下候扨テ先般牧野伸顯氏ニ托シー書拜呈候節申上 爾來益御清康御鞅掌之義奉高賀候本邦平穩省中一同無事 閣下英政府へ御談判相成候節御心得迄ニ差進候義ニ付決 クス處

一、「タリフ」ヲ「インペリアル 廻送落手仕候併シ右ノ論ハ最早六ケ敷事ト 加一件ニ付ポンスホー 以テ決局取極ル時ハ條約同様ノカヲ有スル故再ヒ論談 不涉方可然卜 = 決定致シ各國ヘモ其都合申込候故公使ョ 奉存候就テハ通常條約中へ十年間結付 ルド氏ト御内話相成候節ノ筆記御 ジク y 1 」ニテ條約へ不附 相案候且公文

之度候 論申入候得ハ不都合ノ義ニ付閣下最前ノ御論ハ御見合有

ル時ハ擬定輸入稅目中ヨリ何品ニテモ撰拔コンベンショル時ハ擬定輸入稅目中ヨリ何品ニテモ撰拔コンベンショル時ハ擬定輸入稅目中ヨリ何品ニテモ撰拔コンベンショル時ハ擬定輸入稅目中ヨリ何品ニテモ撰拔コンベンショル時ハ擬定輸入稅間所錄第一號ハ別紙第十九號ノ通ニ付先通商及航海條約附錄第一號ハ別紙第十九號ノ通ニ付先通商及航海條約附錄第一號ハ別紙第十九號ノ通ニ付先通商及航海條約附錄第一號ハ別紙第十九號ノ通ニ付先通商及航海條約附錄第一號ハ別紙第十九號ノ通ニ付先

所合ドム、列太、ハニ書き進安と、死ニ元と元ニ平義第可及御内報候の使ヲ以テ總理衞門へ談判ヲ爲始候筈何レ其模様相分次公使ヲ以テ總理衞門へ談判ヲ爲始候筈何レ其模様相分次

信ヲ以テ御通知ニ可及候御心得迄ニ差進候義ニ御座候彌以布告相成候節ハ速ニ電御心得迄ニ差進候義ニ御座候彌以布告相成候節ハ速ニ電を相濟候義ニテ近々布告可相成場合ニ相運居候先ツ閣下を相済候義ニテ近々布告可相成場合ニ相運居候先ツ閣下

受護短スルノ人ニ有之候ニ付閣下ニモ此際御交誼ヲ被結新外務大輔チヤールスジユルク氏ノ義ハ元來日本ヲ偏ハ來月十一日發ノ郵便ヲ以テ赴任爲致候積ニ御座候 柳原井田二公使ハ來ル廿八日ノ便船ョリ鍋島長岡二使

ナタリフへ御增加相成候テ差支無之候

内ノ諸公使へモ右同様ノ訓狀附與致候義ニ御座條一 鮫島靑木二公使へ相渡候訓規寫御心得ノ爲メ差進候其之其內存在セシムヘキ分ハ追テ箇條書相認差出可申俟

取便船次第必御回送相成度候樣致度候電信ヲ以テ大意ヲ御申越相成尙其談判ノ模樣ハ委敷御認ニ付何ノ廉ハドレ程迄意見ノ相違アルヤ否ヲ其都度速ニ

被付置候樣致度存奉候
政府へ可差送事ト相察候條夫迄ノ間ニ篤ト御閱覽貴考ヲ
渡積ニ候就テハケネヂー氏ョリハ其次ノ佛船便ニ托シ英

調書爲御參考差進申候 先前ョリ各開港場ニ於テ起リタル彼我紛紜一件槪略取

グランビル氏へノ御親交相成度候ヲ圖リ今便別封カンペル氏へノ紹介狀差進候條氏ニ因リヲ 圏下英外務卿クランピル氏ト御懇親ヲ被結候樣ノ都合

一 修好條規草按ヲ始メ諮書類ハ疾クヨリ差進度存シ日夜

b、要牛页∃1多々及内各戻ゴヨニ戻へ条トKv由ハ再毒井下之ト想像仕候御含迄申進候 之ト想像仕候御含迄申進候 程能御取入相成候ハ、改正一件ニ村テモ多少ノ便益可有

奉祈候敬具邦ノ景況等ハ青木公使ヨリ御問取被下度候折角時下御自愛邦ノ景況等ハ青木公使ヨリ御問取被下度候折角時下御自愛先ハ要件而已多々及內啓候右申上候个條外委曲ノ事情丼不

明治十三年五月二十二日

开 上 融

. 森有禮閣

下

事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間左様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間を様御了承一層御助力被下度奉希望候事ニ相決候間を様御了承一層御助力被下度奉希望候

申越シ益々青木ヲ差遣候事可然ト被案候と彼レ何トナク我ヲ愛スルノ模様相見へ甚好都合ナル旨と彼レ何トナク我ヲ愛スルノ模様相見へ甚好都合ナル旨

信号の引シテ連絡被附置様致度候へキ國柄ニ候へバ爾後一層在佛獨ノ諸公使ト不斷五ニ通英獨佛ノ三國ハ歐洲ノ牛耳ヲ執リ我外交上最モ注視ス

節ハ直ニ電報ヲ以テ御報可致候中候多分異議ハ有之間敷候ヘトモ自然異議ノ廉モ有之候市仗多分異議ハ有之間敷候ヘトモ自然異議ノ廉モ有之候

ョリ新个條ヲ以テ我條款ニ代用センコトヲ要求スル時ハ疑團相生スル歟叉ハ其條款ニ付存廢ヲ論出スル歟或ハ彼差廻候上自然英政府ヨリ質問ヲ受ケタル條別ニ付閣下ノ

意宜敷取計相成度偏ニ御依賴ニ及ヒ候名國政府ヨリ各自勝手ノ異見可申出若シー々其意ニ從條各國政府ヨリ各自勝手ノ異見可申出若シー々其意ニ從條各國政府ヨリ各自勝手ノ異見可申出若シー々其意ニ從條各國政府ヨリ各自勝手ノ異見可申出若シー々其意ニ從候不八到底我ニ存條ナキニ至ルモ難計當省ニ於テハ各个條名國政府ヨリ各自勝手ノ異見可申出若シー々其意ニ從候御臆斷ヲ以テ確答相成儀無之樣致废候如何トナレバ定テ

駐佛公使宛内訓二七五ハ本文書同內容ノモノナリ註 1青木公使付托ノ書類ニツィテハ一二文書参照尚鮫島

八二 明治士雲月十一日 赤肚英公使ョリ

條約改正問題ニ付新外務大輔ト内談ノ件

七月二十六日

內信

遣ノ旨實ニ御憤發ノ程奉察候來命ノ如ク英國政府ノ變替ハ御調直シノ末既ニ御一定相成リ青木公使赴任ノ便ヲ以テ御設立論ニ關シ御配慮一方ナラス乍去條約改正案ノ義ハ數回四月十二日ノ芳翰欣誦仕候陳ハ內閣分離地方官會議國會四月十二日ノ芳翰欣誦仕候陳ハ內閣分離地方官會議國會

保庇 外務省 御座候且 法權 輔ヂル 人 規ニ碼局 員大輔タ スル所アルヘシト 位ニ付同氏カ當職ニ就キタル 航遊ノ後チ自ラ著述シタル紀行中ニモ = 二談示アリテヂルク氏ト親密ニ交レハ必 遇等尚水溫和 由 カ遲延ニ對シテー僥倖殊ニ新外務卿 ナキ ŋ スルノ意ヲ含メリ且ツポンスホルト氏ハ定職大輔タル ハ寔ニ不要ナリ之ヲ廢止 ラ言外 敢 三於 ŋ $\boldsymbol{\mathcal{V}}$ 1 ・ヲ時 氏 ト欲シ己ニケネヂー セス現ニー昨 ルニ由リ其舉動頗ル自由ニシテ其發言モ亦從テ省 デ公事ヲ洩ラスヲ憚ルノ情アレトモヂルク氏ハ議 ノ都合ハ最モ宜ク殊 ーツ小子へ着英後間 中一 テ小子偶々階段ノ上ニ立チタ ハ弱ヲ助ケ正ヲ友ト 1 ニ示シ法権問 ニシテ其持論モ亦公平ナルノ評アリ新外務 當外務省ハ日 シテ私ニ懇話 忠告セラレ兩人暗ニ 夜レヂ(レーデー 題ノ モ無ク懇親ニ相成リ候故此節英 バニポンス 氏三 ハ我國ニ シテ可ナ 本二對シテ殊ニ好意 セシ事幾ント スルフ 加 内諭シ キモ可 取リ 水 相ヒ協力シテ我邦 IJ 日 士ニシテ嘗テ我邦 5 クル時ヂルク氏傍ラー?) セルボーン氏 舊卿二比 '成丈ケ日 テ ス大ニ日本ニ補益 ルト氏ョリモ懇切 ト迄ニ公言シタ 不二現行スル治外 、其實際ニ 半時 テハ至極ノ幸 「本ノ所望 ノ長 スレ ヲ 懷 D キ ハ ハ ν == ヺ ÷ N

低キ 制定シテ之ヲ發行セント欲ス且ツ此ノ新法ハ悉ク現 テ滿足セシムルニ足ルヘシ但シ目下我政府ノ所望ハ決 其効ヲ奏シタルモ更ニ怠ラス尚ホ不日ニ新刑法治罪法等ヲ ヲ 力 ナ シ ₹ 夫ノヂルク氏カ其省規ニ局促スス且ツ我邦 謀 速ニ其意見書ヲ送ルベシト = ノ囂言ナリ此ノ囂言ノ實際ニ沸騰セサ ケ 事一ト 從來此ノ問題ニ對シ注意ノ深クシテ且ツ先ツ法政ノ改良 リト存候ニ付小子ハ深ク其厚意ヲ謝シ且ツ告ルニ テ過大ノ利ヲ占メント望ムノ色ヲ現ハサヽル テ之ニ處スルニハーニ着實ノ行爲ヲ旨ト 又夕此件ニ付テーノ障礙ト云フへキ 我カー方ノミノ支配ニ属セ 大ナラス先ツ右新法中輕罪即チ警察法權或ハ行政法權等 行ハル、所ノ良法ニ則リタルモ ル文ケ クノ質アル ル事最モ緊要ナルヘシ云々ト右ノ一例ヲ以テ之ヲ見ルモ 法權 1 ヲ シ十年以來漸ク其面目ヲ今日ニ新ニシテ已 事 ハ好 ヲ知ルニ足レリト存候但シ如是ノ好機會ニ臨 = ク之ニ應スル ス ル Ŧ 1 ハ 達シタル旨ラモ 全ク我政府 ント欲スル 1 J) ノニ付必ス外國人ヲモシ ヲ以テ此問題ヲ取扱 ル様ニ注意シ ハ目 == カ 本二在ル シ決シテ之ニ乘 內密 鄭重ヲ旨 ニ對シテ友情 キス是ノ如キ ヲ以 ニ洩ラシ告 三歐洲 我 テ上策 テ之ヲ 外國人 三大ニ ŀ シテ 政府 シ ヺ

之ヲ專行スルニ當テハ必ス中外人ヲシテ爲メニ望ヲ失ハシ 困難ノ業ニハ非サルヘシ尤モ此事ハ不日ニヂルク氏へ面會 スト申入置候右ノ情況ニ付稅法設方體裁一件ノ如キハ左程 ルル事 上内談ヲ遂ケテ其結局ヲ電報可仕ト存候 無ルヘシト信シテ疑ハサル部分ヨリ着手スルニ 過半

過日米國前統領グラント氏へ書翰ヲ以テ音信ヲ通シ候處塽 都有權者ヲシテ霊力セシ 一覽候此ノ方略ヲ試ルヲ可ナリトセバビンハム氏ハ勿論米 本ヲ保庇スルノ一段ハ恰カモ小子ノ素意ニ適シ候間 紙寫ノ通リ親切ノ返書有之其文中英米兩國同意ヲ以 ムル ノ手段ヲ御考案有之度冀望仕 入御 テ

(以下省略)

十三年六月十一 H

倫敦

有

禮

非 上賢臺閣下

1 グラント氏ノ書寫見當ラズ

八三 明治十三年七月八日 森駐英公使宛 非上外務卿ョ:

改正輸入稅額ニ關スル件

註 1及2夫々一八〇及一二文書參照

八四 明治十三年七月八日 森井 駐上 英外 公分使卵 宛ョ

條約改正範圍ニ關シ訓令ノ件

附屬書 十三年六月十五日附森公使宛往電在本邦英代理 公使申出ニ付説明方ノ件

條約改正一件ニ關シテハ先任寺嶋外務卿ヨリ最初海關稅權 テ 海關稅權ノ一事ニ止マラズ法權ノ論題ヲモ同時併 從前ノ順序ヲ改メントノ意見ヲ以テ日不政府ノ目的ハ獨リ 回復之擧ニ着手シ漸次法權ノ論題ニ論及セントノ目 スル旨爺テーニノ外國公使へ開談ニ及ヒショリ公使等ニ於 國政 論及セ モ中ニハ我政府ハ最初ノ目的ラー變シ新タニ法權ノ事 英政府其他ニ於テモ日本政府ノ冀望スル所ハ專ラ海關稅 訓狀ヲ製シ猶其旨趣ニ依リ其任國政府へ照會相成 ノ一事ニ在リト思惟セル様子ニ有之候處拙者當職以來聊 府 ントスル へ申入タル ノ金ヲ起シタリ左スレバ先年改正事件ヲ 時ト其思考全ク變更セ りト 思惟シ ロセテ提出 候處ヨ 的 現二 ヲ以 項

信案第廿三號

存候ピニ我政府ニ於テモ他日内國稅ヲ課ルニ當リ多少關稅後來ノ程度ヲ量リタルモノカトノ御疑念ハ甚不適當ノ様ニ 度ヲ量リ制定シタルモノナルヤ御疑問之趣閱悉セリ右稅額 税額ハ將來我內國ノ國產稅其他之稅ヲ課スルモ差支ナキ程 バ 相成候ハヾ轉入稅額ニ關シ 右條約案ハ靑木公使出發之便ニ相托シ差進置候ニ付御熟讀 ナレバ縱令今日之ヲ適當トスルモ果シテ他日實際ニ差支ナ ノ額ヲ變更セサル可カラサ ヤ否ハ預メ斷定難致ハ不待論儀ニ付現今改定ノ稅額ヲ以 スル等ハ全ク後來物産ノ景況ト財政ノ方略如何ニ 凡ソ將來我邦二於テ物産稅ヲ賦課スルノ有無及ヒ之ヲ增 固ヨリ至當適實ノ程度ヲ量リタルモノニ無之何ント 信第三十六號ヲ以曾テ御回付ニ及ヒタ 例二依リ特ニ通商條約案中第十三條ノ一項ヲ設 存候右申進候也 貴下 ル場合アル可キヲ慮リ各國普通 ニテ御掛念有之點ハ直ニ氷 ル海關稅改正案 候事ニテ 依ル事 ナレ

明治十三年七月八

井 Ŀ 外 務

森 公

報ヲ送リ來リ候次第ニ至リ候右ニ對シ東京在留英代理公使 英政府忽チ其報ヲ得テ大イニ疑惑ヲ抱キ別紙甲號ノ如 知之通リニ有之然ル處條約草案書類既ニ印刷出來兩三日 二答ヘタル旨趣ハ其節既ニ貴君ニモ報道ニ及ヒ候ニ付御承 獨逸公使ノ如キハ自己ノ臆説ヲ主張シ其政府へ報告 訓令ヲ熟讀候得ハ其末段ニ他ノ事項ニ論及スルト 候得共別紙丙號ニ論述有之候通り一昨年中交付及候最初之 見ヲ一變セシ哉トノ疑念ヲ生シ候モ一理ナキニ非ラズト存 出發已前兼テ及御熟話置候通ニ付各國政府モ或ハ我政府所 候尤拙者不職擔任以來專ラ法權ノ一方ニ盡力致候ハ貴君御 氏 = = 差違アル ヨリ今日 スル云々又双方同意ノ上時日場所ヲ定メ條約 承知致度トノ旨ニテ別紙乙號ノ通英國代理公使ケネデー ハ各公使へ可相達迄ノ運ニ相成候際ニ至り前條ノ諸點 3 御照讀相成候得ハ事理判然ニ歸シ貴君御明所可相成ト存 キ双方ノ間疑念有之候テハ不都合ニ付我政府ノ趣旨明確 せ ン事ヲ望ム云々ト有之候得ハ當初改正ヲ申入レタ 照會有之即チ丙號ノ通回答ニ及置候右兩通ノ書翰篤 所ハ即チ拙者ニ至リ約定税目ヲ通商條約ニ附屬 ニ至ル迄終始一ノ如ク尤前訓條ト拙者ノ所見ト ラ 總改正 ノ權 三及 、キ電 ル ラ有 = 中 =

誤解無之樣御說破有之候ハ緊要ノ事ニ有之候 事迄ニテ大相違アルニ非ラズ決テ變說等ノ疑念ヲ生シ候譯 ハ無之筈ニ候條貴君篤ト此意ヲ體セラレ英政府此點ニ就キ 同時,ニ法權ノ事ニ論及スベシト ノ事ヲ申入レタ

儀ハ貴君ニモ銀テ御熟知ノ事ト信用罷在候處豈圖ンヤ拙 惟拙者ノ指令ヲ守ルベキ筈ナレ 孰レニ依リ然ル可キヤ兩說齟齬致居候旨申出候依テ拙者 帶スル罰法ニ照ラシ英國裁判所ニ於テ實決執行スルニ在 遵守セシメ若シ之ヲ違犯スルモノアルトキハ其規則ニ附 候依テ先般青木公使ヲ以テ及御達候訓狀其他ノ書類竝ニ 者即チ政府ノ定見御詳悉無之様相見へ實ニ意外ノ事ニ存 レバ拙者ノ說ヲ採テ確信セラルベシト答置候元來右等ノ ハ外務卿ナレバ公使へ指令スルハ當然ノ事ニシテ公使ハ ハ其隨時發行スル所ノ行政上ノ諮規則ヲシテ英國人民ニ ス氏ト御面話ノ節今回改正ニ就テハ日不政府冀望ス 今便御廻付ニ及候書類ニ就キ逐一御熟讀ノ上向後右様ノ 如ク成ルトキハ閣下指スノ趣旨ト相反セル様思ハル ト御説述有之候趣申聞候且同氏ノ言ニ果シテ森氏ノ説 過般ケネデー氏ト面晤ノ際貴下パークス氏ソー バ若シ兩説不相符合處ア 7 ル ν 所

> 進候也 覺書竝ニ註解書ニ明揭セリ但タ行政規則ノ中稅關規則違 誤解無之樣篤ト御注意有之度候畢竟當方ノ冀望スル所 ラス貴君一個ノ御見込ヲ以テ御決答無之樣致度候此段申 廉申出候ハヽ渾テ御聞取ノ儘委細書信ニテ御申越有之必 之度尤モ條約草按中ノ事項ニ付英政府ヨリ何等變更致度 歸スルモノトス右ノ諸點御詳悉ノ上其外務卿へ御談判有 犯ニ限リ罰金其他處分方ノ限界無之全ク我政府ノ權內ニ スル事ニ有之候此限界ノ外ニ出テタルモノ處分ノ儀ハ猶 貳圓ノ罰金ヲ以テ限界トシ同シク日本裁判所ニ於テ處分 日本ノ裁判所ニ於テ審判シ其罰ヲ實行シ又違式註違罪 ニシテ罰金五百圓禁獄三ケ月ノ限界已内ニ相當スル者 曾テ及御打合置候通我政府ノ行政諸規則違犯ノ英國人民 ハ ハ

明治十三年七月八

務 卿 井 上 馨

森 全權 公使殿

註 1甲號本號附屬書

3 2乙號 一五文書六月十五日附駐英公使來翰 · 丙號一六文書六月二十六日附英公使宛往翰

附屬書

甲號 十三年六月十五日附森公使宛往電

在平邦英代理公使申出に付説明方ノ件

Japanese Legation

London

following telegram from his government: English Chargé d'Affairs here has received the

was telegraphed by him to his government: tariff convention. I made following reply which Powers jointly for a simple revision of the existing tariff and wishes to negotiate with the Japan has abandoned the idea of fixing her own "English Government has been informed that Treaty

existing treaties. Treaty Powers separately for general revision of proposed import tariff and wishes to negotiate with own tariff but willing to negotiate on the basis of "Japan has not abandoned the idea of fixing her Mori will explain."

negotiation and that we decline to enter to you 17 January should be made basis of tariff for Foreign Affairs that proposed import tariff sent must point out clearly to English Minister any

> the whole existing treaties generally. simply to existing Tariff Convention but to the negotiate separately with each Power and also that such joint negotiation as that of 1866 but ready to revision is never intended to confine cover itself

Inouye

八五 明治主美育千五 日 井上外務卿宛森駐英公使ョ

條約改正範圍ニ關スル件

八月十二日

先達テ關稅設立體裁ノ義ニ付ポンスフオート氏へ内談ニ及 館ノ書記官ヨリモ鮫島公使ヨリ何人へカ同趣意ノ事ヲ話 當府駐劉同國大使ヲ經テ英外務省へ報知相成リ又佛國大使 御電諭ノ旨ニョリ開談候處右ハ在東京日耳曼公使ョリ ヒタル趣旨彼方ニテ或ハ誤解シタルニ由ルカモ難計 キ候處外務卿ハ墺國大使ト談判ノ央ニモ有之且ツ右ノ件 シ先ツ同氏ヲ探索候方便利ナルベシト考へ同氏へ面會ノ上 本月十五日電信ヲ以テ御中起ノ義ニ付本使親ク外務省へ赴 別信第四十四號 タル事アル ヲ傳聞シタル旨内話アリタルニ 付取敢へス電 ト懸念 起リ サ ハ

フオ 之旨確答有之候左スレハ右ノ一件ハ全ク東京日耳曼公使ョ 紙ノ通リ及電報候義ニ御座候尤モポンスフォー ニテ同公使ヨリハ決シテ右等ノ事ヲ何人へモ話シタル事 中鮫島公使ヨリ何人ヘカ相話シタル事有之云々ニ付テハ本 3 リ早速同] } リ営國外務省へ相聞へ候事ト 「本國政府へ申送リ同政府ヨリ當政府大使へ通報シ同 テ ノ説明ニ由テ其 氏ヨリ囘答有之候ニ付乃チ本月二十一日ヲ以テ別設明ニ由テ其全ク誤聞タル事ヲ信認致候旨ポンス 東京代理公使へ其實否ヲ問合セ候次第 一公使へ及問合候處右ハ全ク佛國書記官ノ誤聞 相考候敬具 - ト氏ノ談話 へ共只 **4K** 大

明治十三年六月二十五日

有

外務卿井上馨殿

1 六月二十 一日發森公使來電ハー六附屬書

八六 明治十三 年七 月二日 **并上外務卿** 宛ョ

條約改正範圍及形式ニ關スル件

附屬書 十三年六月二十五日附森公使覺書

スル所 閣下ニ述ベン日本政府 (ノ改正トハ結約ノ一方ニ於テ舊約中改正ヲ要スルト見定中改正ヲ要スル部分ハ盡ク之ヲ行ハント欲スルナリ尤モ 日本政府ハ必ス之ニ同意セザルベシ又タ日不政府ノ請求 意ナシ且ツ若シ其連盟條約ヲ結ハント請 Ŋ ル部合ヲ變更増加廢棄シテ新ニ改正條約ヲ結フヲ云フ ノ改正ハ關稅一件ニ止ラズ總テ從來ノ條約及ヒ約書 ナク亦タ條約改正ノ件ヲ條約諸國ノ會議ニ付ス シテ其自己ノ 關稅ヲ定ル 求スル者アル ŀ N

是ノ如 關稅ニ付日本政府ハ更ニ所考アリ今之ヲ簡短ナル覺書 稅目 覺書ハ御附與ヲ願ヒタシ此ノ關稅案ハ各國ニ對シテ同一ノ 紙英文)ニ認メテ閣下 ハ貴政府ニ於テ善ク御汲受アラン事ヲ希望ス外務卿曰ク其 トス則チ此ノ一紙ナリ ハスルト ナル 務卿日ク Ħ ク淡白ニ我政府ガ其所考ヲ前以テ通報シタル 1不政府 ヤ或ハ其間ニ異ナル所アルヤ 七同種 ハ更ニ諸外國 顯誤解御辯明ノ **不使先ツ之ヲ朗讀セン(讚終テ後)** ノ電覽ニ供スル方不使ニ取リテ便利 ニ課スルニー様ノ税目 「ヲ異視スル事ナク 趣キ委細了承シ 本使答テ 日ク全 ヺ ソリテス 何國 ノ好情 3 ルリクサ輸同 ス 分別

別信第四十六號

フォー 卿ニハ未タ新任ノ事ニモ有之且ツ該件ハポンスフォ 過日 其席ニ列セシメタリ本使先ツ談ヲ開 兼テ詳知致居候ユヘ外務卿ハ直ニポンスフォート氏ヲ呼 メ去月二十五日外務省於テ更ニ同卿ト辨談ヲ遂ゲ候尤モ同 ヲポンスフォー ヲ 故ニ同人ノ氣付ニテ本使ガ辨開 辨開ノ末英政府ニ於テ略我政府(い) 略左ノ通り \sim 奉シテ外務卿へ公然辨開可致事柄ニ屬シ候ニ付尚ホ其旨 、以テ別ニ異存ナシトハ答置候へ共右ハ固ヨリ御電報ノ旨 打合候上外務卿へ差出シ度ト示談有之候ニ付常座ノ挨拶 御電達有之候條約改正ノ趣旨外國政府誤解 ト氏ハ輔職ニ位シ公然タル談判ヲ行フベキ人ニ無之 ニ前日及報告候通リポンスフォー ト氏へ話シテ外務卿へ面會ノ時日ヲ請ヒ定 ノ大意ヲ書キ取リ之ヲ本使 1 趣意ヲ了解致乍去ポ キ御電達ノ ト氏へ面 / 趣旨ヲ述 會シ ート氏 ンス ル テ

ニ止ル事ト誤解スル者アルト見へ本國政府ヨリ其誤解タル之ヲ條約諸國ノ會議ニ付シ且ツ條約改正ノ事ハ關稅ノ一件日不條約國中或ハ日本ハ今其自己ノ關稅ヲ定ルノ念ヲ絕チ ヲ貴國政府ニ辨解致シ置クベシト指令アリタリ本使今之ヲ

・約ヨリ ンスフオー 府 權ヲ專占セントノ點ニハ非ス只其設方ノ體裁ヲシテ外國條 引離チ貴政府一手ニ 恰モ滿足シタルガ如クニ見へ且ツ其議院出席ノ時期モ亦甚 シテ情好ヲ維持セシメント企望セリ云々是ニ於 地ニ行ハレ易キ方法ヲ擇テ之ニ由リ改正談判上彼我ノ間ヲ 相談ニ付スルトノ趣意ナルガ如シ本使曰ク恰モ然リ ニ過ギズ但シ其税目ヲ定ムルノ前ニ於テ之ヲ外國政府トノ スフオート氏傍ヨリ曰ク日本公使ノ所説 承シ得タレトモ尚ホ此ニ疑問アリ今般日べ政府ノ請求 ノ役室ニ入り尚ホ同氏ト談論ヲ密ニセリ其大略左ノ如シポタ迫リシガ故ニ談ヲ止メテ辭シ退キ續テポンスフオート氏 ル各國ト ク御辯明ノ旨ニ因レハ關稅設立 ニバ異ナル所アル ハ甞テ言出シタル其固有ノ權利ヲ主張スルニ非ス全ク實 引離シ日本帝國法律ノ一部分ト做サシメント欲スル スト ハ現存條約ノ性質ハ結約一方ノ便利ニ從ヒ變改 別々 ト氏曰ク關稅設方ノ體裁ノ義ニ付テハ明カ ニ條約改正ヲ行ハントアル 説ニ對シテ テ御支配ナサレ が如 シ 又夕關 其關係如何 ノ義ハ條約改正 税設方ノ體裁ヲ改 度トノ アナラン ハ日本政府 趣二承解 ハ現存條約 本使答え テ外務卿ハ ·日本政 x ラ 一 三領 ∄ 目 x ン ノ

斷ヲ行ハシムル者ニシテ其責ノ所歸ハ日本ニ非サル事固 在り乍去若シ萬一ニモ右妄説ニ類スル不情好ニ基テ我請求 政府ニ期望スル所モ亦其同情好ヲ以テ我ガ請求ニ應スルニ 年若クハ千年際限ナク存スベシト定ルニ至ルニ由リ其妄説 アリト 至テハ質ニ非常ノ妄説ナリト評セザルヲ得ス若シ其說ヲ理 タル事固ヨリ辨スルニ足ラサルナリ殊ニ今囘日不政府ノ主 リ論ヲ待タサルナリ云云 ニ對スル事アラバ是レ賞ニ日本政府ニ追テ終ニ其難避ノ果 メテ穩當ナル改正ヲ行ハント欲スルニアリ故ニ我政府各國 トシテ謀ル所ハ十分ナル情好ヲ以テ實際行ハレ易ク且ツ極 ト請求スルニ非ス又ソノ第二問ナル現存條約ノ性質ノ說ニ 各國ト別々ニ行ハントノ趣旨ハ更ニ現存條約體裁ヲ改メン 十六年ニ結ヒタル貿易約書ノミ英米佛荷ノ四國連名ノ例ア 現存ノ條約ハ蠹ク各國ト別々ニ結ヒタル者ナリ只干八百六 モ是ハ只一ノ異例ナリ故ニ今我政府ニ於テ條約改正 セバ其歸スル所ハ卽チ一度締結シタル條約ハ必ス百 3 ヺ

税一件ニ付テハ佛獨等政府ノ意ハ如何本使答テ曰ク獨逸政 ポンスフオート氏曰ク詳ニ貴説ヲ了承セリ多謝ス扨此ノ關 ノ意ハ米タ間 知スルヲ得サレトモ佛朗西政府ハ日不政府

posed to put into force. ment as to the Import Tariff which it is now pro-Japan and Great Britain, expedient to state briefly the views of his Governtions respecting the Revision of the Treaties between With the intention of facilitating the negotiathe undersigned deems it

- The Import Tariff is to new or Revised Treaty. be disassociated from
- manner would be prepared to guarantee Empire may permit. maximum which the actual fiscal prospect In order to promote the security, his Government number the permanence of the New Tariff for a years, such term to in a satisfactory of be the the
- most careful consideration to the undersigned would be Government may think proper to express. Before promulgating the proposed Tariff of which details of handed herewith, the Government of that Tariff which the prepared to accord the any suggestion as British

(Signed) Mori

Japanese Legation

ナルハ甚タ幸ナリ云々 今之ヲ言ヒ難シポンスフオー ノ請求ヲ拒マザル ベシト決シタルガ如シ其他ノ政府ノ意 ト氏曰ク他政府已ニ右ノ次第

發スベシト決シタルガ如シ故ニ獨逸佛朗西等ノ政府ヲモシ 箇ノ意見ヲ發スルヲ欲セス他ノ條約諸國ト相談ノ上ニ之ヲ 去其後ノ様子ヲ探索スルニ英政府ハ此事件ニ付直ニ英國一 合熟議ヲ遂ケ過誤無之樣謹勉從事可致候敬具 急務ニ有之候不日青木公使到着可相成ニ付鮫島公使トモ會 テ亦タョク我請求ヲ引受ケシムルノ手段ヲ盡クス事目今ノ 外務卿輔ト ノ談話中要用 ナル部分右ノ通ニテ歸館致シ候乍

七月二日

全權公使 有 禮

外務卿井上馨殿

十三年六月二十五日附森公使覺書

Copy

by Mori June 25 1880 Handed to Lord Granville

New Japanese Memorandum as Tariff. to the

June 25 1880

註 1 || 文書附屬書參照

一八七 明治十三年七月六日 井上外務卿宛森駐英公使ョ

外國人ヲ裁判スヘキ判官採用方法問合セノ件

London 6th July 1880

Inouye

tions. fence against administrative law and police regulajudges to try Write at once fully plan for providing proper foreigners under new treaty for of-

Mori

八八 明治士養月十一日 森駐英公使 井上外務卿 宛ョ

外國人ヲ裁判スヘキ判官採用方法ニ關シ回答ノ件

Mori

Japanese Legation

London

Foreigners shall be tried in ordinary Japanese

電達中閣下ョリ英代理公使へ御辯明ノ言ニ Japan has

Court in the same way as Japanese subjects. There is however at present the question of appointment of Foreign judges to be especially employed as Japanese judge in case when Foreign interests are involved, but it is still under consideration of the Government. You are not therefore authorized to mention this English Government.

Inouye.

八九 明治士三年十月十六日 非上外務卿宛

關稅目ト本條約トノ關係ニ付請訓ノ件

件 開粉自主權ノ主張ニ對スル英政府意向ニ關スル 附屬書 十三年七月十五日發森公使來電

別信第五十號

八月三十日到

七月十六日

其後右變更相成候御報知モ無之ノミナラズ六月十五日ノ御サントノ主義ニ記載候右ハ本使在京中我政府ノ豫定ニシテ目ヲ條約書中ヨリ引離シ日不政府法律中ノ一部ノ體裁トナ致シ候義ハ別信第四十六號ヲ以テ致報告置候右覺書中我稅六月十五日御電達ニテ條約改正誤解ノ一件已ニ其筋へ辯解

mot abandoned the idea of fixing her own tariff 云々ト有之候故本使出發前御決議ノ主意少シモ變換不相成義本・有之候故本使出發前御決議ノ主意少シモ變換不相成義感が作日別紙ノ通リ電信差出候次第ニ條右稅則引離候件英献デハ去月二十五日英外務卿へ差出候党書リ主意ト齟齬致成所ノ內意ハ差シテ異論無之模様ニ候へ共各同盟國ノ意見無之由中述タル旨鮫島公使ョリ通知有之候ニ付現今ノ模様ニテハ我請求ハ先ツ行ハル、方ニ屬候下去不得已シテ右覺ニテハ我請求ハ先ツ行ハル、方ニ屬候下去不得已シテ右覺ニテハ我請求ハ先ツ行ハル、方ニ屬候下去不得已シテ右覺ニテハ我請求ハ先ツ行ハル、方ニ屬候下去不得已シテ右覺ニテハ我請求ハ先ツ行ハル、方ニ屬候下去不得已シテ右覺ニテハ我請求ハ先ツ行ハル、方ニ屬候下去不得已シテ右覺ニテハ我請求ハ先ツ行ハル、方ニ屬候下去不得已シテ右覺ニテハ我請求ハ先ツ行ハル、方ニ屬候下去不得已シテ右覺ニテハ我請求ハ先ツ行ハル、方ニ屬候下去不得已シテ右覺ニテハ我請求ハ先ツ行ハル、方ニ屬候下去不得已シテ右覺ニテハ我請求ハ先ツ行ハル、方ニ屬候本中進候也

全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

国国内

關稅自主權ノ主張ニ對スル英政府意向ニ關スル・十三年七月十五日發森公使來電

Aoki's despatches just received, Your telegram June 15th indicated that desire still remained for imperial decree respecting Tariff, therefore informed English minister for Foreign Affairs June 15th that Tariff, when detail settled would be separated from Treaty, but duration guaranteed for fixed period. English minister for Foreign Affairs apparently favorable to plan, but is consulting other Powers. France appears to consent.

Mori.

一九〇 明治主気月十四日 森駐英公使

關稅目ト本條約トノ關係ニ付訓令ノ件

附屬書 十三年七月二十四日附森公使宛往電

別信案 第三十號

其中新定税目ハ本條約中ヨリ分離シ我政府法律ノ一部分トニ中述候貴君御在京中條約案取調ノ體裁ニ付種々論議有之所在御回答ニ及候故既ニ御了解ト存候得共尙詳細ノ事理此趣致閱悉候右ニ就アハ同月二十四日電信ヲ以我政府主意ノ別信第五十號ヲ以テ七月十五日被發候電信ノ旨趣御説明ノ別信第五十號ヲ以テ七月十五日被發候電信ノ旨趣御説明ノ

利ヲ以テ或品目稅ニ限リ約定ヲ以テ之カ制限ヲ相極メ候事 利ヲ放棄シタルモノナリトノ誤解有之候得共右ハ決シテ我 協同ヲ得ルニ容易ナリト思考致候處ヨリ先版青木公使携帶 テ屬否共等シク約束上ョリ成立候事故我政府ニ於テハ之ヲ 以テ約スルトキハ實際ニ於テハ五十步百步ノ差アル 候我政府へ現今條約迚モ曾ヲ其制稅ノ主權ヲ自棄シタル事 = ニ於テ稅目制定ノ權利ヲ放棄シタル儀ニ無之全ク双方之便 差進候草案ハ條約ニ付屬スル方ノ體裁ニ致候事ニ有之候然 政府ニ於テハ引受方宜敷分離ノ體裁ニ比スレバ却テ各國ノ 今歐洲各國間ニ行ハル、通商條約ノ體裁ニ依ルモノニテ各 ヲ考量スルトキハ約定税目トシテ條約ニ付屬セシメ候方現 分離スルモ格別ノ便益ハ無之加之實際各國ト協議上ノ難易 有之候處右ハ全ク外面ヲ僅カニ護スルノミニテ旣ニ公簡ヲ 更事ヲ證明致候方我體面ヲ護スルノ一方ニ可有之トノ議 シテ之ヲ布告シ別 誤解ト被存候間其政府ニ於テ萬一右等ノ誤解無之樣御說 テ即チ歐洲各國通行ノ互相買易ノ主義ニ基クモノニ有之 處右ノ如ク條約ニ付麙スルトキハ我ニ於テ稅目制定ノ權 無之又約定税ヲ以テ之ヲ自棄シタルモノト見做シ候 ニ兩政府ノ間ニ公簡ヲ以テ或期限中不變 ノミニ 公太

明有之度候

分離ノ方ハ全ク相止メ更ニ草案ノ通り條約ニ付添スル方ヲ 狐疑ヲ生シ不都合ニ付一旦電信ヲ以テ申進候事ニハ候得共 ヲ量リ候迄ニテ他ニ主意ハ無之候水邦ニ於テハ拙者ョリ 今般我政府ヨリ税目ヲ本約書ニ付添セシハ實際協同ノ 右之次第二付稅目 以テ專ラ御談判相成樣致度候 ニ右付添ノ方ヲ以デ各國公使へ談話ニ及置候間 相成候テハ却テ當方ニ於テ通知シタル主義 テ各其本國政府へ通徹致候事ト存候然ルニ今兩樣ノ仕方 ラ麗否 ハ制税權利ノ有無ニ不致關 ŀ 麒齬シ或ハ 其主意 係但 難易 が極 旣

此段中進候也

註 1一八九文書附屬書

2次掲附屬文書ナルニ付参着

附屬部

十三年七月二十四日附森公使宛往電

24th July 1880 2h- 30m p./m

Mor

Japanese Legation

London

Your telegram July 15th received We never abandon

claim of fixing our own tariff, but have no objection to annex a conventional tariff to the treaty as we proposed in draft treaty. But, if you think it possible to make English Government consent to separate entirely from the treaty the said conventional tariff binding it by Imperial decree only, try it and if you succeed you must get written promise from them: should, however, English Government decline to consent in both above manner, then, we presume, there is no other way than to annex whole tariff to the treaty as a conventional tariff or bind the same by Imperial decree.

Inouye

九一 明治士三年十月三十日 非上外務卿宛

新條約案ノ疑義ニ付請訓ノ件

月下旬ニ達スベク之ニ付第一不使ニ於テ辨議致スベキ事柄ノ上在京公使ヲ經テ各條約政府へ御遣相成リ英政府へハ七十三年六月十日付貴翰恭讀仕候新條約至案廟議一定シ印刷九月十三日到

第二英政府ヨリ論出スル所ノ意見問題等ニ付不使ノ臆斷ヲ

行ハント欲スル者アリ故ニ今其全權者ヲ速ニ派遣スルヲ要 モ 委任スルヲ欲セズ假令新條約調印ノ地ヲ東京ニ同意シタル 正事件ニ由レリ其然ル所以ノ者ハ此事件ニ付全權ヲ同氏ニ 得ルアルモ英政府ノ傾意未夕其何處ニ出ルヤ豫メ之ヲ今日 領承仕候此ノ三諭ノ中第三ニ付テハ大陸諸國或ハ其便利ヲ ヲ東京へ簡派セシメ候樣要求致スベキ旨等御縷諭ノ趣逐一 以テ之ニ專對スベカラズ第三各國政府ヲシテ速ニ全權使臣 **企體ニ付意見ヲ述へ尚ホ後便ヲ以テ逐條之ヲ呈スベシ** 見ニ對シ廟議豫備ノ料ニ充ルニ足ラント存シ敢テ今先ツ其 シテ貴魔ニ供セハ或ハ為メニ他日英政府ヨリ來タス所 ヲ進呈スルモ蓋シ無効ニ屬スベシト雖トモ茲ニ其一二ヲ記 條約竝ニ附屬覺書及ヒ通商條約ニ付今更ニ本使等ヨリ意見 求スルモ或ハ我所望ノ如ク迅速ナル事ヲ期シ難シ但シ本使 ニ察シ難キ者アリ御詳知ノ通リパークス氏ノ滯英ハ專ラ改 第一新案ヲ修交覺書通商ニ三別 於テハ必ズ貴諭ノ旨ヲ遂ル様ニ盡力可仕候却說新案修交 事無之本使着英以還ノ質況ニ由レハ却テ英京ニ於テ之ヲ 其大綱談判ノ權利ニ至テハ英政府未夕曾テ之ヲ明言シタ シタル 理由ト其便否ニ付英 プ意

之ヲ充分ニ辨明シ得ルノ訓令ヲ有セズ

明ニ付不使未夕訓令ヲ有セズルニ似タレトモ今後之ヲ改ルニハニ似タレトモ今後之ヲ改ルニハ只雙方ノ全權協議ノミニテ更ニ批准ヲ要スルニ及ハスト做スガ如シ是レ前ニハ重大テ更ニ批准ヲ要スルニ及ハスト做スガ如シ是レ前ニハ重大

之ヲ譲與スル者ハ則チ譲與ナ**リト** = 辭柄トシ囂然不服ヲ鳴ラスベシ其時ニ當リ先ツ之ニ 意トナシ更ニ彼方へ讓與ヲ加ルナキニ由リ彼方ハ必ズ之ヲ 第四新案ハ專ラ所失ノ權利便益ヲ我方へ回復スルヲ スルニ似タ ハ須ラク從前護與シタル事項ノ中今回ノ條約。 不使未ダ示諭 レドモ ヲ 得ズ 東京ニ於テ彼 $\dot{\nu}$ **主張スベキ** ^ 1 開談已 · ヲ 以 = 玆 = デ適切ト = 出夕 リ更ニ 應スル 、以テ注

政府ニ於テ或ハ難問スル所アラン果シテ然

ル時ハ本使未タ

第五今回我所要ノ法權ニ限ヲ立タルハ行政上ノ規則法律ヲ犯シタル外國人ノ處分三ケ月入牢或ハ五百圓罰金ノ科ョリ北シタル外國人中間ニ係ル分竝ニ右規則法律ニ係ハラザル分等ハー切犯者本國ノ法律ニ依賴ストナシ假令其裁判ノル分等ハー切犯者本國ノ法律ニ依賴ストナシ假令其裁判ノルシタル乎本使未夕示論ヲ得サルニ由リ若シ其辯明ヲ要ヲ極メタル平本使未ク示論ヲ得サルニ由リ若シ其辯明ヲ東

テ英京ニ於テ開談セントノ意向相見候趣御中越ニ候處右ハ

こ於テハ或ハ右全權ヲバークス氏ニ付與スルヲ望マス

締結之全權委員派遣之儀ニ付テハ外歐洲政府ハ知ラス

七月三十日附貴簡昨十三日接手御來示之趣委細了承候條約

ハス請諭此ニ及候也敬具日ニ青木公使へ面會問答ヲ遂ケ候へ共明ニ其辯明ヲ得ル能者ニシテ更ニ御垂諭ヲ仰カサルヲ得サルト覺候分ニ候實ハ以上五事ハ專ラ新案全體ニ係リ本使意見ノ大略ヲ陳述スル以上五事ハ專ラ新案全體ニ係リ本使意見ノ大略ヲ陳述スル

七月三十日

倫敦 森 有 禮

上馨閣下

飪 六月十日附外務卿書翰見當ラズ

九二 明治士三先月十四日 森駐英公使宛

交渉地及條約ノ形式字句等ニ關シ回訓ノ件

森公使別信案 第三十二號

候樣御取計有之度候 一御盡力委員派遣ノ儀英政府へ御追リ有之當方企望通相運ヒ |

充分ニ解シ得ルモ

ノ甚タ寥々無據雇外國人ヲシ

テ文辭ヲ修

支無之積ニ有之候貴君モ御承

知ノ通リ現今日本人中洋語ヲ

ニモ幾分數便利ヲ加へ候事ト存候其他別ニ趣意無之候 係約草案ノ大體ニ就キ御意見ノ條項左ニ及御回答候 り、 等ニ至テハ覺書トシテ之ヲ別ニ掲クルニ如ストノ考案ョリ が、時、修交ノ事項中貿易其他法權ノ事ヲ混交シ其體裁又 使利上ニ於テモ不都合ナキニ非ス依テ新約改定ノ際可成彼 世混交錯雜ノ患無之様カメテ事項ヲ區分シ判然セシメ候方 可然就中法權ノ部ノ如キハ頗ル難問ニテ種々錯綜候事柄ニ 可修交ノ條款中ニハ只大綱ノミヲ擧ケ實際舉行ノ手續細目 特に交ノ條款中ニハ只大綱ノミヲ擧ケ實際舉行ノ手續細目 有様各部ヲ別冊ニ分チ候事ニ有之且右體裁ノ方閱覽ノ爲メ 右様各部ヲ別冊ニ分チ候事ニ有之且右體裁ノ方閱覽ノ爲メ 右様各部ヲ別冊ニ分チ候事と存候其他別ニ趣意無之候

ノ要旨ヲ承諾セハ其文字體裁ノ如キハ幾分敷變換候テモ差係質明晰ナラシムルヲ以テ主要ト致候故ニ各國ニ於テ大體を第五数候得共抑我新案ノ如キハ專ラ我所望ノ要件ヲシテルスルヲ要セス尤御申越ノ「ギツドデイプロマティツク」がスルヲ要セス尤御申越ノ「ギツドデイプロマティツク」が、一般のでは

見ニ依ルトキハ委員ノ派遣ヲ躊躇セルカ如ク相見候得共此 於テ開談スヘキ事ヲ再應中入候處英政府於テハ同意ノ趣干 點ニ至リテハ旣ニ最前回答モ有之候故當方於テハ之ヲ確信 テ我政府ハ曾テ各我公使ニ付與シタル内訓狀ニ基キ東京ニ 會へ派遣セサル旨ヲ答候處其後英京會議ハ廢止ニ相成候依 せ ル 3 カン事ヲ預定セシ際我政府ニハー應ノ打合モ無之當時鮫島 貴君御在京ノ日御熟知ノ通最初英獨兩改府ノ考案ニテ日本 ハ貴君當時外務大輔御奉職中委細御記憶ト存候然ルニ今貴 八百七十九年四月二十一日附別紙寫ノ通報答有之候其顚末 リ電報 テ後來着手ノ順序ヲ預定致居候事ニ付貴君ニ於 大旨英政府ニ於テ承諾シタル上ニ非ラサレハ我委員ヲ該 リ因テ我政府ハ最前彼政府ニ示シタル我公使へノ訓狀中 ニ英政府ハ日本ノ委員ヲモ會同出席ヲ冀望セシ旨ヲ申越 同盟ノ各國政府ノ意見ヲ打合セン爲メ內會議ヲ英京ニ開 ニテ始メテ此事ヲ承知シ在英上野公使ニ問合セタ テモ

第四項 第三項 双方全權協議ノ上ニテ每時批准ヲ要スルニ シ候上 綴セシメ候次第ニ付或ハ法律家流ノ語氣無之トモ難申然 置候得共御中越ノ康ニ對シ尚此 當ナラサル様ニ存候此儀ニ付テハ旣ニ別信三十號ニ 約ヲ改定シ新條約ヲ締結スル上ハ甘シテ約諾スルノ外ハ我 縛ヲ不免候得共決シテ放棄ト中譯ニハ無之候故ニ現今ノ條 候併シ是迚モ英政府於テハ每時批准セサレハ不都合トノ儀 コンベンションノ如シ 追加條款ヲ補添スルカ如キ場合ヲ指即チ千八百六十六年ノ 追加條款ヲ補添スルカ如キ場合ヲ指 進步ノ度ニ應シ増損改換セサルヲ得サル場合アル時ニ限リ ナカラ是等ハ抑枝葉瑣末ノ事ニ屬シ前述ノ通事實明瞭ニ歸 國固有ノ權利ヲ保持致候事ニ付此放棄云々ノ用語 ハ當初外國ト締約已來一時或ハ約束ノ爲メニ幾分敷之カ束 ニ有之候得者我ニ於テハ其主意ニ任スルモ亦妨ケ無之候 譲與ス ノ儀ハ元來本條約ヲ旣ニ批准セシ上ハ爾後我內國ノ形勢 ハ如何様トモ修正ヲ加へ可 我所失ノ權利云々ト有之候得共我國權ノ儀ニ付 ^ 丰 E 旣ニ最初 ノ訓狀中ニ == 中卜存候 中述候又我要求 クル 如 二八甚タ穏 = 新港ヲ 及 公ス シ テ シ

迎へテ擬定スルニ不及ト存候脱き輸出稅ヲ廢スル等ノ外別ニ當方ョリ新案ヲ提出スルニ別・輸出稅ヲ廢スル等ノ外別ニ當方ョリ新案ヲ提出スルニ別・輸出稅ヲ廢スル等ノ外別ニ當方ョリ新案ヲ提出スルニ

第五項 以テ答フルノ外致方無之候 営ノ事有之外國人ョリ苦情申立候事アラハ亦前同様ノ事 可カラス若シ有之ニ於テハ相當ノ手順ヲ經テ伸寃ノ道ニ由 候故ニ英國法官ノ審判トイヘトモ或ハ不當ノ事ナシトイフ 失ヲ補足セン爲メ各國共ニ大抵控訴上告等ノ制法有之儀 漏ナク法官ニ不明ナシトノ事ハ素ヨリ難保事 フ如キ云々御申越ニ候得共元來何國何時ヲ論セス法律ニ遺 ハ英國ノ法庭ニ任シテ處分セシト雖ト ノー手段アルノミト存候將又萬一我法官ノ判決ニ於 五百圓罰金三ケ月入年ノ分界ヲ越タル犯罪ノ英人 モ裁判若シ其當ヲ失 三付此等ノ缺 アテ不 ヺ ___

貴簡ニ對シ大體ノ要點ノミ不取敢此ニ御答申進候也右之外尚各項ノ細目ニ付御疑問ノ點有之趣ニ候得共今便

十三年九月十四日

註 1前揭一九一文書

2 十二年四月二十一日附英國政府回答(サリスベリー

所記ノ 該案第四條所記ノ法律 巧手ヲ要スル スカ或ハ締約雙方ノ商 云々」ノ文意明瞭ナラズ然カク認ル者ハ日本政府 ラ指スカ尚ホ詳密 「日本二於テ左ノ條々ヲ不要ナラシムルガ ガ如シ 復ヲ主張スルト 議ニ由 ニ係ル分ハ未タ時 ノ開諭ヲ要ス ノ疑ヲ來タスノ恐レ ルカ尚ホ全體ノ文章上 ノ至ラサ 如キ法律 一方ヲ指 ア ル y ア原 三更 文其 = Ξ

使ノ所解 明條章ト云フモ可ナルベシ此ノ如キ事柄ハ著ク一箇ノ條章 條約規程外 要考數件アリ例へハ 該案第五條 裁ニ改 キアル」ナル今ノ字ニ意アルが如クニ見ユレト ŀ ノ五例ハ我邦ニ取リテ重要ナル關係アルハ言フニ及ハ ケ ルヨリ 七條ハ外國裁判ノ權限ヲ解キ明カセリ目ケテ之ヲ解モ新案訓令共未夕明示ナキヲ以テ此ニ之ヲ添述セリ ニ由レバ然ラズ全體此ノ外國法權ノ行方ニ付テハ ル方穏當ナラン殊ニ)裁判官ノ應。分(戊)上告ノ便等ノ如キ是ナ(丙)一港ニアル裁判廳ニテ他港ニ起レル訴へ ハ主意明瞭ナラズ但タ其章尾ニ Now open「今 寧 他ノ條章ニ附 (甲) 既開ノ港ト將開 其下半文ハ ケ加ル カ或ハ 旣 ノ港ト 往 ロケテ之ヲ解 起事 亦夕覺書ノ Ż モ青木公 /別(乙) 三反照

||五||文書附屬書一参照||和||文書附屬書一参照

一九三 明治十三年八月五日 非上外務卿宛

新案修好條約竝附錄覺書二付意見(一)

九月十

Ħ

約ニ由リ讓與スル者ニシテ之ヲ目ケテ讓與條款ト爲シテ可 文章ノ上ニ思ヲ致スヲ以テ緊要ナリトス又其材文「Where 加ル方適當ナラン該案第三條ハ舊約ノ中讓與ノ部分ヲ尚新 以下ニ至テハ意味明瞭ナラズ其文中 land has been granted 凡ソ條約或ハ條約書ニ依テ云々」 ヤ應否ヤニ從テ再許否ヲ決スベキ事柄ニ 屬スルガ 故ニ 其 ナリ此ノ讓與ハ今回我政府ノ請求ヲ外國政府ニ於テ友スル 國ヲ他ノ不文國ニ甘列スルノ氣味アルガ如クニシテ不利 該案第二條ハ從前 其條中領事ニ係ル分若シ有要ナリトセハ通商條約ノ部 モ今ニ至リ 尚ホ之ヲ我方ヨリ再出スル 鎖國 ノ氣未夕存在 「公衆共用 セ ル ハ或 時 ニ方リ其要ヲ ハ以テ猶ホ自 ノ爲」ト = ナ

ハ改締談判ノ一障礙ヲ來タスモ料リ難シシ英政府ノ如キニ對シテハ爲メニ不要ノ不快ヲ覺ヘシメ

或

覺書ニ付意見

若シ爲メニ我邦安ヲ妨ルガ如キアラバ其害實ニ擧テ言フベ又其不當ナル裁判アルニ方リ一箇人ニ係ル事ハ姑ク問ハス 外國法定ノ裁判ハ或ハ輕重其當ヲ失シ或ハ犯罪又ハ 部分ニ係テハ須ク深ク慮ルベキ事アリ既往ノ經驗ニ由 覺書第一款ヨリ第三款マデ重大ナル法權ヲ外國ニ 我國内ニ限ルノ意ナルベケレ カラズ須ク深ク慮ルベキナリ 逃亡其跡ヲ暗ラマシ其處分ヲ行ヒ能ハザリシ實例少カ ニテハ何法ヲ取ルベキヤ F 又其第二款第四節商社ノ分 モ清國諸港 ラ如 オ共同ノ 讓 被告等 與 **グラズ** ルニ ス ハ

外國政府ノ同意ヲ得ルハ甚タ覺束ナシ假令之ヲ得 モ下等無金ノ者ヲ處分ス 四款罰金二圓以下 ・ノ輕罪 ル ノ法ヲ明示 ハ 我法廷ニ於テ處 セザ ν バ 此 Rルトシテ 分ス ノ條款 ル 事. 全.

繫獄三ケ月以下ト限リタル 覺書第五款行政 法 ヲ悉ク五百圓三ケ月 Ŀ ノ法律 :規則ヲ專行スル 以下ニ豫定シタ ハ其實或ハ右法規ノ犯者ヲ罰ス 二罰金五百圓 ル = 基クナ ラ 或 ン ハ

20 重 今回新の 三0分

将又夕法律上ノ 陳スベシ 考訂ハ目今着手 中 Ė 付完了 上之ヲ後便

場ニ在ル同國領事或ハ相當ノ官吏へ報知シ」云々ト

・ヲ以テ

セ

ハ更ニ充全ナルヲ得ルガ如

シ

明治十三年八月五

日

敦

森

有

開港市場へ送付スルハ場合ニ由リテ或ハ我方ノ不便利タラ

該案第十七條中ニ免許

ナクシテ規程外ニ出タル者ヲ最近

1

ン故ニ尚ホ之ニ加ルニ「又ハ抑留ノ上其趣ヲ最近キ開港市

明治十三年八月 Ŧi. В

敦 有 禮

井

Ŀ

閣

-Б

非 Ŀ 馨 閣 ъ

四 明治十三 ÆE. 八月 Ti. Ħ 非森 上外務 卵使 変 ヨ IJ

新案通商條約ニ付意見 $\stackrel{\frown}{=}$

約ヲ以テ我一方ヲ束縛スベキ事柄ニ非ス 但佛蘭西伊太利ノ如キハ必ス之ヲ廢スル事ヲ請求スヘ 該案第十二條輸出稅ノ一項我方ヨリ發題スル 付彼方ヨリ所求ノ模様ニ從テ最高稅何額ト限リ之ヲ我友應 通商條約案第十第十一ノ兩條ハ全ク稅關 譲與ト 覺書或ハ 保證書ヲ以テ彼等へ交付スル方妥當ナ 則 *>*\ = 、其要ヲ 属シ 通商 キ 見 --Z

> 九五 明治十二 车 八月 六 E 井森 上駐 外英 務公卿使 宛ョ

改正條約諸案ニ付意見具申ノ \equiv

森公使意見書

書等和英兩文照合查閱候處往々多少之相違有之樣相見候 過般御廻附相成候改正條約案及橫濱港則噸稅規則幷御內達 別信第五十四號 付心附之分別紙ニ 認メ差出候條尚篤ト御審査有之度右中進 =

月六日

倫敦 有

井 上外

註 文書アリ参照外務卿ノ同答十月八日附一九八文書及諸案註解一九九外務卿ノ同答十月八日附一九八文書及諸案註解一九九

十三年八月六日附森公使發別信第五十四號附屬森公使意見書

濱 港 則

第三條

× ナ 日 ŀ 力 不文第一行凡テ入港ノ船舶ハ云々英譯ニハ入港 シテ汎ク之ヲ指シ其下文ニ至テ各入港船ノ船長ハ云 アリ意少シク差異ナキニ非サルニ似タリ ラ文字

第四條

第一行官船舶碇泊云々英譯二 船ノ如キモ亦云フ ノ名稱ニ ハア ハ ラサ Public ships ル ヘキ ŀ ァ IJ 郵

第六條

里トハ同 第七行一海里ト ナ ラ ス ブ ル モ 英譯 = ハ _ 英里トア ŋ 海 里 <u>}</u>

第十條

井上外務卿時代 對英交涉 一九五

> 第十一條 第三行少許ノ手敷料云々英譯ニハ 當ノ意ナリ 格別ノ異同 25 ナキ モ 少ク妥當ナラ moderate サ 'n ア カ 如 IJ

アリ國主ノ所有ト 第一行國王ノ所有云 - 云フ方可ナ Æ 英譯二 ラハ Property of Crown

第十二條

末文港長ヨリ スヘシト ノ文字アリ クショ取除 T ^ シ ノ下英譯ニ ハ 或 シ 之ヲ毀却

第十四條

第一行何等ノ船舶タ 於テトノ文字ア IJ ŀ Ŧ 1 下英譯 == ハ 水港 1 經界內 =

第十九條

第五行吏員ノ許可云々英譯ニハ 第二行第三行或ハ航海中船内 ノ下英譯ニハ港內ニ近ツクニ 及テト ニ傳染病患者ア Written permission - ノ文字ア IJ シ モ ノ ハ

アリ許可ノ 書面ト ・カ許可狀 . 1 力 云フ方可ナラ

第二十一條

第二十條

第一行少ク E 干 应 時 前 云 × 英譯 = ハ 炒 ク モ 文字ナ

アルニ似タ 第三行第四行此規則ヲ犯シ或ハ之ニ從フ事ヲ拒ム者ハ云 皮薬器ニハ或ハ之ニ從フ事ヲ怠ル者トアリ少ク輕重ノ差

第二十二條

第一行外國形ノ船云々英譯ニ トアリ大ニ相異ナルカ如 Vessel of foreign build

第五行其代理ノ下英譯ニハ及ヒ補助員トノ文字アリ

第二行但以下ノ日本文ノ方英譯ョリ 大ニ 粗 サル 力如 シ

本港噸稅規則

項軍艦及軍用船トアリ英譯ニハ軍用 船 ノ文字ナシ

好 條

第四條

雙方協議同意ノ上ニ加フル 所ノ修正ハ 爲シ雙方ノ同意ヲ以テ之ヲ加フヘシトアル 以テスヘシ 但書爾後ノ修正 ŀ ァ リ少ク差異アル ハ時々兩締盟國ノ全權大臣 カ如シ Convention > モノ英文ニ ノ間ニ協議 ハ ヲ

第八條

洲市場ニ於テ兩度ニ借リ入タル公債ノ元利仕拂其他云々 其利子借リ入タル公債ノ元利年賦拂其他云々英文ニハ歐 第九行歐洲市場ニ於テ兩度ニ借リ入タル公債ノ年賦拂ト トアル ノミ

第七葉

之ヲ一條ニ登載セリ云々英文ニハ之ヲ四條款ニ登載 第十行內外交涉裁 《判權ノ事中略率ネ現行條約書中簡 1] =

トアリ

第六行第七行且ツ其良政府ノ施治ヲ窘迫スル云々英文ニ

ハ善良ノ施治ヲ妨害ストノ意ナル 力如

云此文及ヒト書スルトキハ五百元以内ノ過料ト三ケ月以第三行第四行過料洋銀五百元以内及ヒ禁獄三ケ月以内云 乎英國ノ Order 内ノ禁獄ハ之ヲ併課スルモ可ナル如クニ見ユ果テ其旨意 in Counsil 쑠 ヺ 視 ル ニ皆或ハト 載ア

井上外務卿時代 對英突涉

> 此條約調印ノ日附ヨリ 第二行其日附ヨリト アルハ批准 ŀ 記スル方明瞭ナル ノ日ト解セラル ヘシ ` カ 如

第四節會社ノ文字英文ニ フ方妥當ニハアラサルへ キ平 partnership ۲ アリ 組合ト 云

アルモノニテ其意ヲ盡サ、ルニ似タリ 第四行即斷審判ノ文字ハ英文ニ To try summarily

文字アリ 第九行日本法律ノ下英文ニハ或ハ右條約又ハ約定書トノ

第十一行圓ノ字英文ニハ弗トア 1)

本税關ノ法律或ハ規則トア 末尾ョリ第三行日本ノ慣例法律或ハ規則云々英文ニ 1)

ハ

日

通商及航海條約

第八條

挿入スル方可ナ 第四行諸什具物品類ノ下英文ニ ラ ハ救得タルト

各公使ベノ内達書

第六行第七行責テハ彼我互ニ現行條約ノ本旨ヲ相解 々此處英文ノ方ハ脫字ニテモアラン歟何分讀下シ難 シ云 · 3

英文ノ意ヲ本旨ト認メ可ナルヘキ平 不合ノ處アリテ貴意ヲ貫キ得タルモ 第六行以下ノ一節ハ日本文ノ方明瞭ヲ缺 ノニ アラ キ且ツ英文ト サル カ 如 モ

説トデモ云フノ意ニテ反スルノ義第八行之ニ反シテノ文字英文ニハ ルノ義ニハ To return ヘアラサル ^ h ア 却

cially トアリ裁判ニカケテト云フノ義ニテ直ニ之ヲ公正 第四行是等ノ案件ヲ公正ニ處分スル云々 英文ニハ judi-

トハ云ヒ難キ == 似 Ŋ

第四行挿注其區域頗ル狹隘ナリ ヲ除ノ外トアリ意相同シカラス トアル ŧ ノ英文ニ ハ 僅少

第十行條約上 ノ英文ニハ條約上當然トシテ之ヲ要求セ ニ由テ當然之ヲ自 得セ ント謀 リト ν アリリト ア

第四葉

第一行條約書中一條トシテ之ヲ明示セル者ナシ然ルニ云 云英文ニ據レハ條約書中何ノ條款ニ據テソノ然ル平ヲ明 示セスシテ唯タ一般ニ條約トノミ云フトアリ

第十五葉

第一行ノ訴訟及ヒ第四行ノ暴論等ノ文字ハ英文ニ照 少ク妥當ナラサルニ似タリ ス =

九六 明治士三代月十三日 非 上 外 務 脚 交 会 使 宛ョリ

ダビツトソン氏意見書進達ノ件

附屬書 ダビツトソン意見書其一其二

委員ヲ命セラレタル事モアリ且ツ寺島外務卿ノ時顧問ヲ受 候處幸二嘗テ我ガ工部省ニ奉職シタル英人ダビツトソン氏 前便送呈シタル意見書ノ宋文ニ豫報致シ置候法律上ノ考訂 ケ條約書等ノ考訂ニハ多少ノ經驗アル人物ナルニ付試ニ同 ニ付テハ本使親ク筆ヲ執テ聊カ述呈スル所アラント相考居 九月三十日到

> 資料トナルベキモノ不尠ト見受候ニ付本使ノ考訂ハ暫ク之 氏喜諾直ニ別紙意見書二通差出候右ハ實際ニ於テ御參考ノ 氏ヲ招キ私ニ修好條約案ノミヲ相示シテ其意見ヲ間候處同 ヲ後便ニ讓リ先ツ同氏ノ意見書ノミ今便及進達候敬具

八月十三日

在倫敦 森 有 禮

井上外務卿殿

附屬書

ダビツトソン意見書其一

Japan and England 1800. Treaty of Friendship between Davidson's notes on Draft

substitute "for 5 years from the date of signing Art. to the Treaty Powers to decide as to the Efficiency procedure about to be adopted by Japan". better than the text which practically nistration of the Japanese system of law & legal to the Treaty Powers of the institution and admithis Treaty, or until the notification by until the institution &c. IV. I would suggest striking out the words down to practically leaves "thereafter" & This is

of that new system.

respectively exercised. therein in accordance with said provisions may be & any right to institute civil & criminal proceedings this Treaty & of the Memorandum annexed hereto, H. B. Majesty in accordance with the provisions of to be "Any jurisdiction exercisable Art. V. I would prefer the first part of this art. by Courts of

II subsection 1. As to the words "now open" see note to Section

obtained the favor to object if they think "the in the first place by the power making the demand privilege." By this article it is left to be decided decide what is an "equivalent Compensation or this article might thus be in the first place to open they agree it is open to the power who previously & the Japanese ing the demand and secondly, (even if this be seta dispute between Japan I the foreign power makvalue than that which they gave. The effect of equivalent Compensation or privilege" is of less The difficulty here is Government. But even supposing as to wko is to

> the power now arranged with than power of all the other Treaty powers (who had sible, or for one which the two high Contracting identical Compensation or privilege if that be posmodified if the words ran thus "in return for an think this difficulty ment on the ground that it is more favorable to on other conditions) to interfere with this arrangepreviously made the same demand & obtained it tled satisfactorily to both parties) to put it in tracting parties. would exclude interference by the other High Conparties shall consider to would be very considerably be equivalent." to them.

words indisputably Convey a Contrary intention." and I should strengthen the by substituting "save where to have made" the additional words "or to make" Art. VII. I would add after the words "deemed words after "Save" express and positive

Notes on the Memorandum.

clusively." questions arising." Section 1 subsection 2. This is done to strengthen subsection I would add the After the words "all such word

4 of section II. if it is to deal with cases of partner-ship where Japanese, and members of two or more foreign nations are all partners in the same firm—for example in the case where a Japanese, a Frenchman & an Englishman are all in one partnership. The introduction of the word "exclusively" will make it more plain that such partnerships are excluded from the operation of this subsection 2 and that they are therefore to be under Japanese jurisdiction.

Section way at present as regards these new ports. them, at all events to avoid binding Japan in any different arrangements & smaller concessions as to restrict the operation of the treaties to ports "now intention of the framers of this treaty really to meaning the words will bear; yet it may be the would not have this jurisdiction. courts in Japan ports not "now open," these courts art. V of the Treaty) if the Queen established & when other ports are opened to make Ħ. subsection 1. Under this (read with This is the only

Subsection 2. This gives such large powers to

Sect. sentatives, that the Treaty these rights have been disputed by foreign reprenot exercised these rights for many years, & that is necessary in the face of the fact that she has when similar powers were so much restricted by this extensive power was meant to be acknowledged it may be argued that it was inconceivable that are enormous compared with the modeste Jurisdic-& exact statement of these powers. property that I would prefer much & minutely defined and the mode of its exercise, than general words of reservation & but I do say that even if she be right in that, it in the assertion of her claims of jurisdiction now; ly right in her construction of the old Treaty, & tion reserved by Section IV, & if this subsection disputes will be always occurring. & imprisoning for eigners, & forcibly seizing their Japan especially in the matters of arresting, fining Every right claimed or asserted should be clearly left as it is, when it comes to be interpreted IV. I do not say that Japan is not technicalshould contain more These powers Without this more specific assertion.

specified with the utmost exactness

Subsection 4. The above remarks apply to this. After the words "British subjects" I would add "even in cases where members of other nationalities than Japan and England may also be partners with them."

As to the last provision of this subsection it is not clear what its effect would be. There is no penalty imposed. If the intention be that the Japanese court is to decide what to do under the previous Comprehensive clause of this subsection, then before the Treaty powers will agree to this they will ask to be informed particularly as to the laws guiding and controling the Japanese Courts in the exercise of this jurisdiction.

It is not clear whether it is intended by this subsection that where there is a partnership of such a prohibited kind, the partnership is to be regarded as unlawful *only* as regards the prohibited property, or as regards the property of *every kind* belonging to the partnership.

Section III. The last part of this section especial-

ly is liable to the same remarks as those made under subsection 2 of Section II. The power of arrest is only inferentially asserted. Such matters have been notoriously disputed, and require now to be setted in express, direct & distinct words.

Section IV. There is no power given here to imprison in case the offender is without money. Nor is anything said about enforcing payment of the fine by seizure of his property. These two things should be specifically provided for. By mention of the 2 yen punishment, every other punishment practically, is excluded.

Section V. This section is in such contrast to the last as regards the power which Japan is to exercise that one doubts if it is seriously intended to press it on the Treaty powers. But I fear they will not agree to it until they are shown these laws, and receive satisfactory assurances as to their administration.

I do not know why after the words "against the state" there are not also these "or the creime of high treason." This would include offences against

the Emperor & family &c.

ダビットソン意見書其二

Mr. Davidson's observation on certain of the difficulties in regard to the Draft Treaty of Friendship between England and Japan (1880) and the mode of dealing with these.

The main object of this treaty seems to be
I. To assert Japan's right of jurisdiction in all
cases except those between foreigners of the same
or different nations, those between Governments,
cases where foreigners are defendants, and offences
by foreigners against Japanese subjects, Japan however asserting her right to deal with them up to
the moment of trial. The treaty proposes temporality to restrict this right as regards foreigners to a
jurisdiction in the following cases.

- 1. A criminal jurisdiction in petty cases punishable with a fine up to 2 Yen.
- 2. A jurisdiction as regards offences against the

state, offences under Treaty or Convention, and offences against administration or police regulations whenever the maximum punishment for these offences does not exceed three months imprisonment or a 500 yen fine. Such offences where punishable more severely to be tried by the foreign courts in Japan except where they are not justifiable & punishable by these courts in the same way as they are in these foreign countries respectively, in which case Japan reserves her right to deal with them.

Note No restriction is made as regards customs laws which will thus depend on their Special enactment.

- 3. A civil jurisdiction in all cases of partnership between Japanese and foreigners.
- II. Japan also asserts her right to make her own laws, and objects to the power claimed by foreign Ministers, to issue their own in Japan.
- III. Japan asserts her right to conduct her own judicial proceedings without the interference of foreign Ministers.

IV. The Treaty also confirms certain treaties, conventions, agreement &c &c declines to be bound otherwise (for example by the law or effect of usage.)

The future effect of the favored nation clause is also set *forth*, and certain general rules as to judicial forms and procedure are indicated.

assertions of right, however well founded, when the foreign Powers will not subscribe to general specific & detailed arrangements, for I fear that example the laws as to arrests and punishment and laws in connection with it drawn up, important. they involve dealing with matters so various and in the Treaty, the laws regarding offences punishgulations and laws which are classed to-gether their property, the administrative and other recases as well as criminal) against foreigners and and as to the execution of judgements (in civil the Treaty made with reference thereto. The above objects require to be obtained by specific, its limits clearly defined, the rules Each right or power claimed should and For

the foreign powers will ask that all these laws able with 2 yen, & the laws of mixed partnership, police, the equitable and uniform administration ciency, discipline & self-control of the Japanese ask for assurance upon the subjects of the effiand to contain full & detailed rules as to arrest, ly the them among other things to enumerate specificalbe made and shown to them. trial procedure & punishment. They will also inst (it is to be noted) the jurisdiction has not virtual appointment of the judges who they insistestablishment of the Mixed Court in that country. arranging similar questions with Egypt on the matters may be inferred from their conduct in probable attitude of the foreign Powers to such judges, the sanitary of the laws by thoroughly qualified & reliable tempt of court and in some police cases in which jurisdiction was conceded except in cases of coned should be mostly foreigners. There the foreign Powers insisted on having the diffrent offences and their punishments condition of prisons. They will expect No criminal

for example the consul in any case where there a foreigner was seized by order of the Court vestigate his the right to call on the Court of Appeal to inwas a ground of complaint against a judge had had the right of interference in specified cases, prisoner over to his Consul. Further the Consuls Egyptian police were obliged at once to hand the outcry in which though arrest was permitted the those two classes of flagrant delict and public The powers been exercised owing to probable complications. to be notified in all cases where the property of of arrest were strictly confined to conduct. The Consul had always

That being so, it is necessary to consider what is really practicable in the present condition of affairs. I do not mean what is the best and quickest method of overcoming all the difficulties in connection with extra-territoriality (for that I have already laid before the Japanese Government in my papers on Mixed Court) but what it is possible to do in the present negotiations. This I will now consider, putting aside, however,

reference to the powers of arrest and seizures of property by the Japanese police I think that the purely diplomatic questions (which do not this is one of the points in the draft treaty which it is advisable that Japan should agree with the while reserving all her rights by a general clause, I hope may be satisfactory settled now. require further comment from me) such as the of duties for foreigners who implore their protec-Police should be called on to perform all kinds by these powers. For it is absurd that the Japanese may be some modifications & conditions proposed it is possible to agree on, though probably there foreign Powers on certain rules, and I think that in administrative matters, all of which questions to offences against the Japanese Government & in Japan for their own subjects with reference power claimed by these Ministers to enact laws foreign Ministers with judicial proceedings, & the on Japan, the unjustifiable interference of the declaration that the Treaties alone are binding modifications of the "favored nation" clause, the

Arrest without Warrant Police should have the power to arrest foreigners of imperative necessity that some rules should Ministers. should be met with a volley of foul abuse from ports flourishing open knives and threatenin gthe now be made on this subject. the culprit, peaceful inhabitants native & foreign that they ruffians who reel about the street of the open good by asserting such offences as the drunkness, proceed to exercise their powers for the public tion (against theives for I think therefore that it is a matter and a defiance from his Consul & example) & when they The Japanese

without any warrant in the following cases—I where the foreigners is caught in the act of committing an offence—2 where, though not so detected, he is endeavouring to escape after having committed it, 3 where he is seen flying from the scene of a crime immediately after its commission carrying arms or other dangerous weapons or bearing on his person or dress marks of a recent struggle, or under other circumstances of

suspicions-4 where he is pursued by public outcry is seen escaping by night from a house, store, would be most unreasonable to refuse them. it is unreasonable to demand on the contrary it good and there is not one of these powers which for help from the inside of such places. In all they should have this power when there is a cry foreigners or not to make the above arrest. & if necessary break into any building or ground, should also have the power without warrant enter having committed a crime therein. under circumstances warranting suspicion of his or such other building, or from an enclosed space his property or those of his family-6 where he accuses him of an offence against his person or -5 where he is given in charge by a person who cases they would be acting for the public private whether the property The police Also

Arrest under Warrant

Besides the above powers the police would require to have full powers *under warrants from the courts*, either when a search was necessary, or in cases

well as the authority to enforce the attendance of witness and the production of written and other evidence would be issued under the new laws which it now proposed should be agreed on by Treaty in the manner indicated further on. I refer to warrants issued under the administrative Regulations under the 2 yen jurisdiction, under the partnership law, the press law, and under the law for punishing offences against the Japanese The Mikado, the State

Sovereign or State where these inst. are not punishable by the law of foreigner.

Further the power of arrest, and seizure, & persuit of offenders & their property under any of the laws now in force such as Harbour, Shooting, Harbour, Shooting, Quarantine.

Quarantine Laws should be extended under these new general laws now to be made.

Immunity of Police

Further there should be an agreement that when the police acting in good faith make the

mistake of arresting innocent persons, or so enter on, seize, or break into property or ground neither they nor the Japanese Government shall be eiable.

The power of arrest & seizure &c will thus be either without a warrant as in the six above enumerated cases (Page 8) or with a warrant in such cases as may be agreed on in the new administrative & other Regulations.

Forms & Procedure

The Japanese law as to forms and procedure will require in these cases to be specially clear, as any mistake or informality may be taken advantage of by the Powers, & made a subject of a dispute, and if the terms of Subsection 2 of Section. II of the Memorandum are to be adhered to, it is highly probable that the Powers will ask for the most exact information as regards them. Mixed Partnership

I shall here add one word to what I have already said on the Subject of the mixed partnership provided for in Memorandum. I have not

dealt on the many difficulties resulting from extraterritoriality in Japan, because these are familiar to Your Excellency, but as regards this subject of partnership the difficulties are perhaps more complicated than as regards any other in as much as the conflict of laws & jurisdiction Conflict of jurisdiction

practically prevents the operation of any law of any country whatever. Judgements may be pronounced by the court of one of the partners and execution issued, and the other partner (of a different nationality) can practically laugh at the one and defy the other. This I have myself in seen done in Yokohama where in such a case the English officer of the English Court acting on an English judgement got by the English partner was ignominiously ejected from the premises of the partership by the other partner who was a Duchman.

It will be therefore very necessary if this subsection 4 is to be pressed on the Powers, that they should be asked to endeavour to unite toge-

ther to remedy this unsatisfactory state of matters. They will however desire information not only as to the Japanese laws of partnership, but also as to the law of Bankruptcy which often complicates these difficulties still further. And if this subsection be adopted it can not be too plainly expressed that all foreign action and interference is excluded, and that Japan alone has the rights expressed in the clause together with distinct words giving Japan exclusive power to seize, sell or otherwise deal with the partner-Seizure & Sale of Partnership Property

ship property according to Japanese law.

With reference to the offences punishable with fine up to 2 yen I have already said that these 2 yen Jurisdiction

require to be enumerated and the laws and modes of trial and procedure as regards them intimated to the Powers. When that is done they will be more ready to consider this proposition, & it is not to be forgotten that the difficulties as regard, these petty offences will be very much

seem the most practical method and avoid the Japan after the Treaty is settled. This would (if not already prepared) being postponed till the the offences & preparing the law and procedure jurisdiction generally, the duty of enumerating might in the mean time be asked to assent to this ces the British Government and the other Powers arrest and seizure. deminished by the settlement of the question of sary arrangement in Japan and to establish this found to do their utmost to facilitate these necesis conceded and that the foreign Ministers are ever be distinctly arranged that this jurisdiction most extravagant waste of time. ed are acting together in one place without the matter can be properly arranged unless all concernthe Foreign courts making different arrangements possibility of the different Japanese Ministers at Japanese Government can arrange to do so in jurisdiction. & different rules. In fact I can not see how the I think that in the circumstan-It should how-

As to the administrative and other laws & the

jurisdiction now claimed under them, a similar these laws before them, all the pewers will do policy, I think, will be agreeing to these laws, place no unreasonable obstacle in the way being reported to their own courts at home they will in fact be bound under the penalty will then be the duty of the foreign ministers, approval I have spoken of be in the treaty, it sary, just, and reasonable ed, and every object sought to be obtained necesevery step and form of procedure clearly indicatdistinct, every power to be exercised well defined, the foreign Ministers gained. These laws could then be presented to the 2 yen jurisdiction, a great point would be operation. thing their own courts can to facilitate their desire to adopt them, and to offer to do every will be to undertake to consider them with every have said they might be asked to do as regards them in the same conditional way in which I But if they can be got to agree to ij the bost. For without Japan, and if the general every clause

done a great obstacle is removed and then one as to arrest &c should be first agreed on. That however indispensable that the above agreements guarantees as to proper trial, and treatment of be put before the foreign ministers, the simplest by one the new administrative regulations should ence and care it may be done in time. It is character may facilitate matters; but with patijurisdiction by Japan & so they will be the more themselves to no instant recognition of actual plan is that the powers are really committing Japan will be obtained. offenders & thus step by step the great object of posals which may be afterwards specifically made. prepared to accept moderate and reasonable prohave still the power to withhold approval and ready to grant what propose, and at the same Thus it may be said on the whole present matter, little This will take some time of course and perhaps most moderate first with assurances they will feel more ready, though they may friendly negotiations The advantage of this of an informal and

if the general declaration as to Japan's Right to make her own laws, & conduct her own judicial proceedings, in both cases without the interference of foreign ministers and unhampered by a usage which has arisen from an exceptional state of circumstances now no longer existing, if all this be conceded by the treaty in the manner I have indicated, & at the same time the offencive right claimed by the English minister to legislate independently in Japan be distinctly removed, a great advance will have been made by Japan and she will then be able to free herself step by step from all the evils of extra-territoriality & to attain to a position of perfect & absolute independence as regards both foreign ministers & foreign Powers.

註 本意見書ニ對シビードン意見書アリ卷末追補参照

九七 明治十三年十月五日 森駐英公使宛

英外務卿へノ覺書訂正方訓令ノ件

附屬書 十三年九月三十日發森公使宛往電

有之全體ノ意味明瞭ニ了解致策候得共爾後其政府へ御談判 以テ貴君ヨリノ御發電別紙甲號接到候處電文中ニー二誤字 付本官ヨリ回答ニ及候書翰中之意味ニ關シ去月十六日附ヲ 去ル六月二十六日附ヲ以テ英國代理公使へ條約改正之儀 之候得ハ更ニ御訂正ノ上御辯解有之候樣致冀望候因テ去ル ニ相成候節ハ專ラ我書翰ノ旨趣ニ基カレ若シ曩キニ貴君ヨ 卅日別紙乙號寫ノ通發電ニ及候此段申進候也 グランウォル氏へ被差出候覺書中右書旨ニ支吾スル所有

1及3夫々一六文書及一八六附屬書參看 2別紙甲號後出二〇〇附屬書二ナルニツキ參看

十三年九月三十日發森公使宛往電 Japanese Minister

be guided by it solely view of Our Government. Mine 26 June to English Chargé d'Affaires is Therefore I request you firm

Tokio 30th Sept. Inouye 1880.

モノ

ハ今囘ノ新約

二依り

明晰確實ナラシ

A

ル

其委細ハ先前既ニ御送致ニ及ヒタル説明書ニ詳述致候間 或ハ各外國人ノ爲メニ設クル墓地等ノ如キモノヲ指シ候猶 意二有之候公衆共用 熟閱有之度候 八為メト ハ外國人居留地ニ接スル 公園

歩ヲ進メテ以テ其所期ニ達スルカ爲メナレ 今日 置キ以テ他日我内國法制ノ整備法官ノ熟練スルヲ待ツテ然 權ノ獨操ヲ期スルノ意ヲ明示シ先ツ其地步ヲ今日ニ占有 スル 第四條ハ未夕時ノ至ラサル ナラス却テ我政府法權ヲ獨操スルニ切ナラサル ラニ年月ヲ經過スルトキハ其幾分スラ今日ニ收メ難キノ ナク漫然之ヲ發題シタルモノニ無之若シ法制全備スル 、後ニ全ク外國法衙ノ廢撤ヲ要求セント欲スルニ在リ故 シ彼ヲシテ益治外法權ノ堅塞ヲ固守セシムル ν ハ不可ナリトシテ法權ニ關スル部分ハ一切發題セス |此ニ法權ノ幾分ヲ收メテ倘其法制ノ備ワル ノ疑アリ云々本條立案ノ精神ハ我 ニ今日ニ = ス 於テ速カニ之ヲ發題シテ前途全權 ノ確實ナル 甲號 如 ヲ顧ミス漫然法權 カズト存候 開キタ 政府將 ル ハ決シ 港 來ニ ハ締盟各國 ~二從ヒ着 の回復ヲ主 獨操ノ ニ到ル ノノ意ヲ彼 一於テ其法 テ目 事 モ = 的 非 = Ξ モ Z = シ

> 九八 明治十三年十 月 八日 森駐英公 使卿 宛ヨ

改正條約諸案ノ疑義ニ付囘訓ノ件

信按

約二付御意見ノ條項縷々御申越ノ趣熟閱致候右貴見ニ 新案ノ説明左ニ致條列候 本年八月五日附貴信接到新案修好條約幷二附錄覺書通 簡

其中二就テ貸借ノ手續等ノ如キ不正ニシテ往々紛議ヲ來ス 第三條ニ讓與ト云フハ舊約ニ依り 方至當ナルヤ否ヤハ尚再考可致候 シ 國相五ニ締結スル條約中ニ其文例ナキニ 如キ云々トノ貴見一理ナキニ非サル 修好條約第二條ハ自國ヲ他ノ不文國 ベキ患アル ニシテ決シテ今新タニ讓與スベキモノヲ云フニ非ラス但 テ今遽カニ改ムル能ハス繼續スルモ實際之ヲ存スル = 有之候尤領事官ニ關スル事項ハ貿易條約ノ方ニ挿入スル 難キ理アルヲ以テ舊約ノ如ク之ヲ存シ置クモ妨ナキ見込 ハ治外法權ノ論題アリ自然歐米普通ノ條約文例ニ 旣ニ讓與シタル カ 二甘列 如 非 シト ス殊ニ我國ノ如 z 雖 ル ノ氣 ・モ歐米各 モ 依準致 味ア ノ旨意 ノニシ IJ

之ニ拘ワラス新約締結施行之日ニ至ラハ開 之ヲ豫言スル 從來ノ開港場ハ其儘ニ開キ置ヨリ外 府自家ノ便益ナレ ニ之カ區別ヲ付スルニ及ハサル事ト思考セリ乙號條約規程 テ自カラ多少ノ殊別アリト雖トモ法權ノ施行上ニ於テハ特 ヤハ外國政府ノ我請求ヲ諾スルト否ヤトニ依ル事ナレ ハ舊ニ依リ之ヲ存シ置カサルヲ得ス隨テ規程外ハ勿論規程 方ヨリ冀望スル非サレ キ事ニ非ラス又其權限ノ廣狹伸縮ハ我權 下雖トモ居留地外ニ於テハ外國ノ法衙ヲ置クヲ許サ、 立テ之ヲ讓與セシ部分ノ外ニ出サル間ハ我政府 ル外國法衙ノ權限ニ至テハ覺書中ニ在ル如ク法權ノ分限 意義ナリ丙號一ノ開港場ニ在ル外國法衙ト他ノ開港場ニ シテ可ナリ尤モ行政上諸規則ノ如キハ各港其土地ニ就 ノミナラス彼國民ノ利害ノ ベシ丁號法官ノ應分ノ如キモ單ニ我國民ノ利害ニ關 Ź 他國 要求ヲ俟タスシテ相當ノ法官ヲ撰任スル ^ モ益ナカルベシ凡ソ開港場ハ新舊ノ ハ其場合 ハ決シテ他ノ言ヲ俟タサル ハ之ヲ鎖スル ニ因テ法官ノ應分ヲ が關スル 所尤大ナル ナシ新ニ開港スル ノ見込ナシ然ル 港場ノ 理ノ所及フェ非 个條中二揭 べ シ モノナレ /別アル ノ干與ス ハ外國政 新舊ヲ不 .シ英佛 ŀ ヤ否 ハ キ ス N モ

候事 解可相 數項ニ關シテハ覺書及叙言說明書ヲ御熟讀相成候得 ス英佛國 七或 成卜存候 ノ如キハ其手續現今既ニ整頓ニ近シト云フベシ右 ハ n |有之候戊號上告ノ方便ハ固 3 ŋ 無力 n ゝ 可 御了 カ ラ

貴見ノ 等既往ノ實例ヲ援引シ之ヲ論辯スルトキハ或ハ彼一シテ未タ共局ヲ結ハス 因テ此條項ヲ議定スルノ時ニ今條約解釋各共見ヲ異ニ 因テ此條項ヲ議定スルノ時ニ 要セリ ラス 第七條不條ハ外國裁判 從來各公使ョ ノ檢疫規則其他行政上ノ諸規則ヲ施行スル 際二既ニ其慮リナキニ 感觸ヲ與起シ談判ノ障礙ヲ爲スモ難測トノ事ハ 感觸ヲ起スト雖ト 他ノ讓與ノ事件ヲ包括スルヲ以テ此ニ之ヲ揭示スル 往ノ質例ヲ援引シ之ヲ論辯スルトキハ或ハ彼一時不快 下半文ハ暗ニ英政府既往 如ク覺書ニ記載スル方得體ト雖ト IJ / 屢々抗論ヲ發セシ實例不少 モ將來ノ紛議ヲ一掃スルノ好機ナリ |ノ權限 非ラス然トモ尚熟考スル ノ [ノ起事ニ反照シ英政府不快 ミヲ解明 モ獨リ法權ノ 3 ノ論題ニ Ŋ ルノ時ニ臨ミ右の各政府トノ現の出議題ニ別シテ ル モ 、最初起草 ŀ ノ 丰 ナ ξ ハ彼 ν ヲ ナ

便ニ申進候通り彼ニ讓與シタル法權ノ區域内ニ於テスルモニ付從來裁判不當ノ弊害ニ對シ深慮スベキ云々右ハ旣ニ先覺書第一款ョリ第三款マテハ重大ナル法權ヲ讓與スル部分

民ト 罪 亦彼ノ法衙ニ付シテ處分セシムルハ勿論ナリ 且 カラ 地ニ在リテハ自 商會結社ノ事ハ勿論我邦内ニ限ル事ナリ清國ノ 我ニ有スル 丰 ハ = シ シ 然シ如此 一何等ノ (ノ性質ニ依リ外國法衙ニ在テ之ヲ處分スル 關スル事ニ非ラスシテ我邦安ヲ妨クルカ如キ アリテ夫カ爲メ我人民ノ害ヲ被ルモノアル シ 夕 在日本外國法衙ノ權限外ニシテ之ヲ處分スル能ハ ノ談判乎或ハ他 ハ我裁判所ニ於テ日本法律ニ照シテ之ヲ處罰スル 若シ外國法官甚シキ過失アル乎又ハ法律上 依リ控訴上 ノ間 ルモノ ス故ニ本條ハ右等ノ如キ我國地外ノ事ヲ含蓄シテ立案 我之ヲ如 ハ全ク本條外ノ事 事故ヨリ其事ニ至ル哉ハ豫メ期シ難ク候又一個人 = 出事アル 結社 ナリ其事ハ第五款ノ末文ヲ御熟覽有之度候 ニ無之候若シ清國地方ニ於テ我人民ト他各國人 何 告ノ手續ヲ履 セル為メニ豫メ其分限ヲ議定スル **めラ其地ニ就ヒテ之レカ分限ヲ定メサル** ハ何レノ國 ノ關係ナキ政府ノ判定ヲ仰 爲ス能 ニ屬スルヲ以テ他日別 ムノ外他 ス 二於テモ實ニ稀少ノ 如 此 ニ處分ノ方法 ノ法ナ ト雖ト クニ止 ŀ ニ之ヲ議 如 事アラハ是 + 甚敷遺漏缺 事二 八 兩 ヲ + 共同 要ス ノ權ヲ ·モ其犯 サ 丰 7 ナ ラ 有之 カヌ ルト カ ル 或 可 べ 政 ル ノ

度右 シテ ノ貴説アリ 四款罰金二圓以下ノ輕罪處分ノ權ヲ我ニ取 ij ゝ スレハ最モ多ク紛起スル 以下無金ノ者ハ即チ我違式註違等ノ條例 不相成事ニ付我要求ヲ達スル ゙ス ト雖ト シモ 此 ・モ該件 = 之ヲ豫定スルニ不及ト存 ハ人民交際往來ノ際他ノ重罪犯 所 ニシテ是非ト 事 別シテ御注 ルハ覺束ナ モ 罰則 同意ヲ不得 意有之 __ 照 ラ シ

変ヲ開 第五款罰金五百圓禁獄三ケ月以上ノ罰ニ係ルモシテ我人民ト均シク之ヲ處分スル事ニ有之候 習慣ヲ以テ實施スルノ事不少此際ニ方リ如此 我ニ取ラント云フハ恰モ外國人ヲシテ全ク我 ク 初 ニ之ヲ實施スルハ容易ニ難被行依テ不得止 4 ノ法衙ニ交附 ション」ノ下ニ立タシメント企ツルト同様ナリ a I 裁判 トモ到底他各國政府 狀ヲ熟視スル キシ以來今日 標目ト モ 權限 ノナ シタルモノニシテ右ニ超過シタル分マテ シテ處分セシムルトノ事ハ此草按ヲ起ス ヲ分界シタ ニ諸法制亦未夕充全整備スル 近ノ來歷ヲ觀察スルニ蓋シ條約外單 ŀ ノ貴説ニ ノ肯諾ヲ得ル事甚タ難シ且 'n 者二有之候本條自好 彼我ノ 無限ノ 述 「ジュリスデ ノハ素 ス N = 至ラス 請求 我邦外 間 ラ以テ 一我內 三右 ⋾ モ 1) ヺ --

> 情アルヲ以テー時 主眼 テ終 - 無之候 出テ候モノニシテ決シテ自好ンテ退縮ノ發題ヲ爲セ = ニ有之候本條ノ 第四條ニ所謂治外法權ナルモノヲ全ク除 = 審判ノ全權ヲ掌握セス漸次ニ 如 7 ハ即チ其初步る占得度 其步 ጉ 却 ノ考案 t ラ シ $\boldsymbol{\mathcal{V}}$ E ŀ

之ヲ課 法ノ公平ナルヲ示シタルモノナリ且輸入人ノ承諾 ν 通商條約案第十條十一條 = 共尚我邦現今及將來財政ノ都合ト貿易ノ景狀トニ依リ再 故二今後自 = 各國貿易條約中之ヲ揭クル類例少ナカラス ハ ---多少相違スル處アリ此條約中ニ條列スル 既二其事ヲ載有之又米國ノ如キハ條約ニ依リ廢止 十二條輸出稅廢止ノ事 依り我一方ノミニ於テ斷定決行スヘキ通常ノ規則條例 共專ラ輸入人ノ利益ニ關スル事 [カラ各國ニ對 目 止スル等其時宜 由 ラ シテモ之ヲ廢セサル可カ ハ最初我公使ニ付與シタル 八稅關規則 我二 保持致置度キ ヲ酌量セサル 柄ナレハ主 中一 入 モノニ有之候他 'n ニモ共例有之の英佛貿易條約上 主意 トシテ п ^ キ カ ロヲ要スル ヲ ラス故 ラス然 カ 訓條中 以 我 スルカ 加 處分 テ T ۲ ν 1 候中

第十七條規程外ニ出テタル外國人ノ處分ハ犯者ヲ抑留シ器

然トノ貴見ニ候得共元來右等ノ如キ規程外ニ出ツルモノア 裁判所ニ於テ審判處罰スヘキ筈ニ有之即チ覺書ノ第五款ヲ 之尤本人ニ罰スベキ罪狀ハー旦送還シタル上ニテ之ヲ我カ ニ送還スルノ意ニシテ必シモ之ヲ領事ニ交付スル譯ニハ無 ル場合ニ於テハ之ヲ抑留スルニ及ハス直ニ其最寄ノ規程內 キ尤近キ場所ニ在ル領事或ハ相當ノ官吏へ報 御參閱相成候得ハ判然御了解ト存候 知スル云 一次可

文御回答二及候也

明治十三年十月八日

一九三乃至一九五文書参照

九九 明治十三年十月八日 森駐英公使宛井上外務卿ョリ

改正條約諸案送付ノ件

附屬書一 日本及大不列頭修好條約草案

條款及ヒ裁判權ニ關スル附鈴覺書草案ノ叙

覺書草案註解 條約草案註解

十月八日發

第四十號

ヲ得ベシ 民地及ヒ所領地内ノ何レノ港及ヒ市府ニモ駐留セシムル 若クハ副領事ヲ派遣シ大不列顛及ヒ愛爾蘭又不列顛ノ諸植 大日本皇帝陛下ハ公使ヲ派遣シ倫敦ニ駐劄セシメ竝ニ領事 事

ク旅行スルノ權アルベシ 大日本國公使ハ不列顚國 所轄內何 ν ノ 地 ヲ 問 ハ ス 故障 ナ

來其爲メニ開クヘキ日本ノ各港或ハ市府ニ メ又此條約二依テ不列顛國ノ貿易ノタメニ開 大不列顛兼愛爾蘭皇帝陛下ハ公使ヲ派遣シ ヲ駐留セシムル事ヲ得ベシ 東京ニ 領事或 キタル 駐剳セ ハ副 又ハ後 領事 シ

大不列顛國公使ハ日本國內何レ ノ權アルベシ 1 地 ラ問 ハ ス故障ナク旅行

Ξ

居營業シ地所ヲ借受ケ家屋ヲ購買シ及ヒ居家倉庫ヲ造建ス 特典及ヒ讓與ハ今此條約ニ依テ之ヲ批准固定スルモ | ラ得ル事ニ就キ從來大日本皇帝陛下ョリ與ヘタル一切ノヲ得ル事ニ就キ從來大日本皇帝陛下ョリ與ヘタル一切ノヌ得ル事ニ就キ從來大日本皇帝陛下ョリ與ヘタル一切ノ 不 不列顛國ノ臣民ニシテ日本國中某港內及ヒ市 列顚國臣民ニシテ日本ノ相當ナル官吏ヨ IJ 特別 ノナリ 内 =

> 先般及御送付置候修好條約幷附錄覺書草案ノ叙言及特別 ノ和文譯出來候ニ付則差進候御收手有之度候也

明治十三年十月八日

一一文書附屬書并二三四文書參照

大日 方ノ國土臣民ノ間ニ久シク成立チタル和好ノ友誼ヲ保持擴 改良セン事ヲ決意シ之カ爲メニ 充セン事ヲ冀ヒ兩國間ニ現存セル諸條約及ヒ約定書ヲ修正 本國皇帝陛下及ヒ大不列顛兼愛爾蘭皇帝陛下ハ 大日本及大不列顛修好條約草案 俱二

大不列顛兼愛爾蘭皇帝陛下 大日本皇帝陛下ハ ヲ全權大臣ニ 任シ ヲ全權大臣

-

良正當ナルヲ認メ左ノ諸條款ヲ契約決定スルモ 任シ而シテ此兩全權大臣ハ五ニ其委任狀ヲ示シ其書式ノ端 ノナリ

陛下及ヒ其儲嗣繼承者ト 遠不易ノ和好ヲ存スベシ 大日本皇帝陛下及ヒ其儲嗣繼承者ト大不列頭兼愛爾蘭皇帝 間並ニ雙方ノ國土臣民ノ間 永

護シテ其地ニ送還シ此ノ如キ者ハ此條約ニ對シテ罪ヲ犯 規程内ナル最寄ノ地ニ送還シ又據ナキ場合ニ於テハ之ヲ看 至ルマテノ罰金ヲ増課スル事ヲ得ベシ苟右ノ約束或ハ制限 ル **免許狀ヲ得ズシテ前顯ノ規程外ニ出行スルカ又ハ其免許** 商品ヲ取上ケ終ニ之ヲ沒收スヘシ ニ遠背シテ商品ヲ買賣シ或ハ買賣ヲ契約スルモノアレハ其 ル 約束或ハ制限ニ違背スルニ於テハ地方官吏ハ直ニ之ヲ其 者ト看做シ其犯罪ニ決スルニ於テハ每犯百圓ヲ超過セ ノ罰金ヲ課シ若シ其再犯以上ニ及フモノハニ百五十圓ニ サ 七

- 與ハ今此條約ニ依テ之ヲ堅定批准スルモノナリ 別ニ大不列顛國皇帝陛下ニ許シ或ハ餘國ノ君主又ハ主宰ト 一列ニ大不列顛皇帝陛下ニ許セル一切ノ地所 從來大日本皇帝陛下ョリ公衆ノ共用ニ 供フル ノ給付或ハ譲 爲メ特
- (回) 證券ノ中ニ就テ此條約ニ附加セル約定表中ニ詳記スル所ニ ヲ得ス)今兹ニ保續固定スルモ 係リ而シテ此條約ノ箇條ニ觸抵セザルダケ 約定書、契約、 給付、 給與狀及ヒ各般ノ公書、公文、 譲與及ヒ其譲與ヲ成ス所 ノナ ハ (其他 ノ諸條
- 五 大不列顚國ト 共二二ケ國或ハ其以上 君主或ハ主宰

シテ之ニ 述シ得 日 本駐剳大不列顛國公使ガ大日本皇帝陛下 せ ハ管理 Æ 本皇帝陛下ノ代理者ニ非 シタ シ セル趣意 4 ノトス (イ註) 尤本條ニ言フ所ハ決シテ右等ノ地所ヲ券或ハ約定書ノ文意ノ本條ニ觸抵スル者ハ一切其効ナ ラ ンル條約或 べ 如 其代理者一列二大日本皇帝陛 ルノ權ヲ褫奪スル 給付スル スル キモノト看做スベカラス是ニ依テ凡 キハー個人若クハ公立或ハ私立 ニ基ツキ其地所 ノ權ヲ有セシ ハ約定書ニ於 1 / 明文ア ノ意ナキ ルー非 ムベキ効ナキモノトシ又之ヲ有 サル 或ハ其使用者ノ事ニ テ公衆ノ共用ニ供 モノヲシテ右地所ヲ所 Æ サレ ノト 下若クハ ハ自今以後決シテ大 ・ノ政府ニ 知 ノ組合ヲ依管者ト ルルベ 其代 ア契約書若 ンフル 意意ヲ陳 理 地 シ テ 有 所 1 Ħ D シ

第四條

事テ左 今後困難ヲ生セン事ヲ恐ル、ニ由リ 兩締盟國各自所轄ノ裁判所 定施行スルニ至ルマデハ開港及ヒ開市場ニ住居シ又ハ法 從テ日 ノ甚タ プ諸 1本國內開 |條款ヲ不用ナラシム 殊異ナルカ為メニ從來困難ヲ生セシニ由リ 港開市外ニ = 於テ施行遵奉スル法律及 ルカ如 在住ス 獨二兩國相約 キ法律及 N 不列顛 超足 に裁判 シ日 民 法 文 本 ۲ 1 身 裁 ヲ = 25

叉ハ 臣民タ 切ノ地方稅及賦錢ヲ発カルヘシ尤地方政廳ョリ 地所ヲ所有スル日本人民ヨリ其時々該政府ニ納 府ニ納ムヘキ地租ノ年額ヲ輕減シテ該地方內又ハ ヲ以テ給辨付與シタル ノ年額ト同格 シ 不列顚國ノ N ラ所 パフベキ テ日 施行スルノ譯ヲ以テ不列顯國臣民及ヒ餘國ノ人民ヨリ ハ ラヲ得ザ H 有スル ルト外國人タルトニ論ナク日本國内ニ住居シ又ハ財 ノ場所ニ於テ不列顛國臣民カ其借地ノ爲メニ日 各般ノ費用賦錢ノ如キハ總テ此限ニ非ス但日 本在住不列頭臣民ト雖ト 臣 民叉ハ日 ヨリ永 N モノニ對シテー様ニ賦課スベキ ナラシムルノ日ニ至 ベシ 々地所ヲ借受クヘキ許可ヲ得 ヘホ 特別ノ事件權理特典ヲ實際ニ享用 本ト 條約ヲ取結 ÷ ルマテ不列顛國臣民ハー 此 (條約二依 ٤ 刃 N 一般 該廳 テンラの A 其近傍 ヘキ Ĩ Ŋ 7 Ź 租稅 ノ費用 N 一本政 本ノ 地租 民 港 カ 1 シ =

第八條

列頭ニ在ル日 Ê 由 ラ得 大不列頭ニ於テハ奉教自由 本人及ヒ日 シ 本二 在 N 不列顛 ノ行 人 ハ ハ共ニ N ``= 工其宗敎信 由リ 大不

第九條

井上外務卿時代 對英交涉 一九九

體財產及 此條約及ヒ之ニ附加セ 1 ス ("註) んヒ權利 三關 ス N ル覺書ノ諸條款ニ從テ施 八訴訟二就 キ日本裁判所 行ス ノ裁判權 べ キ モ ハ

使ノ間 べ 之ヲ改補セ 前顯ノ覺書 ニ協議ヲ爲シ雙方ノ同意ヲ得テ之ヲ修正 八兩 ント欲スルト 締盟 國 ノ批准ヲ經ベキモノ 丰 ハ其時々兩締盟國ノ大臣 ナ IJ 但後 ス ル 事ア 及ヒ公 至 ル IJ

第五條

決シ ル 3 兩締盟國中 ۲ リ出訴スルト テ其審判法ヲ異ニズベカラス 同一ノ方法ニ依リ且同一ノ程限ニ從テ之ヲ審判スへ 申國 キ甲國ノ裁判所ニテハ ノ政府或ハ政府 1 官 一吏ニ對シ 自國臣民 テ乙國 プ出訴 1 於 臣 民

第六條

出訴スル 府ニ於 及ヒ此 限ニ從ヒ且同一ノ方法ヲ以テ施行利用スル事ヲ得ベ 大不列顛皇帝陛下ノ裁判處に **ルテモ** 條 一切ノ權利ハ現ニ別キタル日本帝國ノ諸港或 約叉ハ之三附加 大不列顚皇帝陛下ノ所轄内ノ於ケルト パセル覺書 於 かテ施行ス フ條款ニ べ 從テ該裁判 + 一切 一同一ノ程 ノ裁 シ(ニ) 處 八市 =

第七條

看做スベ テ A 其報知 ノ盟約 ノ第 ラ再訂 ハ何時 告スベシ然ル ŀ ヘント欲スル事アレハ十二ケ月前ニ其由ヲ報知 盟約 丰 兀 ハー方二於テハ右十二ケ月ノ期限ノ滿ツル知ヲ得タル後其再訂ニ取掛ル事ヲ怠ルカ或 ラ他ノ タリ シ = 條及ヒ第六條 ハ 兩國 關 ŀ シテハ兩締盟國共ニ其本來 一方 酮 ŀ モ 兩 キ ノ條約中ニ 締盟 ハ此兩條ハ全ク無効 いニ掲クル所 要求スル事ヲ得ベシ 國ノ中一方ニ於 於 テ曾テ之レ ノ盟約ヲ履行 *%*ノモノト つ權利 テ此條約 無キ 若シ他ノー方ニ Ŧ = セ ノ、 復シ ナリ * 3 1 *>*\ = 、之ヲ拒 改正 N 丰 テ 該條 斯 旨ヲ 如 刀

第十條

ス 府或ハ臣民ニ准許 准許スベシ ハ 他ノ キハ 求 盟國中一方ニ於テ實際ニ恩典特權又ハ除発ヲ餘國 他 一方ノ V シー = テ之ヲ准許 約束アル 尤之ヲ准許 方ョ 政府或ハ臣民ニモ之ト同様ノ IJ セルカ又ハ將來之ヲ准許 モノ 七報酬 コスルニ就 \sim ハ 3 即チ之ニ ヺ 求 4 キ餘國ヨリ N 事 相應 ナク ス 報酬ヲ 、若シ又之ヲ讓與 恩典特權免除 スル事アル ル 酬 求メ 或 ハ ザ ŀ ノ ル ヲ キ

(⊹)

列顚國皇帝陛下ニ付與スル所 記確定スル所ノ外決シテ權限又ハ其外ノ事ニ關シテ何等ノ シテ疑ヲ容ル、ニ及バザルモノハ此限ニ非ス ノ權ニ止マル者ト知ルベシ但單二司法ニ 讓與ヲモ爲サドルモノト知ルベシ且殊ニ此條約ヲ以テ大不 大日本皇帝陛下ハ此條約及ヒ之ト同日 ノ權限ハ單ニ司法ニ 附ノ貿易條約中ニ 關セサ N 闘スル 事明白 所 眀

事件ニ就キ大不列顛皇帝陛下カ其公使或ハ領事ヲシテ右様 爲メ立法右法ノ二權ヲ施行セシメ又ハ之ヲ施行スル事ヲ要 府ノ施政規則 シ但此條約ニ附加セル覺書ノ第一款ニ於テ別段ニ定メタル シムル事ナク又之ヲ施行セン事ヲ要求セシムル事ナカル 求セシメタリト雖トモ自今以後ハ決シテ是等ノ 從來大不列顛皇帝陛下 權ヲ正當ニ施行セシム ノ缺ヲ補ヒ或ハ之ニ代フベキ規則ヲ設クル ハ其公使及ヒ領事ニ委任シテ日 ル ハ(該款ノ存立スル間 権ヲ施 此限 行 木 ガ べ セ 政

十二條

或ハ之ト同日附 通商航海條約中 ノ條款ノ文書ヲ解

於

帝陛下 **判權ニ關スル** ニ取結ヒタル修好條約中ニ 日大日本皇帝陛下ト大不列顛兼愛爾蘭皇 掲示ス N 所

締盟國ニ於テ同意告白スル **ニ加フル所ノ修正トハ總テ右條約ノ諸** 此覺書ノ諸款節ト將來本條約中ニ定ムル ニシテ且該諸約款ノ爲メニ其効力ヲ有スル 所 ナ IJ 済約款ニ係屬スルモノ ムル方法ニ從デ此覺書 モノトス是レ 覺書 兩

一節)(リ) **顚臣民ノ中(ヌ)或ハ其間ニ起ルヘキー切ノ訴訟ハ獨** 不列顛國裁判所ノ裁判權ニ屬スヘシ 財産若クハ身體上ノ權利 ニ關シテ專ラ不列

(第二節) 大不列顛ノ政府若クハ臣民ト餘國(日本ヲ除ク) 契約ニ從ヒテ大不列顛ノ裁判所若 政府若クハ人民トノ間ニ起ル所ノ財産及ヒ身體ニ係 一切ノ論件ハ大不列顛ト其餘國ノ間ニ存スル條約又 ノ裁判權ニ 歸スベシ(ル) ク ハ 其餘國 プ裁判

井上外務卿時代 對英交涉 一九九

> 府ヨリ 釋ス ヲ爲サ 異論ノ差起ル事アルカ或ハ此條約ノ第十條ニ從テ改正ヲ加 ヘントスルニ際シ異論ノ差起ル事アルトキハ兩締盟國ノ政 ッシムヘシ 有名ナル法律家ヲ以テ仲裁者ヲ定メ之ヲシテ其裁斷 キ何時二 テモ日本政府ト大不列顚政府ト ・ノ間

第十三條

批准ヲ經此條約 條約 ハ日本國皇帝陛下ト 日附ョ 大不列 顯兼愛爾蘭皇帝

定及ヒ事 ル IJ 約書丼ニ其中ニ載スル諸約款ハ何等ヲ論セス悉皆無効ノ者 シ是迄日本ト ス 約定表 締盟國間ニ決定シタル通商航海條約ヲ地准シテ之ヲ實施 ルベシ但此條約ノ第三條ニ載スル所竝ニ此條約ニ附加 ルニ於テハ專ラ此諸條約及ヒ其中ニ載スル諸約款ヲ適守 項ノ各部分)ハ此限ニ非ス ニ明記スル所ノ諸約定及ヒ其他ノ 於テ互ニ之ヲ交換スヘシ而 大不列顛ノ間ニ交換シタル諸條約約定及ヒ契 シ テ此條約及 事項若クハ ۲ 日 セ

右證據ノ 印ヲ捺スルモノナリ 爲メ雙方ノ全權大臣ハ此條約 三姓名 ヺ 手記 シ各其

月 日 卽チ千八百八 + 月 日

(第一節) 告方ノ管轄裁判所ニ於テノミ之ヲ審判スヘシ 當ナルトキハ此第一節ニ由テ許與スル ク無効ノモノタルヘシ・(ワ) 本國内ニ設ケシ初審裁判處ハ其訴訟ヲ審判スルニ不適 不列顛皇帝陛下カ本條約第六條ニ載スル權カニ 不列顛國臣民ガ民事訴訟ノ被告トナル場合ニ於テ若 日本臣民ト (本款及と第四款ニ載スル事件ヲ除ク)獨リ 不列顚國臣民ノ間 一起 所ノ裁判權 ルー (*) 依テ日 八全 但 3

(第二節) 都テ伸理方法訴訟法及ヒ判決實行方法 (第三節) 日本臣民ト不列顯臣民ノ間ニ正當ニ取組ミタル 會社ニ ヒ該社 裁判ノ權ヲ有スルモノトス且右ノ如キ會社及ヒ其社務 必ス本件ヲ審判スル裁判所 ザルヘカラス然レトモ日本法律ニ於テ外國人ニ(財産 ニ關スル事件ニ關シテハ該社ニ加ハリタル不列顛人及 關係スル事件ニ就テハ日本裁判所ニ限リ 、財産ヲ取 總財産ハ共ニ專ラ日本裁判所ノ裁判權ニ從ハ ハ地位ニ由リテン所有又ハ取扱ノ權利ヲ許サ 扱フ 、ベキ目 ノ法則ニ從フヲ要ス 的ヲ以テ日 本人ト不列顛 ア如キ テ民事 **カ**)

トスベシ 4 人ノ間ニ取組ヒタル會社ハ總テ之ヲ法ニ背キタルモノ

受理シ且之ヲ審判スルノ權ヲ失フ事ナシ則ニ因テ受理スヘカラサルモノ、外ハ)一切ノ反訴ヲ(第四節) 何レノ裁判所モ此約條ノ爲メニ(該裁判所ノ規

第 三 易

第一節) 不列顛臣民ニシテ日本ノ人民若クハ餘國(日本外ノ國ヲ云フ)ノ人民或ハ政府(ヨ)ニ對シテ罪科タルベキ所爲アリト訴ヘラレ而シテ若シ其所爲ハ直ニ不列顛ノ法律ニ依リ(タ)在日本不列顛裁判所ニ於テ審判のニ於テ不列顛ノ法律ニ依明(後第四款ニ載ル場合ノ外)該裁モノナルトキハ必ス(後第四款ニ載ル場合ノ外)該裁判所ニ於テ不列顛ノ法律ニ依テ之ヲ審問シ若有罪タラハ該裁判所ニ於テ之ヲ處罰スベシ

(日不ノ外)ノ人民或ハ政府ニ對シテ罪科タルベキ所爲第二節)(ソ) 不列顛臣民ニシテ 日本ノ臣民若クハ 餘國

ノ權ヲ含有セザル事ヲ爰ニ明言ス(レ)

本款及ヒ其他ノ條款ニ據テ讓與セル裁判權内ニハ捕縛

不列顛臣民ヲ審問シ及ヒ處罰スル

ノ件ニ關シ此覺書中

アリト日本裁判所ニ訴へ出タルトキ(即手在日本不列 護所為或ハ之ト同致ノ所為ヲ罪科トシテ處罰スル事ナ 該所為或ハ之ト同致ノ所為ヲ罪科トシテ處罰スル事ナ 裁判所ニ於テ之ヲ罪ニ擬スル事アリトモ大不列顕ニ於 表別のニ於テ之ヲ罪ニ擬スル事アリトモ大不列顕ニ於 表別のニ於テ之ヲ罪ニ擬スル事アリトモ大不列顕ニ於 表別のニ於テンヲ罪ニ擬スル事アリトモ大不列顕ニ於 でいい。 でいい。 でいい。 ではいる。 では、 では、 ではいる。 ではないる。 ではな。 ではなな。 ではなな。 ではなな。 で

第四款

ノ為メニ日本裁判所ノ裁判權ヲ失フ事ナシ左ノ事項ニ於テハ第二款及第三款ニ揭クル裁判権讓與

セサルノ金額ヲ拂ハシムル即斷ノ權ヲ失フ事ナシシ日本臣民ノ告訴ニ因リ不列顚國臣民ヨリ五圓ニ脳過夫カ為メニ日本ノ法律ニ依リ該裁判所ニ於テ民事ニ關

列颠臣民ヨリ(卽斷ニ依テ)二圓ヨリ超過セサルノ罰從テ受理處罰スベキ小罪ヲ日本臣民ニ對シテ犯セル不(第二項) 第三款ノ規則アリト雖トモ夫カ爲メ日本法律ニ

金ヲ課スル權ヲ日本裁判處ニ於テ失フ事ナシ(ネ)

第五款

依リ之ヲ罪科トシテ平等ニ審問スルヲ得ス且該裁判所ル犯罪ト雖モ若シ該裁判所ニ於テ直ニ不列顛ノ沒有ニ 問スベク若シ有罪タラハ該裁判所ニテ之ヲ處罰ス可シ **罪科ニ處スル刑罰ノ極度禁獄三ケ月罰金五百圓以上ナ** 為アルトキ 定ニ對スルノ罪科モ亦此中ニ含有ス)ト認ムル所 科又ハ現時日本ト大不列顛ノ間ニ行ハル、條約或ハ約 スル(一個人或ハ他國政府ニ對セザル)罪科(全國又 **之ヲ罰スルヲ得ザルトキハ此第五款第一節ニ於テ不列** 罪若クハ之ト同致ノ罪科ヲ罰スルト同一ノ程限ニ從テ ルトキハ該件ハ不列顛皇帝陛下ノ裁判所ニ於テ之ヲ審 ハ一地方ニ關スル警察上或ハ施政上ノ規則ニ對スル罪 (ナ) 但本款ニ因テ不列顛皇帝陛下ノ裁判權ニ歸シタ 於テハ不列顛皇帝陛下ノ所轄地内ノ裁判所ニ於テ該 犯罪ト雖モ若シ該裁判所ニ於テ直ニ不列顛ノ法律ニ 不列顛國臣民ニシテ日本ノ法律ニ於テ官府ニ 一譲與スル所 ハ之ヲ審問シ而シテ若シ日本法律ニ因 ノ 裁 判権ハ無効ノ 七 ノタルベシ ア共 ブ所

> 府ニ領牧ス可キ者トス(ラ) 徴牧シタルヲ問ハス總テ日本政府ノ所属トシテ日本政 徴牧シタルヲ問ハス總テ日本政府ノ所属トシテ日本政 此覺書第一款ノ條目中ニ在ラサル訴訟ニ就テ徴牧シタ

附屬書

條約諸條欵及ヒ裁判權ニ關スル附錄覺書

草案ノ叙言

(本文省略ス)

註 五月二十二日 ※附叙言 | 一文書附屬書四 全然同文ナリ

條約草案註解

(イ)號

此條款ヲ設クルノ趣意ハ是マテ日本政府ニ於テ公衆ノ共ノ如キ公館建設ノ爲メニ許與セル地所或ハ永世各國人民ノ如キ公館建設ノ爲メニ許與セル地所或ハ永世各國人民ノ如キ公館建設ノ爲メニ許與セル地所或ハ永世各國人民

井上外務卿時代 對英交涉 一九九

ルナ 授付セズシテ唯永夕某用ニ供セントスル所ノ地所ノ取扱 方二就キ現 所即チ例へハ公園地等ノ如ク全ク外國政府或ハ外國人ニ ニ干預セン事ヲ要請スルノ權力ヲ今後全ク廢棄スル 1) ヘタル(且此條款ニ依テ其供用ヲ保續スベキ ニ外國領事ガ地方政廳ノ處置ニ干預シ或ハ之 = ن 在

(口)號

設クルニ及ハス 抖内國臣民ニ對シテ該權ヲ施行シ得ル事勿論ナルニ由リ 殊更ニ條約ニ因テ其權ヲ剝奪スルニ非サル以上ハ外國人 日本國內一切ノ裁判權ハ日本裁判處ノ固有スル所ニシテ 今兹ニ日本裁判處ノ該權施行ノ事ニ就キテ殊更ニ條款ヲ

覺書ヲモ込ムルモノナリ餘準之)中殊更ニ取除キタル明 此草案ノ意ハ特ニ日本裁判處ノ固有ノ裁判權 文ナキ事件ハ總テ日 ヘキ事件ニ限リ之ヲ掲載スルニ在リ故ニ此諸條款 本裁判處ノ固有ノ治內裁判權ニ 3 ŋ 取除 (附錄 歸 ス 7

発カレタ 約束 **免除ノ説ヲ保持スルヲ得ベキヤ得テ了解シ難シ或ハ日** 治外法權ノ條款ニ論及スベキノ外何ノ理由ヲ以テ此 ムルモ ニアラス此一事ハ = = 外國人居留地ノ地 本政府ハ他ノ國々ニテ外人ノ爲ヌニ其國ヲ開クト ン是レ外國人自己ノ罪ナリ日本政府ノ罪ニ非サルナリ日 ン外國人ハ日本國ノ各部ニ至ルヲ得サルカ故ニ國稅ヲ納 ヲ以テ外國人ノ爲メニ日本國ヲ開カント欲スルモノ 地方税ヲ賦課 内國人民同様ニ之ヲ納ム 至ラズト ノ租税ヲ冤除スル所以ナリト然レトモ之ニ答テ曰ハ 天 (即チ本國ノ法律及ヒ裁判處ニ服從スル事 Æ ノ、享有スペキー切ノ利益ヲ受クル事能ハス是レ ハ是等ノ税ヲ発カレシ ルカ如キハ全ク右ト同 從前外國人ニテ一般ノ租稅(國稅地方稅共) ス タリ ルスル 依テ諸般ノ國税ヲ外國人ニ賦課スルマデ モ冤許稅及ヒ製品稅ノ如キハ外國人ニテ 祖ノ重キ 實ニ他ノ諸事 故ニ其地租ヲ改メサル間ハ居留外 ノ權利又ハ緣故ハ絕テ無キモ ハー切ノ地方賦稅ヲ冤カ ル 事 ユヘ内國 一ノ理由ニ根據スルモ ヲ拒ムベキ理由ナシ從來 1 共ニ舊來ノ條約中ノ 製造人又ハ販賣 デヲ云フ) ノトス ·同様ノ 租稅 國人 ナリ ヲ ハ

ヲ固執セシ故ナリ 告訴スルノ權利(外國公使モ之ヲ幇助スル所アリシナリ) 附説スルモ可ナラン)何國ノ裁判處ニテ何國ノ臣民タリ 民ノ訴訟ニ於テモ受理スヘカラサル事件又ハ(茲ニ之ヲ ヲ全フセンカ爲メニシーハ從來外國訴訟者ニシテ本國臣 兹二此條款ヲ設ケタキ理由ニツアリ即チーハ モ要請スヘカラサル事件ヲ日本政府及其官省ニ對シテ 條約ノ體裁

(二)號

註 若シ此第六條ニ載ル如 別ニ其箇條ヲ設クベキナリ是卽チ此條款ヲ置ク所以ナリ 暗ニ其意ヲ含メルノミ然ルニ斯ク緊重ナル事件ハ自然文 於テ其裁判權ヲ施行スルノ權利アルカ如キ 權ヲ拋棄スルノミニ止リ大不列顚皇帝陛下 唯某ノ場合ニ於テ不列顛國ノ裁判權ノ爲メニ日 面中ニ其意ヲ含メリトテ之ヲ拋擲スベキニアラス宜ク特 キ條款ナキト 八此條約 · カ 日 ハ唯文面中ニ 本ノ裁判 1本管內 ノ効験 =

(ホ)號

人ニ比スレハ格外ノ利益ヲ得タルモノナリ之ヲ譬ヘテ曰 Vi 内國人ニ 海關税ヲ課シテ外國人ニ之ヲ課セザル ŀ

(()號 耳格政府トノ間ニ締結セル 條約 / 第二十 | 條 ヲ以是ノ如キ條款(千八百六十一年四月二十九日 大不列顚國 例トス)ハ大不列顚皇帝陛下ノ日本駐劄公使ガ其政府ョ テ明ナル所 ・本皇帝陛下ノ政府ノ立法行政ノ兩權内ニ立チ入ルヲ防 ンカ爲メニ最須要緊切ノモノタリ是レ既往ヲ實驗ニ (餘國ノ政府モ同様) 許サレタル獨裁ノ大權力ヲ以テ ナリ ヲ以テ先 1 因

(上)號

今此章ノ目的 領事廳ニ令シテ日本政府ノ規則ヲ其儘ニ採用 ル所ノ規則ヲ設ケテ之ヲ不列顛ノ臣民ニ施シ又否ザレハ 陛下ノ公使モ亦(之ヲ適當ナリト考フル 是迄日本政府ニ於テ規則ヲ布告スルトキハ大不列顚皇帝 1 ス ル所ハ今後不列顛國公使ガ此ノ如キ權 トキハ之ニ應ス セシメタリ

サルノ意ヲ明示スル事必要ナリ 列顚臣民ニ關係スル事件ニ處スルノ權力ハ(覺書第一款 ベカラス尤目本政府或ハ日本人民ニ關係セスシテ單ニ不 チ是ナリ)大不列顚皇帝陛下ノ公使及ヒ領事ヲシテ右等 タルヲ以テ今兹ニ箇條ヲ設ケ(此章ノ末段ニ載スル所即 == 事件ニ就キー切ノ規則ヲ設定實施スル權利ヲ失ハシ 依テ)今後モ尚ポ從來ノ如ク不列顯公使ニ讓與スル所 ナレ ___ 本ノ權限二從ハシメサルカ如キハ曾テ條約 シ ニ非スト雖トモ右様ノ事ニ就キ不列顛ノ臣民ヲシ ノ規則ヲ採用セシムルガ如キハ固 ハ今此條約改正ニ際シ明白ニ此權力ヲ廢捐 テ從來斯ル權力ラ固執セシハーモ其據ル所 フルヲ防遏スルニ在ルナリ抑領事廳ニ令シテ日 ョリ左ノミ故障 ジア ナキ サ セサル X モ ル ス

是レ條約中ニハ決シテ斯ル權限ヲ大不列願皇帝陛下ニ付 場合ニ備フル (注意) 大不列顛國ノ議政官布告ニ依テ大不列顛皇帝陛 權力ヲ有セシ 事ナキヲ以テ陛下モ亦斯ル權限ヲ其公使或ハ領事 規則ヲ設定スベキ權力ヲ授クルハ單ニ是等 ムルハ大不列顛皇帝陛下ノ意ニ非ザルナリ ニ過キス公使ヲシテ此他ノ規則ヲ設定スル

條ナカ シメザル以上ハ明ニ之ヲ治內裁判權ヨリ除クノ約 故二 ル 荷クモ此類ノ論件ヲシテ治内裁判權ニ ベカラズ是レ即チ此一節ヲ設クルノ 所以

(オ號) 判所ト ムル 地利條約ニ因テ日本裁判所 玆ニ此條款ヲ設クルト 判權ハ自然日本裁判所ノ所有ニ歸スベシ而シテ今 從來ノ如クナルモノナリ若シ此約款ナケレハ該裁 民ヲ相手取リ 此約款二由 事ヲ得ベキナリ ノ間ニ約定セシ該規則ヲシテ益堅固 II Ŋ ル民事訴訟ノ裁判權ヲ失フ事 本ノ裁判處ハ日本人カ不列顛國臣 キハー千八百六十八年ノ墺 ト日本國内ナル外國裁 ーナラシ 酒ホ

(ロ號) ヲ伸フル 訴訟ヲ裁判スル權ヲ拋棄シ而シテ日本國内ニ設 若シ此約東ヲモナクシテ日本裁判處ニ於テ是等 ヲ受理シ能ハサル事アラバ日本ノ出訴人ハ將ニ理 タル不列顛皇帝陛下ノ裁判處ニ於テモ是等ノ訴訟 加 ノ所 キ事件ノ生スル事ハ多分ア ナカラントス尤大不列顛 ル ₹ ** トノ間ニ於 キ ナ ヶ

> ニ授與スル 事能 ハザル ノ理タルヲ以テ知 N ベキ ナ

附屬書五

覺書草案註解

ベカラ 覺書ノ諸款節ヲ解スルニハ常ニ條約案第六號ヲ参觀セザル 詳言スレハ日本裁判所ニ於テ日本在住ノ不列顛臣民ニ對ス N スル條款)ノ文言ニ照準シテ理會スペキ者ト知ルベシ之ヲ 此覺書ノ諸款節ハ都テ條約案第六條(即チ裁判權許與ニ 裁判權ハ此覺書ノ條款ニ從テ施行スヘキ者タルヲ以テ此 ス

(リ號) 幾ント同様ナリ 此一節ハ前條約中 = テ之ニ 相當スル條款ノ 約 |文ト

(ル號) 故二此類 兹ニ載ス 習卜 ヲ有スルヲ願フニ非スト スベキ理ナリ 兩締盟國ノ權利ト正シク一致セ ノ論件ハ自然日本固有ノ治内裁判權ニ歸 ル諸論件 固ヨリ日本ニ於テハ此 ノ中前條約 雖モ自今以後ハ實際ノ慣 二載セ ン事 ザル ノ如キ裁判權 ヺ モ 要 1 ァ ス IJ

ヲ 如キ 備ヘンカ為メニシテ且又小國トノ間ニ於 モ玆 事 ニ此條款ヲ設クル所 件ノ生スル事ナシト の以ノモノ モ 謂 ヒ難ケレ ハ 條約 テ 7 ハ 體裁 八此 ナ

(カ號) ヲ喚起スルノ便宜トモナルベシ其所謂別 更ニ其文中ニ含蓄スル所ノ一種ノ 玆ニ之ヲ掲載スルヲ要セザルベキナリ又此條款ハ 專ラ自國ノ訴訟法ニ從フモノアルニ非サレハ敢テ 主義ヲ實行スル權利アルヲ否ムノ意ヲ述へ而シテ 及ヒ其領事若クハ公使ニシテ住 スル所ノ主義ヲ述ルニ過ギス若夫レ外國ノ出訴人 此條款ハ各國裁判所ニ於テ此等 ノハ何ソヤ「訴訟ノ裁決ニ關スル諸事 タル一切ノ權利 = IJ 於テモ偶然兩造間ニ存スル所ノ外國法律ニ基 即チ是ナリ 區別シテ云フモノト知 ヲ顧慮酌量 ルベシ)ニ就テハ裁判 t サ 々日本裁判所ノ此 ノ事件ニ就 別則ニ就テ注意 ル べ (訴訟法等 別リナルモ ラ キ實行

專ラ 在日 本外國裁判所 ノ法律ニ 從テ詞訟ヲ聽斷シ ニ於テハ此規則ヲ承認セズシテ 日本ノ法律

上外務卿時代

對英交涉

一九九

(彼等ノ爲メニハ外國法律ナリ) 事ハ屢々アル所トス) ルモノアリ濫日本ノ法律ヲ酌量セザルベカラザ ヲ顧ミルヲ欲

(ヨ號) 原條約中之ニ應スル所 民或ハ餘國ノ人民ニ對シテ罪科ヲ犯ストキハ不列 約第十六條)》)ニ於テハ不列顚國臣民若 **顚臣民ハ云々」トアリ(一千八百五十八年天津條** 國トノ條約ニハ 顚國ノ他ノ條約ハ大ニ之ニ異ナル者アリ設如ハ淸 分ニ從ヒ當國政府ニ對シテ犯サドル罪科ト同部類 ケ(第LI)餘國ノ政府ニ對スルモノハ其自然ノ區 日本政府ニ對スル罪科ハ之ヲ此覺書ノ第五款ニ掲 對スル罪科ノ事ニ及ハス今此二者ニ就テ(第一) 顚ノ官吏不列顚ノ法律ニ從テ之ヲ審問處罰スベシ ミ載セ (第一) 日本政府 「清國ニ於テ罪科ヲ犯ス所ノ不列 ノ條款 (此事件ニ就 (第三)餘國政府二 シ日本ノ臣 デ不列

(タ號) = 一直 ニ不列頭 ノ法律ニ依テ」 ノ敷語ヲ用 プル

裁判所ニ於テモ之ヲ罰スベシト雖トモ其罰ハ英國 ハ英國ニ在テ罪科トシテ罰スベキモノナラハ日本 決シテ然ルヲ得ス又右ト同様ニテ若シ其所爲例へ 本ノ裁判所ニ於テモ亦罰ヲ受クベク若シ否ザレ 所爲例へハ英國ニ在テ罰ヲ受クベキモノナレバ 裁判權ヲ有セザ N 所 ノ案件ノ如キ是ナリ若夫レ ハ Ħ 其

(ネ號) 與ス 之ヲ日 事訴訟 罪科ヲ處分スルノ裁判權ハ之ヲ不列顛裁判所 列顛臣民カ日本臣民ニ對シテ犯ス所ノ大小一切ノ ヲ定メ裁判吏ノ即斷ニ決スへキ者ノ如キ項 事訴訟ニ於テ裁判權ヲ有スルニ付キ兹ニ其ノ制限 本款ノ効用ハ即チ(第一)不列顚裁判所 ここ属ス 規則ニ因テ不列顚臣民ガ被告タル所ノ一切ノ民 ルニ付キ兹ニモ亦右ニ類スル制限ヲ設ケ此部 本ノ裁判權ニ歸シ(第二)第三款ニ依リ不 (即チ設如ハ人力車賃拂方請求等ノ類) ハ ヘル瑣小ノ 科 ハ之ヲ日本ノ裁判權 小ノ民 =

> スベキ本來ノ權力ヲ以テハ卽時ニ大不列顚國內 ヲシテ此ニ許與スル所ノ裁判權ノ限外ニ在ラシメ ンカ為メナリ 在日本不列顛裁判所二於テ其本國ノ法律ヲ施行 ト同様ノ方法ニテ處罰シ能ハサル所ノ諸案件 =

- (レ號) 「罪科トシテ處罰スルヲ得ベキ云々」此 足ラザル所アレバナリ 民事裁判ニ止マルモ亦知ル可カラザルヲ以テ未タ ニ於テ審判スルヲ得ベキト ハ必ス刑事裁判ニ依ル可キヲ謂フ若シ單ニ裁判所 ノミ云フト ブ如 キハ其或ハ キ案件
- $\widehat{\nu}$ 號) 此一段ハ元來必要ナルモノニ非ス然シ現條約ニ 兹ニ此明文ヲ設ケ以テ將來權限ノ事ニ關シテ不適 フノ權モ亦等シク日本官吏ニ許サベル所タレハ今 テ明ニ其限界ヲ定メタリト雖トモ自由ニ捕縛ヲ行 テ譲與スル裁判權ハ「審問及ヒ所罰」ノ二語ニ依 當ナル解釋ヲ下スヲ防クノ用ニ供スベシ

(ソ號) 該節ニハ第一節ノ規則ニ依テ不列頭ノ裁判權 スベカラザ ル モ ノヲ揭示ス卽チ外國裁判所 = 於テ 二屬

(注意) **之ヲ日本ノ獨立國權ョリ奪フモノニ非スト信スルナリ** 所在ヲ討尋スレハー切ノ公罪 能ハザルヤ必然ナリ抑現行條約ニ就テ切實ニ其權利 請スルカ故ニ之ヲ施行スルニ方リテ大ニ不都合ナキ事 案件ニ關スル箇條ナリ蓋シ信スルニ其裁判權ハ曾テ之 開載スル所ハ目今實地ニ此困難ヲ救フノ考案トシテ艸 行セン事ヲ冀フニ非ス又實際ニ施政上ニ必要ナルノ外 雖然現今ノ日本裁判所ハ敢テ此固有ノ裁判權ヲ盡ク施 ルモノ、外一切ノ罪科ヲ云フ)ニ關スル裁判權ハ曾テ ヲ許與スル所ニ非スト雖トモ外國裁判所ニ於テ之ヲ要 ス ル 本款ハ即チ從來裁判權ニ就テ大困難ヲ生セ ニ之ヲ施行セン事ヲ欲セサルヲ以テ今此第五款ニ ナ IJ 1 知 N べ シ (卽チ人民ニ對シテ犯 シ所 七 ラ

註

在テ其罪科ニ當ツル罰則ノ制限ニ

超ユベ

カラズ

註

(ナ號) クル シ ム 本款ノ全文ヲ草ス セサル所ノ訴訟ハ之ヲ日本裁判所ノ裁判權ニ歸 所 ル事言ヲ待タスシテ明ナルベシ故ニ本款ニ ョリモ輕キ罰則ニ當ルベキ此 N ノ主義ニ於テハ總テ兹ニ 類ノ諸案件 ハ セ

專ラ日本裁判所ノ權内ニ歸スルノ案件ハ重モニ施 専ラ日本裁判所ノ裁判權ニ歸スル所タリ是ヲ以テ 政上ノ諸規則卽チ例へハ撿疫規則出版條例等及各 港地方警察規則海港規則等ノ違犯ニ係ルモノト N 知

註

(ラ號) 外國裁判所ニ於テ之ヲ課スルモ是レ唯其裁判ノ器 之ヲ論スレハ總テ罰金ハ内國法令ノ違犯ノ爲メ 該款ノ主義ハ(銃獵規則 ヲ異ニス 兹ニー言ノ以テ之ヲ盡スヘキアリ結局論理上 キ所見ヲ固執セサルヘキ 不列顚政府及其他ノ締盟各國政府ニ於テモ上 ノ原 ヒサルカ如シ然ルニ從來此主義ヲ排斥セシハ何等 **駁論ナカリセハ)其認可ノ爲メニ論辯ヲ費スヲ須** 駁議アリ)公正ノ條理タル事明白ニシテ(當時ノ 罰金ノ件ハ之ヲ實施スルニ方テ大ニ不列顚公使ノ 、因ニ由ルモノナルヤ未タ明解ヲ得スト 者ナリ ルノミ外國ノ裁判ニ依テ處罰スル者ハ内 假令其罰金ハ外國特設ノ法則 ハ信シテ疑ハサル所ナリ ノ違犯ニ依テ徴收ス 雖トモ 三依 3 1 ^ 'n = 1) 如

> 者ハ豈些少ノ金錢ヲ獲ンカ爲メナランヤ如 右議論ノ起リシ時ョリ今日ニ至ルマテ依然其地位 ナルニ該政府ニシテ其罰金ヲ得ルノ權利ナシト 國裁判所ヨリ處罰ノ權ヲ奪ヘハナリ內國政 為メナリ 政府ノ為メニ ヲ固守シ其適當公正ナルノ認許ヲ得 ル者ハ果シテ何ノ據ル所アリヤ抑日 反違ニ課スル罰金ハ無論該政府ニ属スベ 緊要ナル主義ヲ維持セ ント 不政府ニ於テ ント熱心スル 欲スルカ 何二七 キ 府法 E ス

明治士完月十 七日 井上外務卿立森駐英公使 宛ヨ

ン氏本邦へ出張方ノ件

附屬書一 十三年九月十日發森公使宛往電法權問題并 誤解ヲ避クル爲レーン派遣方ノ件

十三年九月十六日發森公使來電

過ル十四 故電信局 御差立ト確信候ニ付不日寫乙號ノ通リ返電候電文來示ノ如 別信第五十八號 間合候處無名ノ由申聞候乍去電文ノ趣意閣下ヨリ 日別紙寫甲號ノ暗號電信致落手候發信入記名 十一月六日 無之

望 スル 問ニ候處同人義ハ目今ノ處何分手放シ難ク乍去重修事 在候尤ソーマ 之候右ハ彼等ノ臆測カ又ハ計策ニ出テ報告シタルト疑察罷 打消候通りニ候此件細述スレバ本使パークス氏丼ニソー 候様別信第二十二號中相見へ候ノミ右ハ本日發ノ電文中ニ 使ノ所説ト做シテケネデー氏へ誤ヲ報告シ之ヲ御信用 シ行政上裁判權ノ義ニ付パークス氏ソー 汲違候恐レ有之候へ共今日迄ノ處未夕汲遠候事件無之候但 氏ヲ差遣候 付倫敦府ニ於テ込ミ入リタル商議ヲ開候場合出來候ハ、同 義六ケ敷仍テレ 候事有之右ハ其節私書ニ縷述閣下 ト御垂示ニ候處本使ニ於テ前件ノ如キ談話致シ候事更ニ無 附帯セル罰則ニ 人民ニ遵守セシメ若シ之レニ違犯スル者アル時ハ其規則ニ ク條約重修 ース氏ト曾テ面話ノ節今回 所ハ其隨時發行スル所ノ行政上ノ諸規則ヲシテ英國 御聞取リニ付本使ニハ我政府ノ定見詳悉無之哉 モ須要カトモ存候尤モ中外懸隔為メニ御趣意ヲ ニニ付テハ **川シ英國裁判所ニ於テ實行スルニ在リト談** 1 1 ン氏ヲ本邦へ差遣シ候テハ如何トノ御 ス氏ト條約改正一件ニ 充分ニ閣下 條約改正ニ就テハ日本政府翼 へ差出置候パ へ親接シ御趣意ヲ奉候 關シ嘗テ内話致シ マレース氏ヨリ本 Ī クス氏 相成 件 下 ^ ~ ==

對シテモ同様ノ話ヲ致シ候事ト相覺居候

成候勳章ノ種類ト各國君王へ御進贈相成候種類等內密致承 卿へ內々聞合置候處我天皇陛下ニテ各國君王ヨリ御受領相 右電文末款ニ銀テ內命相成候英帝へ勳章御進贈ノ件英外務 知度同卿申聞候義ニ 付速二御返電有之事ト存

右申進候也

九月十七日

全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

註 1一八四文書

附屬書一:

甲號 十三年九月十日發森公使宛往電

法權問題ニ付誤解ヲ避クル爲レーン派遣方ノ件

Mori

Japanese Legation

London

sible Ministers here on the subject. is very grave and most complicated. ous opinions on our side and also among foreign Treaty Revision especially to convey full ideas Ьу jurisdiction question It is almost imposletter There are variand

misinterpretations of our views abroad as was the case on previous occasions when you were Vice-Minister.

Nothing would be better if you and Sameshima could conveniently return for the purpose of verbally explaining your views and fully understanding mine, but this can not be done as your presence in Europe is now necessary, owning to new draft already despatched. I consider Stuart Lane suitable person to represent you to understand my views clearly.

Should you think it advisable, you will instruct him to leave for Japan at once. I shall be able to explain him all in two or three weeks.

If he can come, you will make agreeable arrangement that Marshall may not create ill feeling. Answer by telegraph.

Inouye

州蜀事二

乙號 十三年九月十六日發森公使來電

(Received 17th Sept. 1880)

London 16th Sept. 1880.

(下略) 又同時臨會致候グビツトソン氏モ別紙之通リ演 說 有 之 候

九月十七日

全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

魔畫

V 十三年八月「ベルン」ニ 於ケル「ダビツトソン」ノ演説

August 1880. Mr. Davidson's Speech at Berne.

As regards the question of Extra-territoriality the position of Japan 22 years ago when the Consular jurisdiction was imposed upon her could well be compared to that of Turkey. The position of mat-

ters by no means identical was similar.

In both

To Inouye

Lane cannot be now spared. My conversation with Minister to Japan, and Saumarez must have been artfully misinterpreted by them. I never told them about judicial power in (English?) our law of administration. Granville wishes to know privately what kind of decoration the Emperor of Japan has received or given to Foreign Sovereign.

Mori

一〇 明治士三先月十七日 非上外務卿宛

ベルン會議ニ於ケル「ダビツトソン」氏演說寫送付

附屬書一 十三年八月「ベルン」ニ於ケル「ダビット

一十三年九月十四日附「ダビットソン」ョリ

別信 第六十號

相開候ニ付拙者モ臨席(中略)先便中述候通り瑞西ベルン府ニテ去月廿四日萬國公法會議

practical kind. Further Japan has adopted foreign and its spirit, if it exists at all, exists only in the promulgated certain laws which were necessary to in the selection of judges to preside over her courts. system on the modern plan, and has been careful stitutional, branches of law-municipal, international and constudents to Europe and America to study the laws every science is taught by foreign professors. She colleges and universities in her capital where almost ing primary schools throughout the country, and institutions and educated her people by establishdistricts, but not as a power or an influence of any hearts of a an instance, judges versed in the theory and practice of modern I do not say that it was possible to select in Japan have the strongest predilection for the study of all of foreign countries. has also during the last 8 years sent numerous found amongst Japanese judges, and I mention, as law but I will say that most able men are to be She has also few of the Samurai in the outlying the name of Mr. Indeed the Japanese seem to established a Tamano. She has judicial

power of Tycoon is no more.

Feudalism is abolished

The

countries there was religions antipathy to, and hatred of foreigners and a dislike of all innovation. Now the two countries are to be *contrasted not compared*. Japan has established a strong Govern-

ment which can and will protect foreigners.

guide the conduct of the native judges." press and educated native opinion to restrain and judge of the court of appeal in Alexandria in which association a paper by the Honourable John Scott of Japan. Last year there was read before this maintenance of decency and order in the open ports tion of that very life and property, and for the the right to exercise their function for the preservafor foreign life and property deny to these police that the foreign Ministers who demand protection lined body of police. embodiment of a large and thoroughly well discipbeen most successful and most energetic actory body of laws. On the other hand she has providing the country mission has not been entrusted with the duty of more vigorously her freedom from consular jurisdiction has not been though she has made some progress with her code her under the new conditions of her existence, and must regret that this most necessary step towards lamented the absence in Egypt of "a native urged on, and that a law Com-Yet it is curious to observe with a complete and satisf-He said in the

> as in all countries, there are newspapers able (sic) opinion and press not only exist, but exercise a with judicial powers. tion to the proposal that they should be entrusted that the absence of these was an important objecinterests can well be protected by the police which study of the law is vigorously carried on, laws are safe, a judicial system is established, the scientific ducted by Mr. will bear comparison with any in the world and I are amongst the best of these in Japan some which and inferior, but I say without hesitation that there very powerful influence on all public affairs. the Government has provided. being enacted to meet foreign demands are foreign at the present time life and property are perfectly mention especially that one which is so ably con-Fukuchi in Tokio. Ĭn Japan Thus that in Japan There,

Though Japan cannot now demand the *complete* abolition of the consular jurisdiction as she has yet to complete her new code and to educate her judges more thoroughly not only in the theory and practice of law, but also in the art of administering it,

she has nevertheless earned the right to ask some concessions. The police should be free to exercise their functions and the administration of justice as regards (for example) petty offences and offences under administrative regulations should be exclusively entrusted to her. And there is all the more reason for this because practically the Foreign Powers have failed to provide a foreign police for Japan and the administrative rules of foreign countries do not apply there.

The question remains—what is the best and speediest method of improving the condition of foreigners in Japan as regards the administration of justice in that country, and by what means can the foreign Governements be relieved of the expense, inconvenience and annoyance incident to the consular system?

In the first place the Consular system with whose evils we are all so familiar, is far too objectionable to be continued. In the next place the administration by consuls of a Japanese Code is only one degree better. There still would remain amongst

others the objections that these Consuls are neither trained lawyers nor trained judges, and they would administer that law, each according to his individual ideas of justice, and also unguided and uncontrolled by a common court of appeal.

other and with the Code itself. should be gradually formed by the decisions of the courts ministering that code, and that the body of law judges and lawyers be instructed in the art of adprovides herself with a code acceptable to modifications being made, I think that system would to make such concessions as Egypt made. But these higher than the people of Egypt—cannot be expected and as regards general advancement and education cauce the Japanese-being a people intellectually under certain conditions and with modifications, bebeen suggested. territoriality in Japan. have the effect of shortening the period of extra-Foreign Powers, what is next wanted is that Japanese Mixed courts on the lines of those of Egypt have consistent and in harmony I am favorable to this but only For assuming that Japan with each

Government itself should appoint properly qualified foreign judges by foreign Powers-she would secure foreign lawyers as assistants to the Japanese judges, eminent Japanese. abolish consular jurisdiction. the foreign Powers desiderate before consenting to those qualifications in the Japanese judges which and the more sure and speedy means of producing that the system of mixed courts would be the better as a compromise, though I confess that I think of mixed courts. This I would be willing to accept all the advantages to be obtained from the system is most distasteful to her-the appointment of he is of opinion that while Japan would avoid what in the art of administering the law. In this way, and that they should guide, control and train them Another proposal has been made He proposes that the Japanese by a very

Whatever may be done as regards the adoption of some such systems as these I think that in the meantime those concessions I have already referred to, as regards the powers of the Japanese Police, and the jurisdiction in administrative and petty

of jurisdiction should be made be perfect in every respect, but that, concessions main in all their enormity till the time arrives stration. should the foreign Powers simultaneously withdraw promulgation of acceptable laws, justifies her right makes in her judicial administration and in the Japan, when the Japanese administration of the law shall Consular from their Consuls their powers of judicial adminithe causes which produced extra-territoriality, so regards the future, as Japan removes one by one offences should now be made to Japan; and that as to claim these concessions. Powers from time to time and step by step, as by My proposition is that the evils of the jurisdiction should not be allowed to rethe advances and improvements by the Foreign

I beg to conclude by moving a vote of thanks to Mr. Iriye¹ for the very valuable paper which he has now read.

註 1.後ノ穂積陳重博士ナリ

附屬書二

十三年九月十四日附「ダビツトソン」ヨリ森公使へノ書翰

London, 14th Sep. 1880.

Copy

His Excellency,
Mori Arinori,
Japanese Legation,

London.

There is one part of my speech at Berne which it strikes me I have not referred to in the paper which I handed you there, and which as its tendency is to bear down the excessive demands of the foreign Powers, it may be advantageous to send you now. In speaking of what these Powers could fairly require of Japan before consenting to abolish Consular Jurisdiction, I said:—

"It is always to be remembered in requiring from Japan a Code of laws, a judicial system and a satisfactory method of administration that no one of the fofeign Powers is at present satisfied with the laws or judicial system or administration

system which approach consideration of this question none of these foreign approach those those of any one of the countries of Europe different from theirs. sity be unsatisfactory to the other Powers, because and can not insist upon a system, and a code idenfore they make demands on Japan in regard to and administration of other countries. there are deficiensies and grave faults in the laws inistration as she has in her own. confidence in Belgian or German or Russian adm-France, and Switzerland may not have the Spain (for example) are not thought perfect by of any of the other foreign Powers. Powers could consistently demand a better system, Further more if strict logic only reasonably demand from Japan a code and to it—as being similar to its own—would of necestical with its own. these matters each of these Powers must not expect, Each nation prefers its own and thinks of any other of these countries For what would be satisfactory The Powers therefore their own as nearly as were applied to the And so with the The laws When there-

an abler and more upright administration and a more satisfactory set of laws than those they have themselves supplied as in their opinion sufficient and satisfactory for their own subjects in Japan."

were to become apparent in the conduct of the or bias or any other kind of judicial misconduct bear the test of foreign criticism, or if prejudice deduced by common sense reasoning such as will ed which are not warranted by solid proof and be found that judgements or sentences are pronouncese judges will be watched and criticized, and if it sought be obtained every judicial act of the Japanequity and moderation. learned, able and upright, but men of breadth and administer these laws-not merely men who are to provide good laws and above all good judges to most earnestly trust that every effort will be made advocate of the cause of Japan in this matter I do be permitted to add that while I am a most zealous advantage to Japan they would simply be useful to judges then instead of these concessions being an In sending the above to Your Excellency may I If the jurisdiction now

Foreign Powers as affording a proof that no more concessions should be made, and, instead of promoting, would positively check the progress which Japan has made towards ridding herself of Consular Jurisdiction.

powers powers, privileges and exemptions necessary to the made it will be granted. Specific demands should Japan, and that I think if the claim be vigorously arrived when this now. I will only say that the time has certainly to the matter of arrest. I have spoken of this so often some concession as to the exercise of their propershe should specially and most strongly insist on she can obtain some concessions now, and I think these will not be conceded to her. But I do think being made to her, I fear that at present all of ference in favour of police in the discharge of their functions should be be made at all the foreign Courts in which the While I have spoken strongly at the Berne Con-Government that I shall not dwell on it by the police of Japan-especially in the concession should be made Japan having Concessions

distinctly set forth in minute detail and a distinct arrangement should be come to as to each and all of these—so that there would be no possibility of the foreign Ministers in Japan limiting and restricting the powers conceded by the arrangement.

I feel sure that this demand, so reasonable, so just, and so advantageous to all parties will meet with a favorable consideration from the Foreign Powers, and if it be successfully made, a most important step will have been gained by Japan.

I have the honour to be
Your Excellency's
Faithful & Obedient Servant,
(Signed) John Davidson

一〇一 明治士三先月十七日 非上外務卿宛

條約改正範圍及輸入稅目案ニ關スル件

ノ凝點ニ因リ英代理公使ト御往復相成候書籍寫相添へ我政別信第二十二號ヲ以テ條約改正ニ付舊新外務卿ノ意見異同別信 第六十一號

府於テ舊新外務卿共同意見ニシテ決シテ變說無之若シ此點 見ノ事ト存候然レハ前ニハ裁判制度ヲ從前ノ通リト定メ今 据置ト明カニ交約シタルヲ以テ是レハ舊外務卿渡訓令末段 始一ノ如ク決シテ變說抔ノ疑念ヲ生スル譯ハ無之筈」ト御 有之候ニ付當初改正ヲ申入レタル時ョリ今日ニ至ルマデ終 上時日場所ヲ定メ條約ノ總改正ニ着手セン事ヲ望ム云々ト 段ニ「他ノ事項ニ論及スルノ權ヲ有スル云々又雙方同意ノ 權ノ事ニ付テハ舊外務卿ノ考案ト同カラズ舊外務卿訓令末 回御草定相成候海關稅設立ノ方法トハ大ニ相違有之將又法 候共へ共貴翰中ニモ垂示有之候通り舊外務卿發ノ訓令ト今 ヲ要スル場合ニ臨候ハ、御趣意ヲ奉シ可相勤ハ勿論ノ義ニ ニ付英政府誤解アラバ談破可致旨御指令ノ趣了承前顯談破 メニ變説ノ疑念ヲ來タシ今コレヲ充分ニ說破シ彼ヲシテ我 相見へ候是レハ當時内閣諸賢外務卿及ヒ各國政府等共知同 ノ文意バ裁判制度ノ一項ヲ除キ其他ノ事項ヲ指スガ如クニ 頓條約ナリ該條約ニ於テ領事裁判制度ノ義ハ從前ノ通リ可 ス其最モ著キモノハ舊外務卿ノ訓令ニ從ヒ取結ビタル華盛 垂示有之候へ共變說ノ疑念ヲ來タスノ理蓋シ無キニシモ非 至リ僅カタリトモ之ヲ動カスハ前後異見ノ實アリ從テ爲

御注意アラン事ヲ冀望致シ候 言ヲ信セシメント欲スルモ恐ラクハ甚タ難カラン尚ホ 玆

意ニ則ルニ在ルヲ以テ本使ヨリ英外務卿へ出シタル覺書ノ 府ノ名代人へ遣ハサレタル是レナリ仍チ昨日電信ヲ以テ別 以テ該覺書ヲ英政府へ出タシ閣下ハ東京ニ於テ其翌二十六 無ニ歸シ殊ニ不體裁ノ甚キハ本使ハ倫敦ニ於テ二十五日ヲ 發言相成候上ハ銀テ内命ヲ奉シタル關稅設立體裁即チ本年 候斯ク公然ニ該税目ヲ外國人トノ協議ヲ以テ定ムベシト御 丰二 紙寫ノ通リ及報告置候但シ今ニ至リテハ該件ニ付キ本使ノ 日ヲ以テ同書所包ノ主意ヲ打消スニ足ルベキ御書翰ヲ英政 六月二十五日不使ョリ英外務卿へ出シタル覺書ノ主意ハ空 主意ハ其儘ニ捨置クベキ義ト存候 ハ即チ雙方協議ノ豫案ト爲スベキ存思ニ有之候」ト ハーニ閣下ヨリ英代理公使へ傳ヘラレタル御公言ノ趣 擬定輸入稅目草案ヲ同氏へ御遣シ相成候主意「右草案 本年六月二十六日付ニテ英代理公使へ御返翰文中ニ 相見へ

九月十七日

全權公使 森 有

務卿井上馨殿

九月廿四

日

在

英

全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

1 附屬書参看

2及3夫々二〇〇附屬書二來電及二〇〇文書參照

附屬書

十三年九月二十日發森公使宛往

Dispatched from Tokio teh 20 Sept. 1880.

From Inouye to Mori

I therefore propose Lane instead of you. draft already sent requires Your presence in Europe ing various difficulties and complicated meanings possible misinterpreting which may arise between failed, second must be forwarded for avoiding any in our demand to be considered. Should first be by letter and besides there are two important points that it is almost impossible to convey my full idea tion with Parkes and Saumarez but simply means You and me and for reform and perfect understand. My last telegram does not mean Your Conversajurisdiction question is grave and complicated is very desirous but as Reconsi-

> 註 屬書二參看 1234夫々一八四、 一八六附屬書、 六 二00附

明治士等月十四日 井上外務卿宛森駐英公使ョ

レーン氏本邦へ出張方ノ件

附屬書 明治十三年九月二十日發森公使宛往電

九月二十四日發

氏ハ當地ニ於テ目今尤須要何分手放シ難ク候故差遣シ難ク 右ノ通リニレーン氏御招キ相成度御趣向領承致シ候へ共同 談話ハ行違居候故取消ノモノニ候又第三條ハ勳章ノ件ニ候 放シ難ク候第二條ハ本使パー 意ハ本使パークス氏及ソンマレース氏ト談話ノ件ニ 別信 再述不致候敬具 候互細ハ別信第五十八號ヲ以テ申進候通リニ有之候間玆 差立候電文御誤解ノ事ト存候呈電ノ初條ハレーン氏目今手 過ル二十日別紙寫來第三十一號ノ暗電致落手候右來電ノ ン氏差立ョトノ御垂示ニ讀得候處右ハ過ル十六日本使ョリ ーン氏ヲ請求スルニ非サレハ尙ホ本使ニ於テ再考ノ上レー 第六十二號 クス氏及ソンマレース氏トノ 關シレ

der last telegram and send at next mail. think desirable. Will answer for decoration once Lane ij you by

二〇四 明治三年二月七日 森駐英公使宛

「ダビツドソン」ノ會同裁判所開設方策ニ關スル件

外務卿ョリ森公使へ内信案

熟讀候處抑本邦治外法權ノ件ニ付斯ク迄該會議ノ注意ヲ辱 拜啓陳者「ダビツドソン」氏頃日ベルン府萬國公法會ニ 二入江氏カ其節演説被致候通其短處ト困難ノ有様トヲ天下 ナフシ且現今施行スル法權ノ制度ニ付右ダビツドソン氏抖 テ演述被致候演説文ノ寫壹通御廻送相成正ニ致落掌候再三 公衆ニ被示候事ハ拙者ニ於テ甚滿足ニ不堪候

演説ヲ發言被致候段ハ誠ニ感謝ノ外無他事候 ダビドソン氏ハ領事裁判權ヲ非理ナリト被論且又其裁判權 分致稱賛候同氏カ能ク我國論ヲ保擔被致其實情ョリ ノ幾分ヲ日不官吏ノ手ニ恢復可然旨被申述候拙者ニ於テ十 シテ右

斯ク同氏カ我國ニ盡力被致候功勞ヲ鳴謝シ其聖志ノ善良ナ

子ニ相見へ候也 子ニ相見へ候也

事情ヲ祭スルニ「ダビドソン」氏ハ其演説ヲ爲スニ於テ恰 曾テ無之此儀ハ固ヨリ萬々御承知ノ事ト存候然ル 尤モ右演説ニ付テハ拙者ヨリ態サト貴下迄陳述可致ノ義 モ當政府ニ代リ發言被致候者ノ スル シテ其節該會議ニ參座被成候事故自然吾人等ハ 相加へ候上ニテ之ヲ取用可致ノ見込ニ有之卽チ氏カ策 ヲ公然御賛成被成候模様可有之ト拙者相認候也 演説ノ末段ニ云 八則チ貴下二於テ現二同氏力其會場面前二 二至り候テモ仍ホ又此感覺ヲ鞏固ナラシ 云ッノ考案ヲ提出被致尤モ多少ノ制限約束ヲ施 ソン氏ハ所謂「會同裁判」ヲ設ケ埃及ノ先轍ニ メスル夫ノ實際事件ニ觀察相 如クニ有之貴下ハ派遣公使 Д 此感覺ラ 處當時 テ被述候 N ŧ 加 ノ有 候 由 シ ノ

假ス事 ヲ聽用 其一大不利ヲ謀ルモノナリト 之候因テ凡ソ斯ノ如キ方法案ニシテ貴下荷シ之レニ顏色ヲ 外國政府カ多分將サニ以テ其採用ヲ我ニ强要セント 係スル所最モ甚敷ト存候何トナレ バ雷ニ當政府ノ爲メニ曾テ稗益セサル而已ナラス寧ロ 被致候通り右會同裁判ノ法ハ當政府ノ初メ 夫レ會同裁判ヲ我ニ採用スルノ考案ハ當政府ニ於テ毫モ之 於テ被生候世人ノ感覺ヲ御矯正被成候事ナラヌト 瞭ナルカ故ニ拙者復夕兹ニ敍述スルヲ須要ナリ 所三有之候實ニ此等ノ政府ニ於テハ當政府カ別ニ = ヲ論斷不致候テ特タ爰ニ指示セサル可カラサ 込ヲ具狀被致候通リ之ヲ擧行スル 會同裁判ヲ我國ニ採用ス シテ人荷シ此法ヲ我國ニ採用セント企圖スル者有之候 考案ニ對シテ必ス最大ノ抵抗論ヲ逞フセ ハ蓋シ貴下丼ニ「タビドソン」氏ニ於テモ ス = モ有之候ハヾ其極ヤ竟ニ許多ノ思難ヲ來ス ルッ ハ既ニ其處分ヲ被施候テ彼ノ「ベル 意無之モノニシテ貴下如 ルノ利害得失果シテ如 可中候殊ニ今回ニ於テハ其關 ハ該方法ノ儀ハ直 ノ意有之候拙者ハ シ其時ヲ以テ此感覺 ントス ョリ拒棄スル 事實必ス了 ン」府會場ニ ト ル者二有 事固 ·致信察候 不存候蓋 差出シタ 欲スル 反テ 一々明 所 25

ニ有之候ニー有之候の「則チ大二人心ノ誤認ヲ致スニ可足モノ

三付

キ當政府ニ被差出候報告書中ニ右改正ノ方法見

相容レサ 適用可致モノ有之候其案ニ云フ締盟各國ハ法權ヲ讓與ス 某々方案ヲ議定 **数ニ前段ノ文意ヲ略言センニ當政府ハ旣ニ條約改正** 精密ニ披露不致候事ニ有之候然レトモ拙者ハ此兩案ノ事實 被致候但シ幸二氏カ不點二付キ彼ノ公會二於テ演說セ ハ其語意只一般普通ニ係リ候テ該案ハ全ク當政府カ批 考案ヲ賛成保擔被致候事ハ洵ニ不都合ノ至ト 所 + 荷モ人ヲシテ左ノ如キ思想ヲ起サシムル莫ラン事ヲ須要 ビドソン氏カ提出被致候第二考案ニ就テ シタル時二當り其公使大臣タル者二於テ又他ノ反對 1 ノ方案ト ハ同氏カ我條約改正案ニ付キ具甲シタ シ ク歲月ヲ以テ漸次ニ之ヲ爲ス可シト 致考察候即チ我致府カ其公書ヲ以テ儼然某方案ヲ差 、外國政府若シ此等ノ方策ヲ提出被致候ト 如 ル事ヲ貴下ニ示諭シテ其常ニ躬カラ愼戒ヲ加 相反シ必竟兩立シ難キ所以ノ理由ヲ未タ十分 シテ公然之レ 切拒棄シテ取ラサル ヲ發行被致且ッ會同裁判設置 ノ旨明示致 ル意見書 丽 前述セ シテ其詳細 存候 シ置キタ モ シ所 一ノ爲メ 進ス ヘラ シ シ 所 Ŋ ル

> 所 爲メ只管御周旋可被成候 又前條記載ノ方策ニ就テ若シ說明ヲ被要候節ハ其不認可 之レニ反對スル感覺ハ力メテ御排斥可被成候事ト致信察候 可致方案ハ實ニ採用 行シ其間毫モ外國官吏ト協議照會ヲ要スルノ義務無之候 ノミヲ除却イタシ日 候加之此方策ニ關シ貴下自身モ亦同シク不認可說ヲ被唱候 本件ニ付テハ當時諸種ノ駁說有之候事渾テ御了知之通り ハ敢テ之ヲ受理セサル筈ニ有之候貴下嘗テ外務大輔奉職 儀ト存候此方案ハ乃チ拙者前述ノ通リ當政府ノ採用 一人ニ有之候テ只唯將來治外法權ニ屬スル ニシテ貴下ニ於テハ蓋シ每時此儀ニ御配慮有之候テ荷 |劉國ノ政府ヲシテ採納許認セ ヲ說明可被成候且ッ當政府 スルニ足ルモノニ有之候事是亦御了 不裁判廳ニ於テ法權ノ 3 シム ij 提出スル所 ルノ目 一部ヲ專斷ニ 特權ノ一部分 的 ヲ達 ノ籌策 セ シカ 貴 スル æ 悉

致難キ場合有之候得共拙者 テ同氏カボ 將又貴下ト 他事無之旨且ツ氏カ素志ハ 所ト符合シ 「ダビドソン」氏トノ振合向 :ニ就キ盡力致サレ候功勞ニ向ヒ其當政 補助スルノ間ハ拙者ニ *>*\ 原ト秀良ニシテ縱令盡ク承認 毎々之レヲ承認 於テ固ヨリ稱賛ノ ニ付テハ貴下 ス N ニ怠ラザ (府カ公 ==

同有之候併シ舊外務卿ハ畢竟稅則改正ノ事ヲ先務ト

ナシ

事ハ暫ラク措テ之ニ

關觸セサリシ故ニ華盛頓條約ニモ

シ同

貴下ノ補翼ト作リ當政府ノ稗益ト相成可申樣致度候除此段 ヲ同氏へ御通知被成候上將來氏カ盡力ノ方嚮ヲ一轉シ ベキ旨ヲ御傳致被成候テ但タ余カ本書中ニ致披陳候意見 永 T

明治十三年十二月七日

外務卿 井 F

> 訓令ノ末段ニ有之候他ノ事項トハ法權ノ事ニアラスシテ將 時ニ之カ改正ヲ要求スルトノ差異アルノミ且ツヤ舊外務卿 ヲ据へ置キシニ過キス而シテ拙者ハ同時ニ法權ヲ提出

命全權公使森有禮殿

二〇五 明治二年二月七日 森井 然駐英公使 宛ヨ

條約改正範圍ニ付重ネテ囘訓ノ

||號ヲ以テ申進候儀ニ就テ尚縷々變説ノ疑念ヲ來スノ理ナ 異同ノ疑點ニ關シ英代理公使トノ往復書翰相添別信第二十 九月十七日付貴翰接到然八條約修正二付新舊外務卿ノ意見 キニアラサル所以ヲ御説述有之卽チ華盛頓條約ヲ以テ其最 在英森公使へ機密信案 致承知候固ヨリ拙者ノ意見ト舊外務卿ノ意見ト 一項ヲ除キ其他ノ事項ヲ指スカ如ク相見候云々御中越ノ趣 著シキ例トナシ舊外務卿發訓令末段ノ文意ハ裁判制度ノ 第四十九號 ハ多少ノ異

君兼テノ能辯ヲ以テ「ジブロマチカレー」ニ野生ノ指令ヲ 權ノ事ニ在ルヤ明瞭ナル 關稅ト治外法權トノ二事項ノ外ニ出テスト陳述スルトキハ 體認シ英政府ニ向テ前後意見ノ異ナラサル事ヲ證シ新外務 有之間敷且貴下御出發前ニ於テ拙者ヨリ法權ヲ同時ニ提出 シ之ニ對シテ他ノ事項ト云フト 凡テロジク不相立次第モ有之間敷左レハ先ツ海關稅ヲ主ト 夕何事ヲ指スカ現行條約ニ於テ改正ヲ要スル箇條ハ大體海 モ ハトテ左マテ明々地ニ之ヲ白狀スルニモ及フ間敷候へハ貴 ノ上帝ノ靈前ニ懺悔スルカ如キ者ニモ無之假令ヒ變說ナレ ルハ頓ニ御承知ノ事ト ハ畢竟舊外務卿ノ意見ヲ擴充セシ迄ニテ決シテ變說 ニ無之事ヲ十分御辯明 致記臆居候其上外政略上 儀ト概説致シ候ハド格別不都合ハ 相成度此段申進候也 キハ則チ其指ス所ハ治外法 丁事ハ彼

治十三年十二月

スル

有之度候也 成不申候哉速カ 英政府 = == テ 出發ノ都合ニ相成候樣英政府へ尚御促シ ハ未タ條約改正至權公使差遣ノ都合ニ相

註 1及2夫々二〇〇及一八四文書

二〇六 明治士二十月二十百 井上外務卵 宛ョ

全權委員ヲ東京ニ派遣方ノ件

省略) 眼無之乍然不日ニ篤ト取調ノ上可及御答旨被中聞候 シ候處同氏ノ答ニ日本政府ヨリ囘送ノ條約草案未夕熟閱ノ 昨廿四日英外務省ニ於テグランウヰル氏へ面會條約改正 . | 全權委員東京へ派遣相成度段兼テノ御指令ニ基キ開談致 (以下

本政府ヨリ同送ノ條約草案漸ク此節印刷出來候且夫々ノ筋 次官ボンスホ ヨリ意見書迄モ相添へ不日外務卿へ指出シ政府ノ内議 ート氏へ出會先ツ條約改正ノ模樣相尋候處日 = 可

右申進候也

井上外務卿時代

對英交涉

드 아 차

들

中聞候 以下 省略)

十三年十一月廿五

有

井 上 外 務

二〇七 明治二年一年七 E 井上外務卿は 宛ョ

英國政府ノ態度ニ關スル件

會議要領十三年十一 月二十四日ポ ン ス 水

第八十號

非常ニ多端出會致兼候故ポンスホ 朩 合候(以下省略) リ依テ翌日重テ出頭候所愛爾蘭土國内ノ動搖ニ際シ外務卿 外務卿へ出會ヲ需候所府外ニ出役不在ノ由ニ付次官ポンス 日落手暗電英皇帝へ勳章御贈進ノ件ニ付不使外務省へ出張 鮫島前公使病中本使巴里へ出張過ル ート氏へ出會ヲ需候所同氏ハブライトンへ出張留守中ナ] 九日致歸英候故 ト氏へ出會前件内 不月八 之打

候様ニ被察候同氏ノ内話ノ後今一二回パ 一前述ポンスホー ークス氏ト我條約改正案内議ノ爲メーニ泊該地へ出張致 ト氏ブライ 1 ン へ出張候義ハ雑務ヲ避ケ 1 クス 氏ト 內議候

中聞候右改約ニ關シポンスホート氏一己ノ私見ハ別記レー 右申進候也 得ハ下調完全候故不日中ニ内議案ヲ外務卿ニ可指出見込ト ン氏ト内話書爰ニ在中候間右ヲ以御推知有之度候

十三年十二月十七日

森 有 禮

井上外務卿殿

十三年十一月二十四日ポンスホート・レーン會談要領

Private & Confidential

24th November 1880. Stuart Lane on Wednesday the Sir Julian Pauncefote & Mr. Private Conversation between Notes of the substance of a

Sir. J. Pauncefote. I have had the pleasure of seeing the Japanese Minister to-day at the Foreign I hear his conversation with Lord Granville was interview to discuss the Revision Question, but We thought that he had asked for an

almost entirely about decorations.

Mr. Lane. have telegraphed to Japan for it. other day that you were still waiting for a memcould be referred to. But as he wished it, we copies of all Conventions made and none others hardly necessary as you must have in the Office proposed should still remain in force. orandum as to the conventions which it is Sir. H. Parkes told the Minister the This seemed

Sir. J. P. Quite So. think can be done to meet the Japanese proposals. powers to whom we have promised to state our proved, will then be sent to those of the foreign at once laid before Lord Granville. We only send it as a matter of courtesy, and I long memorandum on the subject, which will be printed, and after having had two or three Congo into the matter. in consequence. In fact we are nearly ready to tant point, and we have not delayed proceedings versations with Sir. H. Parkes, I have prepared a This memorandum will explain what we You say it is not an impor-All the papers have been This, if ap-

attract attention abroad. completely new longer be called a Revision. It is a question of which the matter is put forward. It can no question is now we can best arrange the details. do not think there will be any serious difficulties. very fair and moderate in their tone. I must say I think both the proposed treaties are You see there is some objection to the form in Treaties which will no doubt The only

Mr. Lane. a new & fair start. some of the Japanese. almost sure to be a bad feeling on the part of As long as any portion of them exists there is such a sore as the old Treaties always must be. parties. Every one should be glad to get rid of Surely that is a better position for all That is the best course. Wipe them out and make

make anxious to do all that is possible for the Japamay not take this view. I am myself most think it matters. I shall always support any just claims they That may But you see all the Powers be so. I do not personally

> Mr. Lane. Sir. J. P. matter can at once be taken in hand seriously. would find no difficulty in settling any question. time. nese wishes than there was in Lord Salisbury's there is much more inclination to meet the Japamore delay. As you probably know (the allusion that in their interest there should not be any was understood to be Sir Charles Dilke especially) We are all now back in London and the I should like you to impress on them If they are treated in that way, you

Mr. Lane. Revision should take place at Tokio. You see it has been arranged that the

Sir. J. P. This was at the request of Japan, remember. But in any case reference would have to be made here.

Mr. Lane. It is settled that Mr. Kennedy should act for as in Japan.

Sir. J. P. No. He will not have any such powers. up this and all other matters. It is intended to settle the leading points here. and then for Sir H. Parkes to go out and close

Mr. Lane. And return home. Is that fixed?

- Sir J. P. Yes. He now wishes himself to leave Japan finally.
- Mr. Lane. Will he probably have a new diplomatic post?
- Sir. J. P. No. There is I think no Chance of this. He will retire from the service altogether as soon as this Revision matter is settled. By the bye one of the difficulties we have had to meet is that Japan does not now offer to give as any new concession.
- Mr. Lane. That is quite intelligible as the Powers had already taken every-thing there was to give. Nothing it seems to me remains which she could possibly in fairness further concede, except the opening of the country & that can not be expected till the whole jurisdiction question is arranged. The opening under the present arrangement would only create endless complications.
- Sir. J. P. I quite agree in that. I do not think it would be at all wise to have the whole country opened now. The "rowdies" from the free ports would give as great trouble. But I do think

arrangements might be made for free travelling in the interior with a proper system of passport. Mr. Lane. That exists already. I think I am right in saying that no proper application for leave to visit the interior is ever refused, but it is not

permitted to reside and trade.

- Sir. J. P. I was not aware of that and am glad you have told me. Now as to the commercial part, I fear we shall find that the proposed tariff is looked on as very complicated. On the 35 Article if I remember rightly the duties vary from 5 to 20 per cent.
- Mr. Lane. But you will see that the average is only about 10 per cent, and that the principal British Staples come at about that duty.
- Sir. J. P. Then why do they not decide to propose one uniform rate all round of ten per cent? That would be much simpler and avoid much discussion and trouble.
- Mr. Lane. I hardly think that would meet the views of the Government, but if you think it desirable why do you not propose that change yourself.

It would then be at once considered.

- Sir. J. P. We shall see after we have heard from the other Powers. By the bye, can you tell me what it is proposed to do about the judges who are to try the light cases against foreigners. Are there any Japanese capable of this duty?
- Mr. Lane. I do not know what the Government proposes, but I am sure the scheme will involve competent judges, for they are well alive to their necessity from the experience they have had of incompetent ones in the Consular Courts.
- Sir. J. P. (after laughing) I think this will be a difficult point. Would it not be better to propose to have foreign assessors to assist in all cases involving foreigners.
- Mr. Lane. I can not say how this would act, but the great point to be aimed at in all solutions of the questions is in my opinion to have Japanese and not foreign laws and jurisdiction.
- Sir J. P. There is one thing I am very glad to see as it makes our adhesion much easier, that is that it is proposed to leave all questions between

foreigners to be settled by themselves. If our people voluntarily deal with the Japanese they must naturally take the consequences.

一〇八 明治古堂三月十八日 森駐英公使ョッ

機密信 第五號

ヘキカハ 府卜 乎此問二 フニ 考案ナラ 其旨不使へ御通知アリタシト申入レ置キ歸館シタリ右ノ次 愈々貴政府ノ考案ヲ自餘ノ締約諸國へ囘付アリタル時ニハ 言致シ難シトノミニテ之レカ明答ヲナサス是ニ於テ不使ハ ラル、二當テハ我カ日本政府へモ共ニ之ヲ通牒セラルヘキ 案モ立チタレハ不日將ニ我英政府ノ考案ヲ自餘ノ締約諸國 ニ通牒スへキ積ナリ本使又夕問フテ曰ク締約諸國ニ通牒セ 我國ヨリ提出シタル條約修正ノ考案未タ精思熟考ノ尊暇ナ 本使先ッ外務卿ニ向テロク數旬前面晤ヲ得タル際閣 テ去ル十五日本使外務省へ出頭同卿へ面談ハ始末左 シトノ趣ナリシ 御漏泄アリタシ外務卿答へテ曰ク既ニ熟考ヲ遂ケ略 御熟考ノ結果貴政府ノ御考案不使承リ若シカラサル 議ヲ 今般ノ改約談判ニ就テハ英政府之レカ主ト爲リ其考案 付キ翌十六日即チ別紙ノ通り呈電ニ及ヒタル事ニ候思 知ル \mathcal{V} 開クノ念慮ナルヘシ其考案果シテ如何ノモノナル ·締約諸國ニ囘付シ各國協議一致ノ考案ヲ以テ我政 ハ外務卿少シク妙ナル顔付ヲ爲シ其事ハ何トモ發 ニハ固ヨリ滿悅ノ至ナリト雖モ之レカ考案ヲ ヘカラスサレトモ若シ我カ發案ヲ聽容スル カ爾來旣ニ御熟考ニ及ハレタルヤ若シ然ラ 下 ホ考 ダ

> 英政府ノ内情兹ニ及御報知置度如斯敬具 更二内探偵ヲ成スノ事モナキ等熟々英政府ノ所爲ヲ以テ祭 令ナクシテ本使ノ敢テ猥ニ着手スヘキ事柄ニモ非サ == $\stackrel{-}{=}$ ス 前 策無ルヘシト愚考致シ候然ト 向テ其未夕之ニ同議セサルノ前ニ於テ謀ル所アル 難シ萬一ニモ然ルモノナランニハ此上ハ自餘ノ締約諸 レハ其考案或ハ我カ發案ニ對シ不可喜ノモノナル テハ我カ發案ニ付キ曾テ何等ノ説明ヲ要ムル事モナク又 == 當り 東京ニ於テハ其事アリ モ其處置ニ至テハ閣下 シ カヲ知ラサレ æ ノ外 ヤモ ν 不使 ハ貝 1 測 他 國

十四年二月十八日

有禮

井上外務卿殿

註 1四0文書

一〇九 明治十四年四月一日 森駐英公使宛

條約改正交渉方針ニ付訓令ノ件

機密信 第三號

十三年機密信第八十號ニ相添へ客年十一月廿四日書記「・

内話 旣 外務卿或ハ大輔ニ御面會ノ上左ニ中進候趣意ヲ以テ懇々 起シ候康々ニ就キ一層詳密ニ我意見ノ在ル所ヲ示 中遺候儀ニ有之候間可然御諒察有之度候 尤右ハ迅速ヲ貴フ事柄ニ付貴下ヨリ御通牒ヲモ不待 ハ愈談判ヲ關候節大ニ都合可宜ト相考候ニ付此機ニ會シ英 改正談判ノ手續モ既ニ此迄相抄取候事故幸ヒ彼ヨリ疑問 ン」一己ノ心得ニテ英外務大輔へ申入レ可 同 ン」氏英外務大輔ト 同 人へ返書差遣シ略我意見ヲ中述候様中聞候事ニ御座候 |人ヨリ鈴木金藏迄私書ヲ以申越候ニ付不取敢鈴木ヨ 相成候樣致度ド存候尤「レーン」氏内話ノ儀ハ過日 內話ノ筆記御差越相成致閱悉候偖 然上 ノ意ヲ以 小シ置候ハ フレ ヺ

全ク新規ノ約條ノミヲ設クルモノニ非ス唯其添刪 テ知ル可キナリ我新條約ノ考案ハ決シテ舊條約ヲ ノ趣意ニテ引ニ所系与・デ・流行之候得共我ヨリ起ス所ノ考案ハ全ク舊條約ヲ改正、有之候得共我ヨリ起ス所ノ考案ハ全ク舊條約ヲ改正、イニュノ改正ト稱シ難シトノ 其儘 無之候是即チ條約草案中ニ舊條約ノ約規ヲ存スル 今般我提出スル所ノ條約改正ハ改正ト稱シ難 スル約規ヲ添删スル ノ趣意ニテ別ニ新條約ヲ結ハントスルノ意ニテハ決シ ニ存シテ其中ノ 二止 添删ス可キ條款ノ N ノミ然レハ何故ニ舊條約 Ξ ラ添刪セ 一廢棄シ セント ヲ見 办 スな批

患害ヲ豫防センニハ舊條約中ノ 當り改正條約ニハ斯クアレトモ舊條約ノ趣意ハ斯ク々々 憂アリ況ヤ今又之二改竄添删ヲ加フル事アラハ更二其煩 異同アルヲ强カレス之ヲ施行スルニ臨 在リ今舊條約ヲ其儘ニ存シ置キテ新條約ヲ添加 ク彼我雙方ノ便ヲ謀ルニ外ナラス扨又旣ニ舊條約ヲ廢棄 新條約中ニ加へ而シテ專ラ新條約ヲ守ルニ如カス是レ全 然ナリ且傍ラ舊條約ヲ存スルトキハ後日之ヲ解釋スルニ 雜ヲ增長シ之ヲ實施スルニ際シテ甚シキ不便ヲ釀ス事必 タスシテ明瞭ナラン今夫レ現行條約ハ 主意ハ勉メテ後日ノ爲メニ煩雜ノ 観易キモノアルナリ左ニ之ヲ陳述セン抑我改正草案 ル以上ハ名義ニ於テ之ヲ改正ト稱シ難 則新舊撞 着 アル可シト雖トモ之ヲ改正ト稱スルモ亦可ナル 抔ト言フカ如牛異論ヲ生スルノ患害アル可シ是等ノ クカ為メニ我政府ト外國公使ノ間ニ於テ自ラ見解 3 例アリ 難問 ノ事アルトキ其説明ノ煩雑ナル事論ヲ須 ヺ 即チ御承知之通リ夫ノ一千八百 起ス事必然サル可 存スヘキ者ヲ存シテ之ヲ 患ヲ発カレント シ (其約文ノ テ常っ ルシト難 1 困難阻滯 ,明確周詳 其理 1六十六年 論ス スルト スル ヲ ルモ ハ キ 1

ンヤ 思惟ス豈 中二 即チ千八百五十八年ノ貿易條約ト六十五年ノ大阪 ラ設定セシモノナリ然レトモ此時現ニ日本ニ於テハ各 フ レ I 去レハ今囘モ亦此例ニ據テ改正ヲ行フ事ヲ得ヘシト 載セタル税則 其質ヲ云フトキハ全ク舊税則ヲ廢棄シテ別ニ新稅 、改正ハ當時各國ニ於テ之ヲ改 正ト唱ヘシモ - 税則ト條約ト改正ノ字義ヲ異ニスル ニ應シテ之ヲ肯諾 ン」氏ノ答辭ハ至當ノ論ト被存候 改 正ノ約規ニ基ツキテ擧行セシモノ セシニ非スヤ右ノ税則改正 ノ理アラ 党書が ナ

求ス 忌嫌スルノ徒多ク之カ爲メニ外人ノ便益ヲ障害スル 際ヲ開キシ事ユへ素ヨリ條約ノ何物タルヲ辯セス且 モノアリ最初我カ各國ト條約ヲ結ヒシ時ハ始メテ外 來我改正案ハ我要求スル所 銷國ノ政略ヲ拋棄シタルノ際ナレハ政府ニ於テモ十分 日本ヨリハ新タニ讓與スル處ナシト 交通商 ル所 (上ノ利ヲ占取セラレ對等ノ權利ヲ保ツヲ得サリシモ(ニ尠カラサリシユヘ止ムヲ得ス各外國ノ爲メニ十分 ハ彼自ラ之ヲ提出スヘシ但今茲ニ一言ヲ要スル ノ方略如何ヲ知ラス又國民中ニハ尚ホ外人ヲ ノモノヲ提示スル ・ノ批難ア ナリ レト 彼 グノ要 虚カ 國交 事 モ 元 E

復スル 最切ナ トキハ我人民ハ外國政府カカヲ以テ締結シタル約條ハ亦望スル所ナリ若シ此機ヲ失シテ我人民ノ切望ニ副ハサル 百般 テ應分ノ權利ヲ或ニ回收スルハ我政府ト人民ノ共ニ最渴 以テ其一班ヲ觀ルニ足ラン然ラハ今般ノ條約改正ニ際シ 蓋近來各地方人民カ國會開設ヲ政府ニ懇請スル 歐米諸洲ト對等ノ地位ニ進步セントスル熱心ノ クシ孜々倦マサルモノハ皆是レ畢竟我獨立國權ヲ保維シ 公務教育或ハ其他ノ事業ヲ委托シ又專ラ內外ノ交際ヲ厚 壓生及ヒ官吏ヲ外國ニ派遺シ或ハ夥多ノ外國人ヲ聘シテ テフシ ₹カ專ラ歐米諸邦ノ文明ニ傚ヒテ開化ノ域ニ進入セ タモ ノト謂フ可シ今ヤ我國ノ情勢全ク昔日ニ異ナリ 1 メ凡ソ學術、 ハ固ョリ 專ラ開 見サル 事物ニ至ルマテ専ラ歐米ノ法方ヲ採擇シ又數千 リ然ラハ則我開進ノ度ニ應シテ漸次ニ其權利 人ヲ忌嫌セシ心情ハ今旣ニ全ク消散シテ復タ其痕 是即チ我固有ノ權理ノ幾分ヲ不知不識彼ニ 進ノ途ニ就テ我國勢ヲ振興セ カ如キニ至リ全國ノ人民學テ萬國 上下ノ切望スル所ナリ抑日本政府及ヒ人 法律、工藝、農業、商務、海陸兵制其他 ントスル ルカ如キ亦 /結果ナリ ŀ 友誼 ン事 ラ囘 ノ情 Ż. ヺ

裁判及ヒ内國施 政ノ完全整備ヲ得ル事アラハ我政ル事固ョリ論ヲ須タサルナリ今日ト雖トモ若シ我法律、 國ヲ開 得サ 府ハ無論ニ金國ヲ外人ノ爲メニ開キテ治外法權ヲ廢棄セ 内國施政ハ我ニ於テゼ亦未夕十全完備セリト斷言スルラ ルニ因リ些少モ治外法權ヲ存スル間ハ之ヲ許諾ス可ラサ 夫ノ治外法權ヲ廢スルト正サ ŀ 事情ヲ考察スルニ外國ニテ新タニ要求ス可キ ク襲日 理 是即チ我全國ヲ開クニ漸ヲ以デセサル可カラサル n 欲ス然レトモ外國人ノ見ルカ如ク我法律、 幾日ノ如 ナリ ユヘ止ムヲ得スシテ治外法權ヲ存留セシムルモノ (クノ一事ニ外ナラサル レ彼我ノ政府ニ於 與ノ問題ハ實際上ヨリ推究セサ ノ市中ニ 可 他ノ權利ヲ我ニ囘復スルニ就テハ我 尤今般提出シタル草按ニ載スル如 ク外國人ヲ嫌悪スルノ心情 ハ之ヲ匡正ス可カラスト - 決意スル 雜居ヲ許 テ深ク顧慮セサル可ラサル 所 ス事是ナリ其他 カ如シ然レト ノモノア ニ相對向匹偶スル ノ想像ヲ存 三一傾向ス リ卽チ東京、 尚水 ヲ得 モ全國ヲ開 ク法權ノー 裁判及ヒ けス 今實際 i) モ モ 1 ル :シ復 國 ノタ ハ全 ŧ 所 ノ 所 Ŋ 恐 T

好意ノ 擧行ス可シ此邊ハ貴官 スシテ却テ我讓與スル所ヲ彼カ爲メニ奪去ラル 然提出スルト ニ應ス可キ約ヲ爲サ、ルニ早ク旣ニ我 テ之ヲ條約二記載スルヲ好マス其故ハ未タ彼ヨリ我要求 ヘント要望スルニ相違ナカル可シト 度候又此雜居ノ 右雜居ノ一事ハ 開ク可キ新港ニ於テハ從來ノ居留規則ヲ充用スル 新港ヲ開ク可シト要求セハ我政府ハ何ノ港ヲ擇ハス ν ス是即チ之ヲ條約ノ箇條ト ハナリ舊來ノ經驗ニ於テモ往々之ニ類スル事ナキ ニ約束ヲ定メ我地方規則ニ從遵セシメ 又地方官ト領事ノ協議裁判法ヲ用フル モ彼ニ於テ我要求ヲ承諾スル 應シテ之ヲ開クモ妨ナシ尤右三府ノ雜居地及ヒ將來 ハ貴官ノ御見込ニテ御話相成候テモ妨ケ無之何卒我 彼力思想二浸潤致候樣丁寧二御陳說有之候樣致 キハ或ハ後二至リ彼ヨリ 一事ノ如キモ彼ニ於テハ必ス條約面へ加 既二内決セシモノユへ英外務卿 ノ御含迄ニ申述 爲スヲ欲セサル所以 ト キハ我政府 雖卜 ハ我要求ヲ承諾セ ヨリ是等ノ事ヲ公 事能ハス ・モ我政府 ン事ヲ要ス 、ノ恐ア ナリ \sim 御對話 宜ク新 事能 二 決 ス之ヲ 可 シ シ シ

「レーン」氏ノ答ニ現今ト雖トモ商用ト住居ヲ除クノ外

シ此段モ爲念申進置候 病氣保養ノ名目ヲ以テ旅行死狀ヲ渡ス迄ノ事ト レトモ現今外國人ノ内地ニ人ルヲ許スハ學術研究或 ハ其筋ノ免狀ヲ得テ內地旅行ヲ爲シ得ル旨ヲ述タ 知ル べ

賦課スルモ左

ノミ輸入ノ減少スル患ナク貿易上

7

如 キ ヲ

輸入高モ亦漸ク増加スルノ勢ナリ故ニ之ニ二割

ご人關稅 =

カ故ニ今日石炭油

ス國内一般ノ糯用スル所

ŀ

チリ

種油ヲ用

フル

ŀ

丰 ハー人

毎二一燈ヲ要ス可

シ

|||拾二|||錢ニシテ尚ホ騰貴ス可キ景況ナリ且石炭油 付拾七八錢內外ナリ然レトモ我國産ノ種油ハ同壹升ニ付 ヲ了知セシモノナリ今試ニ其一例ヲ舉ケンニ米國ヨリ輸 多カラン事ヲ欲シテ却テ之ヲ減少スルノ恐アリ今我政府 重税ヲ賦課スルトキハ必ス貿易ノ衰頽ヲ來シ收入稅額 スシテ海關稅ヲ增課スト雖トモ荀モ其適度ヲ量ラスシ ハ我通商ノ益隆盛ナラン事ヲ欲望スルニ因リ實際我内國 情況ヲ熟察シ關稅ハ其品目ニ從テ差等ナカル可ラサル ナリ抑目不政府ハ財政上ノ需要ニ應スルカ爲メ已ヲ得 シモノニ非ス最モ細密ノ注意ヲ加ヘテ編制 N 擬定税目ハ煩雑ナル 遙カニ種油ヨリ カ如シ 石炭油ランプハー基ヲ以テ五六人ノ用ニ供ス可 所ノ石炭油ハ今日東京市中ノ小賣相場ニテ壹舛ニ 1 ノ説アレトモ元來此稅目 モ明亮ナリ譬へハ職人ノ夜業ヲ爲 ジ税 ハ決シテ杜撰 ス ル所 事 シ ラ = = ス 定 光 1 デ

ユヘ總體壹割 に一定ムル 簡 影響ヲ及ホス事ナカル可シト思考ス ル ナ リ 又時辰

ヲ承諾實行スルトキハ下之關償金三百萬圓ノ內二百萬圓 三五十八年條約ノ税則ヲ改ムル事是ナリ 親睦ヲ敦クシ貿易ヲ盛ニスル 其後亦大阪江戸ヲ開市セリ 六十二年倫敦及ヒ巴黎ニ於テ定約セシ如ク六十二年ヨ 一御批ノ事ハ之ヲ履行シ第二兵庫開港ノ事ハ當時國內人 ハ捐棄ス可シト約定セリ因テ舊政府ハ右三ケ係ニ對シ第 一條約ニ天皇陛下ノ御批ヲ得ル事第二兵庫港ヲ開ク事第 從價五 |ニ六十八年一月一日ヲ以テ約ノ如ク兵庫新潟ヲ開港シ ケ年ノ内即チ六十八年以内ニハ之ヲ開ク可キ旨ヲ述へ ノ未夕平穏ナラサルヲ以テ卽時ニ開キ難キ實情ヲ述 ハ滿足ス可キ旨ヲ明言シ左ノ三ケ條ヲ發題セリ ヲ要セス日本政府ニ於テ其代トシテ外人ニ便利ヲ與フ 政困難ナルヲ祭シ四ケ國ニテ償金ヲ要求スルノ旨趣 萬圓拂渡ノ事ヲ舊政府ニ要求スルニ方リ當時舊政府 抑千八百六十五年英佛米蘭四ケ國ョリ下之關償金三 にかっ 分ノ割合ニ軽減セリ畢竟スルニ 五分税ニ輕減セシ時ノ實況ヲ視 之ヲ約諾 シ逡ニ六十六年諸輸入品 第三減税ノ事ハ千八百六十五 ノ本意タルニ付必 舊政府 而 シテ右三ケ條 テ知ル事ヲ シモ其全 カ斯 デチ第 IJ ~

様ノ 舊政府ト外國トノ間ニ償金拂方ニ付何等ノ談判アリ 加スルモ甚シク需用者ノ不便ヲ生スル事莫ル可シ酒類其キハ多分中等以上ノ人民ノ用フル所ナレハ假令其稅ヲ增 テ當時ノ事實ヲ審ニスルヲ得タリ是ニ因テ之ヲ觀 シ ヲ詳ニスルニ由ナク因テ其催促ノ通リ遂ニ全ク之ヲ拂渡 ヲ促カシ我政府ハ當時國事多端舊記等未夕整理ニ就カス 圓損棄ノ事ハ之ヲ直ニ實踐セサルノミナラス新政府更迭 額ノ輕減ヲ肯諾 扨又此稅額ノ過當ニ非サル 國前卑官面會ノ節同氏ョリ談話有之候乍併我考案ニ於 易ナル可シ云々ト此平均壹割ト云フハ「パークス」氏歸 テハ内國一般ニ經濟上ノ不便ヲ生スル事論セスシテ明 ラサルユへ實際ノ便否ヲ顧ミスシテ關稅ヲ賦課スルニ於 業尚ホ幼稚ノ有様ナレハ外國ノ輸入ヲ仰ク品物モ 需用者ノ不便實ニ甚シカル可シ殊ニ日不ノ如キハ製造 人民ノ須要品ニ係ルユヘ成ルタケ海關稅ヲ輕クセサ 他ノ贅澤品ハ殊ニ然リトス之ニ反シテ英綿ノ如キ 受ス セサル 六年ヨリ今日ニ至ルマ ラ沸 タリ而後之ヲ旣往ノ事迹ニ徴シ之ヲ舊記ニ檢シテ始メ 後ニ至テ償金三百萬圓ノ殘リ百五十萬圓ハ償却セ シタルニ右四ケ國ニテハ其發題シタル彼ノ償 ハ當時四ケ國ヨリ發題セシ條款ハ大抵次ヲ逐テ之ヲ踐 苦情多カリシュ 至難ノ障礎アルカ爲メ前約ノ如ク港市ヲ開ク事能ハ 輸入税率ハ平均壹割三步强ノ計算ナリ(尤各國平均) 可シ「レーン」氏ト外務大輔ノ談話中諸輸入物品ニー 故外商ハ之カ爲メニ損失ヲ豪レリト愁訴シ且其外ニ 税ヲ課シ譬ヘハ之ヲ壹割ノ一種ト爲ストキハ シ ラ享有シタルモノ ヒ四ケ國ハ償金ノ全額ヲ領シタル上ニ開港ト 於テハ四ケ國ノ請求ハ之ニ應シ尚其上ニ償金ノ殘 ルヲ得サル テ特別 セ ノ利益ヲ附與 へ舊政府ニ於テモ義理ニ迫リテ之ヲ承 ノ勢ニ至リシ モノハ當時我邦ニ鎖國論等ノ如 テ凡ソ十六年間各國ニ對 ナリ左スレハ我政府ニ於テハ六 ハ當初千八百五十八年ノ t リト云フ ・モノナリ 却說我政府二於 ŧ 2 金二百萬 テ過言 大二簡 亦少カ レハ我 ハ下等 シ ン事 丰 シヤ ν テ ナ ハ ノ

以テ讓與シタル事ニテ必シモ減稅セサル可ラサルノ義務時減稅ノ事實ヨリ之ヲ言フトキハ是全ク我政府ノ好意ヲ 二千七百五十九萬餘圓ノ多キニ及ヘリ然レ 以テ讓與シタル事ニテ必シモ減稅セサル可ラサ 假定シ之ヲ推算スルニ明治元年ョリ同十二年度マテ十二 スレ 致シ候 ハ各國 意ヲ抹消シ互約ノ義務ヲ踐行セサル可ラサル 無カル可シ特リ之ヲ約書ニ揚ケタルカ爲メニ 今若シ右ノ減税ハ以テ輸入ノ多寡ニ影響スル事 ニ依リ收稅スル 1我政府財政上必需ノ爲メ相當ニ之ヲ改メン事 ラ間っ シタル 八各國二於 カ如シ若 = 損失ハ己ニ十分之ヲ補償シタル勘定ナリ 我政府カ右減税ノ爲メニ蒙リタル 於テ決シテ不相當ナリト シ當時我政府ニ於 ハテモ旣 ŀ キハ收入上大ナル増額 三己ニ多年其特益ヲ受ル以上 テ減税ス ١ / 思考 ハ嚢ニ外 ハ無之事 ラ見ル N 損失サ 事ナク舊稅 三至 我政府 アヌボム ナシト 文當 商力 ř <u>,</u> ~: ν ナ IJ ラ モ

中人有之度存候 株子ニ祭セラレ候故左ノ趣意ヲ以テ老臺ノ御見込迄ニ御 株子ニ祭セラレ候故左ノ趣意ヲ以テ老臺ノ御見込迄ニ御

我邦ニ於テハ民法、刑法、治罪法ヲ始メ其他各般ノ條例規

意ナリ 我政府 經ルニ 歐米各國ノ老練ナル法律士ト比肩スルカ如キ 1 國コソ適當ノ法律家ヲ派遣シテ在日本裁判所ノ判事ニ 3 = 日 判所ニハ必ス外國ノ法律家ヲ雇入レ之ヲ吾裁判官ト爲シ = 雖卜 米ノ法 ŋ 於テ今囘ノ草按中ニ制限シタル權內ノ法ヲ行 外國ノ法律家ト我法律家ト ミタルモノ三四名ヲ擇ヒ之ヲ以テ裁判所ヲ組織ス可 我法律家ハ尚ホ經驗ニ芝シキノ一失ナシトセス是ニ因 本法律學士ノ中ニ就テ十分合格ノ試驗ヲ經且最 モ多シ然レトモ我王政維新以來僅カニ十三ケ年ノ星霜ヲ モ モ遙カニ良好ノ裁判所 少カラス又我邦ニ在 ノヲ漸 斯ノコトクスルトキハ現在我諸開港場ノ領事裁判所 過サレハ其間ニ於 ル モ爾餘ノ諸 ハ每界港場及ヒ開市場ニ於テ外國人ヲ裁判ス可 = 一勝ヘサル 學. ヺ 現今歐洲文明諸 一點 邦ニ至テハ領事ヲ シ現ニ海外ニ留學シテ法學ヲ卒業 行スルナリ尤外國政府 懸念スルモノアリ テ夫ノ至難ナル法學ノ テ外國教師ニ就 ラ得可シト ヲ以テ一體ヲ組立テ我裁 邦ノ シテ 信用 判事 キ法學ヲ學 と パスル シ ニハ至ラス故 、深奥ヲ極 ナリ 職ヲ兼ネシ ハシ 七經驗 現今英 4 Ė セ ルノ シ即 キ裁 判 シ 叉 所 モ = テ メ

!ス前 顯我考案ニ出ツル ナル事疑ヲ容レサ 3 ij 一之ヲ見ル ŀ ノ方法ハ必ス現時 キ ルナリ ハ不十分ノモ j ト謂 Ž 領 事 ハ 裁判 サ ル ョラ

國 人 擧ケンニ過般我稅關ハ外國人ヲ任用セント欲シ ニ與フルノ約ヲナシ後ニ嚙臍ノ悔アルヲ前條ニモ述ヘシ如ク我ニ於テ未タ得ル所 人雇 ŀ ス若シ激物 右外國人ヲ任用スルノ議ハ旣ニ我政府 黎行 ハ不平 ・キハ後日ニ至リテ煩累ヲ惹起ス事必然ナリ試 ニス我ヲ ス モ各條約國カ我法權上ノ請求ヲ承諾スルニ於 人ノ事 ν ハ交々自己ノ利ヲ謀リ五ニ妬心ヲ懷キ甲國人 入ノ事ヲ記載スルハ我最モ好マサル處ナリ ハ乙國人ハ苦情ヲ唱へ乙國人ヲ用 セン事ヲ保證 シテ外人任用ノ念ヲ絶タ ・ヲ訴フルカ如キ事情アリ 出テシ キハ猶更煩雑ヲ生スルノ患多 ハ之ヲ條約上 ラ以テ外國人雇入ノ事 スルナリ去ナカラ是モ亦條約面 1 - 為サスシ シム テ テᡑヲ容 無限ノ煩累ヲ生 事ヲ條約中 いっ至り ヲ恐ル可キ カ ヒント ナキ ルヘシ テーニ之ヲ我 · 早 サ t ,シ事アリ タレト 二記載 其故 グテハ シが ル ス = 樣致置度 レハ丙國 其一例 ア雇ハ シミ 'n 旣 必 ハ旣 二外國 シ 來リ エスチョル ナラ彼 え之 裁 -

> 學校ノ如 ル 候我國ニ於テハ凡 ハ常 ヘキ 事ト ここ之ヲ用 + 至 存候 ル フ 7 N ソ外國人ヲ用ヒテ利益アルヲ見認 テ多ク外國人 ニ踟蹰スル事ナシ現ニ各省ヲ始 、ヲ聘用 ス ル ヲ 以 テ ダ私社 4 Æ ル ヺ

外國ヨリ 法權ノ件 ヲ 此處ハ彼カ心裏ニ感銘スル樣篤ク御説明有之度候卽 デ == ノ ,==<u>1</u> 改正 例擧スレ 緊切ナル所ノ施政上 反シテ獨リ イカル」ノ思想ヲ生セシニハ非 ヲ以テ我ニ囘牧セント欲スル所ノ有限法權ハ尤現實 我國權ヲ損傷 ハ 理論 ハ 實際止ムヲ得 1 點 3 · y ノ t ラル 説ヲ 法 サルノ = 业 シノ 起 ₹ シ 理 テ我 ス我要求スル所 ル ナシト モノニ ハ ニ起因スル 獨立 一言フカ 有之候今其一二 一不覊 モ \sim 如 ブ 全ク之 ノナリ 國 チ 丰 今回 ーフラ ナ IJ

ラス然 モ Æ 人之ヲ犯スモノアレハ必ス其自 其輕重寬嚴ニ至テハ 政府ハ新聞條例ヲ制定シ之ヲ一般ニ施行 ナレ 更二 ルニ各國ノ内ニハ自由刊行ヲ許スアリ或ハ スレハ我邦 ハ我ト同一ニ 實施 ノ効用 = ガラ為サ 於テ此 處罰スル 固 ヨリ其土地風俗 ス 1 加之今日迄ノ 如 事ハ決シテ 千條例 國 ノ法律 ラ設 = 期 依 三問 ス ス可 ッテ T ル 驗 'n = ハサ / 區別アル 方リ = モ カ ラサ 依 外 限 N アル 若 人 可 ル = カ

導ノ勢力ヲ有スルモノナリ然ルニ右等外國新紙ノ爲メニ政 而シテ 止スル ス アラズ我政府ノ制法アリト雖トモ終ニ其實際ノ弊害ヲ防 殊ニ此等ノ品流ニ在ル人民ハ他ノ人民ニ比スレハ多少先 ニ抗敵ノ感觸ヲ發セシ 聞ハ訛傳卷説ヲ採集シテ賊徒ノ擧動ヲ賞揚スルニ至 我人民中ニ外國ノ文字ヲ解讀スルモノ既已ニ少カラ |シキハ近時西南賊徒ノ騒擾入心洶 能ハス殆ント其法ナキト同様ニ至ルベシ 其治外法權ヲ恃ンテ常ニ日本政府及ヒ其官員ヲ誹 ムルトキハ其影響スル所實ニ少小 々ノ際 = 當リ外 ν IJ

意見ニ 之ヲ 相場會社ヲ設立シ空相場ノ賣買ヲ爲シ 又或外國人其居留地内ニ在テ日本政府ノ免許ヲ受ケズ石 ミヲ制シテ外人ハ其所爲ニ放任スル 公使或ハ領事ニ依 ノ弊害不少我國民ニ右等ノ所業アル 名ヲ外 ñ 制スルト否ラザルトハ全ク其公使或ハ領事ノ處分ニ依 ニ依リ之ヲ制止スルヲ得ベシト雖ト 出ツル 可カラズ之ヲ約言スレ 人 ト同一理ナリ此 一般リ テ是ト結社シ或ハ リ其制止ヲ求メザル 此ノ 如クナ バ我法律 トキハ自 公然其賣買 トキハ日本人中 ル ラ質行ハ公使領事 市場ノ相場ヲ變動 ルベカラス而 カ故 モ外人ハ之ヲ其 = 獨リ日 ロカラー般 = 關係 シテ其 木人 = Æ **ラ** 國 7 ス 油

> 為メニ 中一 N モ 論ヲ俟タザル事ナリ ント其設ケ無キト ソ開港場アレハ必ス之カ港則ナカルベカラザ ヲ以テ是迄港則ヲ制定シ實施セントスルニ方リ各國領事 ノ モ之ヲ如何トモス モ之ニ不同意ナルトキハ遂ニ之ヲ實行スルヲ得ス之カ ナシ故ニ我政府ハ勿論各國ノ内ニモ之ヲ企望スル 港場ノ 奸濫ヲ禁遏シ公益ヲ保護スル能 同 ル能 然ルニ從來我各港ニ於テハ確定シ 一ノ結果ニ歸ス ハズ到底我邦ニ於テ ルニ至 $\overline{\nu}$ 制度ア ハザ IJ ル が固 ル = ル 向ア 至 夕 3 Ŧ ル

又鐵道規 テ 所及ハ獨リ日 モノハ一人ニテモ之ニ違犯シ之ヲ罰スルヲ得ザル 1 キト ナキモ 三問 結果ニ至ルヘキナ シ得ルモ外人之ヲ違犯スルト ノ施行ヲ妨クルハ敢テ論ヲ俟タズ故ニ縱令日 テ之ヲ違犯スル キハ同 ハザ ノアリ或ハ之アルモ寬嚴輕重其場所ニ適スル 剘 ル ノ 本人 如 ヲ得ズ然ル 一犯則者ノ内ニ甲乙異同アリ隨テ規則 丰 ノ敷モ亦自カラ増加ス ノミニ止マ ÷ 内外人同一ニ 之ヲ違犯ス 二各國自 リ外 キハ殆 人ニ至テハ各其 カラ其法ヲ異ニシ ント ヘシ到底規 規則ナキ ル 本人ハ之ヲ Ŧ 八本國ノ ŀ Įij ŧ 丰 ヲ 八全 モノ 輕視 テル ハ 絶 則

請スル 断然タ 涌 テ其法律ヲ破ルモ スルヲ得可 夫レ是等ノ事件 所 ル可シ ハ質ニ至當ニシテ カラズト言ハ、取モ直サス外國人ハ日 = 一於テ日 可ナリト言フト一般ナリ 且 止ムヲ得サルノ事情ニ出ツル 木 ハ其內國施政規則ヲ外 然レハ我要 人二 本 =

語氣ナル可シト被察候故貴官ニモ其含ニテ精々 聞ユル 治外法権ヲ スルニ在リト雖今遽カニ我現今ノ政治ノ スル様丁寧ニ彼政府へ御申込有之度存候固ヨリ我冀望 全ク治外法權ヲ蟬脱セント 「ケネディー」 氏ョリ 畢竟夫ノ治外法權ヲ脱カレ歐洲各國ト ナリ 同氏ョリ英政府へ申送リシ所モ定ヌテ右同様ノ t ントス N 或人ニ語リシ所ヲ傳聞スル **カ** 如 欲スル見込ナリ + ハ 決 シテ我望 ノ位地ヲ變換シ直ニ 國ト比肩對峙セント ト言フカ如 4 我意ノ 所 二日 = 非 クニ ント ゙゙゙ヺ ス 木 ル

候事ニ 里公使ノ如キハ之ヲ聞テ大ニ曉ル所アル 右之意見ハ於當地各國公使ヘモ追々申入置候事ニ有之伊太 上之ヲ彼政府へ申通候 改メ 大ニ 有之候隨テ英政府ト 我意見ニ 同 意スル所アル ハ、彼政府ニ於テモ必 懸合向モ追々 可キ旨ヲモ ŧ シト 相抄 ス 取り 從來ノ意見 拙者迄申陳 如 ŋ 右等 歸 國 ラ

外務卿代理

外務大輔 上 野 景 範

特命全權公使森有禮殿

註 1前掲一〇七文書ナリ

獨交渉三四八文書略ホ同內容ナリ2尚三月十五日附外務卿ヨリ青木公使ニ宛タル訓狀對

■ 明治十四年四月一日 森駐英公使宛

任國政府コ對シ我改正條約案ノ根本精神闡明方ニ・

機密信 第四號

シ訓令ノ件

候廉 談判ノ手續モ旣ニ此迄相抄取候事故幸ヒ彼 ン氏英外務大輔ト内話ノ筆記御差越相成致閱悉候偖ハ改正 十三年機密信第八 之二 就 キ 一層詳密ニ 十號ニ相添へ客年十一月廿四日書記 我意見ノ 在ル所ヲ示 ∄ IJ シ 疑問ヲ起シ 候 ` ν

害指遣シ略我意見ヲ中述候様申聞候事ニ 相成候様致度ト存候尤レーン氏内話ノ儀ハ過日旣ニ 心得ニテ英外務大輔へ申入レ可然トノ意ヲ以テ申遣候儀 ヲ貴フ事柄ニ付貴下ヨリ御通牒ヲモ不待「レー 鈴木金藏迄私書ヲ以申越候 ヺ 開候節大ニ都合可宜ト相考候ニ付此機ニ會シ英外 可然御諒察有之度候 [面會ノ上右ニ中進候趣意ヲ以懇々御内 一一付不取敢鈴木ヨリ同人 御座候尤右 -ン」一己ノ ハ迅速 同 へ返 人ョ 話

案中ニ舊條約ノ約規ヲ存スルヲ見テ知ル可キナリ我新條約ヲ結バントスルノ意ニテハ決シテ無之候是即チ條約草 ク舊條約ヲ改正(リブハイス)スルノ趣意ニテ別ニ新條 今般我提出スル所ノ條約改正ハ改正(レブイショ ナリ左ニ之ヲ陳述セン抑我改正草案ノ注意ハ勉メテ 起ス事必然ナル可シト雖トモ其理ハ最モ親易キモノア クルモノニ非ス唯夕其(レ)添删セサルヤト彼ヨリ難問 ノ考案ハ決シテ舊條約ヲ廢棄シ全ク新規ノ約條ノミヲ ノ爲メニ煩雑(コンブリケーション)ノ患ヲ発カレント ニ在リ今舊條約ヲ其儘ニ存シ置キテ新條約ヲ添 シ難シト ノ批難有之候得共我ヨリ起ス所ノ考案ハ会 加ス ン

患害アル可シ是等ノ患害ヲ豫防センニハ舊條約中 後日之ヲ解釋スルニ當リ改正條約ニハ斯クアレ 然レトモ此時現ニ日本ニ於テハ各國ノ要請ニ應シテ之ヲ モ亦可ナルヲ確證ス可キー例アリ則チ御承知ノ通リ シ難シト難論スルモノアル 可シト雖モ之ヲ改正ト稱スル ヘキ者ヲ生シテ之ヲ新條約中ニ加へ而シテ專ラ新條約ヲ 約ノ趣意ハ斯ク々々ナリ (レブイション)ト唱ヘシモノナレトモ其賞ヲ云フトキ ノ間ニ於テ自ラ見解ノ異同アルヲ発カレス之ヲ施行 全ク舊稅則ヲ廢棄シテ別ニ新稅則ヲ設定セシモノ `ルニ如カス是レ全ク彼我雙方ノ便ヲ謀ルニ外ナラス扨 キ不便ヲ釀ス事必然ナリ且傍ラ舊條約ヲ存ス 事アラハ更ニ其煩雜ヲ增長シ之ヲ實施スルニ際 臨テ常ニ困難阻滯ノ憂アリ況ヤ今又之ニ改竄添刪 ノ煩雑 ハ其約文ノ明確周詳ヲ缺クカ爲メニ我政府ト外國公使 ニ舊條約ヲ廢棄スル以上ハ名義ニ於テ之ヲ改正ト稱 百六十六年ノ税則改正ハ當時各國ニ於テ之ヲ改正 ハ即チ新舊撞着(コンクリ ナル事論ヲ須タスシテ明瞭ナラン今夫レ 抔ト言フカ如キ異論ヲ生ス クト)ノ事アル ŀ N

. ノ 存

ス

ナリ

ルノ

舊條 ・キハ

7 Ŧ

シ

テ甚 ラ加 スル

嫌ス 外交通商ノ方略如何ヲ知ラス又國民中ニハ尚ホ外人ヲ忌 銷國ノ 得可シト思惟ス豈ニ税則ト條約ト改正ノ字義ヲ異ニス ナリ是即チ我固有ノ權利ノ幾分ヲ不知不識彼ニ讓與セ 實ニ尠カラサリシユヘ止ムヲ得ス各外國ノ爲メニ十分條 際ヲ開キシ事故素ヨリ條約ノ何物タルヲ辨セス且遽カニ 求スル所ハ彼自ラ之ヲ提出ス可シ但今茲ニ一言ヲ要スル 來我改正案ハ我要求スル所ノモノヲ提示スルナリ彼ノ要 ノ理アランヤ「レーン」氏ノ答辯ハ至當ノ論ト被存候 セシモノナリ去レハ今回モ亦此例ニ據テ改正ヲ行フ事 貿易條約ト六十五年ノ大阪覺書(メモレンダ ノアリ最初我カ各國ト條約ヲ結ヒシ時ハ初メテ外國交 E N 本ョリハ新タニ護與スル所ナシトノ批難アレトモ元 ノ利ヲ占取セラレ對等ノ權利ヲ保ツヲ得サリシモ ル税則改正(レブイション)ノ約規ニ基ツキ 人ヲ忌嫌セシ心情ハ今既ニ全ク消散シテ復タ ノ徒多ク之カ爲メニ外人ノ便益ヲ障害スル 政略ヲ拋棄シタルノ際ナレハ政府ニ於テモ十分ニ ニ非スヤ右ノ税則改正ハ卽チ千八百五十八年ノ シ今ヤ我國 ノ情勢全ク昔日ニ異ナリ其襲キ ム)中二載 事モ亦 ・テ擧行 其痕跡 ノ N ヲ

望スル所 ク襲日ノ 務教育或ハ其他ノ事業ヲ委託シ又專ラ內外ノ交際ヲ厚ク 專ラ歐米諸邦ノ文明ニ傲ヒテ開化ノ域ニ進入セン事 以テ其一班ヲ観ニ足ヲン然ラハ今般ノ條約改正ニシ近來各地方人民カ國會開設ヲ政府ニ懇請スルカ 米諸洲ト對等ノ地位ニ進步セントスル熱心ノ結果ナリ蓋 シ孜々倦マサルモノハ皆是レ畢竟我獨立國權ヲ保維シ歐 生及ヒ官吏ヲ外國ニ派遣シ或ハ夥多ノ外國人ヲ聘シテ公 般ノ事物ニ至ルマテ專ラ歐米ノ方法ヲ採擇シ又數干ノ學 メ凡ソ學術、法律、工藝、農業、商務、 シ專ラ開進ノ途ニ就テ我國勢ヲ振興セントスルノ情最切 ŋ ハ固ヨリ上下ノ切望スル所ナリ抑目 モ見サルカ如キニ至リ金國ノ人民擧テ萬國ト友誼 然ラハ則我開進ノ度ニ應シテ漸次ニ其權利ヲ回復ス ハ我人民ハ外國政府カカヲ以テ締結 ノ權利ヲ我ニ回收スルハ我政府ト人民ノ共ニ最モ渇 レハ之ヲ匡正ス可カラストノ想像ヲ存 ナリ若シ此機ヲ失シテ我人民ノ切望ニ副 如 ク外國人ヲ嫌惡スル ニ於テ深ク顧 感慮セサル ノ心情 不政府及 ニ傾向スル 海陸兵制其 可ラ シタル條約 カ如キ亦 人ヒ人民カ シ ル 際シテ ノ恐ア ハサル ラ厚 (他百 ラ勉 ジス 亦 IJ

外法權ヲ廢棄セント欲ス然レトモ外國人ノ見ルカ如ク我ル事アラハ我政府ハ無論ニ全國ヲ外人ノ爲メニ開キテ治 事固 夫ノ治外法權ヲ廢スルト正サニ相對向匹偶スルモノタ リト斷言スルヲ得サルユヘ止ムヲ得スシテ治外法權ヲ存 及ヒ内國施政(アドミニストレーション)ノ完全整備ヲ得 ヲ開クノ一事ニ外ナラサルカ如シ然レトモ全國ヲ開ク 尤此譲與ノ問題ハ實際上ヨリ推究セサ 情ヲ考察スルニ外國ニテ新タニ要求ス可キ 擇ハス彼カ望ニ應シテ之ヲ開クモ妨ナシ尤右三府 チ東京、京都、大阪ノ市中ニ雜居ヲ許ス事是ナリ其他 地及ヒ將來開ク可キ新港ニ於テハ從來ノ居留規則 ハ我ヨリモ亦彼ニ譲與ス可シト決意スル所ノモノアリ 可ラサル所以ノ理ナリ尤今般提出シタル草按ニ載(ス) セシムルモノナリ是即チ我全國ヲ開クニ漸ヲ以テセサ 「ヨリ論ヲ須タサルナリ今日ト雖トモ若シ我法律裁判 [リ些少モ治外法權ヲ存スル間ハ之ヲ許諾ス可ラサ ク法權ノ一部分及ヒ其他ノ權利ヲ我ニ回復スルニ就 | 國ヨリ新港ヲ開ク可シト要求セハ我政府ハ何ノ港 裁判及ヒ内國施政ハ我ニ於テモ亦未夕十全完備セ ルヲ得ス今實際 別ヲ 充 雑 ルル

求ヲ承諾セスシテ却テ我讓與スル所ヲ彼カ爲メニ奪去ラ 等ノ事ヲ公然提出スルトキハ或ハ後ニ至リ彼ヨリ 政府 有之候樣致度候又此雜居ノ一事 以ナリ然レトモ彼二於テ我要求ヲ承諾スルトキ 條約面ニ加ヘント要望スルニ相違ナカル可シト雖ト ケ無之何卒我好意ノ彼カ思想ニ浸潤致候樣丁寧ニ 必ス之ヲ舉行ス可シ此邊ハ老臺ノ御含迄ニ申述置候 、ノ恐アレハナリ舊來ノ經驗ニ於テモ往々之ニ類スル 病氣保養ノ名目ヲ以テ族行免狀ヲ渡ス迄ノ事ト 然レトモ現今外國人ノ內地ニ入ルヲ許スハ學術研究或 ナキニ非ス是即チ之ヲ條約ノ箇條ト爲スヲ欲セ 我要求ニ應ス可キ約ヲ爲サヽルニ早ク旣ニ我 要ス可シ右雜居ノ一事ハ旣ニ內決セシモノユ ス宜ク新タニ約東ラ定メ我 ハ決シテ之ヲ條約ニ記載スルヲ好マス其故ハ へ御對話ノ節ハ老臺ノ御見込ニテ御 ハ其筋ノ冤狀ヲ得テ内地旅行ヲ爲シ得ル旨ヲ述タ ン」氏ノ答ニ現今ト雖ト ハス又地方官ト領事 **弘地方規則** アノ如キモ **活商用ト住居ヲ除** ノ協議裁判法ヲ用 彼二於 話相成 ·八我政府 テハ必 候 t · 知 ル · おヨリ是 グノ外 サル所 ハ我要 テモ妨 シ フ · モ 我 陳說 メン ゙ス

ン此段モ爲念申進置候

多カラン事ヲ欲シテ却テ之ヲ減少スルニ因リ實際我內國 重稅ヲ賦課スルトキハ必ス貿易ノ衰頽ヲ來シ牧入稅額ノ 重稅ヲ賦課スルトキハ必ス貿易ノ衰頽ヲ來シ牧入稅額ノ 多カラン事ヲ欲シテ却テ之ヲ減少スルノ恐アリ今我政府 シカラン事ヲ欲シテ却テ之ヲ減少スルノ恐アリ今我政府 三拾二三錢 付拾七八錢内外ナリ然レトモ我國産ノ種油ハ同壹升ニ付 ヲ了知セシモノナリ今試ニ其一例ヲ擧ケンニ米國ヨリ ハスル 情況ヲ熟察シ關稅ハ其品目ニ從テ差等ナカル可ラサ 種油ヲ用フルトキハー人每ニー燈ヲ要ス可シ如是ナ カニ種油ヨリモ明亮ナリ譬へハ職人ノ夜業ヲ爲スニ 所ノ石炭油ハ今日東京市中ノ小賣相場ニテ壹升 ニ今日石炭油ハ國内 漸ク増加スル :ランプハー臺ヲ以テ五六人ノ用ニ供ス可 シ トノ説アレトモ元來此稅目ハ決シテ杜撰 ハ煩雑ナルユヘ總體壹割ノ稅ニ定ムル事 ニシテ尚騰貴ス可キ景況アリ且石炭油 ノ勢ナリ故ニ之二二割 般ノ需用スル所ト為 シト雎 ラ光輝 リ其轉 定定 轉 = W

海關 算ナリ(尤各國平均)扨又此稅額ノ過當ニ非 之候乍併我考案ニ於テハ輸入稅率ハ平均壹割三步强ノ計 種ト爲ストキハ大ニ簡易ナルベシ云々ト此平均壹割ト云 談話中諸輸入物品ニー様ノ税ヲ課シ譬へハ之ヲ壹割ノ テ關稅ヲ賦課スルニ於テハ内國一般ニ經濟上ノ不便ヲ生 入ヲ仰ク品物モ ニ日本ノ如キハ製造ノ業尚ホ幼稚ノ有様ナレハ外國ノ輸 シ酒類其他ノ贅澤品ハ殊ニ然リトス之ニ反シテ綿英ヘク チ)ノ如キ 課スルモ左ノミ轉入ノ減少スル患ナク貿易上ニ審シキ影 フハ「バークス」氏歸國前卑官面會ノ節同氏 ル事論セスシテ明ナル可シ「レーン」氏ト外務大輔ノ ワタ)ノ如 ラ視テ知ル事ヲ得可 百五十八年ノ税目ョリ現今ノ五分税ニ輕減 税ヲ輕クセサレハ需用者ノ不便實ニ甚シカ ヲ增加スルモ甚シク需用者ノ不便ヲ生スル事莫ル可 ŋ 下 ホス事ナカル可シト思考スルナリ叉時辰 ハ多分中等以上ノ人民ノ用フル所 ノ關償金三百萬圓拂渡ノ事ヲ舊政府 + 亦少カラサルユヘ實際ノ便否ヲ顧ミスシ ・ハ下等人民ノ須要品ニ係ルユエ シ 抑千八百六十五年英佛米蘭 ナレ サル 3 ル可シ殊 一成ルタケ ハ(ウオツ リ談話有 セ ハ假令 __

ムル 第三減税ノ事ハ千八百六十五年中大阪ニ於テ之ヲ約諾 約ノ如ク港市ヲ開ク事能ハサリシ故外商ハ之カ爲メニ損當時我邦ニ鎖國論等ノ如キ種々至難ノ障礎アルカ爲メ前 り畢竟スルニ舊政府カ斯ク稅額ノ輕減ヲ肯諾セルモノハ 以内ニ之ヲ開ク可キ旨ヲ述へ遂ニ六十八年一月一日ヲ以 第二兵庫開港ノ事ハ當時國內人心ノ未タ平穩ナラサルヲ 事第二、兵庫港ヲ開ク事第三、五十八年條約 ケ條ヲ發題セリ卽チ第一、條約ニ天皇陛下ノ御批 意タルニ付必シモ其金額ヲ要セス日本政府ニ於テ其代ト 金ヲ要求ス テ約定セシ如ク六十二年ョリ五ケ年ノ間即チ六十八年 テ即時ニ開キ難キ實情ヲ述ヘ六十二年倫敦及ヒ巴黎ニ テ舊政府ハ右三ケ條ニ對シ第一御批ノ事ハ之ヲ履行 關償金三百萬圓ノ內二百萬圓ハ損棄ス可シト約定セリ 六十六年諸輸入品ノ關稅ヲ從價五分ノ割合ニ輕減 ノ如ク兵庫新潟ヲ開港シ其後亦大阪江戸ヲ開市 人ニ便利ヲ與フレハ滿足ス可キ旨ヲ明言シ左ノ三 是ナリ而 ルノ旨趣ハ親睦ヲ敦クシ貿易ヲ盛ニスル 政府ノ財改困難ナル シテ右三ケ條ヲ承諾實行スルトキハ ヲ察 シ ノ税則ヲ改 [ケ國 ラ得 セリ ノ水 ァ -F t 2 シ ñ

ハ之 セサル 府ニ於テ減稅スル事ナク舊稅則ニ依リ收稅スルト 付與セリト云モ決シテ過言ニ非サルカ如シ若 凡ソ十六年間各國ニ對シ報酬ヲ受ケスシテ特別 額ヲ領シタル上ニ開港ト減税ノ特益ヲ享有シタル 得タリ是ニ因テ之ヲ觀レハ我政府ニ於テハ四 催促ノ通リ遂ニ全ク之ヲ拂渡シタリ 拂方ニ付何等ノ談判アリシヤヲ詳ニスルニ由 多端舊記等未夕整理ニ就カス舊政府ト外國トノ 殘り百五十萬圓ハ償却セン事ヲ促カシ我政府ハ當時 其發題シタル彼ノ償金二百萬圓損棄ノ事 失ヲ蒙 上大ナル増額ヲ見ル事ナラン今若シ右ノ減稅ハ以テ輸 左 モ スレハ我政府ニ於テハ六十六年ョリ今日ニ至ルマテ ニ應シ尚其上ニ償金ノ殘額ヲ拂ヒ四ケ國ハ償金ノ金 シ之ヲ舊記ニ檢シテ始メテ當時ノ事實ヲ審ニスルヲ テ ノミナラス新政府更迭ノ後ニ至テ償金三百萬圓 E ハ大抵次ヲ遂テ之ヲ踐行 V ナリ 義理 却說我政府ニ於テハ當時 愁訴シ且 ニ迫リテ之ヲ肯諾セサル 其外二七 シタルニ右四 而後之ヲ旣 四ケ國ョ 力 ヲ得サル ハ之ヲ直ニ實 ŋ コナク因テ其 シ営時 l ケ 國 ヶ ノ利益 往 誾 ノ勢 國 二償金 プ請求 フ事迹 ニテハ キ モ ハ牧 國事 1 ヲ ナ 1

ケタルカ爲メニ我政府ノ好意ヲ抹消シ互約ノ義務ヲ踐行稅セサル可ラサルノ義務ハ無カル可シ特リ之ヲ約書ニ揭ハ是金ク书政斥ノ安ネッリニニ 當二之ヲ改メン事ヲ求ムルハ各國ニ於テ決 多年其特益ヲ受ル以上ハ今日我政府財政上必需ノ爲メ相 ハ是全ク我政府ノ好意ヲ以テ讓與シタル事ニテ必シモ メニ蒙リタル損失サヘモ (離祭日) 年ョリ同十二年度迄十二年半ノ間ニ我政府カ右滅稅 ノ多寡ニ影響スル シタル勘定ナリ又當時減稅ノ事實ヨリ之ヲ云フト v ノ思考ハ無之事ト信用 ハ嚢 (ニ外商カ愁訴シタル損失ハ 事ナシト假定シ之ヲ推算スルニ 致シ候 既ニピニ十分之ヲ シテ不相當 明 減 ナ 丰

中入有之度存候 株子ニ祭セラレ候故左ノ趣意ヲ以テ老臺ノ御見込迄ニ御様子ニ祭セラレ候故左ノ趣意ヲ以テ老臺ノ御見込迄ニ御

ご至ル ニ於テハ民法、 モノヲ漸々ニ施行スルナリ尤外國政府ニ於テハ 其任ニ 7 テ現今歐洲文明諸邦ノ例ニ傲ヒ我邦ニ適當 勝 ヘサ 刑法、 ル一點ニ懸念ス 治罪法 ラ始 N メ其他各般 モ アリ併近來 ンノ條 我 例

一失ナシ 三ヶ年 ル カ 如 學ヲ學 律家トヲ以テ一體(ボデー)ヲ組立テ我裁判所 於テ外國人ヲ裁判ス可キ裁判所ニハ必ス外國ノ法律家ヲ ル法學 ヒ之ヲ以テ裁判所 分合格ノ試驗ヲ經且最モ經驗ニ富ミタルモノ三四名ヲ擇 雇入レ之ヲ吾裁判官ト爲シ又日本法律學士ノ中ニ就テ十 シム ト雖トモ 「コソ適當ノ法律家ヲ派遣シテ在日本裁判所 モ遙カニ良好ノ裁判所ヲ得可シト信用スルナリ現今英 クノコトクスルトキハ現在我諸開港場ノ領事裁判所 ノ草案中ニ制限 ヲ ヒシ シ 得 ル キニハ至ラス故ニ我法律家ハ尚ホ經驗ニ乏シキ 1 1 ハ歐米ノ法學ヲ ユへ我 1 深奥ヲ極メ歐米各國ノ老練ナル法律士ト比肩ス 星霜ヲ經ルニ過キサレハ其間 モノモ少カラス又我邦ニ在テ外國教師二就歐米ノ法學ヲ研究シ現ニ海外ニ智學シテ法 ス 爾餘ノ諸邦 セス是ニ因テ我政府ハ每開港場及ヒ開市場ニ モノモ多シ然レトモ我王政稚新以來僅カニ 顯 級我考案ニ 3 J シタル權內 ヲ組織ス可シ即チ外國ノ法律家ト 之ヲ 見ルト こ至テハ領事ヲシテ 出ツル ノ法ヲ行ハシムル 所 牛 ブ方法 ハ不十分 ニ於テ夫ノ至難ナ ハ ノモ 判事 ス 1 、判事ニ任 ノララリ 現 = ノ ノ 於テラ ۲ ラ銀 我法 F = 1丰 + ヲ 7 3

外國 可キ 早 ク 訴フル 故ハ旣ニ前條 == シテ外人任用 外國人雇入ノ事ヲ記載スルハ我最モ好マサ 之ヲ 擧行 八外國人ヲ任用セント 、苦情ヲ唱 利ヲ謀リ五 **ベヲ惹起ス事必然ナリ** 【人雇入ノ事ヲ條約中ニ記載スル・ノミナラス若シ豫約(コンデイ 旣ニ彼ニ與フル モ各條約國カ我法權上 人ヲ任用 ニ於テハ凡 ニ出テシメ各條約國ニ於テ喙ヲ容レサル樣致置度 ハ之ヲ條約上ノ義務 ハ猶更煩雑ヲ生スルノ患多カルヘシ故ニ外國 カ如キ事情アリテ無限ノ煩累ヲ生シ來リ遂ニ我ヲ情ヲ唱へ乙國人ヲ用ヒントスレハ丙國人ハ不平ヲ セン事ヲ保證スルナリ去ナカラ是 ノ念ヲ絶タシム へ乙國人ヲ用ヒントスレハ丙國人 ニ妬心ヲ懷キ甲國人ヲ雇ハント ニモ述ヘシ如ク我ニ於テ未タ得ル スルノ議ハ旣 ソ外國人ヲ用 ノ約ヲ爲シ後ニ嚙臍ノ悔アル 欲シタレトモ各國人 試ニ其一例ヲ擧ケンニ過般我稅 事疑ヲ容 ト爲サスシテーニ之ヲ我政府 ノ請求ヲ承諾スルニ 5二我政府 ルニ至リシ事アリ裁判事件 ヒテ利益アル -ショナリ トキ ツ肉 -ハ後日ニ 決 ア見認 モモ亦條約] ス 、八交々自己 1 ル 、レハ乙國 所 $\overline{}$ 所 シ 至リテ ヲ以テ ヲ恐 ルナ キ チリ デ 入雇 八必 4 <u>~</u> = 面

有之候今其一ニヲ例擧スレ

ハ

法權ノ件 全ク之ニ反シテ獨リ實際止ムヲ得サルノ實情ニ起因スル 「ラデイカル」ノ思想ヲ生セシニハ非 外國 ノナリ此處ハ彼カ心裏ニ感銘スル様篤ク御說 知ラル可キ事 チ ハ尤現實ニ緊切ナル所ノ施政 ョリ 今回ノ改正ヲ以テ我ニ回收セント ハ理論 リ我國權ヲ損傷セラル、ハ理論ノ點ヨリ說ヲ起ご 至ルマ フルニ 螂蟵 テ多ク外國人ヲ聘用 ス ル事ナシ ` シ 上ノ法 1 テ 理 我 ス ナ ハ - 欲スル 我要求スル シト云フカ 現ニ各省 = 立不羈 止 マ ス n 明 有 之 度 所 ル ル ノ有限 ヲ 壬 ラ ヲ 所 ノ 如國 以 テ *>*\ + ---ナ

限アル 我政府 區別 п 可カラズ然ルニ各國ノ内ニハ自由刊行ヲ許スアリ或ハ制 シ外人之ヲ犯スモノアレハ必ス其自國ノ法律 カラサ ルモ外人ニ至テハ更ニ實施ノ効用ヲ爲サズ加 ア モ其輕重寬嚴ニ至テハ固ヨリ其土地風俗 N ハ新聞條例ヲ制定シ之ヲ一般 = モノナレ ル事 依ルニ外入等 ナリ 左スレハ我邦ニ於テ此 ハ我ト同一ニ處罰スル ハ 其治外法權ヲ恃ンテ常 心ニ施行スル ル事ハ決シテ期ス土地風俗ニ依ツテ 7 如キ條例ヲ設 門間 加之今日迄 = == H 方り ハサル

府及ヒ其官員ヲ誹謗シ甚シキハ近時西南賊徒ノ騒擾人心府及ヒ其官員ヲ誹謗シ甚シキハ近時西南賊徒ノ騒擾人心府及ヒ其官員ヲ誹謗シ甚シキハ近時西南賊徒ノ騒擾人心府及ヒ共官員ヲ誹謗シ甚シキハ近時西南賊徒ノ騒擾人心府及ヒ共官員ヲ誹謗シ甚シキハ近時西南賊徒ノ騒擾人心府及ヒ共官員ヲ誹謗シ甚シキハ近時西南賊徒ノ騒擾人心府及ヒ其官員ヲ誹謗シ甚シキハ近時西南賊徒ノ騒擾人心府及ヒ其官員ヲ誹謗シ甚シキハ近時西南賊徒ノ騒擾人心府及ヒ其官員ヲ誹謗シ甚シキハ近時西南賊徒ノ騒擾人心府及ヒ其官員ヲ誹謗シ甚シキハ近時西南賊徒ノ騒擾人心

公使領事ノ意見ニ出ツルト同一理ナリ此ノ如 シテ其之ヲ制セルト否ラザルトハ全ク其公使或ハ 其國ノ公使或ハ領事ニ依ヲ其制止ヲ求メザル 般ノ制法ニ依リ之ヲ制止スルヲ得ベシト スル弊害不少我國民ニ右等ノ所業アルトキ 相場會社ヲ設立シ空相場ノ賣買ヲ爲シ市場ノ相場ヲ 或外國人其居留地内ニ在テ日 ニ依ラザル可 ニモ往々名ヲ外 ハノミヲ制 カラズ之ヲ約言 入 = 人ハ其所爲ニ放任 木政 假リテ是ト スレバ我法律ノ 府ノ発許ヲ受ケズ ・ 雖 モ 結社 ルベカラズ而 八自 ク ス ナ 領事 實行 或 ル カラー N 力 ŀ 石 キ 故ハ 1

> 然其賣買ニ關係ス 於テ制度アルモ 三至 レリ 殆 ルモ之ヲ如何ト ルント基設 ケ無キ モ ŀ ス 同 ル 能 ニノ ハズ到底我邦 結果 = 歸 ス

凡ソ開港場アレ ハザルニ至レリ ヲ得ズ之カ爲メ 各國領事中一モ之ニ不同意ナルトキハ遂ニ之ヲ實行スル ルモノ 向アルヲ以テ是迄港則ヲ制定シ實施セントスル 論ヲ俟タザル事 ナシ故ニ我政府 = バ 港場ノ奸濫ヲ禁遏シ公益ヲ保護 必ス之カ港則ナカ ナリ然ルニ從來我各港ニ於テハ確定シ ハ勿論各國ノ内ニ w ベカ ラ モ之ヲ企望 ザ N 一方り ハ ス 固 ル 能 ス

ノ所及ハ獨リ日 又鐵道規則ノ如 法律 ハ絶 ŧ しノナキト ルテナキ 輕視シテ之ヲ違犯スルノ數モ亦自 == 問ハザル カナル ハ 之ヲ制 ÷ モノハー人ニテモ 本人ノミニ止 ノアリ或ハ之アルモ寬嚴輕重其場所 丰 キ ハ同一犯則者ノ内 ヲ得ズ然ルニ各國自カラ其法ヲ異 Ŧ 内外人同一ニ之ヲ違犯スル 施行ヲ妨ク シ 得 ルモ外 ~ リ外 N 之ニ遠犯シ之ヲ罰 人之ヲ違犯スル ハ致テ論ヲ俟タズ故 人ニ至テハ各其本國 ニ甲乙異同アリ コカラ増加 ŀ モ ベスベシ ス 施テ ハ殆 一適 ニシ = ヺ

ニ出ツル 若シ夫レ是等ノ事件ニ 本ニ來リテ其法律ヲ破ルモ可ナリト ハ 我要請スル所ハ實ニ至當ニシテ且 施用スルヲ得可カラズト云ハ〜取モ直サス外國人ハ日 則 事晰然タル可 ナキモ 同様ノ 於テ日本ハ其内國施政規則 結果ニ至ルベキナリ シ 止 云フト一般ナリ ムヲ得サルノ事情 ラ外 然レ

太里公使ノ如キハ之ヲ聞テ大ニ曉ル所アルモノ、如 **肩對峙セントスルニ在リト雖今遽ニ我現今ノ政治ノ位地** 我冀望スル所ハ畢竟夫ノ治外法權ヲ脫カレ歐洲各國ト比 意ノ貫徹スル様丁寧ニ彼政府へ御申込有之度存候固 同様ノ語氣ナル可シト被察候故老臺ニモ其含 ントスルカ如キハ決シテ我望ム所ニ非サルナリ クニ聞ユルナリ同氏ヨリ英政府へ申送リシ所モ定メテ右 ハ全ク治外法權ヲ蟬脱セント欲スル 「ケネデイー」氏ヨリ或人ニ語リシ所 ノ上之ヲ彼政府へ申通候ハ、彼政府ニ於テモ必ス從來 リチカルポシション)ヲ變換シ直ニ治外法權 ハ於當地各國公使ヘモ追々申入置候事ニ有之伊 見込ナリト ラ傅聞ス 1ニテ精々我 ・云フカ ル ラ廢 = ク婦 ヨリ H セ 如

ノ意見ヲ改メ大ニ我意見ニ同意スル所アル可キ旨ヲモ拙

存候故尚貴官ノ御見計ヲ以程好ノ御通話相成候樣致度存 候此段申進候也 取り右等ノ旨意ヲ御申入相成候而可然時機ニ相至候樣被 者迄申陳候事ニ有之候隨テ英政 府トノ懸合向 モ 追 75

明治十四年四月一日

外務卿代 理

外務大輔 上 野

明治古堂月十 E 井上外務卿 宛ョ

條約改正ニ對スル英政府ノ態度ニ關スル 件

附屬書 十四年三月十日森公使宛往電 十四年三月三日ポンスホート、 ν i ン 對 話

機密信 第八號

案ヲ各國へ廻附シ内議ヲ遂ゲ候次第必寛我國へ對 通り英國政府ノ所爲甚夕其意ヲ得難ク 條約改正件二就 ニ向テモ曾テ本件ニ關シ何等ノ協議ヲモナス無クシテ其考 テハ曩ニ機密信第五號ヲ以テ一應及開 我カ政府若 D シ不懇親 ハ本使 陳

生ノ持論ヲ採用シ舊條約ニ只タ小 變 更ヲ加 利己主義ニテ諸大國調和ヲ旨トシ又ターニハパークス氏平 供尊閱候何分ニモ矢張其內實打明不申候ヘトモ全クーニハ 次官ポンスホート氏ト内話及ハゼ候顛末筆記譯文トモ併 ント欲シ本使内意ヲ授ケ夫レト 被考候尚右ニ就テハ本使ノ意見申述度義モ候 ニ合兼候間次便ヨリ呈送可致候此段申進度如斯敬具 -察セサ ルヲ得ス因テ如 何二七 ナシニレーン氏ヲシテ外務 シ テ其趣意ヲ探出 ラル丈ノ決意 ヘトモ 今便 テ サ

有 禮

非 外務卿殿

十四年三月十

二日

別ニ昨十日御差立ノ暗電領手別紙寫ノ通リ解讀候 也

1二0八文書參看 2 附屬書

(政府ノ條約改正方針ニ關スル件) 明治十四年三月十日發森公便宛往電

井 上 外

ンスホ

ト氏日クソノ約東ニ成り居タル

事

拙者之ヲ派

IJ

シ

ナ

リ鬼ニ角實ハ我カ英國ノ意見書

ハ旣ニ各國へ

ヲ挿入セシノミ並永世ノ條約ニ同意スベシト 政府ハ新條約ヲ結フノ意ニアラズ現行條約ニ基キ新條款 1 思想ハ之ヲ

> 排除セラレタ シ云

千八百八十一年三月三日外務省於テザユリヤン、 ト氏及スチュワルト、 レーン氏對話要略筆記 术 ン ス

スル 抗拒スヘキモノナルカ其事情ノ如何ニ因テ本國政府へ勸告 所以ハ他ナシ英國ノ意見宜シク賛成スヘキモノナルカ或 アルヘキ趣ナリシ由ナルガ我カ公使此報知ヲ冀望セラル、 ヲ日不ヘモ廻附スルカ將タ廻附セサルカノ事ハー應思慮ニ ンウヰル侯へ面晤ノ際同侯ヨリ申聞ケラレ 扨テ拙者長官ノ許可ヲ得テ申陳ヘタキ事アリ長官過日グラ 其言アリタルニ從ヒ尚ホ先夜ノ談ヲ盡サント アリシ事ト想像セラル、夫ノ意見覺書ノ事ニ就キ貴下ヨリ 拙者今日參省ノ要務ハ日本條約ニ關シ英國ヨリ各國へ 餘事ヲ相議シ畢テ後チレーン氏ポンスホー ハルヘク又タ何 シ旨ヲ報道セント欲セラル、カ故ナリ 所アルヘク且ツハ英國政府 レニセヨ各國へ送付ノ上ハ其旨申報之レ 日本ノ考案ニ Ŋ 卜氏二向 一欲スルニ在 付 ルニハ該覺書 キ意見決定 テ 日 致 25 IJ ク

趣意 因ト看做サル、ヲ免レサルヘキヲ憂フルナリ本ノ考案ヲ容レサルノ異議發スル事モアランニ 々其事ナキヲ希望スト雖トモ若シヤ實際談判 主ト爲リ内密ニ協議ヲ遂ケラル 意ヲ得難 趣意ヲ今日 V ヲ全ク日 不當 ラ今日 ラ事 芽 本 ŋ シ英國ニテ各國ト へ知 ニー承リ ニハアラサレトモ日本ニ知ラシメス英國之レ 一談論スル レト 、ヲ冤レサルヘキヲ憂フル ラシメラレ タシト モ該書ヤ ヲ得スレー ニハ非ス然ルモ今般此 サル 意見ヲ交換セラル、 秘密二係 、事斯 ノ處置ニ就テハ拙者甚タ ン氏日ク必 ハルモノナ グノ如 如クナルトキ ス ラ 日二當 ハ決 協議ノ内 シ ハ英國其實 モ 営 シテ 日 萬 月 長

夕 ・ンスホ 將 Ē ート氏目ク敢テ委曲細目ヲ協議スル ノ基礎ヲ立テ其處置方法ヲ定メン ŀ = 欲スル ハ非ラス == 在只

N ン 氏 目 刀 英國 意見ヲ各 國 \sim 廻附ア IJ シ ハ 各締約國

ンス 水 1 ŀ 氏曰ク然リ重立タル 國 × ^ ハ 皆廻附 シタ IJ

旣ニ其意見ヲ開陳シタル 朩 ŀ 氏曰ク否米國へハ廻附セス米國 事ナレハ該國ハソ ハ獨斷獨行ヲ ノ自國ダケ

卜氏

シ

ク今

般

ン 氏 日ク 米國 [モ亦其中ニ在ルカ

> 條約ヲ締約ス ナ ^ シ

同 ナ - 1 曰 T 2 千八百六十八年ノ約定ニ 於 ァ ハ英國ト 共

我 レマタ彼ニ ン 朩 目 セ 刀 ル IJ V ŀ Æ 3 IJ 我 = 議 セ サ ν ハ

地駐劄 ν ス 解説ヲ本國政府へ伺フヲ必要トセラレタル H Y 多少ノ誤解ヲ生スルモ冤レ得タル 力 少之レナキ ႊ. ν ノ ル ν 氏ニシ トモ在 疑心 稍ヤ疑義ノ點ナキニ非ス是等ハソ 企ヲ爲スモノ パークス氏ノ言ニハ同氏ハ該考案ヲ解了セリト ハ東京ニテモ日 1 ヲ知 ・ン氏目 1 ラ生 クス氏ノ指示セル一事項ニ於テハ同氏全シテ之ヲ了解セリトハ其智力寔ニ驚クニ ノ公使之ヲ辯明セラルヘキニ曾テ其事 ルニ足ルモノアリ斯ノ 歐 日本各公使スラ曾テ會同審議 スヘシ實ニ此處置タル ク愚考スル ヲ保チ難シ實ニ ` 一本ノ實情審ニ探問 如ク甚タ友誼 ニ英國今般 事項ニ於テハ同氏全ク 歎スヘキ 如 ナキュ キグ ヘキナリ蓋シ該考案タル ノ處置 ノ質義アルニ ヲ盡サハ其考案ニ E 誤解其他 至 似 日 以末尚 本二 タリ ナ = 程ナル ナカク而 向 テ 堪 = 水 叉 テ 其解 ニバ 其委曲 ・云ハレ へ夕當 一へタ 於 モ H シテ他 テハ當 合同 1 IJ 對 地岩 j ク 夕 シ

ス 際ニ行ハレ得ヘク ナリ是等ノ事 シ 害百出紛議絶ヘサ 之ヲ許諾スルナル Ħ モ 具サ ルヲ知ルヘキ ||國ノ中ニ == 事情 項 ドラ覈察セ 就 ・ノミ併 シ ハル テ各 或ハ之ヲ請望ス ヘシ テ互 ^ 丰 ハ決 國五 相 ハ貴下モ自 シ 五相ノ約野締 商業上ノ事ニ シテソノ今日 (ハ)シト ル ラ論セラ ナ ノ國 n 闊 = 三行 シ版 於 モ テハ目 ア ルヘ ÷ ン ν ナ ij 3 ナ 水 ハ IJ 其實 商標 ŀ 八必 + 1

承諾センニ ト ポ ・モ現今ノ ンスホート N ナリ 條約上我國ニ有スル所ノ權理ヲ放棄スル ハ 先ツ 氏日ク然ラハ談判整ヒ難キ事モ無ル 其理 由 『ラ議院 \sim 開陳 ズ n 所 無ラ サ ^ 1 シ ル ヲ得 議 ヲ ν

强迫ニ因 ν 1 ン氏曰ク其權理 ラ機取 シタ ルモ ナル ノナリ モ 1 ハ 貴下 モ 知 ラ N ` 力 如 力 威 壓

之ヲ 威力 ンスホ × 1 ラ其權 ノ條約ハ大抵殆ト皆同様ト ī 附スル ŀ 氏日ク拙者 理ヲ奪ハ ノ理 ナ ν ハ其貴説ニ 力 ル 夕 ヘキ ル モ ノト ナ 服 ス岩シ 七 ス ル *>*\ 果テ ヲ得 今 Ė 想像ノ ス總 = 至 ^ ル 7 如 ・テ 東 テ ク

目 ク貴下 抵抗論 知ラス 頗 ヤ千八百五十八 ル シ ク爾後千八百六十八年ニ 年 ノ後ニ當テハ内

ナ ・全廢スル ンス ク ン氏 シ == = テ草案 朩 **乏二新條約** 日ク 1 ト氏日ク且 ニ若カサル = 如何ニモ = 所揭 ス專ラ體裁ノ事ヲ議 日ク前ニモ ヲ締フニ異 八其自國 マタ目 ナリ 然り 陳セ 不當不正 ハナラス是レ 1 水 利益ト 3 IJ 如 エナル舊條約 欧スルノミ日 ハ __ ナ 至重 ル ŧ ヘキ 報酬譲與ス ノ協議 フ 事 論 ポノ *>*\ 件ナリ 固 が詳 項 考案ヲ リョ 1 ミル 所 =

ナ ン 氏日ク 1) 固 3 或 *>*\ 各 Ħ 其請 求 え N 所 ア N \sim シ 1 信

ンス 水 1 氏曰ク改正 7 條約 ナラン = ハ = 然 N ^ シ 草

案ノ新條約 三於 テハ然ラサ n ヘキ ナ

千八百五十六年千八百六十八年ノ兩條約二 ハ只夕其至當ノ權理ヲ求ル盡シテ復夕殘ス所アラサル。 ン氏曰ク日本ニ 7 ヲ 當サ 学歐洲 N 人 裁判權 ノ貿易居 於テハ最早ヤ譲與ス 各國 ルナリ 3 ル 取極 ノ外別ニ讓與ヲ望 リ之レカ譲與ヲ請 ラ許 り特ニ今般日 テ ス ・ノー事アル シテ之ヲ ^ 本 因 許 求 エニ非 Ż テ モ 要請 旣 ス ス 1 ŀ Ξ ル ナ 矡 シ夫 ŀ ト雎 サ キ ス 取 ナ ル ル ハ 所 ŀ ν ナ シノ

ンス ス IJ N 1 ŀ ハ倘 氏日ク今マ日 ホ其後ニ至 朝廷ノ エルマテ止 本ハーモ與フル ラ Ŋ IJ マサ シ ij Æ 所 シナ H ハナク 一本人條約 シ テ課 ヺ 稅

三割五分ト爲シ其他 ン 氏曰ク草案ノ 、課税ハ平均 一切之ヲ變更セ __ 割 3 ント ŋ __ 割 欲 4 _ 分 1) 1 間 = 在

ポ ンス テ 决 朩 テ過當ノ ì ト氏曰ク然ラハ何 稅額 バニアラ 故 Ξ. 總 \sim テ __ 割 1 稅 額 1 ハ ナ

サ

`

N

是

 $\tilde{\nu}$

大ニ簡易ナラス

7

百 定 ν 求 六 1 .---固 ス ン ノ税權 ル所 氏日ク其事 3 ŋ 其理由アル事 ハ英國ニテ他ノ諸國幷ニ ラ望ムニ過キサル ハ細目ノミ他日 ナレトモ措 ナリ ノ 一藩地へダ 議 デ論 = 在 セ ス鬼 ル モ ^ 元年角日 與 シ草案 ゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙ N 所 本 <u>---</u>. 1 所 1

變更 スス然 ン 我國ノ ス ス 双方 朩 ル = アラサ 爲シ能ハサル所タリ現行 ト氏曰 ノ同意承諾ヲ以テセ レトモ條約上所定ヲ事 ク貴下我國ヲ慳吝ナ サ ルヘカラストノ事 ノ條約ニ於テハ稅目 1) 少皆 ŀ 思 心考ス 二度 == \sim テ 拋 カ 棄っス ル j ナ

ヲ 見タル ン 日 平 ルカフェ 刀 决 テ然ル 是レ必スパ 事 ナ 、シ貴下 1 ク 何 ス氏ノ臆説ナ ν ノ處ニ斯 N i 文意ア ヘシ ル

トスル所ノ變更ニ限ルヘシトノ事アリポンスホート氏曰ク千八百五十六年ノ條約中改正ハ其適宜

適宜ト 平均二當り殆ト ν 己 ニシテ = 重課スル ラ岩判ニ ン 氏曰 ス ル所 即チ歳入額ノ二十分一ニ 「ク然 不得 プナリ其故 附ス 徴收スルニモ足ラサル 然レト ヘキ 止ニ至ル然ルニ モ ハ現今ノ課稅總額 ノナランヤ今 モ其適宜ト 現今ノ 過キス是ヲ 程 7 N 關稅 税目 ナ 25 1) 以 ラ == ハ 變 僅 五拾萬磅內 テ パ / 直税ヲ不 更 = 1 三分 六 力 ス チ 1

談判ノ基礎アリテ別ニ之ヲ立ルヲ要セサル 术 ナシ更ニ事ヲ ンスホ ..1 ŀ 新タニ 氏日ク センヨリハ改正ノ方大ニ 相當ノ改正ハ英國之ニ同 ナ 可 IJ 意 ナ ス IJ ^ 然 + *>*\ ν ハ疑

テ メ ル 分ニ之ヲ完フシ殆ト ν 貴下ノ ラ誤解 スト其歸 ==] 可トスル ン氏日ク其議 今 シ期限 ミスル所 指陳セラレ ノ理由 終了 ハーノ ハ拙者不同意 ラ 目 皆各條款ヲ變更スル ハ今爰ニ再論セス到底改正 汐 、ミ然レト 双方ノ同意ラ ル **カ** 如 キ議論無ラ ナリ拙者新條約 七將來二 /要スル ŀ 於テハ改正 シ 丰 、ハ新 ŀ メ ・ノ趣意ニ サ ŀ ヲ 規條約 雖 双 ル 山 下 方 š プ意 Ŧ ノ ヺ 充 爲

ポ \mathcal{V} ス ホ 1 ١ 氏 日ク現今 Ì 體裁 ハ保存 シタ 丰 事 ナ ŋ 然ラ ኯ

ト 業シ建築等 為ル 阈 ノノ事 **P**51 ハ成スへ 三大金 入輩條 ヲ費セシ 約 カラサル F ブ 權理二據 者其信據 ナ IJ ŋ ヺ 危 失っ 一般ラ へ任 シ シテ日 是等 ラ本 危 =

於テ之ヲ テ 輩ノ デ 及ホサント 7 ハ V 其意ナ 巨 1 ナ 自 シ ン氏曰ク是亦タパ ラ任 ノ費用 ノ キ事 ナシ商 シ - 欲ス Ħ 25 セ ラ出セシ 瞬間 ナ ル 不政府ニ於テ貿易 がテン 入輩ハ ŋ ル 、若シ英國ニ於テ永久日本内ノ ノ考案ニモアラ Ŋ モ 決テ 4 只タ小屋ヲ建築セル モノ 1 Ŧ クス氏ノー 其背 何 ナシ總ヘテ巨費 ν ノ國ニセ 2ノ道ヲ妨 ス ル所ニアラ サルヘキナハ拙者ハ斷シテ云ハン斯 臆 所 說 ヨ是レ 止 ナ エスル ノ經營 N ノミ其危險 ^ 事二 皆然ラサ カ シ 如 2 商 政府 普 + 人 舠 25 2 = 會ル 彼 ヲ = >

== $\boldsymbol{\mathcal{V}}$ ソ 諸 ス Ħ 國 水 水 = 1 於 = ŀ 限リ テ 氏 ハ是等ノ事件 曰 然ル 力 然レ 可ラサラン ŀ モ 支那 = ハ英國之ニ 7 ラ 如 丰 暹 参與 羅 1 ス 如 N + 總 事. ナヘ ルテ

サル チ ン ŋ ナ $\ddot{}$ 氏 何 日 Ħ 時 + 刀 E = ナ シ目 自 権ヲ ラ其宜キヲ謀ルへ ハ拙者親 本ハ決 放物シン シテ 國ヲシ シク多 之 テ恰 ク其爲政家ヲ シ 拙者 **'**>\ 1)-Ŧ 他 ラ ル 知 \sim N キ 所 ν = Ξ IJ ア支

> 貴下 見 **ト** 貴下 Y 拙者ノ實ニ ⋾ 氏如是ノ議ヲナスアル ルノ永久無期 IJ ル ハ ハ拙者ソ サルル シ Ż 7 ヘケ 4 私見 知ラル テ永 Ŋ ナリ IJ ン カ 遺憾 7 如 ハ之ヲ問フヲ要セスト雖トモ英國公使 ク日本ヲ管東スル 克服 ナル 彼ノ 7 $\mathbf{\hat{}}$ キ 相同 所 = シタリ モ パー 7 シカラサ 國二 $\overline{}$ 1 蓋シー家 サ モ必ス之ヲ聽容スヘカラス ハ萬國公法上 クスヤ餘リ アラサ ル シテ 所 ルヲ了察ス故ニ今此 ノ = ノ議ヲ發スル ル ソ シ ノ私見ト職務 ^ 感服ノ テ鬱 3 ノ承允 ニモ IJ ハ .然 未曾 人 何 スル ソ ソ夫レ 事 = 1 非ラ 所ナラ 拒絕 アル ラ其事 Ŀ 产於 / ス縱令同 且 斯 タル 論 カ セ **かテノ** 夫レ條 ナ ノ ラ 如 == 如 ル ノ人 キ 就 公 ク ヲ + ハ

 ν ポ ンス テ言 ンスホ ヲ 1 日 ン氏 本 ル フ $\hat{}$ == = 目 1 ヶ 在リ 非ラス 所爲二策アル ŋ ヲ モ ŀ ノアリ 或ハ 氏 國 以テース貨物 、其方法タ 入 日 然ラン然 只夕拙者一己 ク然 \sim ---切外 ヘハ ル 脖 ル ノミーハ外商ノ 輸入 電モ條 國品 レト 1 == 包 ハ 現 ξ ノ貨物中阿片 7 Ŧ ヲ 私見二據 拙者日 用 約 行 = 檢查 アルヲ 面 1 三觸 條 / 営業ヲ行 一本ノ為 ヲ 約 ナ N ν 等 ` バ ス シ 或 .7 ナ ル Ì メ ス 쑠 隱 *>*\ ク 1 == ハ 叉夕 時 置ア 許 シ ν テ施 可 = ナ 當 ラ 力 ヲ IJ

ポ 勸告ス モ ンス 此 丰 ŋ ヲ廢棄シ而 理 ハ 議 でノ在 殿ヲ以テ日 ホート氏曰ク決テ兵ヲ用 貴下丼ニ拙者モ之ヲ知 ヘキ シ拙者日 國 ス ノミ蓋シ此 ル所ハ必ス之ヲ論スヘ ジテ條約 一本ョリ 本ノ爲メ且ツ英國ノ モ及フヲ免 成成分ニ 下問ノ榮ヲ蒙ル事 = マ 據ラスシテ公平 シサ 一向テ英國 り日 ヘシ然 パフル ル 本モ キ ナリ又タ ノ事 爲メニ良策 ナ ν 1) マ 決テ兵ヲ用 夕 ハ無ル E ニ外人ヲ遇 E 之ヲ 此方法 アラン 一ハ断然現 知 7 \sim 、二八拙者 シ v フ シ 夕 ・テ切 然 ル ル ス レナ 1 ル 行 7 事 1 IJ = =

ハレ) シ ン氏日ク條理ノ在 得 \sim カ ラサ ルナ 1] ñ 所 ハ論 シ 得 $\hat{}$ キ モ 不條 理 1 在 ル 所

ボ ンス -モ愈々改良進步スヘケレ ナ ヲ改正スル方可ナ 朩 全クノ新條約 Ţ 卜氏曰 アクエ 年若ク ヲ締成スヘキナ ル ルニハ非スヤ ハ然ル後チェ 25 十年ノ 然ル 1) シ 限ラ ŀ 丰 テ シ 歐洲 六以 其間 テー 各 國 = *>*> 現 ŀ 日行 同

ス ν ルア クス氏ヲ派遣セラル ン ラハ多分其議ニ異存ハ無ルヘシ到底同一ノミ鬼 二若力 日ク 期限後ハ必ス新條約ヲ成スヘキ旨其明文 ス パ ŋ ス ١, 氏 ノ前ニ於テ確タル考案ヲ表示 3 IJ 歐洲各國確定終決 7 議 ルモ 角 載 F セ

> ル 英國 ニ至ラサ ⋾ 1) A ル 所 前 1 至當ノ ニ充分協議ヲ盡サル 請求 = 應セシ Д ` ア N ラ 事 大ニ Ħ 容易 本ヲ ナ V

日 テ ヲ ク Ξ 當地 ノ事 故 ラ霊 本ハ ス氏 ン 一今日 スホ へ之ヲ其自 スニ へ附送 皆日 = 開ン事 便ナル ニ於テモ尚 本ニ於テノ セ ずヲ欲 國ニ於テセ 日 1 ノ地ニ於テ會議ヲ開 力 シ嚢ニ英國 ス 談判二依 ル テ ホ 其然ラン事ヲ望 ハ決シ 確定終決ノ ン事ヲ望メリ畢竟我 ンテ斯ノ如 3 ï IJ ヘキノミ拙者ハ パ考案ヲ送 其議ヲ發セ ン エムナ ト欲ス 丰 モ シナ IJ ル ル \sim シ ---充分 元 = ŀ ラ 雖卜 來談判 在 ス ス = パ ル ノ モ

其宜キヲ得 是レ然 ムル ν 1 ハ不可ナシト ン氏曰ク扨テ夫ノ裁判權ノ事貴下ノ ル 相 ハ小事件ニ限リ外人ヲシテ日 造ナカル セラル ヘシ 、旨拙者之ヲ我カ公使へ通シタ コ本ノ裁判ニ 意見 ニテ ハ 從 判所 *>*\ シ

テ愈 本ノ雇入レニテ裁判所 レリ (躊躇 ポ ンス ・ン氏目 々其實際 ホ シ ツヽ)拙者ハ質ニ預先ノ改正ヲ良策ト 1 力 ト氏曰クソレハ拙者一已ノ私見ナリ 愚考スルニ外 ニ便ナルヲ見 へ用フル事トナシ小事件ノ裁判 タル 國裁判官或ハ顧問タル Ł 八佾 ホ其方法ヲ擴充 考フルナリ へキ者日 ν ŀ ススル = 於 モ

ナ

致ス シ `ス 尙 ル 人 ン 程 \sim 朩 能 ル ア・ス へ シト グラ 水 ハス二三週ノ中ニハ之ヲ議スルヲ得ルノ 1 ン セ 卜氏曰 ゥ 考フルナリ然レトモ シムル 牛 N ク法律完全ヲ得外國 侯 二於テハ拙者 へ迫り貴公使ノ 七此論ハ拙者之ヲ今日ニ論治一己ノ意見ニテハ先ツ不 此論ハ拙者之ヲ今日 意見審問 人交涉 1 運 IJį. セ 至 ラ 伴 í ニハ n $\dot{}$ 外 \sim

テ シ ケ ν 在 實際談判] ν 東京日 サ ン氏日ク ノ = ル シ 1 人 ¥. ノ基礎ト ナ 本外務卿ハ拙者親シ テ爲スヘキ所一週間ヲ費サス 項ハ尚 1) 貴下森 彼ノ 和蘭公使ノー ナスヘキ所ヲ辨知 ホ木國政府 公使ト協議 T ノ意見ヲモ伺 セ 件貴下之ヲ ソノ爲人ヲ知 ラレ セ 同 シテ事 公使未夕 *>*\ パー 承知 ハル 力 能 v ス氏 ヘク而 t ij 力 訓 頗 辨 ラ 令 スへ 7 ラ N ル Ξ へ英 シ

ヲ ァ ンス ・ン氏日ク 議員 ラ ハ是 以其他全國 八大二同 ŀ パー 氏曰ク該件 N ナ クス氏若シ尚 人皆之ヲ 氏 IJ ノ誤謬タル 八日 意見 知 本ノ處置至當タ 水 ñ ヘシ拙者ハ有體ニ言論ス 舊來ノ心得 ŧ ハグランウヰ nJ ゞ IJ 拙者カ我英國ノ --ル テ議論等ナ 侯及ヒ下

> 待夕 友誼 N ラ ν ` 會スルノ事在 其責ヤ獨リ 無知拙劣ノ所行 ハ拙者 英國 ル事ナシ今 相 サル 一悖 ア思 ナクシテ條約ヲ廢棄ス 會ト云フヘシ然ルニ若 **遠無ルヘキヲ知** ニ於テモ正シキ ヲ得サル フャ ハ斷シテ日 ルノ議論ヲ爲シ他國ヲシテ之ニ 英國 猶水 ij ・ヤ英國今回ノ論ニ就テハ 一テ日本政府へ忠告スルニソー同氏ヨリ拙者ニ向テ斯ノ如 ニ依テ多年ニ醸出シ ブ / 肩頭ニ歸 ^ > Ħ 本ノ 思慮ア n 拙者若シ東京ニ於 利益ヲ思フニ ナ 1) ル 「シパー シ非ヲ改ムル == ñ 岩カサ 1 人 ク Ż 夕 々 ルヲ 宜 同シ毫モ其間 ハ 氏ノ勸言ヲ採用 N 皆必 從 非 1 テ シク他國 理ヲ改 ٦٩ 期 以 丰 ハシ 1 ス之ヲ 決テ ラ テ 1 > 4 セ 論 尙 ク 之ヲ ン ヺ ス 朩 ル 4 一率先 百年ヲハ 二異 賛 + ル ŀ 氏 ストア相 ノ --ス是 成 2 テ シ ル

ポ ^ 丰 ンスホ 至 N] ノ ۲ 時ヲ以 氏曰ク他日有體 テ尚 重ネテ審議ヲ盡ス = 拙者ノ 意見 ラ ^ 陳述ス シ ル ヲ 得

ン氏目 ク 其期 何 ν ノ 日二在 ル ヘキ

欲ス 決定スル スホ == 所] ŀ ナ ナ シ只タ 氏曰 ナ ŋ 分三週間内ニ在ル 日 = 在 テハ各國ト ヘシ未タ 意見ヲ對照 何 セ ν ン ጉ ١ Ŧ

Private & Confidential

Précis of a Conversation between Sir Julian Pauncefote and Mr. Stuart Lane at the Foreign Office.

London March 3 1881

After discussing other subjects;

Mr. Lane said: other evening on the subject of the memorandum tinue, as you suggested, our conversation of the supposed to have this information so that he might be able to when it was despatched. and that in any case he memorandum could be communicated to Japan stated to him that he would consider whether the Lord Granville at the interview the other day Treaties. other Powers in connection with the Japanese should be supported or opposed as circumstances might require, and also in order that he might that the propositions made by England My chief authorizes me to say that I called chiefly, Sir Julian, to conbeen sent The Minister desired should be informed by England to the

inform his Government that England has arrived at a conclusion on the Japanese Proposals.

Sir J. Pauncefote. I did not understand this was arranged, but in any case it is the fact that the views of England have been sent to the other Powers and I may say that the communication is of a confidential kind and I am therefore unable to discuss its contents at present.

Mr. Lane. It is not the contents of the communication that I would so much refer to at present, as the action involved in excluding Japan from all participations in the discussion at the present stage. Of course England is justified in exchanging views with the other Powers, but it is evident that in thus taking the lead in bring about an understanding to the exclusion of Japan she exposes herself to being looked on as the active cause of any opposition if that should result, which I hope may not be the case.

Sir J. Pauncefote. The fact is that we have not suggested any details of arrangement. We have merely endeavored to form a basis for future

discussions. We wished to establish a basis for action.

Mr. Lane. You mentioned, having sent your views to the other Powers. May I know if you mean all the other Treaty Powers?

Sir Julian Pauncefote. Yes all the Principal ones. Mr. Lane. Including the United States?

Sir Julian Pauncefote. No, not the United States. They have taken their own views and they must make their own Treaty.

Mr. Lane. But surely they were joint parties with Great Britain to the arrangement in 1868.

Sir J. Pauncefote. Yes, they were, but they have not consulted us nor we them.

Mr. Lane. I venture to say that I think the cause taken is open to very serious interpretation in Japan. It looks like an attempted coalition against that country which would be considered unfriendly. Besides reference to Japan here or in Tokio would have got rid of may possible mistakes as to the proposals. These were somewhat ambiguous in some points, which the Minister

here could have explained. Sir Harry Parkes said the other day he had understood them which would say much for his ability, for the Japanese Ministers in Europe after conferring together found it necessary to ask for further particulars and it seems that on one point which Parkes named he was quite wrong in his interpretation. The same may have happened in many other points which would be much to be deplored.

Sir J. Pauncefote. I report that we have not entered into details. We have discussed the form chiefly. You see the Japanese proposals amount to making a new Treaty altogether, which is a serious question.

Mr. Lane. So it is. It is evidently better to get rid once & for all of the old and unjust Treaty. I think you agreed to this.

Sir J. Pauncefote. You see also that Japan offers no reciprocal concessions to us. The draft only contains proposed advantages for herself.

Mr. Lane. Naturally the other Powers could be trusted to make their own demands.

- Sir J. Pauncefote. This might be so in a question of revision, but not in a proposed treaty.
- further. to any such arrangements if they can be shown right-trade marks &c., this could well be enterarrangements on matters of trade, such as copypresent. If the Powers wished any reciprocal powers sions to Europe, excepting the opening of the Treaty Powers. to be feasible & are made reciprocal with all the mination it will be found to be impossible at Continental Powers may ask for it, but an exalead to endless difficulties. I believe some of the have said yourself it would be a bad thing and would gladly agree see what you could ask, and that you know they whole country to trade and residence, I do not for what is her right and due, and as to conces-Besides she asks for no concessions herself only In fact I am sure Japan would consent were arranged for. Without this you All was taken from her in 1856 & 1868 I really see nothing Japan could concede ťo Ħ. proper jurisdiction
 - Sir Julian Pauncefote. Well then we ought to have no difficulty in coming to an arrangement, but we must really have something to show the House of Commons before we consent to give up our present Treaty Rights.
 - Mr. Lane. These rights as you know were extorted by pressure.
 - Sir J. Pauncefote. I can not allow that, they are almost the same as with all the eastern nations, and Japan should have not waited till now to protest that they were obtained by force, if she thought so.
 - Mr. Lane. You must know that in the early times after 1858 everything was in a state of commotion, and the opposition to the Treaties was obvious enough. In 1868 force was most distinctly used to get the Mikado's Consent, and ever since the Japanese have never ceased to protest against the Treaties.
- Sir J. Pauncefote. They now offer nothing and propose duties of 35 % & all kinds of changes (sio). Mr. Lane. The proposed duties on goods average
- about 10 to 11 per cent. That is not excessive as times go.
- Sir J. Pauncefote. Then why not propose 10 per cent duty all round. It would be much simpler. Mr. Lane. That is a detail—open to discussion. No
- doubt there are reasons for the proposals, but in any case Japan only asks for the same rights as to tariff as we give to other countries and even to our own colonies.
- Sir J. Pauncefote. Well, you must not think, we wish to be illiberal, but we can not give up everything secured by Treaties all at once, the Treaties say the tariff must be altered by mutual consent. Mr. Lane. Nothing of the kind, Sir Julian; where do you see such a statement. That must be one
- Sir J. Pauncefote. Well in the '56 Treaty it says revision is to be confined to changes shown to be desirable.

of Parkes' ideas.

Mr. Lane. And so it will be kept to, but the desirability must not be left to the judgement of Parkes. In the case of the tariff, changes are

- manifestly desirable. The present rates only produce about £500,000 or one twentieth of the income so that direct taxation has to be excessive in proportion. The present rates barely average 3 per cent on the goods hardly worth collecting. Sir J. Pauncefote. Well we shall no doubt consent to a fair revision but that form seems much better than a fresh start. We then have something to go from—a basis to commence discussion.
- Mr. Lane. I see objections to this, but will not take up your time in repeating why I think a new Treaty better for all parties, but of course if the revision is made sufficiently complete which I think would involve changing nearly every clause, it would virtually amount to the same thing. But there must be no misunderstanding as to the meaning in future of 'revision.' No question such as you hinted at just now, as to mutual consent being required at the expiration of the term fixed.
- Sir J. Pauncefote. It seems to be the feeling that

the present form must be maintained or else all security for our traders would be lost. They have under Treaty right established themselves in Japan at great cost and erected buildings at great expense. All this can not be put in danger.

Mr. Lane. In the first place this must be another of Parkes' wild assertions. The traders have made no great outlay. The outlay has been made by the Government. The traders have built some small houses, but in all countries they know this is done at their own risk, and there is no idea of stopping their trade. But if you mean that England is going to propose that she is to have a control for ever over Japanese concerns, I may say at once that I believe such a course would not be entertained one instant.

Sir J. Pauncefote. But we have a voice in such matters in all eastern countries, China and Siam for instance. Why not Japan?

Mr. Lane. Simply because I am sure Japan would not submit to it. China and Siam must take care of themselves. I am personally acquainted

Sir J. Pauncefote. sibility that they would never consent to sign I do not hesitate to assert on my own responwith most of the leading Statemen in Japan, and rebuff, and we should have to give way at last. sals he will not be listened to. thought of) and if he appears with such propoyou will I believe find a positive refusal to treat country could bring this about. If it is proposed of slavery. Nothing but a conquest of the whole which would be reducing their country to a state ance of giving up the national rights for ever, any fresh document which had even the appearand I do not ask you your own views on this. would remain in force? English Minister. It would only lead to a serious proposal to bind Japan for ever come from any know them, between a personal opinion and an official oneternational Law. I quite understand the difference a thing as a perpetual treaty is unknown in In-You know Parkes is not bien vû but But then the present Treaties I should be sorry to see any You know such

Sir J. Pauncefote. Would it not be better to revise the existing treaty for a time say 5 or 10 years.

This would give time for the reforms to take root and then we might have a new treaty altogether on European footings.

Mr. Lane. This might possibly be entertained if it were clearly laid down that the new treaty would be obligatory. But it would then amount to the same thing. I do think you had better make some formal proposals, before sending Sir H. Parkes out. You will much more readily induce the Japanese to do what you can fairly demand by negotiations before Parkes presents his European ultimatum.

Sir. J. Pauncefote. I assure you as ultimatum is thought of. No cut and dried scheme would be sent out by Parkes. I wish it had been arranged to discuss the matter here. We proposed it, and you must not blame England if Japan preferred to discuss it in Japan. We proposed a conference, where all could be openly discussed and I am sure we would still, accept this plan as much

Mr. Lane. That depends. doing this without infringing the treaties, they But this would injure themselves, and the other might examine every package to see if it containpossible. I or any one could suggest ways of see two ways for them to proceed—one would be thority to speak for the Japanese, but I can only pean Manufactures and in many ways stop trade. not go to war on such a point. as well as you & I do that this country best for England, as well as Japan. They know sult me this is what I should strongly advise as gners fairly. to denounce the treaties and yet treat the foreiwould be straight forward and legitimate. course is the one they would adopt I believe. It even prohibit any native from wearing Eurorender the position of European traders imopium &c they might pass sumptuary laws If they did me the honor to con-I have no kind of au-

Sir J. Pauncefote. No, certainly not. But surely something is to be said for existing rights.

Mr. Lane. Existing rights but not existing wrongs.

more satisfactory.

Mr. Lane. ing your views that you do not see any objection small cases, if the tribunal were satisfactory. to native jurisdiction over foreigners, at least in By the bye I hope I was right in report-

Sir. J. Pauncefote. sion would be wiser, but (hesitating) I really think a preliminary revi-Yes that is my personal view,

could be extended. visers of course in Japanese employment, might, You would soon see how it works and the system I think, be fairly worked at once in trivial cases. A tribunal with foreign judges or ad-

Sir. J. Pauncefote. Well, if we find the code satis-Granville to ascertain your Minister's views. I shall be ready to do so, and I will urge Lord discuss the proposal now. In two or three weeks any objection myself. But really I must not foreigners in the Japanese courts, I do not see factory and foreigners assist in cases involving

Mr. Lane. ascertaining what would be a possible basis for You will I think do more in a week in

> Sir. J. Pauncefote. (interrupting) Japan was quite right. know what happened about the Dutch Minister? sonally the character of the Foreign Minister in Parkes would do in three months. I know peron points on which he is not instructed than time to ascertain the views of his Government discussion by consulting Mori and giving him He is very intelligent and very firm.

Mr. Lane. under Parkes' advice and leads the other Powers if on the other hand she takes a hostile attitude matter and of thus doing away with the mischief old attitude, and arguments he will find himself to follow leer, all will be laid on her shoulders which years of unwise conduct has caused. a grand chance of taking a good lead in this of Japan. der our own (English) interests as much as those the country may know my opinion, for I consi-Lord Granville, mistaken. I feel it my duty to speak openly and And if Parkes thinks he can resume his They are identical. the House of Commons and all England has now

from all right-thinking men in this country. the Japanese Government to decline any considleast part of them with the certainty of support eration of it and to denounce the treaties or at attributed to him, I would not hesitate to advise proposed any such fian as that, perhaps wrongly, If I were asked to meet Parkes at Tokio and he and it will take a century to undo the mischief

Sir J. Pauncefote. tion again when I am able to speak openly as to our views. Well we will discuss the ques-

Mr. Lane. How soon will that be?

Sir J. Pauncefote. time. wished to compare opinions with the other Powers We have as yet decided nothing, we only Oh, probably in three weeks

井上外務卿宛森駐英公使ョリ

リード氏英外務卿ト會談ノ件

附屬書一 十四年三月四日森公使來電

= 十四年三月十日森公使ョリリード氏へノ返翰 十四年三月八日リード氏ョリ森公使へノ書翰

> 機密信 第九號

機密信第七號ヲ以テ同氏條約改正一件ニ就テハ頗ル盡力有 英外務卿エ面會條約改正一件ニ付談話有之候旨別紙ノ通リ 之候存意ナルニ由リ解約不都合ナル旨中進置候處爾後同氏 通知有之候御心得ノ爲メ此段申進候也 リード氏海軍省通信解約當分見合ノ儀ニ付本月四日呈電抖

十四年三月十一日

森 有 禮

井上外務卿 殿

附屬書

十四年三月四日發森公使來電

 $\vec{}$ 井上外務卿宛

「リード」ニ斷リ候儀ハ暫ク猶豫アリタ シ云々

附屬書二

十四年三月八日附リード氏ョリ森公使へノ書翰

Private & Confidential

March 8th 1881

I have a long interview with Lord Granville

My Dear Sir.

井上外務卿時代 對英交涉

alone to day, and opened up my mind to him in the

influence upon his mind. patiently and made many inquiries and I cannot they are carried out. fortunate position which Japan occupies with refullest manner about Japan, and about the most unhelp feeling that treaties Lord interview and the manner in which Granville listened most must have great

Yours most truly,

Signed: E. J. Reed.

十四年三月十日附森公使ョリリード氏ヘノ返翰

March 10th 1881

Dear Mr. Reed

sincerely hope that it may produce good result. factory conversation very glad to with hear Lord that you had a satis-Granville, and

In any case I am much indebted to you.

Yours truly,

Signed Mori.

明治古生月十五日 井上外務卿宛

條約改正ニ關スル意見書進達ノ件

言ノ謹直ニ過グ

ルア

ル

モ

願ク

ハ善ク恕容セヨ熟々英國政

ヲ窺フニ

過グルハ無シ我ガ政府ハ甞テ此 約ヲ改正セントスルニ當テハ必ズヤ 權ヲ回復スルニ漸ヲ以テセントシ今日ハ則チ一旦ニ 當否ヲ以テ事ノ成否ニ 曰ク我ガ改正案文體其當ヲ得ズ其レ外交ノ事ハ文書體裁 之ヲ奈何ンセンヤ是レ信ヲ我改正案ニ得ザ 案ヲ稿定シテ之ヲ各國政府ニ頒付セリ セザルベカラズ是レ外交普通ノ順序ニシテ事ノ捷便亦此ニ ツ彼レヲシテ我ガ要點ヲ預諾セシメ而シテ後チ不案ヲ發行 序宜ヲ得ズ其レ一國政府ノ外國政府ト新約ヲ結ビ浩クハ舊 我改正案ニ得ザルノーナリニニ曰ク我改正案ヲ發スル ノ定見ナキヲ疑ハシムルモ將タ之ヲ奈何ンセ フロント、 ラズ其間更ニ外交政略ノ機軸ヲ變ズベキ 二敏捷ナル者早トニ我ガ交術ノ未熟ヲ洞視スル 大部分ヲ取ラント トシ今日パ 閣論ニアラ 然ルニ今日ノ廟議ハ前 ニシテ外國人政府ヲシテ我外交政略ニ首尾貫通 則チ舊ニ仍り ザル者アルヲ見ル例へ ス此等ハ英語ニ所謂チェ 關ス ノ廟議ニアラズ前日ノ閣論 本條約二 ルモ ノ順序ニ從ルナク直チニ全 少シト バ前日 附加 不案發行以前ニ於テ先 英國政府 セ セントシ前日 理由 ズ蓋シ ル *>*> リン 税權ヲ專有 ノニナリニニ ンヤ是レ信ヲ ロヲ存ス モ 1 亦夕將夕 ヂ、 人 如キ外交 シ *>*> ラ性 今日 ヲフ テ共 其順 ハ法 七

附屬書 十四年三月二十四日附森公使意見書

機密信 第十號

電令ノ趣意ヲ英政府へ說入候ハ、尚盡力ス 右ハ本月十日別紙寫ノ御電報接掌前之作案ニ 條約改正件二付前便申進置候本使意見書則 如斯敬具 致シ候様可相成カト頗ル氣力ヲ得候次第ニ候先此段申進度 ヘキ好端緒開發 今便及送呈候尤 係り候處該御

十四年三月廿五 H

森 有 禮

井 上外 務卿殿

1 | 一 | 附屬書一参看

附屬書

十四年三月二十四日附森公使意見書

條約改正ニ付意見

テ肝膽ヲ吐露シ以テ萬一ノ參考ニ供セント欲ス霑シ或ハ其 ダ淺少ナラサルヲ知ル有禮着任以來兹ニ一年有餘其間內外 ラズ本使有禮ガ苦心ノ日ニ甚シキヲ以テ閣下ノ焦慮モ亦甚 條約改正ノ擧タル日旣ニ久候而シテ猶未タ其局ヲ結ブニ至 情勢ヲ熟視シ區々ノ微衷ヲ獻スルモノ前後數次今復タ敢

政論ノ軋轢ニ關スルニアラズ内閣ノ

變動二

因

ル

=

ア 7 スルヲ以テ主服ト做セバナリ我政府ノ政略ハ果シテ此 ヲ暴白スル事甚タ尠シトス蓋タシ國威ヲ貴重シ外交ヲ保全 以テ之ヲ施シ邊ニ前政府ノ外交政策ヲ反轉シ以テ其ノ痕跡

1

義ヲ得タリシヤ

有禮甚ダ之ヲ疑フ何ゾヤ一昨年我外務卿

趾

モ

其ノ之ヲ爲スニ當リテハ最モ翼々ノ小心ヲ加

へ漸ヲ

則チ外交政略ノ機軸ヲ一變スルモノ無キニアラズト

レハ

功ヲ期スベカラズ政黨爲政ノ政體國ニ在テハ政府其人ヲ易

論ゼン一ニ曰ク我ガ政府改正要求ノ政

略其機軸ヲ變ズソレ

バ充分ノ成

一國外交ノ政略ハ首尾貫通一執不動ニアラザレ

テ然ラシムル所以ノ大ナルモノ三ツアリ請フ試ニ得テ之ヲ

ノミヲ咎ムベカラザルニ似タリ我レノ以テ彼ヲシ

テ彼

 $\tilde{\nu}$

ヲシテ然ラシム

ルモソ無キニアラズ未タ遽カニ

獨リ ノ以

ハー目

故ニアラズ有禮ガ見ル所ヲ以テスレ

ハ我レ ナノ此ニ至

外國政府

其議ヲ合シ以テ不利ヲ我ニ嫁セントセリ蓋シ事

レニ

シ

・テ足レ

リト

シ之ヲ他ノ條約諸國ニ通牒シ

先ツ互

 ν

自ラ瑣細ノ修正ヲ現行條約ニ加へ今次ノ改正

啻ニ信ヲ我ガ發行ノ改正案ニ置カザル

1

外務卿 頃ロパ 之ヲ轉 改正 権ナシト 追フ可 .直ニ彼ノ所爲ヲ爲サヾ シ ニ至リ 體裁ヲ以テ先ツ我ガ外交ニ未熟ナルヲ想定セシ 案即チ覺書ノ體裁ノ如 先入主 ズ唯夕荷 我改正案ニ得ザ デ 試二我レ英國政府ト テ六項トス 意ヲ我ニ傾 甞テ有禮ニ 考案ヲ草シ條約各國ニ通スルモ有禮途ニ其內問 ラズ期スル所ハ以テ深ク將來ヲ慮ルベキ テ益々其難キヲ見ル深グ異シムニ足ラザ シテ他 下 -] == 一報ズル ナル事 モ時機アレバ則チ我ガ要求ヲ主張シ力メデ彼レヲ 云フヲ以テセリト此言蓋シ疑フ可ラズ近時英外務 クス氏ノ言ヲ聞クニ曰ク在東京ケネデー氏 ニ赴カシムル頗ル難 二在外 ñ 圖議スルニ改正ノ事ヲ以テスル ケ ノニナリ シ 發端ニ於テー 4 Ħ ルヲ知ランヤ雖然是レ旣往ノ事 地ヲ易へ之ヲ謀ルトセバ我亦タ何ゾ + ル事ヲ謀ル ハ一閥ノ下直ニ人ヲシテ驚異シ其 本公使ハ改正ノ談判ニ容喙スル 此等ノ原因アリ 感覺ヲ發スレ ノミ而 シ我ガ改正案就中法制約 シテ我論旨ヲ大別 改正 ・ニアリ エノ擧ノ よ是 事無ク其ノ ル バ ナリ 子後 |八英國 で信 二與ラ 今若 今日 7 3 1 ヲ

異常ノ特權ヲ附スルモノニシテ全ク一方ニ偏倚シ互相の一日本ト各外國トノ現存條約タルヤ獨リ各國ヘノミ格外

報酬ノ約ニアラザルナリ

應ノ改正ヲ加フルハ必要ナリ第二日本ノ事態ハ二十五年來全ク變換シタリ隨テ今之ニ所

ルニ止り敢テ別ニーノ護與ヲモ望ムニアラズ應ゼンガ爲メニ其ノ至當ニシテ且ツ切要ナル改定ヲ求第三日本ノ今般各國ニ向テ要請スル所ハ單ニ時勢ノ變換ニ

ルモ可ナリ亦夕或ハ舊條約ニ充分ノ改正ヲ加フルモ妨至テハ必ズシモ之ヲ緊要トナサズ更ニ新條約ヲ以テス第四日不ノ此趣意ニ貫通スルヲ得ハ新定條約ノ體裁如何ニ

甘シテ其議ヲ容レ應サニ熟案ヲ遂グベシ柄ノ利否得失ニ因リ且ツ殊ニ其互相ノ約ナルニ於テハ第五各國ヨリ日不ニ向テ新ニ讓與ヲ請求スル所アラバ其事

ナシト

ス

現在ノ 第六舊條約中所揭ノ改正權理ニ就テハ或ハ其本旨ヲ誤解 者ア 事態此ノ如シ則チ今ニシテ早ク將來ヲ慮リ我ガ以テ 何卜 本ハ之ニ由リ永ク外國管制ノ下ニ属スルト忘想スル ナ 1) 斯ノ ラズシテ最モ嫌悪スベキ不正ノ甚シキモノ ナレ ハ 如キ忘想ハ決シテ毫モ日 是レ則チ目不ヲ以テ他ノ 不ノ允サッ 奴隷國ト見做ス ル ナ IJ ナ

= 31 ス 如 == 三至 ・萬一不幸ニシテ若シ之ヲ斷決スル事能ハズンバ則チ寧 若カズ今ニシテ外國ノ威力ニ キハ實ニ不幸ノ甚シキ ル事ヲ得 强ノ違言ヲ發シ姑ラク談判ヲ中 ルニ於テオヤ大事ノ成否ハ斷不斷如何ト顧ミル モノナリ 畏怖シ不利ノ改正 頓首敬具 止シ以テ他日ヲ待ツ コラ行フガ

明治十四年三月二十四日

在倫敦 森 有 禮

外務卿 井上 馨殿

英政府ヨリ各國へ廻付ノ考案ニ關スルー四 明治十四年四月一日 非上外務卿宛

附屬書一 十四年三月二十二日附森公使簽英外務卿宛

一 十四年三月二十三日ポンスホート、レーン内話大意筆記

機密信 第拾壹號

曩ニ英政府ヨリ各國へ廻附ノ考案ニ未タ各國ノ答議到來不以英外務卿へ及照會置候處爾後未夕何等ノ回答無之候得共條約改正件ニ付開談ヲ促シ別紙甲號﹐通リ去月廿二日附ヲ

彼我平和 奈何 セズ ヘジ 在外使臣ニ含メ須ラク機ニ臨ミテ外政府ニ之ヲ暗示 條中 ツ平穏ノ談判ヲ反復セザル 以テ必ス輕々シク之ヲ早マリ行フベキニ非ラズ飽マデモ先 ニ各國ヨリ ル事至要ナリ是レ事ノ實ニ不得止ニ出 IJ ツア ジョナキ 如此 シテ知ルベシ但シ廢止論ヲ發スルハ最後ノ一策タ 議相協ハザル分ハ日 ズ其時ニ臨ミ我政府ハ必ラズ須叟モ躊躇スル ス モ ス 公發スル サレバ則チ談判ノ權衡ノ大ニ我ニ傾ク所アル ŧ 、異議ヲ我レニ加フル能 ラテ行 ニ至リ萬已ムヲ得ズシテ之ヲ行フニ於テ 改正 政略ラー定セザル可ラズ是レ我ガ政府目 モ我ガ レザル ハザル モ若シ談判熟和 論其議ヲ遂ゲ以テ我ガ企望 政府ハ我ガ從來外人ニ許與スル ナリ況 ノ機ニ至ラバ我レ テ之ヲ剝奪 本ヲ東縛スルノ効ナシト 可ラズ若シ平穏ノ談判ニ ンヤ此等敷筒 セ 關スル所ナクシテ ハズ而テ早ク今日ニ之ヲ ズ勢ヒ不利 スルニアラズ又況 ルモノニシテ為 ラ達 一ノ條項ヲ廢止 シテ之ヲ諾 雖ト ブ 改正 マスル 公言ヲ發 が一番約 æ シ セ ルヲ ンヤ 之ヲ 决 テ終 ヤ論 シム ゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙ シ

疾事ニ有之候右申進度如斯敬具疾事ニ有之候右申進度如斯敬具疾事ニ有之候右申進度如斯敬具疾事ニ有之候右申進度如斯敬具疾事ニ有之候右申進度如斯敬具疾事ニ有之候右申進度如斯敬具疾事ニ有之候右申進度如斯敬具疾事ニ有之候右申進度如斯敬具疾事ニ有之候右申進度如斯敬具疾事ニ有之候右申進度如斯敬具

四月一日

森. 有禮

井上外務卿殿

附屬書一

甲號 十四年三月二十二日附森公使發英外務卿宛往翰

Copy

Mori to Granville

London March 22, 1881.

My Lord,

At the interview which I had with your Lordship on the 15th February last, I understood that I should shortly receive, either the text of the communication on the subject of the Japanese treaties, which the British Government proposed to send to

the other Powers, or (if it were decided that Japan should not be previously informed of its nature) an information that the document had been despatched.

My understanding of the arrangement may have been inaccurate or the subject may have escaped Your Lordship's memory. In any case my Government have already received from the Continent a report of the views thus advocated by Her Majesty's Government, and have sent instructions in reference to them.

I have therefore the honor to state, that whenever Your Lordship may deem it desirable, I shall be prepared to explain accurately the views of the Government of the Emperor in reference to the proposed basis for the new treaty arrangements. It would be deeply regrettable if the great delay which has already taken place in this matter were unnecessarily increased by any false impressions as to the views & demands of Japan.

I have the honor &c.

(Signed)

Mori

所層書二

乙號 十四年三月二十三日ポンスポート、レーン内話大意筆記

Precis of a Conversation between Sir Julian Pauncefote and Mr. Stuart Lane.

March, 23, 1881.

liberally toward Japan and would continue English Government only wished to act fairly after all there was no need of mystery. dential, but that secrets were sion Question; as this was supposed to be confi-English Despatch to Foreign Powers on the Revithe Japanese had obtained information as to the said that it certainly was surprising to find that basis for discussion, and he said he should like to the Japanese proposals could not form a satisfactory as the most important point. the Treaty and not the form would be looked on In answer to Mr. Lane, He was glad to hear that the essence of Sir Julian Pauncefote He felt sure that seldom kept, this The and and

said that this was only right in courtesy, but that been done, the whole might be taken in hand and might be found necessary and then when this had clause then discussed consecutively, and altered as see the old treaty taken as a starting point each and should be borne in mind that certainly Japan definite period, that any new arrangement would only be for a it practical, but that it must be clearly understood in different forms). On Mr. Lane saying that he unnecessary delay and telegrams should be sent to Granville to propose this. He would prevent any that Japan had to agree to a treaty with all Counceptance of this idea, that personally he thought could not express any official opinion as to the acwish to act liberally (He repeated this several times whatever views were expressed, England would the other Powers asking for immediate replies. the details settled in Japan. He would urge Lord put into the shape of an entirely new treaty Sir Julian said that there were important facts (some even small) and that England must remember not with England alone,

saying that as to the code and the prisons, he rid of the extraterritorial jurisdiction as mu h as Julian then touched on the jurisdiction question he could well appreciate that difficulty, and he did the public, but that what was found desirable could foreign cases. foreign assistance at first in her courts, as regards foreign cases. This should not be insisted on in Japan saw the necessity as no doubt she would, for thought there would be no difficulty, but that if could not be settled in the matter. ranged for, he could see no reason why something beginning foreign assistance in the Courts was arsystem was shown to be satisfactory, and as a could be submitted for examination and the prison ment made with light cases, and if a proper c de possible, that he should like to see a commenceand said England ought to assist Japan in getting could not be expected to be bound indefintely. could not be come to. He said there should be not see why a compromise on the basis suggested guaranteed in despatches &c. treaties, as it would not be well looked on by Sir Julian said On Mr. Lane's

> forward some of the salient arguments against the far as possible. He hoped this would be undergine that England was hostile to her claims—quite found desirable embodied. Japan was not to ima-Japanese proposals need not be ignored, these would tentively and with earnest appreciation. Parkes policy which Sir Julian listened to most at treated and the memorandum attached to the probe considered as the clauses affecting them were whatever time was required to the matter. full meetings of all parties and a proper discussion clause by clause of the treaty. contrary—every Mr. Lane took the opportunity of bringing could be similarly treated, and what one wished to meet them as He would devote

1一五 明治古四四月十五日 井上外務卿宛

改正條約案ニ付英外務卿ト内談ノ件

機密信 第拾二號

條約改正件ニ付前信申進候通り開談ヲ促シ英外務卿へ及照

顕末左ノ通りノ事ニ有之仍テ卽チ去ル九日本使外務卿自宅へ參向談判ノ」の事に有之仍テ卽チ去ル九日本使外務卿自宅へ參向談判ノ皆中越尤ポンスホート氏丼パークス氏モ同席セシムヘシト會置候處共後同卿ヨリ頃日自分儀所勞ニ付於自宅致面談度

基本トナス可ラストセラル、ニ由ル平將夕或ハ該案ノ大ニ 修正ヲ加フルヲ得ハ我政府ハ以テ足レリト爲スナリ又タ若 無ラシメサルヲ得ス蓋シ改正條約體裁ノ事ハ我政府敢テ必 府ニ代リ其趣意ヲ明瞭ニ辯開シ以テ貴我ノ間ニ誤謬ノ 舊條約ト異ナリテ金ク新條約ヲ視ルカ如クナルニ異議アル セシ由我政府之ヲ聞キ疑ヲ起スヤ甚タシ抑貴國ニ於テ我國 ガ條約改正件ニ付貴使ニ於テ御說明相成度次第有之趣ナレ 二出ル乎若果シテ此二ケ條ニ基キ然リトセハ本使爱ニ我政 ノ旨ヲ以テセラレタルトノ事大陸地方ヨリ 一同列座ノ席ニ於テ外務卿先ツ發言シ曰ク過日尊書ヲ得 シモ其體ノ何様タルヲ須要トナサス到底舊條約ニ充分ノ 考案ニ不同意ナリトハ該案ノ體裁ヲ不可トシ以テ商議ノ 貴國ヨリ各國へ通牒スルニ我國ノ考案ニ同意ス可ラサル 今日ハ其事承ハリ度ト存ス本使曰ク今般ノ改正一件ニ就 ウヰジョ ン」ナル字義ニ付キ双方異解ノ 我カ政府へ報告 / 所アラ 考察

趣意ニハ直チニ同意成シ難シ何ニシテモ先ツ日本公使ト 聞キ須叟默然タリシカ旣ニシテポンスホー 之ヲ存スヘシト云フニ異ナラス如此ハ我政府ノ斷シテ肯 セ セ 舊ニ仍り保存スヘシト云フノ一説是ナリ本使未夕本邦ヲ發 含ストセリ往年條約締結ノ時勢ハ今ヤ大ニ變換シ我國今時 以テ談判ノ基本ヲ議定スルヲ良策トナスヘシ本使曰ク本使 取捨スヘキモノ或ハソノ修正スヘキモノ等逐條審議ヲ盡 ンスホート氏丼パークス氏三人相會同シテ舊條約二就 ノ兩氏ニ向テヨク最後ニ日本公使ノ辯述アリシ日 トキハ其條款ダケハ爾後實行ヲ止ムルヘキノミ外務卿之ヲ スル能ハサル所ナリ萬一ニモ双方ノ議相協ハサル條款アル ヲ得サルハ若シ改正ノ事結局双方ノ議相協ハサル ン乎我政府ノ之ヲ解セル所ハ「リウヰジョン」ノ意決シ ハ其實即チ現存ノ條約ヲシテ永久條約ト見做シ幾百年モ サルノ前ニソノ説アルヲ聞ケリ若シ夫レ然ルヲ得ヘシト ヲ以テ極テ必要トナスナリ又タ爰ニ併セテ辯シ置カサル 、一部ノ修正ニ止マラス修正ヲ要セル所ハソノ全體ヲモ包 於テ公然ト斯ル 狀態ハ金ク改新セリ從テ之ニ適應ノ修正ヲ舊條約ニ加 商議ヲ爲スハ之ヲ辭セサ ト丼ニパークス ル ヲ 得ス乍去私 1本政府 ノ條款 光井共

亦夕之ヲ賛成ス是ニ於テ本使モ之ヲ諾シ兩三日 キヲ得 與ノ事ヲ愁訴スルニ非ラス唯タ事ノ實ヲ擧示ス 貴我互相ノ約ヲ結フハ敢テ異議ナキ所ナリ本使曰ク敢テ讓 ムル所 ナル 閱シタルニソノ應サニ保存スヘキモノ 偏倚ノ約ト云フノ趣意ナルヘシ是レ日本ノ情勢自ラ然ラシ スヘキヲ約シテ退館ス 朩 如シ而シテ其條中永久和親條款ノ外ハ悉ク唯夕日本ヨ 置キタキ事アリ抑モ舊條約 ミノ讓與ニ係ハルナリ 内議ニ參與スルハ甚夕喜フ所ナリ然レト (ルカ如ク我英國人ハ貴國ニ於テ自由ナラシムルヲ得 ソノ方サニ然ルヲ知ルヘシ外務卿曰ク讓與ノ條款 ヘシ本使曰ク然ラス貴君ト雖トモータヒ條約書ヲ披閱 |ル所アルヘシ外務卿左様アリタシト述フパー ŀ ナルヲ奈何セン今ヤ浩シ貴國人カ我英國ニ在テ自由 氏曰ク鬼ニ角三人相會シ内議ヲ盡サハ大ニソノ宜 パー クス氏日クソハ日本一方ノ意 ハ旣ニ幾回 ハ殆ト絕テ之レ無キ カ本使反覆之ヲ沓 モ玆ニ豫メ ルノミポン - クス氏 內會 Ĩ. >

所有之ヲ曉ラシメタルニ由リ候事ト被考候右及禀報候也リシハ內々手段ヲ盡シ彼ヲシテ是迄大ニ我本旨ヲ誤解セシ右之如ク外務卿ニ於テ本使ニ面會シ我趣意ヲ聞取候運ニ至

十四年四月十五日

森有

禮

井上外務卿殿

一六 明治古医月十五日 非上外務卿宛

ける計 トリチリリトラー きょくせい 改正條約案ニ付英國側ト内議ノ件

附屬書 十四年四月十三日後森公使來電

機密信 第拾三號

第十二號內信會之義旣ニ一昨十三日ヲ以テ相開キ候處段々第十二號內信會之義旣ニ一昨十三日ヲ以テ相開キ候處段々第十二號內信會之義旣ニ一昨十三日ヲ以テ相開キ候處段々第十二號內信會之義旣ニ一昨十三日ヲ以テ相開キ候處段々第十二號內信會之義旣ニ一昨十三日ヲ以テ相開キ候處段々第十二號內信會之義旣ニ一昨十三日ヲ以テ相開キ候處段々

十四年四月十五

有禮

开上外務卿殿

註 1前號文書参照 2附屬書來電ナルニ付參看

門屬書

十四年四月十三日發森公使來電

(條約改正ニッイテ英國政府態度ニ陽スル件) From Mori to Inouye

At the request of English Minister for Foreign affairs unofficially had an interview with assistant Minister for Foreign affairs and Minister to Japan. It is probable they propose taking into consideration all jurisdiction questions later, Meanwhile settling commercial arrangements.

General dispositions friendly.

一一七 明治古四四月二二日 赤肚英公使ョリ

改正條約案ニ關シ英外務大輔ト會談ノ件

附屬書 十四年四月十三日改正條約案內談會筆記

非上外務卿時代 對英交涉 **二一七**

機密信 第拾四號

左ニ略記併セテ供高覽候九日本使外務省へ突然出頭ポンスホート氏へ内面談ノ顚末時日遷延今便迄モ間ニ合兼候條英文ノミ差進候且又去ル十時日遷延今便迄モ間ニ合兼候條英文ノミ差進候且又去ル十時便申進置候條約改正件ニ付本使トポンスホート氏丼パー前便申進置候條約改正件ニ付本使トポンスホート氏丼パー

ルノ事之レアルヘキカト存スル處過日ノ內會議ニ關シ拙者ニ在府ヲ要セラル本使曰ク 拙者儀近日暫ラク倫敦ノ地ヲ去リ他行セン

週日乃至十日位ハ相掛ルヘキニ依り其間ニ於テハ貴使、大其命ヲ受ケ昨今專ラ貴政府ヨリ發付ノ通商航海條約氏其命ヲ受ケ昨今專ラ貴政府ヨリ發付ノ通商航海條約の表によのラックを出シ同侯ノ関党ヲ經ル迄ニハセノスが

ル、ヤカスハ 我政府ノ修交條約幷附錄覺書ヲモ一同取調ヘラカ又ハ我政府ノ修交條約幷附錄覺書ヲモ一同取調ヘラ本使曰ク パークス氏取調中ナルハ通商航海條約ノミ

御不在

ナルモ別ニ差支之レアルマジ

ポンスホート氏曰ク 否通商航海條約グケナリ裁判權

り中出ルノ都合ニ至ルナラン回ハ先ツ通商航海條約ダケヲ議スル事ヲ多分英政府ョンヲ今日ニ議シ難キヲ以テ該件ハ姑ラク後日ニ譲り今領事及ヒ裁判官等ノ報告ヲ得タル上ナラテハ未ク遽ニノ事ハ甚タ込入タル事柄ナレハ日本ニ在留セハ我公使

正數回 變易常ナシトテ夫ノ檢疫規則ノ一事ヲ引證シ我政府 處スヘシ アルヘキノ ポンスホート氏曰ク 英國人民ヲシテ日本ノ地方規則 ト云ヘリ 本使日ク (英國ニテハ行政規則ト稱スルモノナシ故ニ 地方規則 大ニ區域廣狹ノ差遠アリ)ヲ循守セシムルハ無論然 ヤラル 氏ノ説ニハ日本政府ノ行政規則ナル ニ及ヒタルハ同氏之ヲ拒ミタル 然レトモ英國ノ地方規則ハ我國ノ レドモ是レ甚タ過酷ノ論ナリ必竟該規則ノ 事ナレトモ之ヲ公布スルノ方法頗ル難事ニ 裁判權ノ事ニ就テハ過日內會議 ノ致ス所ナリ モノハ朝令暮改 地方規則ト がかが 1 ヲ

ス例へハ襲ニ我政府檢疫規則ヲ設立スルノ時ニ於ケルス之ヲ公布セシムルニ至ル迄ノ手續マタ甚タ容易ナラ本使曰ク 雷ニ之ヲ公布スルノ方法難事タルノミナラ

後二非 決意スルニ至リタルナリ タルニ由リ我政府ニ於テハ此不友誼ノ回答ヲ得然ル上 ハ止ヲ得ス我レハ我國權ノ ガ如ク我政府 公然タル手續ヲ以テ照會ノ上英公使ノ認許ヲ得タル 内示シ其助力ヲ請ヒタルニパークス氏ハ如此 シハ英國人民ニ施行ス可ラスト公然論出セラレ ハ友誼上ニテ該規則ノ草案ヲパ 所在ヲ主張 セサル ヲ得 ークス氏 キ規則 ス 1

欲ス 異ナラサルヲ以テ我ガ政府ハ舊條約ニ據リ改正ノ基本 正ニ付テ各國へ通牒シタルモ決シテ惡意ニ出ルノ所致 國ニ比スレハ恐ラクハ最モ深厚ナルヘシ故ニ今般ノ改 然レトモ此般ノ事ハ今後再ヒアルヘキノ事ニ 超越シタル處置ニシテ我英政府ノ賛助スル所 ニアラス全ク日本政府ヨリ發付ノ考案ガ恰モ新條約ニ ルヘシ又タ曰ク元來我英政府ノ日本ニ好情ナル ポンスホー ト記載セル モ我英政府ハ成ルヘク日本ニ向テ寬裕ナラン事ヲ ル ヲ可トシ之ヲ各國へ謀リタル ト氏日ク ヲ 以テモ我政府 該件ハパークス氏全ク其權限 ノ厚意ナル ノミ現ニ該照會書 ヲ知ルヘキ バニアラス モアラサ ハ他各 9

ルヘシ 開クノ事カ何カ譲與ノ事アラハ談判ノ都合大ニ宜シカ止ク要求ノミニシテ讓與ノ項一モアルナシ更ニ海港ヲポンスホート氏曰ク 扨叉タ貴國今般ノ老案ニ於テハ

本使日ク **ゕンスホー** キ 各國ノ望 ョリ之レカ請求アラハ我國ノ海岸不幸ニシテ良港芝 テ金國ヲ開キ貿易ヲ許スカ如キハ到底今日ニ行ハル ナクシテ實際ニ行 ・ヲ知レト ノ事ナラス然レト 我國ニ於テハ最早ヤ讓與スヘキモノナク而 ŀ ニ應ス、ヘキハ拙者ノ保證スル所 ・氏日ク モ尚精査ヲ遂ケ且ツ其他我國ニ格別ノ障 ハレ得ヘキタケノ事 左アラハ寔ニ可ナリ モ海港新開ノ件ニ至テハ若シ各 ハ如何ニモ ナリ シ

右申進候也
於是不使同氏ノ懇話ヲ深謝シ別ヲ告ケテ退ク

四月廿二日

森有禮

井上外務卿

十四年四月十三日改正條約案內議會筆記

Précis of an Interview at the Foreign Office on the 13th April 1881, at which were present H. E. Mori, Sir Julian Pauncefote, Sir Harry Parkes and Mr. Stuart Lane.

Mr. Mori to have say that he had no objection to sume the shape of a new treaty. discuss the clauses of the existing treaty one by sider that the most practical method would be at Lord Granville's suggestion for an unofficial exusefully be hardly any portion of the old treaty changes had been arrived at, the whole might asone, and that when a decision as to the desirable change of views on the Japanese treaties. Sir Julian Pauncefote stated that they had met but that in his embodied in a opinion new one. there would remain He understood Mr. Mori aswhich could He con-

in connection with the other treaty powers. Some necessary all through to bear in mind all the points the new treaties to be practically identical it was but it was pointed out that as England wished all the efficient working of the British courts in Japan, jurisdiction clauses, and great stress was laid on then commenced on the proposed changes in the jection was raised on this score. A long discussion should be referred to as more complete and no ob-Parkes suggested that the Austro-Hungarian treaty in some recent ones proposed which had passed in also pointed out that in the letters and especially there were alluded to as new treaties. But it was proposed revision not an essentially new treaty. H. E. Mori also criticized the action of the British was finally agreed that the form was unimportant Japan, the word revision was expressly used. Japanese Government handing in the proposals, sented to this, but repeated that his Government Harry Parkes remarked that in the letter from the whom it was admitted had very imperfect Courts. long as the result was reached. Sir Harry

freely. respectable people and that he could not safely taken only to issue passports to those known as results he named were owing tional court-facilities if the country were opened perience after about 4000 passports had been issued discussed, Sir H. Parkes contending from his exin cases of foreigners outside the treaty limits was very desirable. The general question of Jurisdiction the Consuls before houses could be entered was while Sir H. Parkes argued that the interference of cularly in cases of those caught in flagrante delicto, the powers of arrest should be very simple partiin some cases &c &c. more than one nationality, the difficulty of arrest of appeal the want of stipulated union between the Courts in several points as the absence of Courts trust mates and seamen of vessels; also that the those and that there would be no need of addito British subjects that offences and difficulties courts of different nationalities, were almost unknown as regards the holders of But he had to admit that the favorable Sir Julian Pauncefote said to the great care in cases affecting

pointed out that the Japanese Government would ditional arrangements would be required. It was Sir Harry Parkes agreed in. ese who required protections from foreigners. required to be protected from Japanese, but Japanstating that now it was no longer foreigners who Mori wound up this part of the discussion by that this state of things had died out, and H. E. the latter were endangered, and it was explained the Japanese and foreigners so that the lives of respect as natives. Sir Julian Pauncefote inquired were abandoned, and foreigners treated in every unconditionally until all extraterritorial rights be very unlikely ever to consent to open the country interior large numbers of foreigners were admitted into the so satisfactory. He had also to admit that in case results as regarded other nationalities were not to whether the old animosity existed between for mining or such purposes, special ad-

Sir Harry Parkes called attention to clauses 14 & 16 in the draft treaty of Commerce and Navigation and contended that it would be impossible to

such as the absence of trial by jury difficulties for to submit to a system in which the procedure was state of things foreigners could not be fairly asked Mr. Fukuchi) which explained that in from Nichi Nichi Shinbun (written it was said by laws were made known. He read a subject foreigners to the Japanese laws until such Japanese jurisdiction. It was pointed out that Lord no valid reason why foreigners going into the incontradictorily it appears) said that he could see fairly till the code was known as well as the new that it was impossible to consider the disappear under the new system, but both Sir Julian It was pointed out that these objections would all the same offence the absence of open courts, etc. &c. possibility of being tried more than once for essentially different from that known in Europe Derby had declined to admit this, but he still adterior should not voluntarily agree to submit to course of procedure. Sir Julian however (somewhat Pauncefote and Sir Harry expressed their opinion accused to get evidence and legal assistance long the present question

hered to his view, saying that in this way the working of the native jurisdiction would be seen.

Sir Julian then asked how a proposal would be received to defer the consideration of any jurisdiction changes till more information was obtained and to proceed to settle the other points in the treaty. Mr. Mori said that he could not reply to that, but that any proposal should be submitted to his Government, but that it was clear that as long as Extraterritorial jurisdiction remained in any shape, foreigners should provide proper Courts &c., and this Sir Julian cordially agreed in.

The discussion then turned on the administrative laws of Japan, which the new proposals specially declared to be binding on foreigners. Sir H. Parkes defended the old system at great length and said that he could not see what the Japanese Government would gain by changing it, as every Japanese regulation could be made binding on British Subjects under the Order in Council. He was shown in this was permissive, not obligatory, and that for instance, in the case of shooting regulations and

question of the Sanction of the foreign Ministers ment to their control. show instances of this, he named the quarantine curred. He said that it was impossible to expect to this, nisters in Japan would be to subject the Governand that to submit them officially to foreign Miwas any mention made of the administrative laws that nowhere either in the treaty or conventions really the essential difference, and Mr. Mori said laws.' It was then clearly stated that this formed formally ordered to obey the Japanese administrative and said hardly that 'British subjects can be be made British Law, on which Sir done at present, as any Japanese regulations could statement that all that was necessary gestion. positively been modified at Sir H. Parkes' own sugregulations. continually at short periods. Being challenged to foreigners to respect regulations which were changed quarantine laws, great trouble and delay had ocbut Sir Julian said that he supposed the Sir. H. Parkes then returned to his former When Mr. Mori replied that these had Sir H. Parkes did not reply Julian interposed could be

was referred to and that there could be no doubt whatever that foreigners were bound to obey native administrative regulations, unless of course these were obviously absurd. Mr. Mori said that the advice of foreign representatives in cases involving their subjects would be welcomed, and that for this purpose the regulations were generally communicated to them before they were promulgated.

the offer of Japan to bind herself is to a tariff for that the Japanese proposals Kennedy to the effect that Mr. Inouye had stated discussion Sir H. Parkes read a despatch from Mr. therefore England and even small powers, and should not identical with those existing in treaties between provements on the old treaty, and were generally 10 years was among others a great concesion, but respect, but Mr. Mori remarked that he considered could make their own counter-proposals in this contain any The draft of the Commercial treaty was referred It was pointed out that the clauses were imbe objected to. In the course of concessions, but that foreign powers did not pretend to the

> right to freedom of tariff was insisted on by all settlers in a foreign country should pay taxes, and sentations of foreigners in Yokohama. said this would give rise to meetings and reprehad to the claims to tax foreigners (Art. 14) and Colonies. Sir H. Parkes pointed out objections he wich Island and even was conceded to the British civilized nations however small such as the Sandconcession and Mr. Mori then pointed out that the posed tariff of 30 per cent in some Sir Julian said that he hardly looked on the proboth as a matter of fact and of principle. rents in the City of London. then he fell back on the argument that the present pointed out that it was universally conceded that land rents were sufficient, being as high as land This was disputed cases Ţ was

Several other points were discussed and at last Sir Julian said that he now thought it would hardly be worth while to go through the old treaty clause by clause and as the British Government had been asked through Mr. Kennedy to make their own counter-proposals it seemed the best

planations would be most useful to him. proposals most liberally. He was much obliged by emphatically that England would consider these what they could agree to, and that they Excellency's was for the British Government to frame with the these Kindness in coming and his proposals Japanese accord ones. He said as would try much as most

明治上 四年五 一月六日 井上外務卿宛森駐英公使ヨリ

獨、 公使ト打合セノ爲メ巴里出張ノ件

第拾五號

爲メニ改正ノ業ヲ妨ケ候様ノ事有之テハ我不利甚大ナルニ ヨリ別議ヲ起シ特ニ我内地ヲ開クノ件ノ如キヲ發言要望シ 商議ノ基本トナスノ前議ヲ一變シ此節ニテハ我國ヨリ提出 事由ハ前便追々申進候通條約改正件ニ付英國政府舊條約ヲ 本使儀去月廿二日巴里へ出張同月三十日致歸英候右出張之 改正新案ニ據リ談判スヘキ都合ニ相成居候得ハ若シ各國 リ之ヲ發言セシ メサルノ手段ヲ今日ニ盡スヲ緊要ト ·存候

> レニ甘服セシムルニ足ラサルカ故ニ尚其上ニ精鋭ナル論鋒(マトク)ト交換タルヘシトノ拒論ノミニテハ論鋒鈍ク外人ヲシテ之 右豫防ノ手段トハ從來多人ノ用ヒタル内地雜居ハ法權回復 青木公使ニハ昨今病氣中ニテ出張難相成趣申越セシニ依 卿へ差出候前ニ於テ本使へ尙充分內談可致ト 月三十日ニ差出候へ共未夕査閱ノ暇ヲ不得但シ其調ヲ外務 候處同氏ノ話ニパークス氏通商條約案ノ取調ハ旣ニ出來去 加ル所有之候ニ付追テ可及送進候 ストノ點是ナリ其趣意書既ニ一通り稿上候へ共今尚刪正 ヲ提出シ雜居ノ特典ヲ得ント欲スルハ實際不行ノ空望ニ屬 ヲ加ルヲ以テ須要トシ外國方ノ見ヲ以テモ亦タ今此ノ問題 スル事件差起リ本意ヲ果サス依テ書面ニテ一通リ 本使伯林へ相廻り可申卜迄存候得トモ其內至急ニ歸英ヲ要 一、本使歸英後早速外務省へ出頭ポンス 付右等ノ事専ラ關係有之在佛獨蘭三公使へ篤ト協議ヲ診 ホー 卜氏 ノ趣ニ有之候 八の面會致 中進置候 ル ヲ IJ =

右申進度如斯敬具

十四年五月六日

森 有 禮

上外務卿 殿

 ν 再伸前文巴里出張ニ就テハ種々認メ物等モ有之候ニ付 ーン氏弁島田書記生兩 人隨行為致候此段中添候也

二九 明治古電中三十日 井上外務卿宛

條約改正ニ對スル英政府ノ態度ニ關スル件

附屬書一 十四年七月二十六日發森公使來電 十四年七月二十日附森公使宛往電

十四年七月十二日附森公使ョリ英外務卿宛

四 來翰 十四年七月二十三日英外務卿ヨリ森公使宛

第貳拾貳號

英政府ヨリ別案提出(カウンタ **務卿ニ贈リ嘗テロ約アリシ別案提出ノ議ハ如何ノ運ニ至リ** 手セリ然ルニ先是七月十二日已ニ別紙甲號之通一書ヲ英外 締約諸國へ通知ノ有無ト日本在留英國公使東京ニテ商 金權ヲ受ケ赴任ノ期如何トノ兩件御問合之電報不月廿日接 ヤ暑中休暇前回答ヲ望ムト云タルコトアルニ依リ其答書 待チ爲メニ貴問ニ答ル ノ電信ヲ延引セシニ本月廿五 一プロ ポザ ル ノコト ヲ我 日 議 1

> 中裁判 二通共ニ商議之基礎トシ難シトスルノ理由明白ナラス 提出ノ條約草案ハ商議ノ基礎トシ得へキ者ニ非サルヲ以新 部ニ混交シー齊ニ拋棄ニ附セントスルハ我政府ニ對シ不友 テ提出セシ者タルニモ拘ラス一言ノ説明ナク他ノ故障アル ዻ タルカ前議頓ニ消滅シ今回來書中一言之ニ及ハサル 諸外國ノ意見ヲ問フニ方リ或ハ異議ヲ其間ニ容ル、者アリ 務卿ヨリ口約アリ故ニ切ニ其結果如何ヲ待シニ英政府ヨリ 一之二代ユヘキ別案ヲ取調へ出サントストノコト嘗テ英外 大略申進タレハピニ御承知ト存候(電文寫本號ニ添)抑我 至リ外務卿ョリ ノ部分ニ至テハ於我國充分精密ナル調査考究ヲ加タル上ニ <u>~</u> 關係ノ一部ヲ採取セサルハ其辭柄ナキニ非ルモ通商條約 ト勘考中ニ付時宜ニ依リ近日電信ヲ以御指令ヲ伺ヘキ事 | ノ措置ト云ハサルヲ得ス右ノ件一應英外務卿へ疑問可然 ヘシ且又我提出セシニ通ノ稿案ハ之ヲ却斥ストアリ ノ件肯諾シ難シト 別紙乙號ノ通返翰到來ニ付便チ電信ヲ以其 ・ノ意ヲ略陳アルヲ以我稿案中法權 ハ甚怪 來書 而此

英外務卿ョリ 中止シ考案ヲ轉シテ公使ヲ東京ニ派シ各國公使ト會同 口約アリシニモ拘ラス乍チ別案提出ノ議 シ 7

議ヲ肯諾セサレハ彼ヲシテ自ラ別案提出ノ策ニ出シム 彼到底我提出ノ通商條約ヲ採リ之ヲ商議ノ基礎トスル 結ハントスルハ彼カ本願ナルコト無疑レハナリ故ニ今後 我請求ノ程度ヲ減縮シ終ニ彼カ所欲ノ不公正ナル條約ヲ 回新案ヲ更出セシメー案出レハ則之ニ批難ヲ容レ漸次ニ 意見所在ヲ提出セス只我請求ヲ不可ナリトン我ヲシテ數 來或ハ彼カ術中ニ陷ラントスルノ恐アレハ決テ彼カ慫慂 彼不得已別案ヲ提出セントスルノ場合ニ及タル 商譲ノ基礎トシ難シトノ議アリシ時我ヨリ勉テ我提出案 出タルハ彼最其宜ヲ得タル者ト云ヘシ初メ我提出案ヲ以 改正ノ基礎ヲ定メンカ爲メ預先ノ商議ヲ開カントノ策ニ キ様周旋盡力致度存居候 ニ 應シ更ニ新案起稿ノ策ニ出へカラス何則彼未夕曾テ其 メ熟考スルニータヒ提出シタル約案ハ巳ニ擯斥セラレ將 シテ中止シ其効ヲ見サルハ質ニ遺憾ナリ就テハ我國ノ爲 レハ彼ヨリ別案ヲ出スニ若カストノ意ヲ述ヘタルニ依リ ノ不用ニ非サル事ヲ辯明セシ末暗ニ彼若シ之ヲ可トセサ - 今日ニ

英外務卿書中「歐洲締約諸國」 ニ關スル者ハ唯歐洲諸國ノミニ限リ南北米國及布哇支那 ノ語アルヲ以觀レハ本議

等ノ諸國ニ關涉ナキ事明了ト存候

候也 此段不取敢申進候尚右ニ付今後愚考ノ次第ハ追々可及稟啓

明治十四年七月卅日

特命全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

註 1及2夫《附屬書一及二

附屬書

十四年七月二十日附森公使宛往電

(英國政府ノ對案各國政府ニ送付濟ナルヤ等問合セノ件)

From Wooyeno to Mori

Japan? to Japan starts with full power Treaty Foreign Powers? Had counter proposal been communicated to all When English Minister to negotiate

July 20th 1881.

附屬書二

十四年七月二十六日發森公使來電

From Mori to Gaimukio

sion and propose preliminary Government; Granville rejects draft of treaty revi-Received yesterday a despatch from negotiation with all the British

a new basis of a treaty of commerce only. the Foreign Ministers Tokio in order to arrive at July 26, 1881.

註 十四年七月十二日附森公使發英外務卿宛往翰原文 譯文ハ五四文書附屬書一旣出

Copy

Mori to Granville

July 12, 1881.

My Lord,

revision of the treaties between Japan and Great letter of the 22nd of March respecting the proposal have the honor to refer your Lordship to my

made to me verbally, to the effect, that the subject Lord-ship of the assurances which have since been expressed wishes of Japan as far as these are conand in fact have vernment, and that counter-proposals, was under the serious consideration of H. M.'s to this communication, I venture to remind your Although I have not received any written reply been, prepared embodying the would be, Go-

> communicated to me. that these modified proposals would be shortly sidered reconcilable with those of this country, and

and uncertainty are more injurious affecting as they substantial progress may be made in the matter is in order to express my earnest hope that some Japan, do very seriously the fiscal and other interests of before your Lordship leaves London, foreign countries. If I now trouble your Lordship on the subject, it as well as her commercial relations with as the

I have the honor &. Ro

(Signed) Mori

附屬書四

十四年七月二十三日附英外務卿來翰原文

誈 譯文ハ五四文書附屬書二旣出

Foreign Office

July 23, 1881.

Monsieur le Ministre,

your note of the 12th instant, refering me to your previous letter of the 25th March relative to the I have the honour to acknowledge the receipt of

proposed revision of the Treaties between Great Britain and Japan, and expressing the hope that substantial progress may shortly be made in the consideration of the subject, as delay, you observe, is calculated to affect injuriously the fiscal and other interests of Japan as well as her foreign commercial relations.

While I fully reciprocate your feeling as to the desirability of proceeding with this negotiation as rapidly as possible, and can assure you that the efforts of Her Majesty's Government have been sedulously directed towards that end, I think I should correct the impression which may be derived from your letters under acknowledgment, that any delay, if such has occurred is to be attributed in any degree to Her Majesty's Government.

The receipt of the proposals of your Government formed as, you are aware, the necessary initiatory step in this negotiation, and those proposals which were invited by Her Majesty's Government in the middle of 1879 remained incomplete until I received on the 28th Feburary last the Table of Conventions

ground of agreement. desires to introduce into the existing Treaties and the difficulty of speedily arriving at a common provided for by the XXII Article of the British which extend far acter of with the European Treaty Powers who had received on Her Majesty's Government to exchange views Treaty with Japan have materially contributed to the same proposals, and I may add that, the char-Treaty of Friendship. It was obviously incumbent which forms a most important annex to the Draft the changes which your beyond the scope of revision Government

Thus in regard to the new system of jurisdiction to which it is proposed that British subjects in Japan should in future to amenable, and which forms almost the sole subject of the draft Treaty of Friendship, I may point out that the questions raised by your Government are of too wide and important a nature to admit of being treated without previous careful examination of the laws of Japan and the constitution and legal procedure of the Japanese Courts.

On these subjects Her Majesty's Government are still only imperfectly informed, and they have no means of judging how far the laws, which are believed to be under revision, and the practice of the Courts which do not appear to be regulated by any positive rules of procedure have been brought into conformity with the principles received by Western Nations.

For these and other reasons which I need not now detail Her Majesty's Government feel that they cannot accept the two draft Treaties proposed by your Government as a suitable basis of negotiation. But I am glad to think that those subjects which affect the fiscal interests of Japan, and which equally concern the commercial interests of Great Britain in that country, admit of being more easily dealt with

I trust therefore that if these questions be treated on both sides on the basis of reciprocal concession it will not be difficult to arrive at a satisfactory understanding respecting them.

With this view Her Majesty's Government have

Majesty's Representatives at Tokio to propose to placed themselves in communication with the Chamserve as the basis of the revised Treaties which accepted by all the European Treaty Powers should proved to be desirable. This agreement after being general agreement as to the essential amendments at that Capital for the purpose of arriving at a your Government to enter on joint preliminary and I shortly expect to be ed with the Tariff and other commercial matters bers of Commerce in this Country on points connectwhich they may severally consider most convenient Contracting Powers at the place and in the form might then be separately concluded by the various in the existing Treaties which experience negotiations with all the Foreign Representatives able to instruct Her

I have reason to believe that this plan of proceeding is concurred in by the various European Treaty Powers and as it has been prompted by the most friendly consideration for the wishes of your Government I trust it will proves acceptable to the latter, and be the means of bringing about a

mutually beneficial settlement of the question at

deration I have the honor to be with the highest consi-

Monsieur le Ministre (Signed) Your most obedient humble servant. Granville

==0 明治十四年八月五日 井上外務卿宛森駐英公使ヨリ來信

條約改正ニ關スル英政府ノ意向質問ノ件

附屬書 十四年八月二目發森公使宛往電 十四年七月三十日發森公使來電

第貳拾七號

寫爲念差進候也 條約重修ノ件ニ關シ英政府ノ意向質問之儀ニ付往復ノ電文

明治十四年八月五日

特命全權公使 森 有 禮

外務卿非上馨殿

附屬書一

候也 變セス徹底盡力可致覺悟二付於貴地モ內外一致彼是同論ヲ 主トシ前後表裏毫モ差遠ノ弊ナキ様御注意被降度不堪希望

明治十四年八月十二日

特命全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

註 1二一九文書ナルニ付参照

十四年八月九日附森公使ョリ英外務卿へノ書翰原文

London

My Lord, tion, that Your Lordship expected shortly to instruct marks on this subject, and especially the informa-Government the substance of Your Lordship's rethe proposed revision of the Treaties between your Lordship's note of the 23rd ultimo, relative to H. M's Representative I have the honor to acknowledge the receipt of Lat once communicated to my at Tokio to propose Japan

附屬書 十四年八月九日附森公使ョリ英外務卿へノ書翰

第貳拾八號

英政府ヨリ照會アリシコトハ機密信第貮拾貳號ヲ以旣ニ具 政府ノ意見所在ヲ確知シ其旨ヲ體シ慎密熟考ヲ加へ英政府 故ラニ其論旨ヲ混淆轉變シ兩國貿易ノ利ヲ進ルヲ以答辭ノ スル所ノ論點ハ財政上ノ要用ヲ補足スルニ在リトスルヲ彼 與ヘスシテ我提出ノ約案ヲ却斥シタルハ其辭理何處ニアル 書翰ヲ差出セリ其大意ハ則今回英政府ヨリ完全ナル解說ヲ 申セリ其後不使ヨリ發呈ノ電信ニ對シ御訓令有之ニ依リ彌 辯解ノ意ヲ含タル一書ナリ尤本使堅ク政府ノ意見之ニ外 主眼トシ以テ彼カ占取ノ利分ヲ大ニセント欲スルノ心術ア ルヤノ疑ヲ質シ殊ニ海關稅增加ノ儀ニ關シテハ從來我主張 ヤ又且彼ノ發題即東京會議ヲ要スルノ目的果シテ安クニ在 ヘノ照會ヲ起草シ尚ホ數回添削ノ上竟ニ不月九日別紙寫 シカ爲双方持論ノ撞着スル處合同ナラサルコトヲモ サ ヲ疑ハス前書 ルヲ信シ且今後ト雖トモ終始同一ノ目的ニテ貫通アル ノ新條約案却斥ト ノ通リ及照會タルコト 於東京各國公使會同開議ト ニテ尚此末方向ヲ 併テ ナ j

and Great Britain.

井上外務卿時代 對英交涉 Heren Council Second Second

十四年七月三十日發森公使來電

From Mori to Gaimukio

Japan you wish to know why draft Treaty of Cominstruct me to inform British Government that beexplanation as to British views. or counter-proposals and merce and Navigation is rejected without grounds fore entertaining the proposal for conference in Strongly recommended that You to demand preliminary immediately

July 30, 1881.

附屬書二

十四年八月二日附森公使宛往電

From Wooyeno to Mori

necessity they should propose preliminary conference with all the Foreign Ministers in Tokio. Treaty revision have been rejected and upon what British You are instructed to ask for Government upon what ground explanation of draft of

Aug. 2,

明治古堂人月十二日 井上外務卿宛 森駐英公使ョ

東京會議開催案ニ付英政府へ照會ノ件

附屬書

Japanese Legation

August 9th 1881.

joint preliminary negotiations should be entered upon at that capital between my Government and foreign Representatives for the purpose of arriving at a general agreement as to the essential amendments in the existing Treaties which experience had proved to be desirable.

My Government have instructed me to state that before expressing any decision on the proposal, they would desire to receive some elucidation on certain points, and to save time I therefore now submit them to Your Lordship.

In the first place my Govt. desire to be informed upon what grounds the draft Treaties submitted by them are rejected as a basis of negotiation.

Your Lordship, in the letter now under acknowledgment, asserts "that the character of the changes which my Govt. desire to introduce and which extend far beyond the scope of revision as provided for in the existing Treaty have materially contributed to the difficulty of speedily arriving at a common ground of agreement," and as an instance Your Lordship refers to the new system of jurisdic-

tion to which it is proposed that British Subjects in Japan should in future be amenable, and having stated that previous careful examination of the Code and procedure of the Japanese Courts is essential, your Lordship adds, that for these and other reasons which your Lordship did not consider it necessary to detail at the time, the two draft Treaties proposed by My Govt. could not be accepted as a suitable basis of negotiation.

It is evident, my Lord, that my Government are entitled to some additional information on this head. In the early part of the negotiations the general wishes of Japan, particularly as regards commercial matters, were explained at length. Briefly stated, they amounted to a demand for a resumption by my country of the rights and privileges which are inherent to every sovereign States, and which had been placed for a time in abeyance by the Treaty of 1858, Japan was subsequently urgently invited to specify her demands more full, and this was accordingly done, at the cost of considerable time and labour, in the draft Treaties referred

poses of discussion, while all idea of making position of having to announce that these draft wishes of this country, I am now placed in the and the full assurances received as to the good force at her Custom Houses. Notwithstanding this a much earlier period, in fact at any time since been put forward on more intelligible grounds, at other Treaty Powers are made, which might have new suggestions for conjoint negotiations counter-proposals is also apparently abandoned, and Treaties inite time, the maximum tariff which should be in expressed her willingness to fix, for a further defto; in connection with which my country moreover are considered useless even for the purwith

As regards the statement that the Japanese proposals extend far beyond the scope of the contemplated revision, I venture respectfully to demur to it. I see nothing in the Treaty itself or in the nature of the case, which limits the scope of the revision. In the true interests of both Powers, the revision should be searching and complete.

Japan naturally desires that at last her real necessities should be recognized; while Great Britain, as I firmly hope, must regard with pleasure any steps which, even if accompanied by some possible loss in money or in privileges to her traders, (though this apprehension I venture to believe to be visionary) would lead to the execution of a Treaty on which both Powers could look with satisfaction, as equitable and consistent.

The consideration connected with the comparatively slight application of the Japanese territorial Law to British Subjects appears equally to afford no solid grounds for the course adopted by H. M's Govt. Further information on the subjects would have been willingly afforded either here or at Tokio. The portion of the Code which it was proposed to apply to foreigners could have been exhibited, and any serious apprehensions as to the procedure of the Japanese Courts would probably have disappeared when on inquiry it had been ascertained that my Govt. had under consideration the appointment of well qualified judges or asses-

those therefore be looked upon, primâ facie, as objection-Great Britain and other countries and could not draft commercial Treaty are almost identical with subsequently on its own merits. The articles in the ly, leaving the jurisdiction matter to be considered could, under certain conditions, be treated separatepoints out, that the commercial and fiscal questions peared that the time had not yet come for H. M's sors, of European or American extraction, to assist in Japan, it is evident, as your Lordship indeed bilities connected with the administration of justice Govt. to be even partially relieved of the responsiwere involved. But even if on examination it apat all cases in which the interests of foreigners to be found in Treaties existing between

I am therefore unable to present to my Goyt. any substantial grounds for the total rejection of its proposals even as a basis of discussion, and still less for the absence of any expression of opinion in the shape of counter-proposals or otherwise, in return for the candid exposition of their own de-

mands. If there is anything unreasonable or inequitable in these demands, let it be pointed out; but a curt rejection without explanation is not at first sight any indication of progress towards an early and satisfactory settlement.

ing the natural order of things. Japan has made settled (separately) by Japan and the other Powers. ing at a general agreement, the details to be then This latter course would in my opinion be revers-Conference should be held for the purpose of arriv-Lordship, on the other hand, suggests that the between Japan and the several signatories. principles of the Treaties had been agreed upon the Powers might appear to dash, after the general consider that a conference might be useful in adship, I am entirely unable to comply with. plained. prompt the proposal for a conference, mit to Your Lordship relates to the grounds which justing details as to which the interests of any of necessity for which my Govt. wish should be ex-The next question which I am instructed to sub-This request, until assisted by your Lordthe present Your

ponsibility in connection with it than any other the present Treaty she has naturally a graver resimmediately followed the United States in making than any other; but from the fact of her having that country more important relations with Japan the case as regards Great Britain. Not only has necessary, to look to each Power for its individual of Japan will be also supported by Great Britain. provisional Treaty. I sincerely trust that the rights commercial matters, enjoyed by my country, and have lately, as regards since recognized that similar freedom might to be the Treaties were intended to possess, many year ments, and knowing the temporary character which value of complete freedom in their internal arrangetreatment of her proposals. But this is especially ires, unless a different course can be shown to be Conference. be increased nor lessened by the But in any case her responsibility would neither her Treaties with each Power separately, and des-The United States, feeling themselves the It is of course well known expressed this opinion in a action of any to my

> evil, almost entirely to her action. fied by the other Powers at a Conference, my counthe views of Great Britain were adopted or modisome other form. I firmly hoped, of doing justice to my country in the Japanese proposals, but with the intention, as ing at least several of the other Powers to reject Govt. that H. M's Govt. took the initiative in movwhich your Lordship may favor me. municate any explanations on the subject with ence as proposed, though I shall be happy to comtry would naturally attribute the result for good or recognize the present necessity for a Confer-In any case, however, I cannot therewhether

Reverting now to the remaining remarks in your Lordship's letter I feel bound to state that I cannot to the view that the delay in the revision of the Treaties is attributable rather to Japan than to Great Britain. I do not consider it important to examine whether or not the absence of the annex to the draft Treaty containing a table of Conventions which were necessarily within the knowledge of the British Foreign Office, or the interchange of

when the national position is no longer supportable, action on the part of most of the Powers. Now she appeals to Great Britain to make no further her wishes have been persistently met by dilatory apparently assured by the conditions of the Treaties, ing of foreigners. shake the confidence of her people in the fair dealeffect of the Treaty of 1858. Conference was made. afford reasonable grounds for the long period which a Treaty based on terms of equitable reciprocity. delay in consenthing to her legitimate demands for promote frequent miscarriages of justice, contributed to retard her fiscal development, however faithfully adhered to them, though they engagements, for a long series of years. remarks of my predecessor as to the incipience and months, but of years. I will not now repeat Japan has suffered has been one not of weeks, or many respects, suffered incalculably from her Treaty elapsed before the present suggestion for between Great Britain and other But from 1872, when relief was The delay from which My Country has, in She Powers, and to has the to

essentially intercourse of Japan, should be amended. And in connection as regards the working of the administrative Laws at least the existing state of things, particularly considered. But if the proposals are not entertained, of a portion of their grave responsibility has to be ed as to be practically unavailable, and in the case with this it should not be forgotten that a the proposal of my Govt. to relieve foreign Powers of some Countries the judges are utterly incompeof Appeal are either non-existent, or so far remov-Witnesses may no common action between the various sdiction is merely a burlesque of justice. out a proper system of justice as regards foreignthat some effectual steps should be taken to carry tent. It is in comparison with such a system that than the Courts of their own nationality. Power has its own Code and As regards the jurisdiction question, Japan insists At present in many instances consular juridependent on the establishment of a between Japanese object to give evidence in other prodedure. and foreigners There Courts. Courts

proper system of administering justice of for no rational statesman would consent to an extension of the present deplorable state of things, now fortunately limited to the Treaty ports.

tances of her condition and proved by experience is not aboundantly justified by the altered circumsprohibitory, duties. own Exports are charged with exhorbitant, or even time by fixing an Import Tariff without demanding the interests of their own, has declared her readiof other independent countries can effectually foster people that nothing short of fettering the commerce as a substantial concession to the opinion of some condition of savage barbarism. Japan, moreover, to nations which a few years since were in a colonies, to states under her Suzerainty and even less than is accorded by Great Britain to her own As regards commercial matters Japan asks for met in an equitable spirit by Great Britain there reciprocal terms from countries in which her to waive her freedom of action for a further not only desirable but necessary. The demands (sic) nothing that If Japan

should not be a case of bargaining, and none dered necessary in the present state of affairs. view, viz, the speedy conclusion of Treaty arrangeference Your Lordship alludes to the concurrence may be useful in adjusting details and in removing out is of secondary importance, and a conference the form in which the arrangements are carried the other Powers will be equally just. is every reason to believe that the disposition of ments embodying all such conditions as are renwill be found to exist as to the aim to be kept in revision negotiations can best be carried on, none ences of opinion as ica. I trust, my Lord, that even if there are differany of the other Treaty Powers in Asia or Amer-Japan has most important relations, or indeed of the United States or China, with which countries to propose diffiulties by proper explanations. however that H. M's Govt. have not the intention of the various European Treaty Powers. observe that the exclusion from such Conference of in referring to the preliminary Conto the form in which the Lastly, I would In that case I assume

express their own views. Japan has already done so in the most candid manner, and expects to be met by Great Britain in a similar spirit. To this end, I now venture to request an explicit statement from Your Lordship on the points, which, under the instructions of my Govt., I have had the honor to submit.

I avail myself &c

(signed) Mori

一十一 明治古天月十九日 非上外務卿宛

コロン萬國公法會議ニ英人雇書記官派遣ノ件

スルノ方法ヲ謀ルヘキ見込ノ處恰モ威仁親王殿下英女皇ニ御電達ノ趣ニ從ヒ該會ニ参場間接ニ我國ノ權威利益ヲ捗進本年於コロン萬國公法會議開場ノ節本使參會ノ儀ニ付銀テ機密信 第三十二號

一名參席爲致タリ於該會英國公法家「トウヰス」氏演說ス

ニ會シ不得止本使出張見合セ雇書記官「レ

及依賴置タルニ付近便可差進候也幾點ニ關シ公法家ノ着目ヲ以意見書取吳トノ旨過日同氏へ終點ニ關シ公法家ノ着目ヲ以充分盡力可致心得ナリ現存條約中恰當ノ機會ニ付必ス我國ノ爲メ利益可有之ト信用シ尙此上へ出日本領事裁判論別冊御一讀ニ供ス右ハ我條約重修ノ際

明治十四年八月十九日

特命全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

註 トウヰス氏ノ別册日本領事裁判論見當ラス

||||| 明治十四年九月九日 井上外務卿宛

機密信 第三十五號

號ヲ以具甲セリ爾來彼ノ答言何ノ點ニ出ルヤヲ待チ今日ニニ訓令ヲ奉シテ英政府ニ照復シタル事ハ旣ニ機密信第廿八基本トシ得ヘカラス排斥ストノ事照會アリシニ付不使更選キニ我政府ヨリ提出セシ新條約稿案ハ於英政府之ヲ窩議

我照復ノ論理ヲ排撃セント謀ルハ蓋シ疑フヘキニ非サル 置ノ不當ナルヲ論シ且彼ヲシテ既發ノ擯斥ヲ今日ニ豹變シ 以テ我約案ハ遂ニ受收セラレ得サ 邦ニ對シ最モ好意ヲ存 使ヨリ照復ヲ贈リタルノ後ハポンスフオト氏ノ 更ニ之ヲ採取 モ思フニ彼カ前日ノ照會ニ基キ尚ホ其論旨ヲ擴充修飾シテ 孤立以テ世界擅威 道ヲ以相待スル所 リト是ニ由テ觀レハ今ヤ彼專ラ答辯ノ論柄ヲ考究スル者 好果ヲ得ヘカラスト判定シテ寧ロ可ナルニ似タリ況ヤ我照復ノ論理ハ正當ナルニ拘ハラス十ノ八九マテハ直 如シ 欲セス故ラニ此談ヲ避ケントスル クス氏ハ近頃頻ニ英外務省ニ出頭シ本件ニ關シ取調 二我邦 ij 陷ル ハハ外交目 一月ヲ開 事無キヲ要ス 然擯斥セラル 中央テ如何ハ未夕之ヲ今日ニ察知シ得スト雖ト 七 シメントスル スレ ノ英國政府 ノ外ニ在リテ他ニ黨與ノカヲ賴ム事 : 尚ホ淺ク歐米各國五ニ敬 富ナルニ拘ハラス十ノ八九マテハ直接 セル人 1 モ `` Ź ニシテ尚ホ話頭 ハ到底可望モ不可期ニ屬ス故 ニ向ヒ其約案ヲ擯斥シタル措 タ答書ヲ得ス因テ本使熟考 Ħ ル者ト預想シテ可ナリ --方り ノ色アリ又側ニ閉 決シテ狼狽 重叉ハ親信ノ交 ベノ本件 /如キ平生我 衽 三涉 チョ クパ ヲ ル X ス

> ス公然約案回 ゚ゝ 假惠シタル所ノ保管ハ他日ノ商議ニ臨ミ尚ホ之ヲ脱スル能 後新ニ商議ヲ始ムルヲ得ルニ在リ セントスルノ患アリ ハ假令約案ハ既ニ擯斥ニ附 ル ハ 題シタル事ハ都合ニ依リ取消スト云主意ニシテ其歸スル處 國威國權ヲ維持張進スル 政府再と擯斥ノ蘇柄ヲ弄呈スルノ時ニ方リ我 我約案採受セラレサル 自由 ス彼レハ則此旣廢ノ約案ヲ引用シ自ラ已ヲ利スル 唯我ヨリ未夕嘗テ何等ノ稿案ヲモ出サ 7 地位ヲ囘收スルニ過キス爲メニ利スル所 **光ノ事ヲ發言スルヲ以至當ノ理トス且是レ** ノ情勢旣 ノ道ナリ セラレタルモ其約案ヲ以一タヒ 二如 抑囘收ノ策タルヤ 若シ公然囘牧ヲ告ケサレ クナレ 、リシ時占有シタ ハ久ヲ經ス英 ハ機會ヲ失 ハノ者ハ今 ノ具 一度發 1

ノ意向如何ヲ紬察スヘシ是レ我政府ノ擧止約案囘收ノ事公告ノ後我須ク暫ク一言ヲモ IF. 期限内ニ於テ現存條約中最モ改正ヲ要スル條項ヲ商議修 ルト我所欲ノ公平ナルトラ覺ルニ至ラハ則彼ョリ 自ラ危惧ノ心ヲ抱カシムルノ策ナリ彼若シ我決心 ス ノ暇ヲ與ヘ且同時豫防ノ術ヲ施シ彼ニ カシムル敷將夕否ラサレハ我ヨリ彼二一ケ年許 止ヲ重 酸セス 告ルニ クシ彼ヲシ 只英政 シテ更 若シ不 ラ堅確

敢テ卑見ヲ陳呈ス切ニ御熟思アラン事ヲ希望イタシ候也ノ措置ヲ計畫預備アラン事ヲ請フハ頗ル有益トス仍テ玆ニヲ慮リ書信或ハ電信ニテ啓報スヘシト雖トモ今ニシテ將來ヲ成リ書信或ハ電信ニテ啓報スヘシト雖トモ今ニシテ將來

明治十四年九月九日

特命全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

|||四 明治古四先月二十日 森駐英公使宛(電信)

條約改正ニ對スル英政府ノ態度ニ關スル件

Inouye to Mori

Judging from the tone of correspondence between yourself and Granville, I now perceive certain change being effected in the disposition of British

> you to should constantly consulting Aoki and I authorize with him. Government, and I have reason to believe it. Germany professes to act in the interest of Japanese because it appears directed to tariff matter only. I cannot accept Granville's on this point. Report fully if movement known. influence of Parkes. from British Foreign Office seem wholly under the tion of British Government. Despatches to you from his friend in Foreign Office regarding intenilar to private communication received by Kennedy revision dated 23 July not so favorable and dissim-Government. to act go to Berlin if you in harmony (以下渔器) Granville's reply regarding You should keep close watch and better understanding reply as think it necessary so satisfactory, Treaty You

Sept. 20, 1881.

二二五 明治士四美月二六日 森駐英公使宛 井上外務卿ョリ

法權問題ニ關シ訓令ノ件

機密 第廿六號

御盡力有之度候也

「大號」の名書翰トグランピル氏ョリ貴官宛差越シタル書名を「大」の名書翰トグランピル氏ョリ貴官宛差越シタル書

明治十四年九月廿六日

樣至急青木公使へ御通知置被下候テ獨政府ヲシテ惡シキ 英外務卿へ御差出ノ寫共昨日落手著々一讀致シ候本文申 詳細ノ御答ハ熟讀之上後便差出可申 感動ヲ生セシメサル様御預防被下度候尤此 テ 有効ノモノニ致シ度獨政府企望スル所粗其點ニ有之候就 ヲ各公使異議ナク外人へ遵守セシメ彼等ノ領事裁判所ニ シ居中候故責テハ諸行政、地方、及ヒボリス等ノ諸規則 述候如ク最初我草按通り法權ノ幾部分ヲ回復シ我裁判所 再白機密信第二十八號八月十二日附ノ貴翰幷八月九日 於テ施行候目的ハ歐洲各國於テ最早同意ハ無覺束ト信 相考候故獨政府ヲシテ其目的ヲ混雜セシムル ハ英外務卿へ御差出ノ書面ハ獨政府へ廻通スルハ必然 候 書翰ニ對スル ノ憂無之

(以下省略)

註 1及2夫々**五〇**及**三五〇**文書

在英森公使へ機密信案

草案ヲ大抵諸方拒絕候樣被考候ニ付此上ハ最早致シ方無之 有之候就テハ今般別紙(乙號)之通青木公使へ申遺シ同公 成不苦候將又別紙(丙號) 貴官伯林へ御立越可相成要用モ有之候ハ、何時ニモ御越相 シ候故篤ト御中合被成候テ満手ノ順序御立被下度候右ニ付 リノ來信ニ據レハ獨政府ハ可ナリ其目的ニ可有之樣推察致 則ハ彼等ノ領事裁判所ニ効力ヲ有シ候様致シ度害木公使ヨ ルフェリング」スル事ナク外國人ヲシテ遵守セシメ其諸規 只行政諸規則、地方、丼ニ警察規則等ヲ各公使ノ「イント 細右ニテ御承知青木公使ト速ニ御協議御打合有之度事ハ我 使ニモ十分右ノ方嚮ヲ捗達候事ニ盡力可致儀ニ有之候間委 權ノ事項ニ於テモ幾分カ我請求ヲ貫徹セシメ候方ノ意嚮 於テハ然ラス別紙(甲號)青木公使來信中ニモ有之候通法 基礎ヲ定メ商議可及トノ旨趣ニ有之様被存候處獨國政府 通商ニ係ル事件ノミハ東京駐在各國公使ト共ニ別ニ改正 趣ニ據レハ英政府ハ我法權ニ關スル請求ヲ拒絕シ單ニ稅則 理公使ケネデー氏へ送り越 シ タ 條約重修一件ニ付貴官ヨリ御申越且ツ英外務卿ヨリ書翰 ハ英外務省中ノ一親友ヨリ英代 ル書翰 ノ大意ニシ テ 別紙 -

5 及6 夫々二二一及同附屬書三 及4見當ラス

三六 明治古堂十月十 四日 **并上外務卿** 宛ョ

英外務卿宛書翰ノ語氣ニ關スル件

附屬書 東京會議二付英國政府ト交涉振二關ス 十四年十月一日發森公使宛往電 N

- = 答ノ件 十四年十月十四日發木村公使來電 東京會議及法權問題等ニ關シ英政府ヨ IJ п
- Ξ 十四年九月五日附在本邦英代理公使へ 訓

機密信 第卅九號

右ハ於東京ノ御想像ニテ過鏡ナリトセラレ **覧後差出サレタル訓令到達迄見合スヘシト** 會ハ銳尖ニ過クルノ疑アリ因テ將來ノ着手ハ閣下該照會御 條約一件二付去ル八月九日不使ヨリ英外務卿ニ贈リタル レトモ本使實施ニテ目視ノ事勢ニ應シ故ラニ意ヲ用ヰ强鋭 ノ筆鋒ヲ振ヒ彼ノ堅城衝突ノ策ヲ試ミタル者ハ是レ豫メ其 ノ電報落手セリ シハ御尤ノ事ナ 照1

> 開胸以テ我論旨ノ正當ナルヲ認識セリ故ニ果シテ本使豫期 輪ヲ偵問セシメタルニポンスフヲト氏ノ如キハ同人ニ向ヒ 理ヲ銳說シタルナリ此三種ノ効驗ヲ見ルヘキ豫算アルカ爲 行スヘカラサルヲ知ラシムル事第三英政府殊ニリベラル黨 タシ候也 今後於貴地モ同一ノ目的ヲ以御處置アラン事吳々モ切祈イ ニ遠ハサル多少ノ メ堅强ナル照會ヲ贈リ其後レーンヲシテ密ニ外務省中ノ内 テ之ヲ嘉稱スルノ實質アルヲ以故ラニ彼ノ意ニ抗對シ我條 政府ハ假令敵國タリトモ守正不動ノ決意アル國ニ逢ヘハ反 將來英政府ヲシテ從前ノ壓迫政略ハ日本ニ對シ永ク之ヲ施 會ニ依リパ 効ヲ奏スルヲ得ヘキ心算アレハ也即豫算 クス氏へ附與ノ訓令幾分ノ更正アラン事第二 効能ヲ收ムルヲ得ヘシト信用致居候ニ付 ノ効能ハ第一此照

明治十四年十月十四日

於 偷 敦

特命全權公使 森 禮

外務卿井上馨設

2 附屬書一 1 五四附屬書ナルニ付参照

(追申省略)

(東京會議ニ付英國政府ト交渉振ニ關スル件) 十四年十月一日發森公使宛往電

From Inouye to Mori

my letter fully touching subject. will receive. stance of Granville's reply to that letter when you too sharp. Doubt your Delay further steps till you will receive letter to Granville 9 August rather Telegraph sub-

Oct. 1, 1881

1 五四附屬書三參照

附屬書一

(東京會議及法權問題等ニ關シ英政府ヨリ回答ノ件) 十四年十月十四日發森公使來電

From Mori to Gaimukio

admit possibility of meeting Japanese views regard-Government. Granville repeats that delay no faned of British ing administrative laws, and of having new Treaty. Their instructions to Kennedy dated 5 September Refers you to Kennedy for specific reply. Defends the proposal for Conference Granville's reply. Entirely concili-

> Disclaims responsibility of urging other Powers to in Tokio on the ground that Japanese Government almost directly. reject Japanese proposals Parkes expected to start the defects and invites suggestions for alternations. wished negotiation there. Defends consular jurisdiction as regarding British subjects. Acknowledges

Oct. 14, 1881.

附屬書三

十四年九月五日附在本邦英代理公使へノ訓令

No. 106.

Earl Granville to Mr. Kennedy.

Foreign Office,

(No. 62.)

September 5, , 1881.

draft revision of the Treaty between Japan and posals of the Japanese Government relative to the Friendship, to which a Memorandum and observa-Britain which were forwarded to you by the Japa-Her Majesty's Government have received the pro-Treaty and which Minister for Foreign Affairs on the 6th July, relating to jurisdiction are attached, and a of Commerce and Navigation. consisted of a draft Treaty of

Table of Conventions which was required to complete these proposals, and which was delivered to you by the Japanese Minister for Foreign Affairs on the 21st December, 1880, was received here on the 28th February 1ast.

Her Majesty's Government willingly entered on the consideration of these proposals in the friendly spirit which they have always entertained for the Japanese Government, and they at once placed themselves in communication with all the European Treaty Powers to whom the Japanese Government have addressed similar proposals, with a view to facilitate a common understanding, which is essential to the attainment of the objects aimed at in the revision of the Treaties.

The conditions under which a revision of the existing Treaty between Great Britain and Japan may be demanded are stated in the XXIInd Article of that Treaty, which provides that "either of the High Contracting Parties may demand a revision thereof on or after the 1st July, 1872, with a view to the insertion therein of such amendments as experience shall prove to be desirable."

be conducted at Tôkio, Her Majesty's Government Japanese Government to state the amendments inary communications, that the negotiation should the Japanese Government, until 1878; and on the but that those Ambassadors, owing to a change of Her Majesty's Government were quite prepared to which they proposed to introduce into the present at once assented to that course, and invited the latter proposing, after the exchange of some prelim-The question was then deferred, on their arrival, to proceed with the negotiation. view on the part of their Government, declined, who were sent to England for that purpose in 1872; enter on the revision with the Special Ambassadors The Japanese Government will remember that by the desire of

Those amendments, which have taken the form of the two draft Treaties above mentioned, do not appear to be in accordance with the stipulations of the abovementioned Article, as they are not confined to a scheme of revision, but contemplate, in effect, the entire abrogation of the Treaty, and the

substitution of two new Treaties, differing widely from the former in several fundamental respects.

The conditions proposed in those draft Treaties would materially affect the position of British subjects in Japan. Their ex-territorial privileges would be largely curtailed, they would be deprived in a great degree of the administrative and judicial protection of Her Majesty's authorities in Japan, and they would be subjected to two concurrent systems of jurisdiction—one British and the other Japanese—which are not likely to work harmoniously, and are calculated to occasion greater difficulties than those which the Japanese Government seek to amend.

The commercial interests of British subjects would also be seriously prejudiced by some of the rates in the Tariff proposed by the Japanese Government, which are obviously too high to admit of that healthy extension of trade which it is so desirable to encourage for the benefit of both nations.

Her Majesty's Government also observe with re-

sary so long as the country remained in an unset-Japanese Government also propose to continue to foreigners tled condition. While continuing to withhold from and trade in the interior, which were only necesto maintain the existing restrictions on travelling some of the rights secured by the old Treaty, and but propose, on the contrary, to deprive them of offer to make any new concessions to foreigners, cluded in 1858, the Japanese Government do not made by Japan since the present Treaty was congret that, notwithstanding the remarkable progress taxation been subject, and to impose upon them additional ground-rents, to which the former have hitherto levy the exceptional charges, in the form of high the same privileges as natives,

Her Majesty's Government feel, therefore, that they cannot accept these draft Treaties as a suitable basis of negotiation for revision. They consider that the questions raised by the Japanese Government in regard to jurisdiction—which forms almost the sole subject of the Treaty of Friend-

inary negotiations at Tôkio. local administrative laws and police regulations under revision, and also of the constitution of treated without the most careful examination of ship-are too wide and important to admit of bing this will best be effected by means of joint prelimground of understanding, and they believe that that it mercial Treaty, Her Majesty's Government trust to many affecting foreigners, and probably also in regard cedure. their Courts, and the character of their legal prothe Japanese laws, will not be diffcult to arrive at a common But with respect to the enforcement of of the subjects treated of in the Comwhich are now believed to bе

Her Majesty's Government will therefore instruct their Representative at Tôkio to enter into joint preliminary negotiations with the Japanese Government and the foreign Representatives at that capital for the purpose of arriving at an agreement as to the essential amendments in the old Treaties which experience has proved to be desirable, and which, after being agreed to by allt he European

Treaty Powers, shall serve as the basis of the new or revised Treaties. Those Treaties might then be separately concluded by the various Contracting Powers, either at Tôkio or in Europe, as they may severally judge most convenient, and might take the form either of new Treaties, or of Conventions supplementary to the existing Treaties, according to the wishes of the respective parties.

for the revision of the Treaties has been prompted proposed plan of proceeding with the negotiations patch to the Japanese Minister for Foreign Affairs, will therefore communicate the terms of this destheir respective Representatives at Tôkio. in conformity therewith will be issued by them to the European Treaty Powers, and that instructions of believing that the above views are shared by ceptable to the Japanese Government, and be in-Gavernment confidently hope that it will prove acgiven to the Japanese by the most friendly consideration that could be and you will obrerve to his Excellency that as the Her Majesty's Government have the satisfaction proposals, Her Majesty's

strumental in effecting a satisfactory settlement of the questions at issue.

I am, &c.

(Signed) GRANVILLE.

二二七 明治古四年月十四日 森駐英公使ョリ

條約改正ニ關スル英外務卿來翰送付ノ件

→四年十月十二日附英外務卿ョリ森公使へ→四年十月十二日附英外務卿ョリ森公使へ

機密信 第四拾貳號

急キ及呈送候尚後便委詳可申進候也郷信發ニ臨ミ匆卒稿成ニ付未夕疎遺アルヲ免レサレトモ差相成タル事ト存候間右ニ關シタル覺書別紙添供御一覽候尤越モ有之右答書ノ大意不取敢電信ヲ以及通報候ニ付御解了越モ有之右答書ノ大意不取敢電信ヲ以及通報候ニ付御解了外務卿ヨリホ日別紙寫ノ通回答落手セリ因テ兼テ御電令ノ條約重修ノ件ニ付八月九日本使ヨリ差出タル照會ニ對シ英

明治十四年十月十四日追戸電文寫爲念差進候也

井上外務卿時代 對英交涉 1111七

特命全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

註 前掲二二六文書参照アリタシ

附屬書

十四年十月十二日附英外務卿來翰

Foreign Office Oct. 12, 1881

Monsieur le Ministre,

your note of the 9th of August in which you inform Treaties which experience has proved to be desiraagreement as to the amendments in your Government and the Foreign Representatives inary negotiations should be entered on between the grounds upon which it is proposed that prelim-Government as a basis of negotiantion, and also by them have grounds upon which the draft Treaties submitted July, you have been instructed to enquire the the substance of my note to you of the 23rd of me that, having communicated to your Government I have the honour to acknowledge the receipt of for the been rejected by Her Majesty's purpose of framing a the existing

ceptable to all the Treaty Powers.. of arranging a basis of revision which shall be acnegotiations with your Government for the purpose also instructed Her Majerty'r Chargé d'Affaires to revision, afford proof of the desire of Her Majesty's Governby your Government, as a basis of negotiation for Foreign Representatives at Tokio into preliminary Article XXII of the Treaty of Yedo of 1858, I have ment to proceed without delay with the the revision of existing Treaties. But in order to decline to accept the two draft Treaties proposed the grounds upon which Her Majesty's Government ed Her Majesty's Changé d'Affaires at Tokio to explain to the Japanese Minister for Foreign Affairs In reply I have to inform you that I have instructenter at once, in accordance in with conjunction with the the provisions of work of

I enclose a copy of these instructions which answer generally the enquiries you have addressed to me; and I hope you will concur with me in the opinion that it is inexpedient to enter into any detailed discussion at the present time on the nu-

merour points which you raise in your note under reply. I desire however to state that I am unable to concur in the statements and views expressed therein respecting the provisions of the existing Treaties and their practical operation.

ments specified in the Table are either to be proposals, as the draft Treaties declare that all the which was received only on the 28th February last, submitted by your Government, and the table of with the Japanese Ammbassadors who were sent Government cannot be charged with any dilatory existing Treaties, Conventions and Formal Agreewas indispensable to the consideration Conventions forming the annex to those Treaties, were the first definite proposals that have since been the negotiation. The draft Treaties of last bassadors, on their arrival, declined to proceed with 1872, and were disappointed to find that those Amto England for the purpose of conducting it in They were quite willing to enter on the revision action in regard to the revision of thore Treaties. I may also again point out that Her Majesty's of those

rogated or confirmed to the extent therein mentioned.

The period which intervened between the receipt of that table and my note to you of the 23rd July can scarcely be regarded as an unreasonable time to give to the consideration of the extensive modifications of the existing Treaties proposed by your Government, and which have occupied their attention for several years.

With respect to the proposal that preliminary negotiations should be opened between your Government and the Foreign Representatives at Tokio, which you appear to regard as a new suggestion, and of questionable necessity, I should remind you that that proposal was made by Her Majesty's Government in compliance with the wishes of your Government that the negotiations for the revision of the Treaties should be conducted at that Capital.

Your reflections on the Administration of the exterritorial jurisdiction exercised by Foreign Governments over their nationals in Japan cannot be justly applied to the Judicial system maintained

those with great care and heavy cost by Her Majesty's Government. Under that system, substantial justice can always be secured in suits or complaints preferred by Japanese law or regulation which British subjects are bound to observe can be effectively enforced in the British Courts. The system of exterritorial jurisdiction is no doubt attended with inconvenience in certain cases; but it must remain a necessary condition of the relations between Western nations and those of the East, so long as their judicial systems are widely dissimilar.

Your Government have themselves recognised this principle in framing their Treaty with Corea, and have embodied therein the same provisions as to exterritorial jurisdiction as those of which you complain in the existing Treaties between Japan and the Western Powers.

It is true that you point to certain reforms in the procedure and constitution of the Japanese Courts which, you observe, your Government have under consideration with the view of removing existing objections to the submission of foreigners

to Japaneses jurisdiction to the extent named in the Japaneses proposals. But Her Majesty's Government are at present without information as to these reforms. I should have been happy at any time to have received explanations on this subject either from your Government or yourself, and I need not add that whenever it suits the convenience of your Government to communicate them they shall receive the attentive consideration of Her Majesty's Government.

In conclusion I must divert to the statement contained in your note that Her Majesty's Government took the initiative in moving at least several of the Treaty Powers to reject the Japanese proposals. This is a misapprehension which I desire to remove. Her Majesty's Government have simply interchanged view with the other European Treaty Powers on the subject in accordance with a previous understandings, and they have found that the other Powers while entirely sharing the friendly feelings entertained by Her Majesty's Government towards Japan, all coincide in the opinion

that the proposals of your Government cannot be accepted as a basis of negotiations for the revision of the Treaties.

I have the honour to be with the highest cosideration,

Monsieur le Minister
your most obedient
humble servant
(signed) Granville

Justice^(sic) Mori

附屬書一

書課文書課文

ヲ唱ヘサル所ノモノハ卽チ英國於テ至當ノ事ト許容シタリ抑森公使ノ書翰中ニ陳述スル所ノ事件ニ對シ答書中ニ異論

辨解セハ却テ害ヲ釀成センコトヲ恐レ之ヲ省略シタルカ芸 衆國ニ對スル狀態等是ナリ答書中此等ノ諸點ヲ逐一論スル 約ノ箇條ニ據ル可カラサルノ論點第三本件ニ關シ英國カ合 第二新ニ設クヘキ法方ハ至當ノ趣旨ニ基キ必スシモ現行條 タル論辨ト語勢ハ左ノ諸點ニ關シ益々重要ニ渉リタルモ 此意見ニ依リ觀察スルトキハ八月九日附ノ書翰中ニ使用 シ此二點ニ外ナラサルヘシ コトヲ廢止シタルハ論辨スルノ手段ナキカ否ラサレハ之ヲ スルヲ得ヘク且ツ表面ヨリ云へハ辯駁シ難キモノタリ 論シ或ハ拒絕セサル所ノモノハ少クモ之ヲ執テ論辨ニ使用 如シ卽チ第一所爭ノ論點ヲ双方各自別々ニ議スヘキコト 政府ノ緊要ナル交渉事件ニ關繫スルトキニ當リ彼ヨリ ハ斷了シ難シト雖モ我ヨリ確然發論スル所 ハノモノ特 = 3

體ニ爲スコトヲ得ルニ足ルヘシ或ハ英國政府ニ於テハ日本へ各國公使ト聯合シテ日本政府ト共ニ共同豫議ヲ開クヘキコトヲ發言スヘキ旨ヲ指令セルノミ此指令ノ意味ハ會議ノコトヲ發言スヘキ旨ヲ指令セルノミ此指令ノ意味ハ會議ノコトヲ復言スヘキ旨ヲ指令セルノミ此指令ノ意味ハ會議ノコトヲ復括シガルの主義ニ殺題シカルの言がランウヰル」侯ノ書翰ヲ閱讀スルニ曩ニ發題シタル會「グランウヰル」侯ノ書翰ヲ閱讀スルニ曩ニ發題シタル會

政府カ合衆國淸國等ノ國々ヲ入會セシメンコトヲ明ニ主張以府カ合衆國淸國等ノ國々ヲ入會セシメンコトヲ明ニ主張政府カ一時ハ論談ノタメ森公使へ示酷タ有ルヘキ事ニシテ內實信用スルニ足ルヘキノ理由アリ志のテ此基礎ハ襲ニ英政府カ一時ハ論談ノタメ森公使へ示事ンテ此基礎ハ襲ニ英政府カ一時ハ論談ノタメ森公使へ示サントシタル別案提出ト多少同一ノモノタルカモ又計リ難サントシタル別案提出ト多少同一ノモノタルカモ又計リ難サントシタル別案提出ト多少同一ノモノタルカモ又計リ難サントシタル別案提出ト多少同一ノモノタルカモ又計リ難

ノ裁判所 トスヘシ而シテ「サー、ハリー、パークス」氏モ亦夕英國 責アルコトラ彼レニ於テ公然識認シタルハ恐ク之ヲ以テ初 夕 サ 件ナリ然リ而シテ「グランウヰル」侯カ英國臣民ノ遵守セ テ自カラ廢滅スヘキコトヲ暗ニ示セリ是レ又注目スヘキ要 法權ハ一時假リニ設ケタルモノナルヲ以テ事勢ノ變**遷**ニ 短所ヲ知ルト雖モ之ニ因テ治外法權ヲ辨護セリ然レト ルヘキモノタリ英國人民ニ於テ或ル日本ノ法律ヲ守ルヘキ 「グランウヰル」侯ハ又治外法權ニ關シテハ英國裁判所 ルハ我ニ取リ冀望スヘキコトニシテ又欣然記臆スルニ足 ル可カラサル或ル日本ノ法律規則ヲ明ラカニ擧ケテ論シ ハ日本ノ法律ヲ一切識認スルコト 能ワスト主張シ ÷ 因

これによればないないでは、これでは、これでは、これであり、これでは、子質行スルヲ得ヘキ旨ヲ陳述シタリ

又凝ヲ容レサルナリー暦自國ノ利益ニ便ナラシメンタメ此一條ヲ首唱シタルハウヰル」侯ノ答辯甚タ弱シ蓋シ英國カ談判ノ模様ヲシテ尙リホョリノ提出案ノ拒絶ヲ首唱シタル責ニ對スル「グラン

ン、ポ 即チ畫一ノ稅額(一割)ハ高額ニ過クルト思考セサルト 出案ニ就キ異論ヲ唱ル所ノモノハ獨リ或ル稅額 雖モ又領事裁判法ノ短所ヲ暗ニ識認セリ第七條ニ於テハ提 各國ヨリ合衆國ヲ再ヒ除キタリ第六條ニ於テハ「グラン 最モ緊要ナルモノトス其第二條ヲ見ルニ英國ハ合議シ コト トヲ見ルヘシ而シテ英政府ハ近來再ヒ「サー、ジ 中ル侯ハ日本ヨリ提出シタル權理回復法ニ異論ヲ唱フル ナル 挿入シタル 氏ヲ滿足シタルモ レトモ「ケネデー」氏ニ贈リタル訓令ハ此 是ナリ然レトモ他ノ各國ヨリ輸出スル所ノ物品干種萬 ーンスフラート」氏ヲ以テ内實左ノ事ヲ陳述シ 以テ畫一ノ モノ ノノ如シ第八條ハ別ニ一定ノ見込アリ 税法ハ恐ク行ワレ難キトノ辯解ハ明 モ思ワレス如何ト ナ レハ英國人民ヲシ 書簡中ニ於 ノミタル э. У タリ IJ ŀ _ ノ 7 3 ゥ N

目的アリ 他各國 於テハ「グランウォル」侯ガ外國人ニ關繫スル 指定セザル = 關シテハ之ヲ公平ニ調和制定スル冀望ヲ示シタルハ 我ニ取 モ ス 夕 ル リ眞ニ滿足スベキコトト云フベシ是レ最モ觀ル == = シテ歐洲 採用スベキモノ更ニ無ケレバナリ又次ノ章(第九條)ニ 日本地方裁判所ニ因テ用ユル裁判手續ヲ以テスルノ外別 ルノ患ナカルベシ如何トナレバ日本ニ於テモ英國ニ於 ル上ハ全國ヲ開クモ可ナル旨ヲ發題スルト 日不ハー層奮發シテ裁判施行 セサル コト ニ警察規則ノ施行及ビ通商條約中ニ掲載スル所ノ數件ニ ハ明カニ之ヲ以テ初トス又第十條ニ於テハ 地ニ於テ自由ニ住居スルコトヲ我ヨリ發題ス ŀ ハ斷シテ行ワレ難キヲ以テ英政府ハ恐ク此發題ヲ承 模様二 ノ區 ヘケレ 一裁判所ニ因リ裁判ヲ施行シ或 テ ノコト ヲ見ル ノ一國ニ於テ其豫メ期シタル讓與ヲ公然告示シ 別ヲ立 因 ハナリ是又英政府カ内實識認スル 1) ナル ベシ然レド テハ新條約ヲ採用スルニ至 テタルハ奇ナリト ベシ又東京及歐羅巴ノ外他ノ場所ヲ モ 日 ノタメ相當ノ手續ヲ設立 不二對シ最モ緊要ナル 云フヘシ是レ ハ他ノ法方ヲ設立 モ敢 ルベキノ進步 ルモ計り 地方行政法 歐洲各國 所 テ害ヲ生 ナリ トモ テ シ

サル可カ 然レ 彼レニ讓ルヘカラス且又彼ヨリ我カ爲ニ許容スル所ノモノ 以テ萬一彼レ 送付シタルモ モノ 譲與スヘキ件 假令未夕其成否ノ計リ難キモノト雖モ採テ以テ論辨ニ充 ナ 談判上大ニ面目ヲ更メタ 用スルコトヲ得 3 ŀ IJ ŋ Ŧ ノモノヲ今日ニ至リ發題スルコト能ハサレ ハ必然日本ニ取り緊要ナル ラサルモノ是ナリ況ンヤ此訓令ハ英政府ヨリ公然 尚餘分ノ事件ヲ含蓄スルモノト 看做シ之ヲ熟讀セ (何トナレバ何等ノ締盟國ト雖モ現行條約ノ **玆ニ記臆スヘキ要件アリ** Þ ラ彼 ニ於テ後來取消サント欲スル點ア ノタルヲヤ故ニ每語必ラス丁寧反覆ニ考究シ ラ判然掲載セスト雖モ其表面ニ顯 ヘキナリ是故二此 テ許容シタル一事 ル端緒ヲ開カン事ヲ冀望ス 即チ此訓令ハ假令日 利益ヲ含蓄セ 出書簡ハ日 = アル Æ N ₩ 不國卜英國 出スル所ノ トモンヲ ハナリ ル アヲ得サ 如 本 7 * 不.

關スル覺書原文

Memorandum

on the despatch of Lord Granville to His Excellency Mori, dated October 12, 1881, and on the instruc-

tions sent to Mr. Kennedy therein Enclosed

It is important to consider His despatch in connection with the one addressed by His Excellency Mori to Lord Granville, dated August 9 1881, to which it is a reply.

It cannot be assumed that any statements in His Excellency's despatch to which exception has not been taken in the reply are allowed by Great Britain to be well founded, but on the other hand it is recognized in European diplomatic correspondence that any positive allegation, particularly when bearing on important relations between two governments, if not combated or demurred to, is at least admissible in argument and primâ facie is unanswerable.

at issue by 9th of August assume increased importance, contention respect to the separate treatment of the Regarded from this point of view, the arguments and the tone assumed in the despatch of the that any Each of new the Signatories; 2, arrangements should be as questions 1, with

based on equitable considerations, and not necessarily on the lines of the present treaty;—and 3, with respect to the attitude assumed in the matter by Great Britain towards the United States. The omission to refer specifically to these points in the reply indicates either an inability to do so or a desire to avoid the consequences of an explanation.

parlers. It may be that the British Government limit the to offer to enter into preliminary negotiations with tion is made of the previously suggested conferdespatch it may be observed that no direct meninterest to have a conference at which the Japanese Government would evidently insist on the invitahas not tions including the United States, China, &c. is unofficial reason to believe that it is possible and With regard to the contents of Lord Granville's wide enough to include a conference or to Foreign Representatives. Japanese Her Majesty's chargé d'Affaires is instructed yet decided how far it would be in their negotiations Government, in conjunction with to more This informal pour ex-pression There

even probale that Great Britain has already prepared a basis of revision to be proposed; which may be more or less identical with the counter-proposals which at one time were to have been submitted to His Excellency Mori for discussion.

part of British subjects to respect Japanese Law;the first official recognition of any liability on the subjects are bound to observe. This is probably tain Japanese Laws or Regulations which British note that Lord Granville pointedly alludes to cerand would cease under certain changed circumstthat the system itself is of a temporary character which even he recognizes defects, while he infers his defense of the system to the British Courts in to ex-territorial jurisdiction Lord Granville confines as British Law. that by his sanction he could make them operative Courts could not recognize any Japanese Law; but Sir Harry Parkes having contended It may also be usefully noticed that in alluding It is however desirable and satisfactory to that British

The reply made by Lord Granville to the charge

of having initiated the rejection of the Japanese proposals is very weak. There can be no doubt that Great Britain took the lead in this matter, in order to give the negotiations a shape considered more favorable to her interests.

But the letter of instructions to Mr. Kennedy is the most important feature in this correspondence. It will be observed that in §2 the United States are again excluded from the Powers with whom Great Britain communicated.

In §6 Lord Granville again inferentially admits the defects of the Consular Court system, though he objects to the Japanese remedies proposed.

In §7 it will be observed that it is only some of the rates in the proposed tariff that are objected to, and unofficially the British Government have again rately, through Sir Julian Pauncefote, stated that a uniform rate (10 percent) would not be considered too high, while explanations apparently satisfied him that a uniform rate could hardly be adopted in consequence of the wide diversity of the imports from other countries.

§8 is probably inserted without any fixed intention, for if free residence in the interior were offered to British subjects, it would probably be refused by the Government on account of the impossibility of administering justice by the present Consular Courts or of providing any other system. This has also been unofficially admitted. Japan might safely go great lengths in offering that the whole country should be opened on proper arrangements for the administration of justice being made, for none other than that under the Japanese territorial Courts could ever be found admissible by either Japan or Great Britain.

In the next paragraph (§ 9) it is satisfactory to see that Lord Granville holds out hopes of a fair settlement as regards the enforcement of local administrative laws and police regulation affecting foreigners, as well as many subjects treated in the Commercial Treaty. This shows decided progress, and is apparently the first official announcement of any intended concessions on the part of any European Power.

and exceptional as the present one. no Power could now propose one so inequitable sarily involve important advantages to Japan, as form of a new Treaty. most interesting point to Japan appears to be the of other places than Tokio and Europe. with intention, §10 a It will be seen that no mention is made that the negotiations may assume the curious distinction is made, evidently between A new Treaty must necesthe European and other But the

extent in any argument. possibility can be advantageously used to its fullest other hand every admission in our favor even of a subsequently be wished to withdraw; -- and on the ly been studied so as not to concede what it might officially communicated. Every word has necessariappears Japan they must be read as implying more than these instruction contain no explicit concessions to But it is important to bear in mind that although on the surface, particularly as they are

may furnish a fresh and greatly advanced starting therefore hoped that this correspondence

> point in the negotiations between Japan and Great Britain.

London

October 0 14, 1881.

三人 明治古年月 一四四 日 **井森** 上駐 外英 務公 卿使

條約改正ニ對スル獨逸政府ノ態度ニ關スル件

クグントン 悟ルニ至レリ流石ニビスマルクノ大智ハ人ニ籠絡セラル、 威勢ヲ加ヘント欲スル 養專一ニ耐入候先達テ御電令ノ趣ヲ領シ伯林へ出張青木公 提出ノ改正兩案共ニ却棄スルコトニ同意シタル ヤ我國ノ問題ノ如キニ對シテハ其謀略易々タルノミ乍去我 ヲ知ラサル如クニシテ其間ニ自己ノ智術ヲ逞クスルナリ況 目的トスル所ノ者アリ卽我條約重修ヲ以歐洲內ニ於テ自己 程度等見聞候處獨政府ノ好意ハ全ク表面ノミニシテ別ニ其 使親會ノコトハ巳ニ前便及密啓候獨逸政府好意ノ事實抖其 内啓長ノ御病氣後再ヒ御繁忙御障リモ無御座哉爲國家御厚 利ラ謀り進ムルノ器具ト做シ是ニ由テ其覇者ノ地位 ハ疑フヘカラス青木公使モ大ニ之ヲ ハ此ノ大智

足レリ此ノ見ハ將來ノ事業ニ關シ御參考ニ須要ナリト信用 問題ヲ深考セサリシニ因ルナラン却說前顯獨政府ノ好意ナ 見へ歐米洲諸國へ對シテハ條理ヲ重スル 仕候ニ付青木公使ニ對シ聊不友誼ノ嫌アルヲモ忍ヒ老臺迄 却棄説ニ與ミシタルハ則其好意ハ唯タ言端ニ止ルヲ知ルニ 二出タリ若シ獨逸ヲシテ眞實ノ好意アラシメハ我條約一件 假面ヲ眞面ナリト誤認シタルト見へ老臺へノ報告亦悉ク此 用シ過クルノ癖アルヲ冤レス故ニ彼自ラ其好意トスル所ノ ル者ハ外交上ノ挨拶ノミニシテ其實アルニ非ス但青木公使 全其靭業ヲ擴張スルヲ得タラシニ事此ニ出サリシ 忌ニシテ自國直接ノ關係少小ナル一案ヲ採用ス 吐露仕候 ニ關シテ別ニ所施ノ術固ヨリ多々ナルニ却テ英政府所發ノ ハ御詳知ノ通獨逸偏信ノ人ナレハ獨人ノ說ハ概シテ之ヲ信 ノ論ヲ假用セシナラハ我國へ對シテハ好意アルカ如ク 一好機ヲ失ヒタルカ如シ若シ通商條案ノ如キ英國所 ノ美名 ヲ占メ得テ ル ハ其實我 ヲ 可 ト =

一今便差進候機密信中ニ中陳候通先般小生ヨリ英外務卿へ 差出候照會ハ實地ノ事勢ニ應シ故ラニ强鋭ノ筆ヲ用ヒ候 ナレトモ其時ノ場合ニ依リ必ス緩急ノ參酌ナクテ 井上外務卿時代 對英交涉 三九 不

> 置ニ出ルハ必然ニ付同人ニ對シ充分溫和丁寧ヲ主トシ内 之其邊ハ小生元ョリ注意仕居候間御安意相成度候パー 候様御盡力被降度吳々モ希望仕候 實ハ堅强不動ノ政略ヲ以彼ヨリ主張スル 上多少ノ怨ヲ抱キ如何樣トカシテ自己ノ意見貫徹センコ ス義愈不遠訓令ヲ帶ヒ東京へ赴任可致ニ付テハ同人意見 相成い勿論ニ付今後何時モ常ニ此强策ヲ用ヒ候譯ニハ無 ノ通り英外務省ニテ採用セラレサル末ナレハ御地到着ノ ヲ欲シ內外强柔ノ策ヲ盡シ我望意ヲ妨ケントスルノ處 所ノ論鋒ヲ挫折

右件々內啓仕候頓首

十月十 四日

偷

森 有

禮

井 上 老

三九 明治古年月二八日 井森 上 外 英 務公卿使 宛ョ

書送付ノ件 條約改正ニ關スル英人公法家トウヰス氏ノ意見

附屬書 トウヰス意見書(別册甲號乙號丙號)

第四十四號

記書ニシテ公法家手筆ノ添削ヲ經誤謬ナキヲ保シタル者ナ 件中要眼トスル所ハ第八項即現存條約ハ有限ノ者ナリヤ否 條約重修ニ付現行條款中文字條理相牴觸シテ彼我異見ノ點 リ我質疑書第八項條約限定有無ノ問題ニ關シ公法家ノ說如 ネタル末初テ我所望ノ要點ニ適當ノ明答アリ卽別冊丙號筆 **ニ足ラス別冊乙號末部ノ如シ於是數回同氏ニ面接討論ヲ重** ルニ彼仍亦約文ノ辭義ノミヲ解クニ止リ未夕我意ヲ滿タス 當ノ見解ヲ下サス故ニ第二ノ質問書別册乙號初部ヲ贈リタ ヲ判知スル事最緊切タリ然ルニ何故アリテカ公法家之カ適 付シタル處同氏ヨリノ答解別冊甲號初部ヲ得タリ右質疑數 則其人ナリト信シ疑點數項別册甲號初部ヲ提出シテ同氏ニ ル事一緊要ナリト考へ「サー、ツラヴアート、トウヰス」 ノー問ニ止リ他ハ悉ク此一點ニ由テ可動モノナルヲ以テ之 見ユル者ヲ有權公法家ニ質シ其公論ヲ得テ我思料ニ値ス

條約文面 ル者ト看做サ、ルヲ得サルモ事理ハ必シモ然ラス條約事 シ締約双方トモ他ノ一方ノ同意ナケレ ノミニ拘り一應ノ見解ヲ下セ ハ改正スル事能ハ ハ該條約 ハ無期限

> 意味ハ此要求ヲ拒ムノ具トスヘキ者ニ非ス 國ニテモ該條約ノ改正ヲ要求スルヲ得ヘク又文章面直譯ノ 以無期限ノ約ヲ結ヒ得ヘキモノニ非ス故ニ日本或ハ他ノ 商理財ニ關シタル事件ノ如キハ一國須要ノ內政ニ屬スルヲ 項中文字見解ノミヲ規守シ得ヘカラサル者數多アリ殊 三通 國

之ヲ要スルニ若シ此要求ヲ拒ムカ或ハ一旦之ニ應シ 方ノミニテモ之カ廢棄ヲ公言スルニ妨ナシト判定セル者ナ ヲ開クモ其議局ヲ結フニ至ラサレハ商議者兩方共ニ又ハー 尚委詳ハ別冊ニテ御熟知有之度候也 テ商

明治十四年十月廿八日

在英國特命全權公使 森' 有

外務卿井上馨殿

附屬書

別冊甲號

submitted to Sir Travers Twiss Q. The Japanese Treaty in reference to and his 0

thereon

Opinion

subject have commenced from time to time. has yet taken place, though negociations on the

readiness to proceed to a revision. The interested powers have now expressed their

made. present guished from that existing when the treaties were ment naturally demand alterations to meet the In this approaching revision the Japanese Governconditions of the country as contra-distin-

in this system are the following:so called Consular jurisdiction in Japan is taken into consideration. Among other matters the defective state of the The most salient defects to be

treated houses. quired before he can be followed into any such which such person may have taken refuge is reparticular country to which a suspected person betreaty) and the permission of the Consul of the Japanese Police is limited (by usage though not by longs or to which the owner of a house belongs in (a) In cases of crime the power of as sufficient. The warrant of a Japanese Official is not In this way particularly arrest by the

Wilson Bristows Harpmael I Copthall Building

 $\dot{\Omega}$

nese Treaty Rights of Counsel in reference to the Case to be submitted for the Opinion Japa-

owing to the between Japan and European and American States assumed that this latter treaty is ber 1869. being that with Austro. Treaties are all nearly identical, the most complete Sandwich Islands. The European American and to the virtual adhesion of all the Powers Japan has Treaties with various European and granted by Japan in all the other treaties It may for the sake States as well as with action of the most favored nation Hungary dated 18th Octoof argument be the binding one and American China and the

as claimable on and after 1 July 1872. revision of these treaties is stipulated for (Art 21) It will be observed that the right to demand No revision

the accused are of more than one nationality the ends of justice may be endangered.

- (b) The various Foreign Courts have no community of action except such as unofficial good feeling may have created. In consequence difficulties continually arise as to the attendance of witnesses the treatment of cases in which there may be several defendants of different nationalty &c. &c.
- (c) The various codes and courses of procedure in use are as numerous as the treaty powers themselves.
- (d) There is a complete absence of any Courts of Appeal in Japan from the Consular Courts—thus great delays and serious miscarriage of justice arise.

Memorandum

It has been tacitly agreed that as some of the jurisdiction clauses in the treaty could not be practically adhered to, all civil cases should be decided in the Courts of the Defendants nationality. It should also be observed that there is no agreement defined in the Treaty as to the observance of

the Administrative laws and regulations of the country (except as to harbour regulations) and while those are admitted by some Powers to be binding on their subjects, they are looked on as inoperative by others. Thus many important regulations such as those used by the Police or respecting pilotage and sanitary requirements are liable to be disregarded by the subjects of some nationalities unless their observance is ordered by their own authorities.

In these circumstances the opinion of Counsel is requested on the following points:—

What is the proper remedy to insure the due administration of Justice as regards Foreigners, and as regards natives in their dealings with foreigners in the open ports and Cities? § A What proposals can justly and according to the true principles of international law and comity, be insisted on? § B Can any distinction be rightly made between grave offences and those of a minor nature with the view of having the latter dealt with by native author-

- ities and if so what line of demarcation can be best adopted?
- 2. How far are Foreigners at present bound to conform to the administrative laws which are binding on Natives, such as the quarantine laws, game laws, police and Railway regulations &c. and how should any infringement of them be punished.
- 3. To what taxes are foreign residents liable and how can these be now enforced?
- 4. If Foreigners go beyond the specified Treaty limits to what jurisdiction are they amenable if they so proceed (a) with the consent and (b) without the consent of the Japanese Authorities.
- 5. Can Counsel suggest any system of Justice other than that of the native tribunals which could practically be employed in case the whole country were opened to foreign trade and residence? § A Is it to be considered possible that any system other than that of the native courts could be universally agreed to

- and carried out effectively by all the treaty powers so as to avoid the difficulties now apparent within the treaty limits?
- 6. If the Japanese Government consented to open the whole Country on the condition of the acceptance of native jurisdiction and the present jurisdiction remained in the treaty ports, how should foreigners be judicially treated who having been outside the treaty limits return within them.
- 7. If under the existing arrangements all or any of the treaty powers neglect to provide efficient Courts, what remedy has the Japanese Government to ensure a proper administration of justice within the treaty limits?
- 8. In case on revision there is an insuperable difference of opinion on the part of any one or more of the treaty powers as to the desirability (see English treaty) or

English treaty see page III of printed book sent herewith, Austro Hungarian Treaty see page 507./

expediency (see Austro Hungarian Treaty) of

any alterations suggested, what course is open to either of the Powers; in other words in case an indefinite prolongation of the Status quo be insisted on by any one or more of the treaty powers as regards any of the stipulations of the existing treaties how can this be best prevented by Japan or any other of the signatory Powers?

9. And generally Counsel is requested to advise as to any course which, with due regard to national and international rights would conduce to an administration of Justice as regards Foreigners in Japan which would be advantageous to all Parties both under the existing conditions and also under these which would arise when the Country is fully opened.

Opinion of Counsel in reference to the Japanese Treaty Rights

Question I. In considering what is the proper remedy for the defects in the system of Consular

resident within the privileged limits of the Treaty and American States can reasonably be expected to the time has not yet arrived when the European the last and most complete example I assume that Austro—Hungarian Treaty of 18th October 1869 is engagements with Foreign Powers of which the Jurisdiction as established in Japan under Treaty its being overstrained and I infer from paragraphs so-called system of Consular Jurisdiction arise from factory judges. The defects in the working of the found to be the most efficient and the most satis-Ports their own Consular Officers will probably be of right between foreigners of identical nationality further that for purposes of determining questions renounce altogether their treaty found in other Oriental countries, to be inadequate diction has been found in Japan as it has been (b) (c) and (d) that the system of Consular Jurisin certain cases vizt. to secure a satisfactory administration of justice privileges and

(1) Where the parties from whom redress is sought are of more than one nationality, as a Consul

has no authority to compel persons of other nationalities than his own to appear as Defendants in his Court, or to enforce judgment against them if they should appear.

- (2) Where the necessary witnesses are of various nationalities, as a Consul has no authority to enforce the attendance in his Court of any Witnesses who are not of his own nationality and if the comity of other Consuls should as a matter of fact secure the presence of such Witnesses, the Consular Judge has no coercive jurisdiction over them, nor has he any authority to punish them for perjury.
- (3) Where a Japanese subject or a foreigner of another than the Consuls nationality is the Plaintiff the procedure and the law are governed by the Consuls nationality, and although this result is in accordance with the international maxim of "Actor sequitur forum Rei" still it is not satisfactory when the cause of action arises in the same country in which both parties are resident and where a different procedure and law would

be applied if the Defendants did the Plaintiff, as the Defendants Consul would in that case apply in his Court the law and the legal procedure of his own nationality.

tion to the Austro Hungarian Consuls exercising Hungarian Treaty of 1869 has given a treaty sancmore called for since Article V of the Austro of such Courts in Japan seems to me to be the in all Civil and Commercial causes where the parwhich should be competent to exercise jurisdiction Native and Foreign Judges should be associated, and coming in the institution of mixed Courts in which the only effectual remedy would seem to be forthevidence or where they gave false evidence so that sary witnesses and where they refused to under a defect, where Japanese subjects were neceslar Jurisdiction, but such Courts would still labor associate themselves in courts of Concurrent Consutem would be found if Consuls were empowered to defects above mentioned in the Consular Court systies are of different nationalities. The most obvious remedy at first sight for the The institution

in such suit was previously exercised from comity 1869 is that the jurisdiction of the Consular Courts in Japan prior to the Austro Hungarian Treaty of between this order of things and that which existed from whom redress is sought. The difference dants is vested in the Consular Court of the party ments the Cognisance of all Civil and Commercial brought against their own subjects by Foreigners the Foreign Treaty Powers in respect of favored nation clause" a Treaty privilege of all Authorities has become indirectly under "the most thus directly conceded to the Austro Hungarian that jurisdiction is now exercised in virtue of Treaty at the voluntary cept in cases in Japan, where Foreigners are Plaintiffs ex-Thus it results that under existing Treaty arrangeright and is exclusive of all other jurisdictions. It have exclusive subject, a subject cases where Japanese subjects are Defendispute jurisdiction and the instance of the Plaintiffs whereas of any other with exclusive jurisdiction Ħ an all Foreign Austro matters Hung-Power suits in

such redress as the Judge is authorized to adminissystem and as a measure of Justice to the Plaintiff ceptional to the territorial law. law of the Consular Courts is personal, and is exits own law but its own law in such cases is tersuitors only such remedies as are authorised by Court of each Country administers to Foreign seem at first right not to be at variance with the ter by the Law of his own nationality. fore his adversary's Judge and must acquiesce in it is equally open to exception, as he must be beof all disputes between Foreigners. But this new to the Foreign Consular Authorities the Settlement rangement for the Japanese Government to devolve Comity, and it may have been a convenient arpractice which has hitherto rested on International to have obtained the sanction of Treaty right to a ritorial, and is irrespective of persons, whereas European Law of Nations, according to which the the defects above mentioned in the Consular Court order of things does not supply any remedy for may be a progressive step for the Consular Courts This may

States of America, first place of the at last been found intolerable a Commission in the to such a chaotic administration of justice having own country. The conflicts and delays incidental to complicate matters still further the Defendant its own system of law and of legal procedure and and the Ports of the far East. Under the system "halfway house" between the Markets of Europe collected for commercial purposes in that important the part of the various members of a community system of Consular Courts had become inadequate but he had also a right of appeal to a Court in his had not only a right to his own forum in Egypt of Consular Courts each of these nationalities had made up of about seventeen defferent nationalities, to meet the complicated demands for justice on plies a noteworthy example. with international precedent, of which Egypt sup-I have above suggested, would be in accordance A scheme of mixed Courts of the character, which and Russia assembled in 1870 under Representatives of the Austria, France, Great Britain, In that country the United the

gary, fers the best prospect of remedying the defects in mixed Courts auxiliary to the Consular Courts, ofministration of justice in Egypt that a system amongst the European Nations interested in the adzation of these Courts. pose to enter further into the details of the organihas been established at Alexandria. and Massowah and a Common Courts of Appeal instance have been established at Cairo Alexandria Courts according to which Three Courts of First the Powers have agreed upon a Scheme of mixed deliberations of the Commissioners has been that Not to go further into details the result of the Norway, assembled in 1873 under the same President. Italy, the Netherlands, Russia, Spain, Sweden and tives of the United States of America, Austro Hunthe parties should be of mixed nationality and subsehas been to show that there has been a concensus quently a Commission consisting of the Representamixed Courts for the administration of Justice where Presidency of Nuba Pacha to devise Belgium, France, My object in citing them Germany, Great Britain, I do not proa scheme of of

may consider himself to be aggrieved may be of justice by them in any case where a Foreigner what arrangements the possible maladministration be rendered satisfactory to Foreigners and under consider how the jurisdiction Native Tribunals can would suggest a negative answer. It remains to again I apprehend that the question of expense mixed Courts into the Interior of Japan. Here within the treaty-limits, namely, whether it would arise depends upon the adoption of mixed Courts interior of Japan. A further question which may arise if similar tribunals were to be set up in the Much more would causes of complaint be likely to of the already in some cases as to the inefficiency of some open to Foreigners. There are I believe complaints the interior of the Empire of Japan if it were thrown maintain efficient Consular Tribunals throughout the system of the so called Consular States to medied without having recourse to Diplomatic remonstrance. practicable Consular I must assume to introduce the same system of Tribunals in the Treaty-Ports. that the Japanese re-

exceed a thousand piastres in value, as also in ofin all suits where the subject in dispute does amenable to the territorial Court of the District of a Consular Agent of his own nationality distance of more than nine hours from the residence where a Foreigner is domiciled in a locality at the the Chief European Powers. It is to the effect that man Port has subsequently been acceded to by all July 28th 1868 between Great Britain and the Ottoshould invite their attention which was signed on Powers. of the Japanese Government and of the Treatyhold land in the interior of the Ottoman Empire is case of Foreigners who are been recently adopted in the Ottoman Empire in the satisfied I am of opinion that the course which has and a Code of Civil and Commercial procedure promulgated a Code of Civil and Commercial Law which will commend itself to the approval of the Government will promulgate if it has not already Treaty Powers. precedent which may deserve the consideration The provision of the Protocol to which I Upon this latter condition being allowed by Treaty to

interior of Japan, if it were framed upon a princiuniversally that the Treaty Powers would be disposed to agree § A of Question 5 inasmuch as it may be presumed seems to me to supply the best answer to paragraph be, will have the Foreign Plaintiff or Defendant, as the case may appeal to a superior tribunal where the jurisdiction of the local tribunals subject to an tion of a similar system in Japan namely a limited to the Protocol of 28th July 1868 suggests the adopbut the general adherence of the European Powers to suit the circumstances of the Japanese territory, to Foreigners. as illustrating a principle which may be applied to formity with Treaties I cite this Ottoman precedent decided with assistance of his own Consul in con-Tribunal, where his Foreigner has the right of appeal to a Superior five hundred piastres. But in all such cases the fences where the fine to be imposed does not exceed interior of Japan if it should be thrown open to a Scheme of Native Courts in the The details would have to be varied a voice. appeal will be heard and This Ottoman precedent Consul of

ple to which they have already assented in the case of the Ottoman Empire.

and I observe that the British Order in Council of Great Britain, as far as circumstances will permit ty would apply to such a case and that the British I am of opinion that Article V of the British Treaoffender according to the principles of the laws of Consul would be bound to try and to punish the side the Treaty-limits against a Japanese subject, Foreigner who has committed a crime when outin a Native Court for debt, his Consul is under a breach of Japanese law. If for instance he should of being convened before his own Consul for any those limits he would reacquire his Treaty privilege outside those limits, but if he should return within be amenable stated should go outside the Treaty limits he will Question 6. that this question may have in view, the case of a to enforce the recovery of the debt. It is possible Treaty obligation (Article VII of the British Treaty) have absconded from the Interior to escape process If a Foreigner under the circumstances to the territorial law whilst he

March 9th 1865 gives to the Consular Court in Japan full authority to apprehend and try such an offender. I do not think that the Japanese authorities could properly put such an offender on his trial before a Japanese Court as long as he remains within the priveleged limits of a Treaty-Port.

the Japanese Government to notify to the Governthe efficiency of the particular Court would be for inefficiency of the particular Treaty-Court. the first step which the Government of Japan should Question 7. In the case supposed by this question subjects of the defaulting power against Japanese corresponding obligations to hear the complaints of operate tant a matter to be a breach of treaty which will due effect to its Treaty engagements in so imporment in default that it will hold its neglect to give unsuccessful in next step, in case such representation should be be to make a Diplomatic representation as to the take in accordance with International Law would to release the Japanese Government from and to bringing about an amendment in redress them in the Japanese The

Courts

of Justice into its own hands. I prefer to use the term "Retorsion" in such a tion of Justice than by resuming the administration Japanese Government can insure the due admistraligation. If the defaulting Power in engagements are to be regarded as of perfect obsignify a reciprocity of treatment, where a State ed by eminent writers on the law of Nations to prisals" although the latter phrase has been adoptcase to the more modern phrase of "Negative Rejustifiable on the part of the Japanese Government. Retorsion in such a Case would in my opinion be engagements. Government persist in neglecting to fulfil its Treaty case should after due notice from the Japanese refuses to fulfil a perfect obligation, and all Treaty-I see no other way by which the the supposed

Question 8. This is rather a perplexing question to answer, for it supposes an unreasonable course of action on the part of a Treaty Power, if it should assert on its part an insuperable objection to a revision of the existing Treaties with Japan against

Consular jurisdiction within the Treaty limits to sible difficulty would be if she should agree with its acceptance of the concurrent condition. ing of the Interior for its own subjects without Treaty Power to claim the advantage of the Openwould in such a case not entitle a recalcitrant opinion that "the most favored nation clause" to the subjects of the Treaty Powers. I am of condition of the opening of the Interior of Japan make the adoption of such a scheme a concurrent the majority of the Treaty powers upon a scheme Mixed Courts as consensus of the majority of the other Treaty The best way for Japan to meet this posauxiliary to the system of

Question 9. It appears to me that the question of opening the interior of Japan to Foreigners is raised very opportunely for Japan at the present moment when the Japanese Government is desirous of a revision of the existing Treaties and when the increasing influx of Foreigners of different nationalities into the Treaty Ports is calculated to aggravate the evils of the conflict of law between the

sular Courts within the privileged limits of the institution of mixed Courts as auxiliary to the Conbe exercised by the Native Courts subject have suggested that a limited jurisdiction should sion for the administration of justice, if the interior system of mixed Courts to meet themself same the Japanese Government; (2) Whilst as regards range the dispute amicably (Article VI of the subject is Plaintiff and where he is unable tance of a Japanese authority, where a Japanese as a matter of fact a Foreign Consul is already Treaty Ports upon two considerations (i) because various Consular of Japan should be thrown open to Foreigners. the Treaty-Ports. experienced in Japan within the privileged limits of defects in the administration of Justice, which are have already concurred in adopting in Egypt a tribunal in mixed cases is not altogether novel to British Treaty) so that the principle of a mixed empowered under the Treaties to call in the assis-European and American Courts. With regard to a further provi-have suggested Governments they to an the

itself to the ready acceptance of all parties as the the equity of this Common Code should commend of the respective Treaty Powers more especially if territorial law and the personal laws of the subjects very much to prevent any collision between the the territorial law. alities within the Treaty Ports would thus have equally as of the Native Courts. become the Law and procedure of the Mixed Courts and which if approved by the Treaty Powers might to undertake, if it has not already prepared them, would be advisable for the Japanese Government Law and a Code of system of Courts is a preparation of a Code of condition for the successful working of such a European and American Powers. ly adopted in Turkey with the full assent of the suggestion is in accordance with a precedent recent-Defendant should have a seat and a voice. Appeal to a higher tribunal, probably at Yokohama benefit of a community of law a branch of the Consul of the Foreign Plaintiff or This circumstance would tend Procedure for them which it The mixed Nation-A necessary This

most reasonable rule for determining their respective rights.

ships nationality having no treaty jurisdiction to may escape punishment from the not within its territorial waters, and so the culprit of a crime committed on board of a foreign ship the law of his own country does not take cognizance of his ships flag, and should claim to be tried before alities and still more in cases where a crime has a Consul of his own nationality and according to to be personally of a nationality other than that If in such a case the culprit should assert himself respect of a crime committed on board the ship. ty claims to exercise jurisdiction over its Crew in Japanese Port and the Consul of the ships nationalibeen committed on board of a foreign ship, in a the accomplices in a Crime are of different nationof the Consular Courts in Criminal matters where may arise in giving effect to the Treaty Jurisdiction of the Japanese Police Authorities but difficulties of the Consular Courts which seems to be exclusive I have not touched upon the Criminal Jurisdiction Consul of the

the Ottoman Protocol of 28th July 1868 of urgency after the precedent of the provisions of Domiciliary visits by the Japanese Police in cases ers it may be necessary to provide specially for interior of Japan should be thrown open to Foreignbetween European and Oriental Powers, but if the eigner belongs is an usual provision in Treaties from the Consul of the country to which the Forhouse under such circumstances without a warrant of a Foreigner. The inviolability of the Foreigners' culprit is a fugitive from justice within the house the Japanese Police, unless it be where a can arise with reference to the power of arrest by hardly see how the difficulty suggested in the case try and punish him within Japanese territory. Japanese

Templ

June 13th 1881

(signed) Travers Twiss

別冊乙號

Further Case
submitted to Sir Travers Twiss Q. C
inreference to
The Japanese Treaty Rights

and his Opinion thereon

Wilson Bristows Harpmael
I Copthall Buildings
F. C

Further Case to be submitted to Counsel in reference to the Japanese Treaty Rights

There are certain points in connection with the opinion lately given by Sir Travers Twiss on the Case submitted to him respecting the Treaties between Japan and other Powers which it is desired to have more fully elucidated and on which the further opinion of Counsel is therefore requested.

Ist The term "Mixed Courts" which is used in Counsels opinion is liable in consequence of its usual interpretation in Japan to be taken as representing the class of Courts so designated in Egypt in which a Code other than territorial is in use and judges are appointed in conjunction with the Foreign Powers and not solely by the Government.

other it is suggested that Counsel might adopt some in which Foreigners were interested. If this is so system which would adopt the territorial Code and It appears that Counsel recommends (as likely to sideration. "Special Territorial Courts" is submitted for conavoid confusion and the term "Special Courts" or of Foreign Judges or Assessors to adjudicate cases promulgated and which would call in the assistance course of procedure when these were satisfactorily advisable in Japan) Courts under a different distinctive name for such Courts so as to

extent limits the opinion given to certain specified ative laws of a similar nature, such as Sanitary may not be justly extended to include all administ-Foreigners er the principle laid down as to the liability of regulations. Counsel is requested to consider whethreasonable laws of personal Police laws, namely the laws (other than quarantine) laws as to sale of In the reply to question 2 Counsel to some to observe these administrative laws quarantine laws, game laws, and Railway

> poisons illegal or seditious publications, illegal meetings &c. &c.

laws of the Offenders country. to be tried and punished in accordance with the or American Jurisprudence, it being of course which are not repugnant to the system of European ers (where no stipulation exists to the contrary) tion to a certain class of laws, that all Japanese regards Great Britain and with or without a limitamay not be more broadly laid down, at least as shall conform to the laws of Japan &c. and Counsel stated (§ IV) that British Ships in Japanese Ports understood that any infraction of these laws has laws are to be considered in force against Foreignis requested to consider whether the general principle 1854 which has not been cancelled it is specially ween Japan and Great Britain dated October 14th Counsel will observe that in the convention bet-

reference to the Treaty engagements; whether in-Counsel's opinion is desired more generally with ly to the Judicial Clauses of the existing treaties. 3rd The reply to question 8 refers almost exclusive-

the right reserved to all parties to claim revision the whole of the clauses, due regard being had to engagement could be held to be possible as regards would then arise whether such a state of perpetual the signatories to revise them, the further question can be rendered perpetual by the refusal of any of of opinion that some of the clauses in the Treaties ing Commercial of fiscal conditions. diction or right of residence &c. and those involvpersonal rights such as those connected with juriswith advantage between engagements involving ment; and the reply might if necessary distinguish various treaties should fail to arrive at an arrange-Powers if all or even one of the Signatories of the desired as to the position of any one of the Treaty consented the inherent right to make any alterations mutually which right apparently points to something beyond other Treaty Power. The opinion of Counsel is volving obligations on the part of Japan or of any If Counsel is

Further Opinion of Counsel in reference to the

Japanese Treaty Rights

I In using the term "Mixed Courts" in the opinion or varied nationality without any intention to be a step in advance of the Egyptian system of impartially to suitors of varied nationality would ing a territorial Code consider that special territorial Courts adminsteras those recently instituted in Egypt. limit that term to Courts of the same character Courts of which the Judges should be of mixed which I have previously given, I had in view ы Government to promulgate a new Civil Code and were parties. sessors to adjudicate in cases in which Foreigners call in the assistance of Foreign Judges or Aswere satisfactorily promulgated and which would ritorial Code and course of Procedure, when these to Courts in Japan which would adopt the Terplication of the term "Special Territorial Courts" mixed Courts, and I see no objection to the apnew Code of In the intention of the Japanese Commercial Law of Law equitably and framed upon In fact I

regarded have been submitted to me and which by reason should not be administered to foreigners in Japan ritorial law of European States nor why justice not be as satisfactory to Foreigners as the terreason why the territorial law of Japan should Cognate nance of a general security of person and of prothat have in view the preservation of the public Japan which I assume to be reasonable laws, paying due respect to the administrative laws of any provision which exempts Foreigners of "the most favored nation clause" may be Japan and the various Foreign Powers which Courts constituted in the manner above suggested. equitably and impartially by special territorial operative, although it has England where would admit that the Convention of 1854 is still by Jury has been from time immemorial the or-I have not discovered in the Treaties between I am not however certain that England and of the general health or the mainteas a principles of consolidated body of treaty law jurisprudence I see no from

recent promulgation in Japan of a new Penal ter territorial law. ritorial judicature. nationality, who would be members of the ter-Native Judges with Associate Judges of varied ed of native Judges with Foreign Assessors or of then special territorial Courts might be constitutnot intended to adopt the Jury system in Japan Henry VI Ch XXIX. and this practice was further confirmed by 9 an Alien Merchant was duced into the English Courts generally whenever (28 Edw III Ch XIII) the mixed Jury was introat that time analogous in many respects to the Towns (the towns of the Staple in England being (27 Edw III Ch VIII) in the Courts of the Staplemixed Jury was established by Act of Parliament early period by Royal Charter. de medietate linguae was introduced at a very Causes, a mixed Jury, or a Jury as it was termed dinary mode of trial in Criminal and in Civil Treaty-Ports in Japan) In the next following year These Courts would adminis-If I On the other hand it it is Plaintiff or Defendant am to infer from the Afterwards a

understood that any infraction of those laws by is nothing in the subsequent treaties which exempt should conform to the Laws of Japan and there of Great Britain. them from so templated that British subjects in Japanese Ports relations between Japan and England it was confrom the commencement of the earliest treaty tionary authorized there to according to the Laws punished by the British Consul or other Funca British subject would have to be tried and ers may be reassonably invoked to shew that Admiral Stirling and the Japanese Commission-Treaty of 1854 and the joint exposition of it by and England holds that War puts an end to all been War between Japan and England since 1854 Code and a new Code of Criminal Procedure that not been expressly revoked as there has I think however that Article IV of the conforming, it being of course

3 I do not think that the argument as to the obligation to revise the Treaties can be pushed further than an obligation to take into considera-

to a probably not be disposed to agree to it. On the revision of the amended tariff of 1866 which is tion any proposals for their revision. For instance tion would remain unaltered and further if one at an arrangement I am of opinion that its posiif all the Signatory Powers should fail to arrive to the position of any one of the Treaty-Powers to the convention of June 25th 1866. With regard tion and concert with the other contracting parties that Government is bound to act in communicajudge of the necessity of any revision although language, which makes the Japanese Government gone one revision in 1869 is drawn up in different Bonded Warehouse Regulations which have underother hand the provision for the revision of the would not be bound to assent to it, and would be bound to take into consideration but Japan ports and exports. between Japan and the Four Power with a view declared to be a substantive part of the Treaties an European Treaty Power might propose the further diminution of the duties upon im-Such a proposal Japan would

ment." treaty of the Signatory Powers should arrive at a new agreeing to a revision if it holds such revision of the Treaties which deals with the subject of but I am unable to interpret the clause of any Government to submit the Treaties to revision, into consideration any proposal of the Japanese good faith requires the Signatory Powers to take enjoy the benefits of it, as incidental to their be more favourable the others would claim to On the other hand if that arrangement should condition of the others would remain unaltered. arrangement with Japan and that arrangement ble to itself. to be unduly favorable to Japan and unfavouraupon any Signatory Power the obligation of revision in such a sense as to say that it imposes were less favorable to the Signatory Power, the (i) that some of the provisions of the as much as the preamble of the Treaty of 1858 with England are intended to be permanent, in right to "the most favored nation treat-Further it may be justly contended that I assent entirely to the suggestion Treaty

either side it would hardly be consistent with for the purpose of facilitating Commercial interprovisions were states that the contracting parties are desirous good faith for any of the contracting parties to the time when a revision might be claimed on parties. course between the subjects of the Contracting that the revision which it proposes is desirable tion of 1858 must accept the Burthen of proof was itself a revision of the earlier Tariff-Convena revision of the Tariff Convention of 1866 which of 1858 it seems to me that the party proposing mind these recitals in the preamble of the Treaty which object might be frustrated unless certain ing parties as expressed in the same preamble intercourse between the subjects of the contractof those provisions being to facilitate Commercial subject to revision from time to time, the object that other provisions of the Treaty are on a permanent and to place the relations between the two Countries As nine years have now elapsed since open friendly footing, and (2) to revision. Bearing in to be

decline to entertain the request of the Japanese Government that the Tariff attached to the Convention of 1866 should now be submitted to revision. If there should be any difficulty as regards the mode of proceeding Japan is entitled to claim that the precedent of 1866 should be followed.

(signed) Travers Twiss

Temple 5th July 1881

別册丙號

Memorandum
on the opinions given by
Sir Travers Twiss, relating to
the Japanese Treaty Rights

It will be observed that a second case was submitted for the opinion of Sir Travers Twiss. This was in consequence of some of that Counsel's replies to the first case appearing vague or otherwise unsatisfactory. This was particulary so with reference to the reply to question 8 in the first

case, which question may be looked on as the most important of the series.

This point was again treated by Sir Travers Twiss in §3 of his second opinion.

Here again the view taken appears to lead to the conclusion that of the literal interpretation of the clause referred to (clause 22, Treaty of Yeddo 1858) is strictly adhered to, no one of the Treaty Powers can at any time enforce any alteration in the Treaties without the consent of the other Powers.

In view of this a personal explanation took place between the Japanese Minister and Sir Travers Twiss, at which the subject was fully discussed.

Counsel maintained that, though the words in the Treaty were exceptional and somewhat ambiguous, yet that as far as they went, and not looking beyond them, they do not confer any power to alter the Treaty without the consent of both signatories. But he fully recognized that such a state of things was highly unusual, and he held that there were strong equitable grounds for setting aside the strict meaning of the words. He thus

thought that Japan was bound by the letter of the Treaties, but might be freed from such a position by certain considerations which could not be overlooked. Among these were:

- 1. The circumstances under which the Treaties were signed.
- 2. The expressions of opinion of Mr. Townsend Harris and Lord Elgin as to the temporary character of the Treaties.
- 3. The absence of reciprocity and reasonable consideration in the scheme of the Treaties.
- 4. The fact that no nation could be equitably hald to engage all her future interests for an indefinite time; particularly such as refer to tariff and fiscal questions.
- 5. The absence of any raison d'être for the revision clause, if it is to be interpreted only to refer to changes made by mutual consent.

Sir Travers Twiss therefore considered that there were equitable grounds for insisting on such changes as Japan or any other Power might reasonably desire, and he held that the strict wording of the

clause ought not to be maintained to defeat this object.

London

October 25, 1881

□□○ 明治古年三三章 森駐英公使宛

東京豫議會開催方英國政府ヨリ提議ノ件

機密信、第三十六號

特命全權公使森有禮殿 外務卿 井 上 馨

外國人ヲ束縛スル所ノ制規ヲ依然トシテ保存セント欲スル外國人ヲ束縛スル所ノ制規ヲ依然トシテ保存セント欲スル料ノ景況往復書簡ヲ添へ逐一御報道相成リ右ハ篤ト識了考し、一方の話ニ就モ我政府ニ於テハ假令彼ヨリ種々ノ譲與ヲ要政府ト共ニ會同預議ヲ開クヘキ旨別紙甲乙兩號ノ通リ中越政府ト共ニ會同預議ヲ開クヘキ旨別紙甲乙兩號ノ通リ中越政府ト共ニ會同預議ヲ開クヘキ旨別紙甲乙兩號ノ通リ中越政府ト共ニ會司預議ヲ開クヘキ旨別紙甲乙兩號ノ通リ中越以入の話ニ就モ我政府ニ於テハ假令彼ヨリ種々ノ譲回行の大力を表別のである。

際ニ於テ効力ヲ有スヘキ様好和ノ決局ニ至ル可クト有之即 氏ヲ以テ我ニ送レル書簡中ニ地方行政規則及警察規則等實 外國貿易ノタメ我內地ヲ開クノ時期ハ即チ治外法權ヲ全廢 英國ト同様ノ議論ヲ提出スルニ至レリ因テ丙號回答書中ニ テ別 方規則ト稱スレトモ行政規則中地方規則ト其他ノ規則トヲ 趣ニ出テタルモノノ如ク祭セラレ候然レトモ彼レー概ニ地 ヲ斷然明言致シ候義ニ有之候將又今般英政府ヨリケネデー スル期ト相對スル事云々ト記載シ卽チ我政府意見ノアル所 英公使ニシテ此等ノ辭柄アル 存條約中第二ケ條ニ因テ會同豫議ヲ開キ候上ハ右ケ條 區別シ之カ制限ヲ立ツルコトハ甚タ難事ニ有之候就テハ現 ルモノニシテ我國ノ現狀ヲ洞察シ我ニ對シ信義ヲ表スル旨 會ニ提出スル ノミナラス又舊條約ニ佐テ得タル權利ヲ幾分カ褫奪ス云々 我ヲシテ幾分カ法權ヲ挽回セシムルノ見込ヲ我ニ通知ス ルニ基キ隨テ他ノ歐洲各國モ亦夕自カラ之ニ誘導セラ 我國ノ事情ヲ本國へ通知スル所ノ報告ニ據テ其意見ヲ定 使ノ關渉ナクシテ之ヲ施行シ領事裁判所 (ニ制限モ無之事故從來彼我ノ間ニ生セル問題ヲ一々 心得二有之候而 シテ終ニ行政法律丈ケハ外國 ハ銀テ英國政府ニ於テ該公使 ニ於テモ其効力 = 於

及御報道候此段為御心得御通知候也點ニ至リテハ目下考按中ニ有之候得ハ一定ノ上ハ尚明細可サル可カラス尤モ此報酬ハ果シテ何等ノ事ヲ以テスルカノサル可カラス尤モ此報酬ハ果シテ何等ノ事ヲ以テスルカノ

十二月廿四日

- 月七日附五八文書英代理公使來翰 日七日附五八文書英代理公使來翰
- 六五文書英代理公使ヘノ返翰
 2 丙丁號十二月十七月附六三文書及十二月二十四日附

|||| 明治十五年二月四日 非上外務卿宛

條約改正ニ付意見具申ノ件

旨ヲ領シ深ク敬謝ス尚ホ充分ノ好結果ヲ得ルヲ切耐スルノ客年十二月廿四日付貴翰ヲ以條約重修結局ノ目的粗決定ノ

竣存スルハ歎息ナリ然トモ曩キニ該問題關係ノ行政裁判等領事裁判ノ問題ニ關シテハ來諭ノ如ク遽廢シ難キ實因尚ホ

以速 税權ヲ輕視シテ尚ホ今後數年間外國ノ干制ヲ受ル セラル 實ヲ後ニ 水諭二依 在職セ 買ハ 定アリ 改正 ントスルニ異ナラサレハ 重修談判ニ取掛度云々トアリ就テハ余不肖ナカラ年 **\sigma** . ニ近世ノ事實ニ徴シテ利益得失ヲ諸君 ヲ信ス カ 如 シ シメ公平有信ノ美觀ヲ現ハスニ如カス然ルニ今回 項中ノ最要點ト 裁判ノ名ヲ先ニス タルハ大ニ憾ナキ能 ニ苦慮シ屢々獻言セシコトハ諸君已ニ之ヲ悉知 v シト雖トモ尚ホ其性質丼習慣ノ如何ヲ萬國交 ハ我政府ハ會計上海關稅增額ヲ必要トス シ反 N テ内政ニ大關係ノ實アル海關 、ナリ寧ロ ハサリ ハ猶ホ巨額ノ金ヲ棄テ法權 丰 我法官其人ヲ得長 何者則海關稅權 ニ告クル Æ 可 ルヲ ハ無 チ 1)

- ノニ スーモ他國ニ對シ交際上ノ義務ト 商條約ハ獨立完全ナル大國ト自治專行ノ小國ト 非ス シ テ之ヲ締結ス · ヲ 論 N
- 條約ヲ視 由貿易保護稅法共ニ純然之ヲ固守ノ 上ルル ヤ唯貿易ノ鞏固(ステビリチイ)ヲ保ツ 國ニ於テハ通 1 商
- \equiv 通商條約ヲ以須要ト視ル 1 國 ハ必ス自由貿易保護稅法

歐米ノ例 今萬國ノ實況ナリ是或ハ敢冒徒言ノ罪ヲ冤レサル カラスシテ廟議亦未タ全ク其影響ヲ冤レサルアル 略ノ運法ニ未熟ナル空論ナリトノ曖昧ナル遁辭ヲ爲ス者少 ヲ蒙ルヤ玆ニ二十八年而甚タ歎スヘキハ今ニ至リ未夕二者 ナ シ ニ諸君ノ モ 異同ヲ辨知セス尚ホ偏縛條約ヲ續結セントシ漫ニロ賞ヲ | 其實ハ之ニ異ナリ偏得偏失其害實ニ極リ無シ我邦亦此害 一於 期ニ臨ミ心慮ヲ前途國歩ノ艱安ニ焦苦スル 條約其名ハ歐米諸國ノ間ニ結ヘル通商條約ニ同シト雖ト モ現二外交ノ重任ヲ海外ニ負ヒ且一大事件 ル 以テ大ニ獨立國ノ實權利ヲ失フ者ハ是レ ノ約ヲ結ヒ其內政ノ一要部タル稅法 カ爲メ耶抑國位ヲ重スルノ不親切ナルニ由 テ或ハ戰後不得止或ハ國權不詳知ニ - 純然固守スル 國ノ 爲メ所惜ナリ特ニ內閣諸賢ノ注意ヲ要ス 三取ル者多ク或ハ時勢未得止或ハ國權稅 一要ヲ彼ヨリ得以テ自己ノ利益ヲ謀 間年期ヲ限リ此不要ナル所 ニ利アラス唯各其財政 其已西諸國ト通商條約ヲ締結ス ニ他國ノ干制ヲ許容 ヲ彼ニ レ國交ノ例 因ルカ皆 ラル條約 ノ身ナル ノ便ヲ計リ ī ル省 如 い實際政 耶 り為 ヘシト雖 キハ竊 如此 三不明 = ス現 メ --丰

'n ル者ア ヲ得ス = ラ 3 由 千預 ガ 7 \sim ヲ許容 **ルナク** 其損害 ~ゼツト モ達シ ノ輿論 ル ル ラ受 至 ŀ 慮熟思ヲ賜ラン事ヲ祈 若シ此要求ヲ拒ムカ或ハ一旦之ニ應シ 結フニ至ラサ 右ハ將來我邦ニ於テ結約ノタメ注意ス 無期限ト ヲ以無期限ノ約ヲ結ヒ得 ハサ 々ニテモ該條約 通商理財 ハ此要求ヲ拒ム ニ妨ナシト判定セル者ナ 十五年二月四日 ル者ト シ締約双方ト 三關 看做サ レハ商議者何レ シタル事件 ノ具トスヘキ者ニ非ストンヲ要スルニ ノ改正ヲ要求スルヲ得ヘク文章直譯 ル ヲ 得 モ他ノ一方ノ同意ナケ ル敬テ再復 ニノ如キハ ヘキ者ニ IJ ノー方ョリモ之カ廢棄ヲ公言 サ ルモ 一非ス故ニ 一國須要ノ內政 事理ハ必シ テ商議 ^ キ 要點 日本或ハ ラ開 ν 有 モ然ラ ナ IJ クモ **デラス**

テ属ス

ス

他

1

意

切っ

Ł

(追申省略)

我邦通商條約改正ニ付疑點トス

ル

所

ハ改正條項

(i)

ヴ

1

Ÿ

クロー

ス)ノ文義不明ナルニ

在リ

余前日密二英國公

ツラヴアスト

トウ

中ス、

二質疑數回

ノ後同氏ノ

註 前掲二三〇文書ナル 二付参照

埃及 税法ハ假令不得正モ他國ヨリ之ニ容啄スヘキニ非ス 新紙サヘモ十二月十日ノ社説ヲ以日本政府カ自定スル所ノ 盛興シ英佛兩 シナカラ其財政ノ大體ニ於テハ國會ノ權內ニ屬スト ハ今後日本自己閱歷ノ學科ニ供スヘキノミト明言ス いノ外國商人輩カ支保セル橫濱刊行ヂヤツ ラ 此説旣ニ歐洲ノ定論ニ屬シ之ヲ公拒シ得 如 事質近年歐洲ニ於テ著ク其餘響ハ遠ク本邦 ハ米タ自ラ其權 モ自治 、キモ從來英佛人ヲシテ會計監督タラシムル ヲ定ムルニ 聴ヲ賜ハル 政 政府ノ存スル所皆之ニ同 リンラ略述スルニ外 府 ハ之ヲ拒 於テ他國 ヘシ現今萬國ノ實況 利ノ何者タルヲ知ラサ 4 7 3 解柄 リ之ニ干預スル フナラス夫 == 2 Ξ ŀ パン、 レ自 唯 25 暗 = 1

井上外務卿時代 劉英交涉

「只條約文面

フミニ

拘リー應ノ見解ヲ下

セ

ハ

該條

約

明治主等青三十百 森并 **体駐英公使** 上外務卿

條約改正ノ二大方針ニ關スル件

森 全權公使殿

草案有之候間拙官篤ト閱查ノ上次便御轉送可及候尤之ヲ預 二月 較ハ實ニ難事ニ有之僅小ノ讓與ハ到底內外法律ノ撞着ヲ來 條約改正ニ付キ彼ニ與ヘル讓與ト我ニ牧回スル國權トノ比 議會ニ提出候以前英、獨兩公使へ相示シ候積ニ有之候今殷 ク)ノ諸法律ヲ適守セシムルナリ此大意ヲ以テ立稿被致候 國ヲ開クナリ其第二策ハ內地通商ヲ許シ之ニ代ハルニ外國 拙官ノ内閣ニ提出候第一策ハ自主國ノ全權ヲ收回シ以テ全 度伊藤氏發途以前内閣ニ於テ會議ヲ開キ候爲メニ有之候即 人ヲシテ内地通商ニ隰シ嬰用ナル我民事及刑事(重罪ヲ除 付キ我ヨリ請求スル件 シ利害不相償ニ付キ寧ロ巨大ノ譲與ヲ爲シテ巨大ノ國權 牧回スルノ優レルニ若カス即チ上文ニ所謂 主國ノ全權ヲ收回スル儀得策ニ可有之ト存 十六日會議後二回 .č 1 ニ對シ彼ニ讓與ス可キ件ヲ預定致 止 候 いか餘 ノ儀ニモ無之條約改正 全國ヲ開 キテ

之貴官書翰ヲ以テ同政府ト御往復可相成儀モ候ハ、 之候樣致度候此件二付丰萬一英政府 之候得共外交上ノ事ハ到底理論ノミヲ以テ云々スルモ熟議 拙官ノ訓令ヲ御中受相成候樣致度候此 - 至リ難キハ貴官ニモ御承知ニ可有之尚此際一層御注意有 ノ上 シ候見込ニ有之候)今般發按之趣意ハ貴官於テ善夕御了悉 三百萬圓ニ減スルノ發議ニ候趣ニシテ拙官ハ四百萬圓ヲ要 使ハ遂ニ發議不致候(竊ニ聞ク所ニョレハ英公使ハ税額ヲ **脳スルノ勢アルヲ以テ暗ニ英公使之鋒芒ヲ挫クニ至リ英公** 條一層御注意有之度候 時機ニ應シ英政府へ御陳述御盡力有之度候」中迄モ無 ス此大樹論一度出 ルヤ夫ノ税論 3 リ疑問ヲ起シ候事有 儀ハ特ニ貴官へ申入 ブ如 キハ頗ル細事 必前以

右甲 -進候也

治十五年四月六日

外務卿

企 公使殿

誑 木(在獨)等ノ各公使宛往信殆ぶ同文ナリ尚同日附柳原(在露)、非田(在墺)、長岡(在り)、根田(在墺)、長岡(左)、東京(古)、東京(古)、東京(古)、東京(古)、東京(古)、東京(古)、東京(古)、東 長岡(在蘭)、

上外務卿時代 對英交涉

> 見萬事協議モ致シ易ク好都合ニ有之候 クス公使モ近來大二面 目ヲ改メ協和ヲ主ト スル 様二

明治十五年三月三十一日

2 伊藤参議憲法取訓ノ爲メ三月十四日後途渡1 同日附駐獨青木公使宛三五四文書同文ナリ 十四日後途渡歐ス

明治十 Ē. 年 [74] **J**:3 バ目 森井 駐上 公劢 使卵ョ

内地雜居ノ宣言ニ關スル件

無號別信

日會議二致提出候即別紙英文差送候間御熟閱有之度候尚三月三十一日附無號別信ヲ以テ大略致開陳置候發按ハ昨 々聞及候ニ付キ最早猶豫ス可キ場合ニ非スト存シ所謂先シ 本政府之ニ對シ何等ノ讓與ヲ爲スヤノ問題ヲ出ス可キ旨 彼外國公使ノ聯合モ大ニ勢カヲ減候姿ニ有之候既ニ 我發論ノ趣旨ヲ賛成シ早便其政府へ報道可致旨答辭 細ノ發按ハ次便郵送可致候今般ノ發按ニ對シ各公使多クハ テ以テ人ヲ制スルノ機ヲ失ハサル様斷然發按致提出候處案 會議於テ英公使ヨリ海關稅ノ儀ニ關シ發議ニ及ヒ且 昨五日 甲述候 カリ目

三四 明治主美月三十日 并 非 計 素 財 英 大 務與使 宛ヨ

内地雑居宣言ニ對スル英政府ノ態度ニ關スル

三月(三)十一日幷四月六日附無號信ヲ以 內我發案ノ一書ヲ示シ同人ノ意見下問アリシ時同人ノ言ニ パークスヨリモ明細報告可差出ニ付其上審議ヲ遂クヘシト 明亮相成カタク何レ追テ日不政府ヨリ詳密ノ發論可有之上 務卿二八埃及愛蘭土等內外多事ノ際二付不件二關シ未夕熟 英外務省ポンスフラト及其他迄我政府發案ノ主意辨明 權ノ部分ヲ分チ若干 略ナルヘシ其策略ト云ハ他ニ非ス卽法權ノ幾部分ヲ收握 テ先ツ其儘ニ相成居候趣然ルニ過日於外務省ケネデ**ー** 考ノ暇無之將又掛リ官員ニハ右發題ノ一事ノミニテハ充分 ントノ内意アルカ爲メ斯 モ了解ノ様子ニ有之其後同省中ノ感覚如何ヲ密探致候處外 二悉承四月五 「是ハ於日本政府爲メニスル所ノ者アツテ提出シタル一策 府 ノ權内ニ屬スト |日會議ニ御提出ノー書モ熟讀 ノ區域迄ハ日 一云カ如 ク發言シタルナラン然トモ 丰 \exists 不政府之ヲ執行シ ハ質地甚夕行 御内訓 ノ末好機會ヲ 到底法 ν へ内 何 セ V

ラ同人發言前已ニ外務省中同一ノ意見ヲ懷キ居タル者モア事情アリ」ト中述タル由此感想ハ獨リケネデー一人ノミナ リト中事ニ候

右内々探知ノ儘御參考迄及內啓置候也

明治十五年六月三十日

森 有

井 Ŀ 外 務卿宛

諈 1 前掲||三||、||三||文書ナルニ付参照

三五 明治主美育二二旦 井上外務卿宛森駐英公使ョッ

ペルメルガゼツト切抜送付ノ件

附屬書 十五年九月二十日ペルメルガゼツト切抜

第三拾四號

事件別紙切拔之通記載アルニ驚ケリ何方ヨリ漏泄セシモノ 英外務省ハ平常外交事務ヲ秘密ニシ決シテ他ニ漏示スル事 本月廿日當府刊行ペルメルガゼツト新聞ヲ讀ミ我條約重修 ナリヤ事質大ナル誤ナク報告迅速ナルハ甚不審ニ有之候於 モ今回ノ如キハ外國ヨリ ノ通信ニ非レハ則外務

> 不取敢 事項ニ關シ輿論ノ如何ヲ暗ニ問試ムルカ爲メ外務省ヨリ故 許容スルトキハ他ノ東方諸國ヨリ請求アラハ亦皆之ヲ許諾 事項ヲ揚クルヲ觀レハ英政府ニ於テ一タヒ日本ニ對シ之ヲ ラニ其一端ヲ發泄シタルモノニハ無之哉ト想像致シ候此段 セサルヲ得ス然ルトキハ英國ノ不利彌大ナル事無疑ニ付此 省ノ外他ニ疑ヲ容ルヘキ所無之若シ果シテ外務省ヨリ出 者トセハ必ス所要ノ目的ナカルヘカラス文中條約有限ノ 御含迄申進候也

明治十五年九月廿二日

特命全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

附屬書

十五年九月廿日ペルメルガゼツト切抜

REVISION OF THE JAPANESE TARIFF.

specific, termination of the treaty. of the treaties has come to an agreement respect-Japanese Ministers sitting in Tokio for the revision The Conference of Foreign Representatives and the A difficulty, however, has occurred as to the nation of the treaty. The Japanese demand others ad vaiorem. tariff imports. Some They average 10 of the duties

admit any such clause into the treaties ese are said to be peremptory in their refusal to reference to the home Governments, but the Japan-Negotiations are at present at a standstill, pending the common consent of all the parties to the treaty. is stated, by his French colleague, is understood on either side. providing for its termination after a year's notice the retention of the clause in the present treaty require that the termination shall depend on The English Envoy, supported it

5 per cent. ad valorem on all imports. The tariff in the present treaties with Japan is

三六 明治宝年一月三十日 **非上外務卿宛** 森駐英公使ョ

條約改正ニ對スル英政府ノ態度ニ關スル件

至リ僕等ニモート安心仕候銀テ御訓諭有之候英韓係約批准 內啓預議會一時收局ノ際朝鮮事件差起リ前後引續半其苦心 ノ程深察仕候乍去本府へノ御訓令ハ其所ヲ得先ツ好結果ニ 、儀ハ米夕英内閣ニ於テ熟議ノ場合ニ不立到様子ニ候得共

> 光今後探得之事柄ハ追々可中進候 甚タ不面白語氣ニ相見得候御含ノタメ別紙御內覧ニ差進候 確然タル事承知不任ケネデーヨリ昨日一書到來右ニ據レハ クスヨリ報告ノ次第并當外務省ノ意見探偵致居候得共未夕

見計ヒ勸説可致心得ニ御座候偖條約改正一條ニ付テハパー

ノ論點ニ關シテハ可成我國利ニ相成候樣注意シ時々好機會

ニ付或ハ批准實行ノ運ニ難相成哉ト預想仕居候尤清國屬邦

付今便ハ略筆致候早々敬具 左府宮過日御着英明日ハ女皇ニ御面謁之筈彼是取込居候

十五年十一月廿四日

森 有 醴

老

附屬書

十五年十一月廿一日附ケネデー氏ョ

Keystone House Sydenham Hill

Nov. 82

My dear Mr. Mori;

Arisugawa no Miya. I should be much Ito and obliged to you for news of young Prince Take-

先般中進候通り税則及其他一二ノ个條ニ異見有之トノコ

ŀ

機密信

條約重修預議會開場中深ク御盡力ノ次第

ハ勿論委曲

領承

五月十九日到

hito. Are they in London? We propose to leave England on the 30th for Russia, but I shall try to see you before I go. We hope also to attend the Reception tomorrow night at the Foreign Office. Shall you be there?

I have read all the papers at the F. O. on the subject of Treaty Revision, I am sorry to think that the whole question may again be deferred. It will be a great disappointment to my friend Inouye San.

異見ナキカ如シト雖トモ唯右期限ニ付後患ヲ顧慮スルカ為

條約施行期限ニ在リ我發案ノ中若干ノ論題ニ至テハ彼格別

ヲ管言スレハ英外務省ニ於テ異議ヲ容ル、ノ點ハ主

トシ

デ

望ノ主意ヲ辯明シ且彼ノ意見ヲモ探知ノ事注意致居候今之來英外務省中有權ノ人々へ面會ノ節好機ヲ見計ヒ我政府企

タヒ日本政府ノ發案ヲ許諾セハ支那其他東洋諸國ニ對シテメ容易ニ我要求ヲ諾セサルノミ其後患トハ何ソヤ卽若シー

モ亦日不ノ例ヲ襲ヒ幾分ノ自由權ヲ讓與セサルヲ得サル

I hope to find Mr. Eisendecher in Berlin and M. de Strove in St. Petersburg. Mr. Renaie is to be knighted and then goes at once to Shanghai.

I remain Sincerely yours,

J. P. Kennedy Please present my compliments to Mrs. Mori.

ル

事實ハ特別ニシテ其例ハ他ノ東洋諸國ニ引用スルコトヲ得場合ニ至ル事モアランカトノ預慮アル是レナリ故ニ我國ノ

ヘキ者ニ非サルノ理由ヲ辯明シ英外務省ヲシテ他ニ顧慮ス

所ナキノ域ニ至ラシムルハ必要ナリト考へ過日外務大輔

二三七 明治十六年四月六日 非上外務卿宛

英外務卿へ内密覺書提出ノ件

與フル將サニ不日ニ在ラントストノ趣ヲ漏聞ス尤其條項ハルニ似タリ然ルニ此際英政府ヨリパークス氏へ更ニ訓令ヲポンスホート氏ニ面會右ノ事柄ニ談及ノ末同氏稍覺ル所ア

確知スルヲ得サレトモ思フニ我カ爲メニ有益ノ事ニ非サ

依テ外務省ヨリ未夕訓令ヲ發セサル

ノ前尚一層

明カナリ

附屬書 十六年三月十三日森公使ヨリ英外務卿へ差出。

由グランヴヰル侯へ差出候別紙英文寫一本差進候條御熟閱 参議へ内談ヲ遂ケ同意ノ上去月十三日ポンスホー 氏ヲ經テ之ヲ英外務卿ニ出スニ若カスト考定シ尚爲念伊藤 危惧ノ地ニ陷ラシメサルニハ内密覺書ヲ認メポンスホー 所爲ヲ束縛セス又之ヲ以テ本使ト英外務卿トノ交際ヲシテ 被降度候 使ハ於當地開談ノ權ナキニ由リ臨機無瑕ノ方法ヲ熟考セ 我政府ノ主意ヲ明示スルヲ嬰スト考察シタレト 假令本使ヨリ發言スル所アリトモ之ヲ以テ我政府後來ノ 七元 卜氏 ∄ /ヲ 經 IJ ጉ シ

明治十六年四月六日

特命全權公使 森 有 禮

井上外務卿時代 對英交涉 二三七

外務卿井上馨殿

附屬書

十六年三月十三日森公使ヨリ英外務卿へ差出シタル覺書

Private Memorandum as to the

Revision of the Japanese Treaties.

1. At the Conference held in Tokio last year, it was practically agreed that the questions as to *Jurisdiction* should remain in abeyance for a time; —Japan offering to open the whole country to foreign trade and residence, as soon as a safe and

proper system of jurisdiction, as regards foreigners, could be agreed to.

- 2. As regards Commercial questions, the Conference arrived at conclusions upon all the points submitted to its consideration—the rate of the Japanese Import Tariff, the Tonnage Dues, the Light House Dues, etc.
- 3. The only point, to which the adhesion of some of the Powers was not finally intimated, relates to the duration of the proposed Commercial Treaty.
- 4. Thus the negociations for the revision of the Treaties, which commenced more than ten years ago, have now almost reached a Settlement, as far as Commercial questions are concerned.
- 5. Japan, by a uniform and consistent course of procedure during many years has fully manifested her sincere determination to enjoy all the benefits of Western civilization, and she has most creditably shown her national capacity, notably as regards the administration of her Custom House System.
- 6. Japan has become convinced of the vital importance of commercial interests, and is further

- fully alive to the necessity of the entire fiscal affairs of the Country being under the exclusive control of the Imperial Government.
- 7. The adjustment of the Customs Duties, which enters vitally into the management of the fiscal arrangements of the country, cannot be placed under the perpetual control of any foreign Power for an indefinite time.
- 8. Japan has however proposed, as a concession to the other Treaty Powers, to bind herself to regulate her Tariff according to an agreed scale, during the period of eight years.
- 9. Japan confidently claims that the signature of the Treaty of Commerce, now so nearly arrived at, shall not be longer delayed; but if, unfortunately, objections to her views as to the duration of the Treaties should be maintained by any Powers, and the long negotiations should thus become abortive, she will be compelled to leave with those Powers who have brought about such a deplorable result the whole responsibility for this failure and for the serious consequences which it must entail.

London March 13, 1883

二三八 明治十六年六月一日 非上外務卿宛

佛政府ノ態度ニ關スル件英政府ヨリノ回章及條約ノ有効期限問題ニ對スル獨

股密信 第三十一號

七月十日到

「大田子」の 「大田」の 「

武参一號ヲ以啓告シタレハ茲ニ之ヲ再述セス 賞改正ノ期ヲ遷延シ以テ現存ノ條約ヲ久績セント欲スルカ 實改正ノ期ヲ遷延シ以テ現存ノ條約ヲ久績セント欲スルカ 實改正ノ期ヲ遷延シ以テ現存ノ條約ヲ久績セント欲スルカ 實改正ノ期ヲ遷延シ以テ現存ノ條約ヲ久績セント欲スルカ 實改正ノ期ヲ遷延シ以テ現存ノ條約ヲ久績セント欲スルカ 實改正ノ期ヲ遷延シ以テ現存ノ條約ヲ久績セント欲スルカ 實改正ノ期ヲ遷延シ以テ現存ノ條約ヲ久績セント欲スルカ 實改正ノ期ヲ遷延シ以テ現存ノ條約ヲ久績セント欲スルカ

幸甚ナリトノ旨ヲ述フ外務卿答曰本件ニ關シテハ今内密ニッルヲ得サレトモパークス氏へ付與セントシタリシ訓令ハスルヲ得サレトモパークス氏へ付與セントシタリシ訓令ハッを関が、本使同行會晤ノ時伊藤氏ヨリ告別ノ爲メ外務卿即份今時富談ヲ開キ本件ハ十年前副使トシテ當時ノ外務卿即份今時富談ヲ開キ本件ハ十年前副使トシテ當時ノ外務卿即份今時富談ヲ開キ本件ハ十年前副使トシテ當時ノ外務卿即份今時富いカラス若シ英政府ノ友情何ノ點ニ在ルコトラ別クヲ得ハスルヲ保知

ント

ス

ル ノ勢

順序ヲ議定スルヲ急務ト 諸大國ト ・お果ヲ得ルノ日應サニ遠キニ在ラサルヘシト 大陸諸國ノ内情ヲ探知シ其模様ニ應シ將來着手 打合中也其事柄ハ未タ之ヲ吐露スル t コト能 25 云因 ታ

探知スヘカラサルニ由リ在獨佛我公使ニ通シテ其事質探偵 前記 テ其條約ハ無期限ノ者タルヘシトノ事ナリト云尤右 府ノ要求ニ應シ増税ノ件ノミヲ肯諾シテ新條約ヲ結 ヲ委托ス數日ヲ經テ在佛公使館ョリノ報ニ云英政府 E [章ハ入手シ難シ然レトモ聞ク所ニ據レハ其主旨ハ日 英政府 3 リ諸大國ヘノ照會如 何タル コ ŀ ハ 到底於當地 1 ۲ 3 次第 不政 丽 IJ 2 ノ

明ス委細ハ青木公使ヨリ報告アルヘキニ付玆ニ之ヲ略ス 大輔幷ビスマーク公秘書官ヲ訪ヒ内密ニ 方法ヲ議ス伯林滯留中伊藤氏頗ル深ク注意シ自ラ獨逸外務 公使ト會議數回三人ノ意見ヲ合セ閣下ノ主旨ヲ貫行ス 伊藤参議巴里府出發前電信ヲ以本使伯林ニ會合ノコ 來ル ルニ條約有限ノ論題ニ至テハ獨政府大ニ友意ヲ衰シ十 九ハ肯諾スヘキ模様ニテ尚今後澳伊其他小國ヲ慫慂 五月十日本使伯林ニ着伊藤氏亦同夕來著是ヨリ青木影議巴里府出發前電信ヲ以本使伯林ニ會合ノコトヲ勸 我所望之主意ヲ辯 ル 要 シ 中 ノ

約有限ノ論域廣大ニ過クルヲ以之ヲ拒ムノ論意ニ通商ノ

發セハ英政府ヲシテ却テ之ニ反對ノ感覺ヲ生セシメ一般條

分ニモ波及シー切水泡ニ屬スルコト

モアランカト

1

恐ナキ

部

同公使館ョリノ詳報ニテ御瞭知ト存候

前述ノ如 ルハ頗 言セシ末今日 亦今般改正ヲ要求スル ル」ニ論シ同 賀公使ヨリロヲ開キテハ妨アルヘキニ由リ 府ニ發言セシムヘキ様内密周旋スルヲ以得策トス故ニ蜂 公然提出スル 議ヲ容ラレ實行ヲ延サル 然之ヲ分別 ナリ ハ第二ト為り財政困難ハ一時ノ辭柄トシテ假用シタルモ 通商條約期間ノコ ト誤認 ル必要ナリト考へタリ然ルニ此事タルヤ我政府 ナ ク條約期限ニ關シ通商條約ノ部ヲ先發ス テ通商條約有限ノコトト諸條約有限ノコト 者ナリトノコ シテ二項ト爲シ假令第二卽諸條約有限ノ部 心セラル、 ヨリ寧ロ佛政府ヲシ 人ラシテ此周旋ヲ負據セシメタリ 一般ノ條約期限ノ論ヲ固守セハ海關稅增額 コトニ有之候 一ト、分別 ノ恐ナキ ノ論柄トシテ我財政困難ノコトヲ明 ŀ 、モ第一即通商條約有限ノ論題 明白ニ佛政府ヲ スル ニ非ス旁一般條約 テ自己ノ意見トシテ英政 ヲ以得策ト考へ前文ノ 篤ト シテ解得セシ \neg 湖限 マルシ ル 7 ショ 要 3 25 = 須 + IJ 1 25 Д =

日來奔走盡力致居外務省 上ハ外務卿ノ 同意ヲ得ハ我所望ノ通英政府へ回答ヲ ヨリノ報ニ據 中政務通商兩局長二 ν > 7 ル シヤル ハ 爾好都合 <u>__</u>

> 佛政府ノ内意探偵ノ所ニ據レハ外務省中政務通 **尙彌伯林ニテ相談ノ主義ヲ確守シ盡力スヘシト決ス** 本使最初 又退テ熟考ヲ加レハ佛政府ヨリ果シテ一般條約有限ノ論ヲ 内議ニテハ條約期限ハ雷ニ通商條約ノミナラス一般ノ諮條 回章ニ不同意ノ旨ヲ答ヘントスル = 有限ノ約東トスルノ論項ニ至テハ東西ノ意見恰 親ク閣下 チ伯林ヨリ巴里ニ 我カ為メニ友情ラ抱キ将サニ外務卿ニ勸メ英政府 至 勸ム サル由抑佛政府斯迄ノ好都合ニ運ヒタルハ大幸ナレト テノ將來着手ノ 晤スヘキコトヲ以テス本使亦一タ ルニ テモ亦望有限ノ者タルコトヲ認識セントスル程 3 ハ巴里ニ出張 リ承リシ所ナリトノ咄ニ據レ 歸路巴里ニ立寄蜂須賀公使及「マル 廻り蜂須賀公使等ニ面ス同人東京出發前 方法ヲ打合置カハ蓋シ益アラント ノ意ナカリ ノ勢アリ然ルニ同 シニ ヒ巴里府ニ立寄同 伊藤氏 ハ通商 ⋾ 商兩 モギ ラ部 り切っ **≥** 7 政府 ヨリノ 局長大 ラ分チ 考へ乃 合 本使 ノコ 三付 地 モ 1 =

佛兩政府 ヲ拒絕 ハ其實有限ニ相違ナケレトモ字句上圭角ヲ露ハサル、カ月日ニ始リ何年月日マテ續行スヘシ」ト云如キ文章ヲ用 限 場合ニ至 此際十分周旋盡力セハ通商 現今佛獨兩國共我邦ニ友情ヲ表セント欲スル 右ノ趣伺置候ニ付果シテ閣下御異見ナシト 25 ク 英國カ年來東洋諸國ニ於テ占斷スル所 贈ルヘキ場合ニ運 メ或ハ於英政府取扱易キ事情可有之哉ト相考昨日電信ヲ以 彼カ利己主義ノ政略上不得止 利益亦自ラ退縮スヘキコト 速ニ青木、蜂須賀ノ兩公使へ通知可致積ニ有之候 - 關スル文字ハ可成之ヲ迂曲ニ 何トナレハ若シータヒ之ヲ我邦ニ許諾セハ支那其他東洋 サ スルコトヲ得ヘカラス果シテ如此 ŧ ν ョリ右 亦日本ノ例 カ我望意ニ對シ異議ヲ容ル ハ ルヘシト冀望 兩國 ノ便法ヲ英政府へ勸告アルヘキ様周旋 ヒ居候 ラシ ヲ襲ヒ同一ノ要求ヲ爲スノ日 テ 致居候但佛獨兩國 暗二 ノ一部ノミハ速ニ結果ヲ得 同 明白ナルニ由リ我所 7 一ノ手段ニ シ即「本條約實施ハ何年 ጉ ノ主點ハ條約期限 、云ヘシ就テハ條約有 ノ權勢自ラ削滅スへ キ場合ニ至 間 五三 ノ電令ヲ得 出テ英國ニ (ノ好機會 嫉妬 が望ヲ拒ム ---方リ之 、カ為 トキ ラ 三在 八獨 ル ノ ヺ 1 ۲ ハ コ

セ 打合置候 シム ル ノ 策ヲ施スコト最肝要ト考へ青木蜂須賀兩氏へ モ

右件《申進候 也

明治十六年六月 一月

特命全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

註

2五月三十一日森公使發ノ電信見當ラ1二三七文書ナルニ付参照 ゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙

三九 明治士至七月十 \Rightarrow 日 森駐英公使 宛ョ

條約改正事件ニ付在獨、 佛公使ト協力方ノ件

森公使へ機密信案

手續詳細御報道ノ趣欣讀不啻候貴君伊藤參議ト御協議爲成歐洲諸大國ノ意向将信、眞ミ扌・・・ 貴機密信第三十一號接收致閱悉候條約修正事件二付先般來 ヲ有期ノ者ト爲シ候儀ハ固ヨリ望ム所ニ有之候得共如 却而其爲メニ英政府ノ感觸ヲシテ一層不快ナラシメ遂ニ 貴說

然卜 戦ニ挫 難ニ非ラザルベシト致思考候處今般御申越ノ如 之候ハ實ニ爲邦國欣喜スル所ニ有之候就テハ此後ト 又ハ間接ノ手段ヲ以テ我目的ヲ勸說致候得ハ蓋其成効ハ至 テ 先以通商條約 層御協力之程不堪切望候將又有期ノ文章ヲ簡單ニ爲ス方可 緊要ト思考致候右ノ如ク各使臣協同一致內外相應シ精神ヲ ヤ猶將接之一和ヲ得ルトキハ隨テ運用ノ妙域ヲ得敵鋒ヲ未 ルノ方略ヲ講シ其動作甲乙矛盾逕延ナク進退一致ニ出ツ 今般ノ如ク各位共無隔意彼此之意見ヲ融通シ豫メ彼ニ應ズ 須賀等御會合ノ上我可施方略等各自無腹藏御協議相成候趣 = 税則ノ方ヲモ併 一途ニ注キ候上ニテ萬一成功ヲ不見ノ不幸ニ立至候共揺官 於テハ毫モ遺憾トスル所ハ無之候間此意ヲ以テ將來共一 拙者之從來希望スル處ニ有之候處今日此和同ノ御談合有 投シ在外我各使臣ニ於テ同心協力其任國政府ニ向ヒ直接 ハ有期ノ問題ニ付追々好都合之運ニ相見候就テハ此機宜 有之候既二貴官ニモ御承知相成候通近時獨佛兩政府 ノ御意向ニ付五月三十日六月一日同六日別紙甲乙丙號 キ得ルト一般我ニ乘スベキ隙ナカラシムル へ有期ノ章ヲ加ヘ該約ノミヲ卽行候様致度儀 セテ行ワレザル様ニ相成候テハ無詮儀 ク旣靑木蜂 ハコト一大 モ萬端 三於 付 ル

セ ス 何年何月ニ始リ何年何月何日ニ續行スベシトノ文章ヲ換用 キ文章ニテハ圭角アリテ到底同意ヲ難得トノ場合ニ至リ候 丁號寫ノ通答電ニ及置候乍去今後各政府ノ内情我說明ノ 付右豫防ノ為可成丈明瞭ニ説明ヲ致置ク方可然ト存シ別紙 議スルニ非ラザレバ全廢難致等ノ紛論ヲ生起候哉モ 或ハ終期之時ニ至リ現行條約ニ取極候約束ニ立戻リ双方協 約改正ノ目的幷ニ有期ケ條ノ儀ニ付中送候間貴官ニ於 ハハ不得已儀ニ付單ニ其文字ヲ迂曲ニシ卽チ本條約實施ハ 之通貴官ョリ ザル ルモ敢テ異議ハ無之候得共可成全廢ノ事ニ付見解ヲ異 :ノ如ク通商條約ハ何年何月日ニ終ルトノミノ文字ニテ 様ノ文體ヲ撰ミ度候間尚青木蜂須賀へモ御協議ノ上 へ御申入相成度候先便青木公使へ別紙寫ノ通後來條 以テ御斡旋相成候樣致希望候此段中進候也 ノ電報ヲ接シ候然ルニ當時 ノ考案ニテハ 難測 御電 ハテモ 如 = 2 =

註 前揭二三八文書

2別紙甲、乙、 見當ラズ 丙號 (森公使來電) 及丁號(外務卿答

二回〇 明治去等月二十日

井森 7上外務卿於駐英公使 宛ヨ

井上外務卿時代

對英交涉

二回〇

條約改正一件ニ付在獨、 佛公使ト協議ノ件

附屬書 十六年九月二十日スパー發森公使來電 (青木蜂須賀二公使ト懇談ノ件)

__ 十六年九月二十一日スパ **一發森公使來電**

十一月七日到

內信

弊ナカルヘキ事ヲ信シ小生ニハ私ニ會議ノ結果ヲ欣 達スへキ様盡力ノ方案ニ同意シタリ蜂須賀氏亦異論ナシト 號ヲ收受シ閣下高意ノ所在ヲ瞭知セシニ由リ其主旨ヲ適守 = 條約重修一件協議ノ為メ巴里府 所在ヲ知ル能ハス然ルニ同國ハ我ト貿易ノ 略ホ之ヲ伺知ヲ得タレト テハ今後着手ノ順序ヲ謀ルニ歐洲大陸中結約諸國ノ意向 云於是各任國政府ニ向ヒ周旋盡力ノ目的一定シ東西撞着ノ ラモ示シタレハ青木氏ニハ釋然了解今後彌閣下ノ御主**意**貫 シテ兩公使ト將來着手ノ方法ヲ協議シ且念ノ爲メ右ノ貴信 、時日ヲ約定シ小生ブロツセル府へ出張ス兩公使モ亦同時 來會アリ是ョリ先キ兩三目前小生ハ閣下ノ機密信第十一 會同可致旨御電令ニ因リ直ニ電信ヲ以右兩氏ト集會ノ場 テ 渡ス カ ラサ N ハ勿論ニ モ獨リ 付先ツ伊國 伊國ニ至テハ未夕其底意 へ出張シ青木蜂須賀兩公使 關係ア ノ内情ヲ探知 ŋ 一小國 ヘリ就

報スヘシト定ム 且我望意ノ貫達スヘキ様周旋シ而後諸政府ノ模様ヲ酌量シ ア英國ニ於テ更ニ着手シ其次第ハ速ニ青木蜂須賀兩氏 $\overline{}$ 通

サルヘシト思ハル故ニ兩人ノ内ニテ出張スル事ハ暫ク見合 政府 卿等ト 氏小生兩人ノ内ニテー名或ハ兩名共彼國へ出張スヘシ ユへ誤解ノ懸念ナカルヘシト考へ小生ラモ此青木氏ノ發議 ニハ好都合ナルヘシトノコトニテシーボルト差遣ノ發議ア ハセ先ツ試ニシー 有之二付青木氏小生兩 人ハ伊國外務卿大輔ト ノ處靑木氏ノ說ニ據レ 同 抑同人ハ東京會議ノ際閣下ニ親接シ御主意ヲ熟知セル人 |國ノ義ハ小生從前深ク注意致居タル折柄今回御電令 ニ打合セタリ 意シ尚シーボルト出張後ノ模様ニ因リ必要ナレバ青木 ノ望意ヲ瞭知シ大陸諸國ト合同スルモ英國ニハ左袒セ 面議アリタル様子聞及ヒ居レハ同國ニ於テハ多分我 ボル モ懇意ノ由ニ付公然トナク談判スル ŀ ハ先般伊藤參議歸朝ノ途次同國外務 |人ノ内ニテ直ニ同國へ出張可致 ヲ遣シ探偵周旋セシメテ可然尤同 心算 ۲

.政府ニ對シ更ニ新手段ヲ以公然着手ノ義ハ暫ク見合セタ 方現今ノ事情ニ就テ考レ ハ却テ宜シカル ヘシ尤閣下ノ御

> 此旨ヲ閣下へ電報ノ時間接盡力ノコトヲ書キ漏ラシタル ト其後ニ至リ承知致候 カラストノコトハ青木氏小生トモ同意シタリ蜂須賀氏ョ 訓令ニ基キ公然ト ナリ間接ノ盡力ヲ爲スハ寸時モ踟蹰 ス IJ コ \sim

通秘密電信差進タル次第也閣下ヨリ更ニ御電令アラハ同氏 致盡力スヘシトノコトヲ信用シ難シ因テ昨日別紙甲號寫ノ 躇ノ色アルヲ察シ小生ニハ不得止當地ニ滯留スルコト旣ニ 氏丼マルシャル共ニ條約一件ノ談ハ故ニ之ヲ避ケント欲ス 高意所在ヲ明ニセント試ミタルコト屢々ナルニモ拘ラス同 N 席ニテ約定ノ通一致盡力ヲ踟駶スルノ色アリ且傍ラ聞込タ 立去レリ然ルニ同氏ニハ鬼角覆藏スル所アルカ如ク會議ノ 歸任ヲ急クノ用向 御訓令ノ通リ共同一致盡力ノ事ハ青木氏全ク了 數日ヲ重ヌレトモ碊念ナル哉尙ホ未タ同氏ノ疑念ヲ釋キ一 ハ抵抗ヲ爲サヽルモ中心ノ異端ハ全ク之ヲ除去セス左右駶 ルカ如キ模様アリテ充分辨明ノ機會ヲ與ヘス且兎角表面 シ蜂須賀氏滯在地「スパ」へ直ニ赴キ懇ニ辯説以テ閣下ノ ヘシトノ約束 コトモ有之小生ニハ不安心ニ相考タルユへ歸英ノ路ヲ變 ニテ歸任ト モアル由ニテ若シ事アル時 同時ニ蜂須賀氏亦ブロ ハ再 ツセ ۲ ル府ヲ =

得タル 望ヲ以今一兩日延滯ノ積リニ 疑點氷解シ小生所説ノ事 上歸英セハ將來着手ノ際誤解 モ明瞭ナル 候 ノ懸念ナ ヘシ可成 カ N ハ其結果ヲ ^ シ 1

呈致シタル次第ナリ此上ハ蜂須賀氏ニ於テモ判然閣下ノ御 深ク注意スヘシトノコトハ何レモ同意ノ末蜂須賀氏ハ青木 主意ヲ了解シ一致盡力ノ場合ニ至ルヘキ様深ク注意シ且期 **幷小生へモ更ニ相談ナク右ノ電信ヲ秘密ニ出シタル也然ト** シタルコト是也抑會議ノ席ニテ將來各個ノ擧動ハ共同 今朝發見シタリ右ハ本月十五日同氏ョリ閣下へ電信ヲ差出 ヲ小生へ示シ且種々辨解アリ因テ別紙乙號寫ノ通電信ヲ送 モ今日ニ至り竟ニ隱蔽スヘカラサルコトヲ自ラ悟リ電信寫 トシ大小共ニ互ニ通信ヲ怠ラス彼此抵觸ノ弊ヲ生セサル様 蜂須賀氏ノ疑念アルコトハ過日來ノ想察ニ違 ハサ 、ル事實ヲ アラ主

尙今後ノ事情ハ詳細可中進候へ共過日會同 タシ度如此ニ御坐候敬具 顛末一 應內陳

十六年九月廿一日 スパーがテ

有

非 上 閣 **F**

1三0二附屬書參看

附屬書

〈青木及蜂須賀二公使よ懇談ノ件〉 十六年九月二十一日スパー發森公使來電

Gaimukio

out your seems to hesitate to act together with us. Berlin in full understanding with me how to carry After we held conference Aoki has returned to instructions, but since then Hachisuka

Spa, Sep., 20, 1883.

Gaimukio, 十六年九月二十一日スパー發森公使來電

myself. telegram of 15 instant which he showed to me morning was by me. He now promises to act with me cordially. Having had a satisfactory explanation with Hachi-His views contained in it are not supported withdraw my telegram of sent to you without telling yesterday. Aoki and

Spa, Sep, 21,

蜂須賀公使ハ御承知ノ通リ

一種奇ナル性質ヲ備ヘタ

ル 人物

四 明治去等一月九日 森駐英公使

獨逸公使へ覺書交付ノ件

附屬書 十六年十月一日發淺野公使來電

內信

Ŀ

書狀落掌候故拙官モ大ニ休神致居候

初

テ協同シタル趣ハ貴簡并ニ蜂須賀公使ヨリ此度委細説明ノ

樣御注意相成度尤同氏モ遂ニ拙官ョリノ電信モ入貴覧候 付其邊ハ預テ御含置被成諸事同氏ヲ誘導シテ從事セシム

望居候 尚此後ト 趣ニ付自ラ好結果ヲ得候半事無疑ト拙官モ深ク滿足致居候 貴官於テ青木蜂須賀兩公使ト協同熟議シテ諸事御盡力 月廿一日スパ發ノ貴簡致披閱候夫ノ條約重修一件ニ付 モ同シク青木蜂須賀ト善ク商議御盡力相成度致希

程同國政府ヲ動カセシナラント思考致居候得共貴官方ニ於 據テ觀レハシーボルト氏同國へ赴キ奔走霊力致居候爲メ餘 話無之由然シ過日淺野公使ョリ別紙ノ通リ來電有之候處ニ 僅カニー度ノ面會ヲ遂ケシノミニテ本件ニ付何モ十分ノ談 御來示伊國ノ テ尚不十分トノ御見込ニ候ハ、御協議ノ上貴官ニテモ青木 公使ニデモー人速ニ伊國へ出張飽迄我望意ノ貫達スル様周 旋方御着手有之度候 、義伊藤参議ニ相尋候處同氏モ伊國外務卿 1

> 度致希望候此段以內信申進候也 談判ノ提要ハ過日已ニ以電信申進候通ニ有之候其後再度ノ テ各國政府へ相廻シ候事確然御承知ノ後迄ハ極密ニ被附置 送附セシ場合ニ立到候儀ニ付獨逸政府ヨリ右ノ意見書ヲ以 右ハ金ク獨逸政府ノ好意ニ起リシヲ以テ竟ニ右ノ意見書ヲ 政府ノ意見書相認メ秘密トシテ書簡相添同氏へ交附致置候 談判ニ及ヒ内閣一同トモ協議ノ末遂ニ別紙ノ通英文ニテ我 本件ニ付本邦在留獨逸公使カウント、 デンホツフ氏 ŀ

六年十一月九日

爲御心得差出候御一讀被成置度候也 今般伊藤参議ヨリビスマルク公エ送致ノ書簡 寫

1前掲一四〇文書二付參照

附屬書淺野公使來電

4伊藤参議書簡寫見當ラズ 3獨逸公使宛書翰及英文意見書ハ**一〇六**文書参看

(伊國政府獨提案ニ賛同章ノ件) 十六年十月一日發淺野公使來電

From Asano to Inouye.

for treaty revision and to use good office of Affairs; (he) agrees to accept German proposition with England and France Satisfactory interview with Minister for Foreign Italy

October Ist

四四 明治士等一早七日 森駐英公使宛 井上外務卿ョ

獨逸公使へノ覺害及英政府ノ囘章ニ關スル件

内信

健

務

電致候次第二候其後獨乙公使カウント、ドノホツフ氏モ來 其他各政府ノ意嚮モ未夕充分ニ明瞭ナラス拙官ハ只夕善ヒ 過般貴官等ブラツセルス府ニ於テ會議ノ節ハ獨乙白耳義及 着シ又貴官青木蜂須賀マルシャル氏ノ報告モ落手シ獨佛白 カ上ニモ善ク致度ト存シ八月廿九日附ヲ以テ青木公使エ 各政府ノ意嚮モ委シク致了解候就テハ先便及御送致候獨乙 蓌

> 公使ト 懇話ノ末附與セシ覺書ヲ基礎ト シテ協同御盡力相

成

等ニ於テ時機ヲ酌量シ無遲緩御着手相成度候 御同案ニ候乍併當方ニテハ其機會ヲ知ルニ由ナシ由テ 更ニ英政府ニ向テ着手スヘシトノ貴官御意見ハ拙官モ至極 歐洲大陸各政府ヲ擧テ我方ノ手ニ入レタル處ヲ機會ト シ

先便及御送付候獨乙公使ニ付與セシ覺書ハ秘密ト 考ニテハ此位ノ事マテハ我政府ニモ承知可致ト思へト 承知致居候様ニテハ大ニ獨乙政府ヲシテ不善ノ感覺ヲ生セ 居仲勸告セシメ度存居候就テハ獨乙政府ヨリ右覺書ノ旨意 歹 蜂須賀公使ヨリ白耳義外務大輔ト 國政府ヨリ讓與ノ點ニ付何トカ御談判及候テモ自分一己 令ト稱シ御發言被成候テ可然時機ノ到來セシ節ハ青木公使 シメ候恐有之候ニ付右覺書ノ旨意ヲ以テ公然我外務卿ノ訓 ヲ以テ各國政府エ掛合ヲナスニ當テ其國政府ニテ巳ニ先ツ コロノ考案ヲ可諾スルトキハ同政府ヲシテ他各政府ニ向テ ルモノニシテ獨乙政府ニ於テ若シ果シテ右ニ記載スルト ノ者ニヤ 拙官及貴官エ トイフ語氣ニテ模糊ト 御通知可致筈ニ付其時機ノ到ルマテハ其 會話ノ筆記送越致閱讀 御話置相成度候 シテ 1

度候 リ可中哉トモ存候尚其邊ノ處篤ト御勘考御意見御申越相成 牛妨碍ヲ來スモ不被計反テモヲ吹テ疵ヲ求メルノ拙策ニ陷 付ケ又其爲メ他年改正ヲ申出タル時無頓着ニ取合ハヌカ 以テ强情ラ言募候時ハ我ニ於テモ英政府ノ考案通リ承諾 候)抑拙官ノ底意ハ重修一件彌ヨ希望ノ如ク行ハ ト答詞スル方可然カトモ相考居候如何トナレハ餘リ ハ現行條約ニ立歸ル考案ニ候因テ英政府ヨリ回章ノ主意 ハ實ニ困難不少ニ付尚二三年ノ猶預ヲ以テ篤ト思考可致 ハ蜂須賀公使ョリヒニ貴官エ寫ヲ送 IJ 夕 レ無 旨申來居 强ク撥 候 如 スラ 時

密ニシ彼ヲシテ十分我ニ傾カサセ度企望致居候考ヲモ生スヘク鬼モ角交際最モ肝要ト存候何トカ交際ヲ親間ニハ或ハ幾分カ「パアークス」氏ノ意嚮ナドトハ異ナル成閥悉拙官ノ思考スル處ニテハ同氏着任ノ後ニ及ヒ永日ノ新任公使プランケツト氏ノ事情及同人意嚮等内密御申越相

ニテ預テ「リイド」氏ト往復シ洩ラセシニハ無之哉ト疑ヲ知致居筈ノ事ヲ同氏ニモ承知致居候ハ若シヤ「レエン」氏ノ時ナトモ大ニ我障害ヲ爲シタル趣且又我公使ノミニテ承伊藤参議ョリ承及候處ニテハ「リイド」氏儀先般艦船購入

後モ屢々面會致シ拙官ヨリモ我國今日外交上困難ノ情形橫歩ノ度ヲ決スル事能ハサル事等懇々為御話同處ヨリ歸リシ現在スル困難ノ件々等及ヒ片言ヲ聽キ一斑ヲ窺フテ金國進

ヘラルド及ガゼツト

新聞等ニテ居留地ノ支配ヲ外人ノ手

過日 セシ時ト テ面會セシ時貴官 記官ヲ同行爲致道スカラ我國現今ノ情形ハ最初外國ト結約 候幸ヒ天長節ニ付內外諸紳士モ集會ノ事ユへ御紹介可申旨 片言ヲ聽聞セシノミニテ在東京內外ノ紳土トモ御談話不被 其節雜話中ニ拙官ヨリ我國ノ景況モ只夕橫濱在留西洋人 總領事アルビン氏ト 込ノ處篤ト御勘考ノ上次便御申越相成度候 申述置三日朝觀兵式幷同晚夜會ニモ案内致シ諸氏ニ引合ハ 成シテ我國ノ全體ニ概評ヲ下スカ如キハ公平ノ裁斷ニ ヲ冤スルトキニハ如 抱キ居候就テハ セ且ツ四日早天ヨリ日光表へ遊覽致度旨申居候ニ付栗野書 ドカー思案致度候間貴館ニテ果シテ要用テルヤ否將タ之 來サア、 ハ大ニ進步セシ事就テハ現行ノ條約ニテハ今日迄 シド ヨリノ御添書モ落掌致候ルー ニー、オー 同船ニテ來着アルビン氏ノ 何ノ方法ヲ以テ冤スヘキ 工 ン」氏ノ要用ト否ト トルロ ー氏及ルウ 因 ヤ ・シー氏ト 紹介ニテ始 シ 'n テ拙官 貴官御見 1 氏布 無之 ノ モ

總領事 密ノ書類ヲ示スヲ好マス因テ同氏發程前一日伊藤參議アル 刊不致旨ヲ誓約セラルレ 氏ヲシテ其內ノ要點ヲ言葉ヲ換ヘテ寫サセ差遣候時ニ「ル リ)ヲシテ其所持ノ會議錄ヲ一通リ讀ミ聞カセ尚テニソン 氏夫婦ヲ午餐ニ招キ候節アルビン氏(アルビン氏ハ布哇ノ ビン、ブリンクリー、デニソン等ヲ陪客トシテ「ルーシイ」 右様ノ擧動 國政府エ企望シタル點モ粗相話シ且双方人民ノ交誼 新紙ニ掲載スルコト 致居候處思ヒショリ ウシイ」氏自分モ平生日本ノ景況ヲ今程迄ニハ無之ト思考 ヲ隆盛ナラシメン爲メ全國ヲモ開クヘシ內 ント欲 シ ナラン叉將來我國ノ事 、送ラル 等詳細内話致置尚昨年ノ會議錄モ若シ必ス新紙等ニ ナルヲ以テ同國政府 好意ラ表シ居ル事丼ニ我政府將來ノ爲メ改正ニ付他 スル - スル ニ及間敷旨誓約候ニ付拙官ヨリハ直接ニ外交秘 、ヘシ自分意見トシテ モ治外法權ナル者互ニ中垣セシ姿ニテハ不能 事及我政府 ハ餘程進ミ居 ハ必ス在横濱外國人ノ嫌 ハ内 二付新紙 こ送ルタメ同氏會議錄ヲ所持 25 ~御見 深ク外國 掲載スヘキ旨 シリ ニ出刊ヲ望マ セ可申旨陳述候處決テ 余モ是ヨリ 一人ノ便利ヲ謀リ 地旅行ヲモ許 がハルトト ルヽコ ヲモ申出 龜國 ラ厚フ ジ後 ·商賣 ト ם ァ t ス

> 本月一日 帆致候 差進候右ノ件々以内信申進候也 海丸ニテ神戸エ向ケ致出發候尙別紙長崎ヨリ差出候報告寫 趣ニ候是モ「ルーシイ」氏ト 此待遇ヲ受候モ畢竟拙官ノ注意ニ依レリト 長崎ノ話ニハ日光エ参リ候節抔ハ大ニ人民ノ懇待ヲ感シ如 天長節觀兵式及拙官方ニテノ夜會ニ案内セシノミニ 及日光見物等致候爲メ遂ニ食事ヲ共ニスル = 京阪地方ヲ遊覽シテ歸國ノ筈ニ候)又オート 全部完備ノ上贈與センコトヲ諾セリ去ル十四日快ク橫濱出 付逗留中 三充分滿足ヲ與エ申候又我國諮統計表ヲ一覧致度旨ニ付 (同氏ハ横濱ヨリ芳野丸ニ乗組四日市ニ赴キ夫ヨリ 入京面會致候原來同氏ハ平素長崎省吾ト懇意ノ趣 ハ諸方見物ノ世話等一切長崎ニ委任シ諸處遊覽 同斷去ル十四日横濱解纜ノ 深ク欣喜致居 ノ日合無之只タ ルロー 候併 氏儀 玄 ハ シ

十六年十一月十七日

3長崎ヨリノ報告寫見當ラズ2對佛交渉三〇三附屬書三参看

|四|| 明治十六年十月五日 非上外務卿宛

英外務卿へノ事實書取書ニ關スル件

欧密言第丘十二虎

十一月十九日

ニ其次第ヲ略述イタシ族モ御照察アルヘシト雖トモ聊說明ヲ要スルコトモアレハ左呈スルニ方リ今日之ヲ英政府ニ贈ルノ必要ナル所以ハ閣下民株約重修一件ニ關スル事實書取草稿一通ヲ茲ニ閣下ニ送

テモ亦 保守黨ノ政府 英國ノ外國ニ 般迅速且堅牢ニ進步シ東洋中無比ニシテ條約重修ニ付我請ニ在ルヘシ今其方法ヲ案スルニ第一我國制度工業其他ノ諸 求スル所ノ要點 トス 區別 ラ以彼 實益消長ニ關スル ラ得ルニハ專ラ我地位 がナク殆ト (之ヲ徴スヘキ也是ノ故 ルニハ單二漠然タル理論ヲ以彼ニ迫リ或 ニ開列シ以テ彼ノ意向ヲ變轉セシムルノ方法ヲ考 事實ヲ明示シーニハ以テ彼カ陰ニ所懷ノ空妄ナル 1、望ムカ如キハ蓋シ實効ヲ奏シ得ヘキノ法 對スル パニ異ナル -同一轍ニ 八他ノ東洋國ニ於テ之ヲ追做スルヲ得 事件 政略タルヤ常ニ コト 出テ自 ニ至テハ之ヲ處理スル ニ屬スル所ノ明確サル ニ我論鋒ヲ以彼ノ鐵壁ヲ破 日由黨ノ政 現ニ我條約重修ノー 利已ヲ主 が府タ ij 1 3ハ友邦ノ ノ目 シ 1 雖ト 事實 茍 事 的 モ 政自 ハヘカ 黨

> ヲ ニ タ ノ ヲ 顧慮セ 出テシ 方案ト云 、以大綱 動カシ 立ノ不良ナル コスル ラシム シムル トスレ 4 我要求ノ過度ナラサルコト 親和公 シ ルノ手段ニシテ ヘキ者アリ コト是也 コト コト 1 Æ 平 倘 ヲ感動 ラ勢焰 以テ彼ヲシテ排 日右二策ヲ併行シ彼ヲシ 一步ヲ進メテ之ヲ考フレハ更 助セシムル ラ英政 卽英政府ヲシテ英國 米諸結約國ノ友誼ヲ得此 府ニ及ホシ彼ヲシ ヲ悟リ コト是也先ツ右 7 更二 柄 ラ構 公正 テ漸 ブ 輿論 ス アニ第三 ・テ自ラ ノ 刀 ル 措置案 國 ⇉ カ

少シモ他ノ 今 フ テシ 我請求ノ諸點ハ悉皆我國資格ノ內ニ屬シ決シテ其外ニ ヲ基礎トシテ條約重修ニ付多年經歷シタル セ ヤ幸 前述第一ノ策ヲ施スニ於テ恰當ノ時機ニ遭ヘリ而之前述第一ノ策ヲ施スニ於テ恰當ノ時機ニ遭ヘリ而之英政府ニ抵抗セントスルノ好機ニ會セリ故ニ英政府 サル 手段ヲ施スヲ以上策トス其事タルヤ固ヨリ訓令 二下 ニ米國ハ勿論歐洲 ラ徴スルニ足ルヘキ諸般進歩ノ事實トヲ列舉シ 理論ヲ附加 セスシテ細密注 大陸諸國 多クク セハ 意書取タル 我國 事實ト = = 友情 重修 別紙即是 ン 主旨 超出 三付 知ス

嘗テ之ヲ失ハサリ 以下悉ク明確適切ナル --۲ Ŋ ル ス 一國使臣ノ意ニ任 人損權條約 我自ラ甘諾シタルモノニシテ彼ノ戦後不得止 」氏ノ書翰中二於テモ明二之ヲ見ルヘシ然リ フ 外國 シコト ブ 1 事實ノミヲ列擧 類ニ非ス結約上自由ノ 共 仕セテ決定シタルコト 亦明白ナリ故 ~ 此 to IJ ートハ「タウセッルヤ我ニ實験 點 - 曷ケ起シー國權ハ我未夕 シ ŀ ンデ

テス ナル 我國近年ノ進步ハ世人認知スル所ナリト 通觀 ハス或 レス蓋シ其原由ヲ推考スルニ凡西洋諸國ニ於 不自由 諸國ノ 默許ヲ經耶蘇宗門ヲ信スルノ徒アリ ルヲ常習トス然 ŀ 1 굸 == ス ハ其質外面程ノ進步ニハ非サルヘシ 事. ν ラ 如 テニ至テハ 氣風特種 ハ耶蘇教 開進ノ程度ヲ量ルニハ率ネ其國宗教ノ ナ ル未開國ニ似タル 想像ヲ懷ク者少 有様ナレ 今日 派ルニ 我國 ナル 三歸化 ハ他 蛇三 カ 爲 セシ メ宗教 3 ラ ニテハ自由信教 が進スル所 者甚タ寡少ナル 諸事進步モ ノ形跡アリ ŀ - セス然 ノ 如何タル 雖卜 プ質 ŀ ルニ我國ハ古 戦トモ英政府ニ於 國宗教ノ事ハ已ニ政 國宗教ノ事ハ已ニ政 国家・ の宗教ノ事の同ヲ以 ットノ見解ヲ下ジナルニ由リ彼 亦之ニ彷彿タ 殆 = 1 西洋 ラス 諸 來 ノル シノ

緊要ナリトス是レ別紙ヲ起稿シタル一ノ目的ナリラシテ其現實ヲ明識シ從前ノ妄想ヲ破解セシムルコト最モニ進達シタルコトハ我ヨリ之ヲ誇言スルヲ得ヘク而英政府ト並肩スルヲ得ヘク況ヤ亞細亞中ニ於テ獨リ比類ナキ地位

スルニ足ルヘシ 序ニセハ猶更前文乞哀ノ 然トモ ヲシテー書ヲ望マシメ テ 哀憐ヲ乞フカ如キノ策 品位ヲ保ツノ意ヲ含ムヲ以之ヲ見ルヘシ(憐ヲ乞フカ如キノ策ニ非サルコトハ書中 提出スルハ上策ニ非サルヘキニ付英外務卿ト 此 __ 書ヲ英政府ニ贈ルハ固ョ ベノ如キ卑劣、不而後彼ノ請な -卑劣ナ 求ニ應シテ立稿シ 人書中ニ ŋ N ゥ小入ノ大入 心 意 叉我ョ ナ 一於テ充分我國ノ大人ニ向テ其 丰 談話 \exists IJ ŀ 角ラ好 夕 ヲ ノ 末彼 朋 N 示 順

公示 惹キ起シ速ニ我所需ニ應スルノ地ニ至ラハ抑此一書ヲ出シタル後果シテ我預望ノ如ク 抑此一書ヲ出シタ ヲ俟タス若シ之ニ反シ彼尙ホ スルモ 7 ヲ ス ヲ テ $\hat{}$ 政 他日 我所望 キ 體 認知セシムルコト コト 1 英國ナ 之ヲ公ニシ議院ニ於テ我條約 ヲ政府ニ要請セシメハ以 1 妥當ナルニ反 ν ハ議院 ヲ得ヘシトマテニ 顧視 ラ 信 シテ英政府ノ待遇不公平 用ヲ缺 ルセサレ の英政府 刀 テ議院其他 ハ 約=關係ノ書類ニハ今ハ之ヲ秘密ニ 幸甚ナル 1-思考シ 丰 ハ其政 1 感覺ヲ 芕 ノ ル ト言 政治 <u>-U</u> ヺ ナ =

右ノ一書ヲ英政府ニ贈ルノ主意ハ旣ニ青木蜂須賀兩公使ト 郵呈イタシ候也 以閣下へ申報スヘキ E モ 問合セ置タリ彌英外務卿ニ贈ルノ日ニ至ラハー應電信ヲ 打 合濟ナレトモ尚爲念草稿一部宛ヲ兩公使ニ寄セ其意見 N ヘキ書類ヲ出スハ英政府ノ熟慮ヲ促スニ足ルヘシ 立スル コト能 心得ナレトモ今日先ツ別紙草稿一本ヲ ハサル ヘキニ付我ヨリ後日 證 左ト

明治十六年十月五日

特命全權公 使 有

務卿井上馨殿

1事質書取書ハ次號文書ナルニ 一付共草稿ハ 之ヲ省略ス

四四四 明治去年月十二日 井上外務卿 宛ヨ

英外務卿へ事實書取書送付ノ件

附屬書一 十六年十月九日發森公使來電

十六年十月十一日附英外務卿宛往翰

十六年十月十一日附事寶書取書

英國外務卿ノ別邸ニ赴キ我條約重修ヲ中入レタルコト 第五十六號 十一月二十九日到 本月

> 機密信第五十二號ヲ以申進タル通リ我要求ノ主旨及要 ナルヘシ尚ホ玆ニ H 別紙寫ノ通電信ヲ以報告シタ 做スニ足ル日本國勢事實ヲ一目瞭然ニ列記 其詳細ヲ申進候 v ハ其大意ハ旣ニ 御承 シ之ヲ 求 知

留中夫婦トモ至極懇篤ニシテ同タハ他ニ來會ノ客アリ 後外務卿本使ヲ室ノ一隅ニ導キ閑談ヲ始メタル時既ニ Castle ニ來リ一泊アラハ 幸甚トノ回答 アリシニ由リ シ 英外務卿ニ贈ルニハ我ヨリ故ラニ提出スルハ上策ニ非ス先 半頃ナリキ ニ及テ同處ニ赴ク本使停車場ニ着スルヤ馬車ノ出迎アリ滯 此書ヲ受ルヤ否直ニ電信ヲ以本月八日同人ノ別邸 Walmer ツ彼ヨリ之ヲ望マシメ而後之ヲ出スノ順序ニセンコトヲ欲 基礎トモ 私書ヲ外務卿ニ寄セ面晤ヲ請タルニ預期ニ違ハス外務卿 約期 晚食 +

外務卿端ヲ開テ曰今夕閑話ノ歎ヲ得 述セラル、コトアラハ欣然之ヲ承ル へ シ タル 1 ハ 幸也閣下 ∃ 陳

條約重修ノ事是也囊キニ諸國委員東京ニ於テ預議會ヲ開キ 本使曰貴侯ノ厚意ヲ以本日ノ懇待ヲ受タル 双方ノ意見ヲ交換シ一時閉場ニ至リタル後已ニー年餘ヲ ス扨貴侯ニ面シ親シク細陳ヲ希ヒタルハ他事ニ非ス ルコト余深 即貴我 ク

ア公然照會スルヨリ寧ロ貴侯トノ面晤ニ付 将築既ニ英延ニ達シ貴政府應サニ意見ヲ確定セント ノ時ナランカト 二份 ヘシト考へ一會ノ歡ヲ望ミ ホ未夕其實効ヲ得 考察シ此際ニ於テ一言ヲ申入度事アリ N ノ期ニ達セ 歺 ñ 世 ス今ヤ歐大陸諸國 スル 方双方 7 欲 Ź ス

務卿曰欣然其事ヲ承ルヘシ

新定ノ税ヲ以テシ而八ケ年間 委員東京預議會ニ於テ之ヲ審議セス事速ニ定ルヘキノ勢無 正ヲ要求セント欲スルノ底意アルモ裁判問題ノ 本使日東京預議會ニ於テ一時ノ シ故ニ姑ク之ヲ措キ我國ニ於テ改正ヲ急務トスル所 ハ則我要求ノ一部分ニ過キス此一部分ト 一部ノミヲ先ツ速ニ完了セント欲スルナリ從前我國ニテ外 事項ト引分ケ速ニ締結スルヲ云抑我國ニ於テハ諸件 タルコトハ貴侯モ了知セラル、如シ此輕少ノ稅 其額若干ノ増加 ヨリノ輸入品ニ賦課スル所 トノコトハ我政府ノ委員已ニ東京會議 タルヤ亦舊稅率ニ基由シテ定メタ デ ト雖ト ハ變換ナク此一定ノ税則 ノ海關税ハ殆ト有名無實ノモ モ 議ヲ畢リタ 尚ホ之ヲ以我國財政 ハ卽通商條約ヲ他 リト雖ト ニ於テ之ヲ諾 ルモ 如キ諸國ノ 三代 ノ通商 ノナレ Ŧ 其事 ラ改 ラ用 ルニ

ハ無類 我國財政通商ノ自由ヲ束縳セシノミナラス今後尚 H 付貴侯へ確乎ト明言スヘキモノアリ卽定期立約ノ明文アル シ 殆ト開明諸國トモ比較スルヲ得ヘク況ヤ東洋諸國中ニ於テ 侯ノ明眼之ヲ見ルコト甚タ容易ナルヘシ夫レ我國人民輓近 = ハ ニ非レハ我政府ハ新通商條約ノ締結ニ同意スルコト能ハス ヲ補充スルニ足ラス ヲ ヲ見ルヲ得ヘシ我人民ハ已ニ自ラ此事實ヲ知リ而此 進歩ハ實ニ迅速且堅固ナルコト諸般ノ事實ニ就テ明 於テハ我政府人民共ニ深ク不快ノ感覺ヲ起スニ至ルハ貴 場合ナルニ外國政府ハ仍ホ其後ニ至リテモ條約 本全國亦滿足セサルコト是也抑外國政府ハ條約 タルモ其施行期限ニ至リテハ諸國異見アルカ如 我國ニテー定ノ税則ヲ用ユヘキコトヲ承諾セント トハ我政府ニテ未タ之ヲ秘密ニ付スルヲ以人民ハ其様子 セスシテ我國ノ自由ヲ限制セント欲スルカ如 ヘカラサルコ シナリ然ルニ通商ノ事項ハ斯ノ如ク預議會ニ於 知 、ナルニ由リ他ノ東洋諸國ハ決シテ我國ノ例 スル スト雖ト ラモ熟知セリ尤條約改正ノ 商議如 唯事ノ速成ヲ望ミテ不滿ナガラモ之ヲ ŧ 其期望スル所 ラ ハ質ニ大ナリ 牛 ホ八年間 ・心意アル ミリシ 多年 シ此點 17終期ラ ヲ追做シ テ議定 何タル 事實ハ スル程 三之

千八百九十年ヲ以國會ヲ開クヘシトノ事ヲ以テセラレタ 注意スル事質アレハコソ我皇帝陛下ハ曩キニ人民ニ告ル 故ニ假令ヒ政府ニテ無期ノ通商條約ニ同意セント欲スル 人知ノ開進已ニ若干ノ度ニ遠シ殊ニ財政上ノ事項ニハ最モ 國勢之ヲ許サヾ ルアリ今此國勢ノ大略ヲ陳述センニ第一、 'n __

本使更ニ其期ヲ明說ス コトニ付問ヲ爲シテ曰開揚ノ期ハ自今何年ノ後ニ在リ (ノ時外務卿ハ容ヲ改メ席ヲ前メテ我國進歩ノ實ハ東洋中 ノコトヲ聞タルヲ喜ヘルカ如キノ色ヲ示シ又國會開設ノ ナク他國ヨリ我國ノ例ヲ追做スルコト能ハサル ヤ ^ シ

進ミ入リタルコト、第四、文武官吏善ク政務ヲ執行シ公直 **狢卿欣然之ヲ聞ケリ)第五、司法善ク行ハレ新刑法治罪法** ニシテ悪弊少キコトハ他ノ良政國ニ比スヲ得ヘキコト、八外 テ安全ナルコト第三、政體制度ノ沿革漸ク立憲國ノ實境ニ シ邊邑僻地ニ至テモ皆外人ヲ友視シ親切ナルニ由リ外人極 本使又曰ク第二、內國人民カ外人ヲ怨視スル 昨年一月已來實施シ良効アリ民法ノ發行亦近ニ在ル ト第六、 信教ノ自由ハ實際各人十分享有スル ノ舊狀全ク變 コト第七、

> ヲ論スル公平且識見アルコト等ヲ詳説ス 致速ニ擴張ノコト第十一、新聞紙全國中甚タ流行內外時事 齊整便利ナルコト第十、 財政幷稅關ハ皆日本官吏ノ自治ニ屬シ惡弊ナク好果アル 第八、學制ハ全國改良大ニ進ミタルコト第九、郵便施行 鐵道電信及其他工業ハ政府人民一 =

外務卿問新聞紙ニハ條例アリヤト

穩當ナラハ其論旨ヲ十分ニ述ルヲ得ルト 心ヲ狂惑スルノ恐アル時ハ條例ニ照シテ之ヲ制スルモ語氣 及フ所ハ概シテ表面ニ止リ若シ過激不當ノ詞句ア 本使答新聞條例アリ然トモ其實自由發論ニ異ナラス條 ŋ 為二人

ニ屬ス故ニ同人ト熟議ヲ盡スヘシ 外務卿曰通商條約ハ外務大輔議院掛フイツモ 1 ij ,ス侯ノ任

夫ヨリ外務卿ハ自ラ本使所説ノ要點ヲ復言シテ云余ハ閣下 ノ言ヲ斯ク承リタリ相違ナシヤ

抑我國進步ノ實況ニ付テハ日本駐劉英公使及領事等ノ報告 望マルレ ヲ認メテ進呈スヘシ アルヘシト雖トモ若シ貴侯ハ簡單明確ニ其事ヲ知ルコトヲ 本使緊要ノ點ハ今貴侯ノ復言セラレタル通リニテ相違ナシ ハ余ハ欣然トシテー目瞭然タルヘキ簡單ナル _

一右之次第二付機密信第五十二號二 ト見へタリ時既ニ十二時ニ及ヒタレ 外務卿謝シテ日請フ之ヲ與ヘラレョト **佗種々ノ談話ヲ爲シ我所要ノ點ハ外務卿十分了解シタ** 添郵呈シタル事質書 ハ止ム IJ

少添削ヲ加ヘタルニ由リ更ニ玆ニ淨寫一本ヲ呈シ舊稿ノ分 通昨日別紙寫ノ公文ト共ニ外務卿へ差出セリ尤事實書ハ少 **ヲモ加記シ改正ノ處ヲ觀ルニ易カラシ** Д

此段不取敢申進候也

明治十六年十月十二日

特命全權公使 森 有

外務卿井上馨殿

1前揭一四三文書三付參照

附屬書

六年十月九日發森公使來電

TELEGRAM

forwarded on Oct. 9, from Mori to Hanabusa 1883

his country place by invitation. have visited Minister for Foreign I took opportunity Affairs

at

attention to statements, Minister for Foreign Affairs promised to give every position of Japan which I promised to furnish. clause. to Japan which did not contain clear termination to make him clearly understand that no settlement He then asked for information about attitude and his colleagues before deciding. Commercial arrangement would be satisfactory I supported this view by full arguments. and said he must

十六年十月十一日附英外務卿宛往翰

October 11, 1883 Japanese Legation

My Lord,

I venture to think may be of essential value. connection with the renewal of her Treaties, which ing on the attitude and condition of my country in Lordship, I now enclose a Statement of facts bearlast had the pleasure of an interview with your conformity with the wish expressed when I

me in this terms the notable facts which have occurred I have confined myself to recording in general connection, but I have the honor

express my willing readiness to supplement this information with fuller details on any of the subjects referred to.

I permit myself, my Lord, in the name of my Government, to commend this question to the early and serious attention of the British Government, and I avail myself of this opportunity to reiterate to your Lordship the assurance of my highest consideration and most profound esteem.

(signed) Mori

The Right Honorable
Earl Granville K. G.
&c. &c. &c.

附屬書三

十六年十月十一日附事實書取書

(Connected copy as sent to the Foreign Office)

Statement of Facts

Falating to Treaty Pavision in Tapan

relating to Treaty Revision in Japan

1. The inherent right of Japan to enjoy full equality and perfect freedom in her Treaty arrangements with other Powers has never been surrendered by her. There is no clause in her Treaties which can be rightly

- interpreted as an admission that any perpetual control with respect to them has been granted to other Powers, nor under any circumstances could such a contention be at present equitably maintained. (especially as ragards national finances.)
- 2. The Treaties between Japan and the Western Powers all contain a clause providing for their Revision during or subsequent to 1872. On the inauguration of the new regime of Government in 1868, and the consequent adoption of a new policy in foreign affairs the desirability of extensive modifications in the Treaties in force was at once recognized. It was felt that many of the existing obligations were unnecessary and (highly) injurious to the progress of the Country, especially as regarded her financial development.
- 3. Repeated efforts have been made by Japan since 1871 to free herself from (those) the condition which had caused her the greatest injury (to the country) but no substantial progress towards this result was made till 1882—ten years after the period at which revision could be and was demanded.
- 4. In 1882, in accordance with a proposition of the British Government, a conference on the subject was held at Tokio. A preliminary understanding was there arrived at as regarded (all) commercial questions, with the exception of those relating to the duration of the Treaty and to the so-called 'most favoured treatment.'
- Japan consent in the hope that further delay would ing to jurisdiction over foreigners and other kindred embodied in a separate Treaty, leaving those relatcommercial portions of the Treaties should be abeyance to the (great) injury of Japanese interests. unanimously approved were and still are held in sequently even those alterations which had been Western Powers). national Treaties (the most recent treaties between on the model of those appearing in modern Intering these two last named subjects should be framed referendum by some of the delegates, and con-It was also proposed at the conference that the It was proposed by Japan that the clauses definsubsequently arranged. This proposal was only received To this

- be thus avoided.
- 7. The proposed treaty thus limited to commercial questions, would bind Japan not to adjust her import duties as she might desire even for fiscal purposes during a period of eight years while Japanese commerce would receive no reciprocal concession from the Western Powers. This also was submitted to by Japan.
- 8. The existing system of Consular jurisdiction in Japan is very defective and in many ways injurious to that country. Japan, wishing to bring about an ultimate solution of the question which would be satisfactory both to the Western Powers and to herself, and it would relieve the former of the onerous obligations they had undertaken in the Treaties, submitted to the Conference a comprehensive scheme of jurisdiction in respect to foreigners.
- 9. This scheme, attended with great cost to Japan, would have permitted the subjects of all the Treaty Powers to trade, reside, and hold land in all parts of the Empire. It was transmitted by the foreign

delegates to their respective governments for consideration.

- 10. The present condition of Japan has a direct bearing on the question of her proper capability to enter into and to carry out treaty arrangements. This country, which is comparatively protected from external disturbances by its insular position, has made in late years steadily increasing progress, without a parallel (entirely unparalled) in Asia. This progress may be some extent indicated by the following outline (indirectly estimated in connection with the character) of her institutions and of her national development.
- (a) The Governement for many years has been gradually assuming a constitutional form and the Emperor, to the satisfaction of all classes of His subjects, has needed the movement. The character of this movement has lately been distinctively marked by the issue of an Imperial Decree, creating a National Assembly for Legislative purposes, which is to commence its functions in 1890.

- (b) Under the influence of a firm and well established Government and with the increased information acquired by the people, all feeling of animosity against foreigners has entirely died out. Throughout the country they are treated with friendly kindness.
- (c) The Naval, Military and civil services are efficiently administered and, as regards freedom venality and corruption, will bear comparison with those of almost any country.
- (d) Justice is also well administered throughout the Empire. A new Criminal Code and Code of Procedure have been brought into operation and have worked very satisfactorily since January 1882. A new Civil Code has been prepared and will shortly be promulgated.
- (e) Liberty of conscience and toleration of religious worship are now in fact fully enjoyed by every one.
- (f) The administration of the finances and of the customs is under native management and the results have proved satisfactory after many

years experience.

- (g) The system of Education, which was always on a large scale, has been throughly remodelled on modern bases and is working with complete success throughout the Empire.
- (h) The Postal system has been similarly reorganized, and operates everywhere with regularity and dispatch.
- (i) Railways, telegraphs and other public works are being systematically constructed (rapidly developed) under the united support of the Government and the people.
- (j) The press has become a recognized institution. Newspapers circulate everywhere in abundance, and questions of interest relating both to native and foreign events are treated with fairness and talent.
- 11. The long delay which has taken place in the negotiations for Treaty Revision has occasioned much (*great*) excitement among the people; but the national confidence reposed in the present Government encourages the hope that the proposed

treatment of the question, though imperfect, would be looked upon as acceptable, if not further delayed.

London

October 11, 1883

二四五 明治大年月十九日 非上外務卿宛

行政規則ノ制定及違反者ノ裁判ニ關スル件

粉 開書 十六年十月十六日附森公使ヨリ青木公使ヘノ返

ş

川設 規則 完了ノ都合 正ノ遲速ニ拘ラス之ヲ外交上ノ常例談判ニ付スヘキモ 行政ニ屬スル 政裁判ノコト 權ヲ損滅セシ == 我國ニテ用意整ヒ次第一件ツ、時々提出シテ取締メ漸次一ノ遲速ニ拘ラス之ヲ外交上ノ常例談判ニ付スヘキモノト リシニ由リ シテー二ノ事項ヲ除クノ外未タ嘗テ之ヲ條約面ニ記 則爲メニ幾分カ國權ヲ損スルノ實アルヲ発レ 定ノ 違犯 ŋ 政 今更ニ之ヲ陳フル = in in シノ外 シテ之ヲ妨碍シ ススル立 ニセハ自ラ外國ノ肯諾ヲ得易カルヘシ タル コト ~ 一部ハ條約改正事件ヨリ引分ケ一般ノ條 今日尚ホ我ニ十分ノ自由ヲ有セリ ・國人ヲ領事裁判廳ニテ處理スル テモ間々外國公使ノ干制 ヤ荷ク アリシカ近年ニ至リ此弊稍ク去レリ 法ノ權 モ條約ヲ以其權限如 ヲ要セス然ルニ於我國ハ從前行 或 ハ獨立國固有常存 ペハ其權内 = 干涉 ラ受ケ シ得 何ヲ約 3 1) Ŧ ・斯ルヒ上 ンス我國ハ 我固 ヘカ ノニシ シ テ其規 定 ラサ 有 アスト 約改し上へ 載 セ 政 N

政問題 三止 ナ ハ勿論 ルヘシ但行政規則違犯ノ外國人處理ノ事ハ領事裁判 - 常例往復ノ公文ヲ以之ヲ規定セハ我カ爲メ少害多 ハ如此新條約ニ登記セスシテ單ニ閣下 ハ我 ニシテ爾後殘ル所ノモノハ領事裁判ノ ニ此權ヲ握有 ス N := 7 ハ頗 ル 難 - ト外國 ナル 全體問 公使 \sim シ

> ハ權限縮小ニシテ徴々タル領事裁判廳ヲ保存ス府多クハ當サニ之ヲ好マサルヘク殊ニ英米兩國 シ 之ヲ全存ス ハ シ行政規則等ニ係ル犯罪處理ノ權ヲ我國ニ屬ス 輕罪或 ラス 十中一分ノ爲メニ領事裁判ノ制ヲ保存スルコト 政府 、領事裁判 ニテ費用ヲ出シテ領事裁判廳ヲ保存 政裁判ヲ佗ノ民刑裁判 八行 ル カ否ラサレ 政規則ヲ犯シタル者ヲ處スルカ爲 存廢 ノ議ニ波及スルノ勢ア ハ之ヲ全廢スル 領事裁判廳ヲ保存スル 3 IJ ス コト ル スル V = ヺ *>*\ 政 撰 ル メ ハ ナ ラ 府 八外 コト +ナ 1) 3 中九分 ナ IJ ラ ν i 寧 如 國 ハ岩 \rightarrow シ 政 t \sim 丰

段申 復セント 日上ノ 於テ可成急速其談判ニ着手スルコト異議ナシ 濱居留地取締其他ノ事件ヲ提出 タル如ク一事件ツツ漸次取締ル方得策ナ 進候 事 情二 欲 -111 七 拘ラス行政規則ヲ違犯ノ外國人處理ノ權 ハ川昨年東京預議會ノ終ニ臨ミ英公使ヨリ セシ時閣下ヨリ「木會外 ル ヘシト 上 ト 1 御答ア 存 候此 ヲ =

明治十六年十月十九日

特命全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

附厘書

六年十月十六日附森公使ヨリ青木公使

~

ヲ解スル能 ヤト想察スレト 本月十三日附ノ貴書拜受欣讃數回如例隔意ナク御示諭ヲ崇 ・廻ハシ 御回諭ヲ希候 關スルコト 多謝扨前日申 || 云々ノ點ニ付御異見アルカ如ク相見へ行政問題 ハス因テ恭問ノ爲メ僕ノ所見ヲ更ニ左ニ呈 モ亦今日英政府へ發言ヲ要ストノ ・モ簡單ナ 進候「裁判問題並行 こ/爲メ僕ノ所見ヲ更ニ左ニ呈候間ル 貴書ニテハ詳ニ其必要タル所以 政裁判問題トモ暫ク後 御主意 ナリ

欲スレ 久延ス ヲ要 加 抑裁判行政通商ニ關ス 速 不被相行候節 へ之ヲ締結スルハ我方ノ熱望タルコト今改テ之ヲ陳フ 三外國政府ノ協同ヲ得ヘキ勢ナク强テ之ヲ議締 |セス然ルニ昨年東京預議會ノ末裁判並行政 ハテ殺言シ ルニ至ルノ悪徴アリ ハ之カ爲メ旣ニ略定ノ通商ノ事 ハ御五ニ詳知ノ通り 縮有利 y ハ更ニ行政權回 ノ通商條約ノミ完結スヘシト廟議ノ定 ル 「若シ我提出 ハー般ノ 也斯 故ニ不得止シテ先ツ速ニ行 條約 復 力 ジョト ク如 セル裁判疑問 二明確ナル キ次第二付東京預議 項マテモ完結ノ期ヲ = 溯 回 裁判 有期ノ シ ノ建言 テ商議 () 事項 セ ルリタ _ *>* ン 下 シ ν ヲ

> ル ル カ ノミナラス亦姑ク之ヲ中止セサ ラ少ク變シタル以上ハ必シモ最初發言ノ通守ルニ及ハサ 如 へ カ ラス <u>니</u> 貴書中ニ指示アル目的モ爾後ノ形勢我廟 ルヲ 得 サ ルノ 理由ヲ ス

破ル Ŋ 巳上所陳ノ次第ニ付行政問題ノ諸部 條ト最優待國ノ條ト == ヲ 回將サニ改締セ サ 政 = 凡通商條約 ラ終ニ行 慧眼能 占 問題ハ之ヲ後定スペシト云論點ニ撞治シテ我目的 向 ル海關法則ノ事項タリトモ今之ヲ通商事項ト 於テ會員協議ヲ經タル事項ヲ實施スルニ有要ナ ν ニ密着スルニ由リ此法則 ハ關稅ノ シ !テ發言スル時 似 4 シ關稅ノ問題ヲ全解スルヲ得ヘキ者ニ非ス唯 タリ況 ル ク之ヲ看破シ爲メニ通商ノ部分マ 政裁判 1 ヲ結フニ方リ海關稅 患 、問題完了 ヲ招 ヤ税關法則ヲ以テ恰 ントスル所ノ通商條約 ハ我政府ノ主旨タル通商條約ヲ先締シ裁 ノ總問題マ ク ヲ附テ之ヲ決スルニ止ル = ニ至ラサル ኑ ア専定ス ナ テ及サント欲スルハ英政 N = コト = 附 於テヲ ハ姑ク措キ假令其 ル ス モ之ヲ中 ノ權マ 言ヲ俟タス然 ^ ハ以テ完然ナ キ法則 テ 7 結局 誾 ノミ テ 有スル 併 ノ鍱貝 八收 == 若シ マ英政府 ラ N 終 預議 ヲ自 N N 府例 一部 稅權 今 非 ラ人 三假 期 ノ ラ 1 會

期望ノ至リニ候匆々敬具が廃贈ョリ別段ノ訓令ヲ御領手アルニ非レハ今日御五ニ幹が終卿ョリ別段ノ訓令ヲ御領手アルニ非レハ今日御五ニ幹が終卿ョリ別段ノ訓令ヲ御領手アルニ非レハ今日御五ニ幹外終卿ョリ別段ノ訓令ヲ御領手アルニ非レハ今日御五ニ幹

十六年十月十六日

森 有 禮

青木公使閣下

二四六 明治士至十月二十八日 非上外務卿宛

事實書取書ニ關シ英外務卿ヨリ回答ノ件

11 十六年十月二十四日附英外務卿宛往翰附屬書一 十六年十月二十三日附英外務卿來翰

第六十三號十二月十一日到

乙號ノ復答ヲ贈リ置且通商條約終期等ノ如キ要點ハ此機ヲリ置タル末昨日同卿ヨリ別紙甲號ノ通リ回答有之因テ卽日條約重修一件ニ付前便旣ニ啓告セシ通英外務卿へ一書ヲ贈

申進候也手ノ上着手候模様ハ速ニ詳報可致不取敢御心得ノ爲メ此段電信ヲ以テ今一應ノ御指令ヲ請タル義ニ有之候尤御訓令接、スヌニ開談彼ヲシテ充分了解セシムルコト必要ト相考

明治十六年十月二十六日

特命全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

註 1電信見當ラズ

附屬書

十六年十月廿三日附英外務卿來翰

Foreign Office

October 23, 1883

Monsieur le Ministre,

I have the honour to acknowledge the receipt of your communication of the 11th instant inclosing a statement of facts bearing on the attitude and condition of Japan in connection with the question of the revision of treaties.

I have to state to you that Her Majesty's Government have been in communication with the other Treaty Powers and that instructions upon the subject will be furnished to Mr. Plunkett, the newly

appointed British Minister in Japan when he proceeds to his post at the beginning of next year.

I have the honour to be with the highest consideration,

Monsieur le Minister,
Your most obedient
humble servant
(signed) Granville

Jushii Mori

&c. &c. &c.

附屬書二

十六年十月廿四日附英務卿宛往翰

Japanese Legation London

October 24, 1883.

My Lord,

I have the honor to acknowledge the receipt last evening of your Lordship's note of the 23rd instant, informing me that instructions on the subject of the Revision of the Treaties between Japan and Great Britain will be furnished to Mr. Plunkett, when he proceed to Japan next year in the capacity of British Minister.

In view of the extreme gravity which I believe will be attached by my Government to this communication of your Lordship, I have the honor to state that I have at once reported it to Japan.

I avail myself of this opportunity to assure your Lordship that I am with the highest consideration,

Your Lordship's most obedient

humble servant

(signed) Mori

The Right Honorable Earl Granville K. G.

&c. &c. &c.

二四七 明治士年十一月九日 非上外務卿宛

英國在留邦人總會決議報告ノ件

附屬書 英國在留邦人決議文

機密信 第六十八號

書ヲ政府へ執達ノ義請願俟ニ付別紙和英文べ書ノ儘致進呈議ヲ開キ條約重修一件ニ關シ討議ノ議決書で使へ差出シ該英國在留日本人爫月三日常府「ランガムホテル」ニ於テ總會

名ノ新聞紙切拔別紙併テ致進呈候此段中進候也 にいう の公前ノ注意ニ出タル者也如此キ議決ヲ世上ニ播布スレハ自 ラ公前ノ注意ヲ喚起スル事ヲ得條約改正ノ事ハ獨リ我政府 ノミ執心スル所ニ非ス我人民亦皆之ヲ渴望スルノ事實ヲモ ノミ執心スル所ニ非ス我人民亦皆之ヲ渴望スルノ事實ヲモ が國政府ニ表示スルヲ得旁無益ノ事ニハ非サルヘシト存候 常着刊行諸新聞紙ハ大抵皆右議決書譯文ヲ記載セリ其內有 なノ新聞紙切拔別紙併テ致進呈候此段中進候也

明治十六年十一月九日

特命全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

附層書

願上候已上進呈仕候可然其筋へ御傳達衆意貫徹候樣御取計ノ程偏ニ奉場總員ヨリ閣下へ奉呈ノ義拙者へ依賴相成候ニ付茲ニ謹テ別紙書面ハ去ル三日在英本邦入總會於テ議決候モノニテ臨

明治十六年十一月七日

右總會會頭 笹 瀨 元 明卿

在英國

サル事

第五 我カ人民ヲシテ我カ政府ハ果シテ人民ノ利益ヲ鍛意

公使ニ請ヒ其ノ手ヲ經テ日不政府ニ送呈スヘキ事公、以上ノ議決ハ之ヲ倫敦駐在日本公使閣下ニ出シ且ツ

本會會頭 笹 瀬 元 明®

同書記官 鍋島桂次郎®

二四八 明治六年一早六日 赤肚英公使ョ

新條約ノ終期ニ付英外務卿へ照會ノ件

附屬書一 十六年十月三十日附森公使ョリ英外務卿へ

一 十六年十一月十二日附英外務卿回答,

一月四日到

政密信 第七十號

スヘシトノコト過般御電令ニ依リ別紙甲號寫ノ通リ私書ノ新通商條約終期ノ件ニ付英政府ノ意見ヲ密知ノ方法ニ盡力

井上外務卿時代 對英交涉 二四八

大日本帝國

森特命全權公使殷

閣下

ムホテルニ開キ全會一致ニテ左ノ請條ヲ議決ス明治十六年十一月三日在英日本人總會ヲ倫敦ランガ

- 第一 條約改正ノ舉在萬已二十餘年ニ渉リ之カ爲メ大ニ我 カ財政及ヒ通商ノ利益ヲ害シ隨テ我カ人民外人ニ對 カ財政及ヒ通商ノ利益ヲ害シ隨テ我カ人民外人ニ對
- 諾ヲ得サル以上ハ新條約ヲ結フヘカラサル事ノ後)ハ我カ國ヲシテ我カ稅權ヲ恢復セシムヘキ承換ヲ基トセス就中將來(萬止ムヲ得サルモ若干年數第二 此ノ上ノ變遷ハ極メテ咎ムヘシト雖モ若シ公平ノ交
- 第三 新條約ニ於テハ日本在留外國人ニ對スル我カ裁判權
- 約中ニテ我ガ國益ヲ害スルケ條ヲ廢棄セサルヘカラル事能ハサレハ我カ政府ハ至當ノ手段ヲ施シ現行條第四 若シ改正談判ヲシテ速ニ滿足スヘキ結局ヲ得セシム

候也

「再答ハ牧受次第直ニ電報可致候へ共先ツ右之趣一應甲進
で貫達ノ好結果ヲ得ヘキ様間斷ナク盡力可致尤英政府ヨリ
の巳ニ電報シタレハ御領知ト存候不件ニ關シテハ可及我望
の世ニ電報シタレハ御領知ト存候不件ニ關シテハ可及我望

明治十六年十一月十六日

特命全權公使 森 有 禮

外務卿井上馨殿

1電信見賞ラズ

附屬書一

甲號 十六年十月三十日附森公使ヨリ英外務卿へノ私信

私信

ロード、グランヴヰル閣下

ノ義ニ付可相成ハ貴政府ノ意見ヲ内密ニ確然承知可致殊ニ改正ノ問題ニ關シ未タ議定セサル最緊要點即新取極ノ期限御下附相成ルヘキ旨直ニ我政府へ通知致候處我政府ハ條約の正ニ關スル訓令日附貴簡ヲ以テ御申越ノ次第即チ我條約改正ニ關スル訓令拜啓陳ハ十月廿五日附公信ヲ以テ申進セシ如ク十月二十三

出テタル義ニ有之候照會上聊カノ困難タリトモ之ヲ免カレントノ我政府ノ希望拙者ニ訓令シタリ依テ此私信ヲ以テ申進スルモ必竟公然ノ

條約國ノ希望ヲ容ンコトヲ勸メ殊ニ向後我條約ヲ改正スル ノ結果ヲ得ヘシノ一言ヲ確然承知セサレハ又々ノ延引(多 上貴政府意見ヲ吐露セラルヘシトノミ聞キ此際竟ニハ滿足 ニ如斯シ左レハ我政府ニ於テブランケツト氏カ日本到着ノ コトニ付常ニ關係諸國ノ利害ヲ參酌可致候我政府ノ意見已 有ストノ通義ニ據ル義ニ有之候然レトモ我政府ハ常ニ我諸 置ニ立ツハ主トシテ各國皆自己ノ財産ヲ整理スルノ全權ヲ ルハ日本カ滿足ト看做サルル旨ヲ再陳致シ候又日不カ此位 相五ノ承諾ナクシテ新通商條約ヲ一定年限外ニ繼續セシム 令ヒ新取極ノ他條款總テ日不二利益アリトスルモ)ニテモ ヲ非常ニ緊要トスル旨ヲ明言致シ置候又如何ナル場合(假 分六ケ月ヨリ少ナカラサルヘシ)ニ付焦心スヘキハ申スマ カ一定ノ期限後ハ其適當ト認ムル所ニ從ヒ隨意ニ其收稅上 デモナキ義ニ有之候 ノ關係ヲ規定スルノ全權ヲ得ルコトニ付豫メ約シ置クコト オルマン、カツスルニ於テ御面談セシ際モ拙者ハ我

右得貴意候敬具速ニ貴政府ノ意見ヲ確然承知可致樣我政府ヨリ訓令有之候本件ニ關シ貴我兩者ノ取極與リテ頗ル大ナリ故ニ成ルヘク収テ大要前陳ノ如ク又談判ヲ繼續シテ有効ナラシメンニハ

千八百八十三年十月三十日

在倫敦日本公使館二於

右原文

Japanese Legation, London October 30, 1883.

Dear Lord Granville,

As stated in my official note of October 25, I at once reported to my Government the substance of the communication you did me the honor to make under the date of October 23, to the effect that instructions as to the Revision of our Treaties would be given to Mr. Plunkett who does not propose to leave for his post till the beginning of next year.

My Government have in consequence specially instructed me to approach you in a confidential

manner, in order to elicit, if possible, a definite expression of opinion from the British Government on the most important point still left in abeyance in connection with the Revision question, viz, the duration of the new arrangements. I venture to hope that the course which I have adopted in thus addressing you, will meet with your kind appreciation as exhibiting the desire of my Government to avoid even the semblance of any serious difficulty in our official correspondence.

attach to a clear understanding, that after a definite the extreme importance which my Government to her, would Japan consider it satisfactory that of the new arrangements were completely favorable cumstances whatever even if every other condition And I do not hesitate to repeat, that under no cirperiod, Japan is to be entirely free to regulate her renewed by mutual consent. did not desguise from you at Walmer Castle financial interests as she may deem proper beyond commercial Treaty should continue in definite number of I may assure you that years, unless

> ry will nevertheless always seek to meet the wishes administration and that my Government and countthis attitude of Japan has been assumed essentially the views of and especially in any future renewal of her Treaties of the Powers with whom Japan may have relation, entire freedom in regulating her own financial on the assurance in the meantime that wishes arrival, be the medium of communication of by the statement that Mr. Plunkett will, on his less than six months) which is now foreshadowed with anxiety the additional delay (probably not I need therefore hardly point out that such being principle that every nation should have of the British Government, myGovernment, they now regard ы without any satisfactory

In these circumstances, and as the useful continuances of the negotiations is so intimately dependent on the agreement between Japan and Great Britain on the subject in question, I am instructed to press for an early and distinct statement of the views of Her Majesty's Government. I sincerely

understanding would eventually be attained

I have received your letter of the 31st ultimo

early date with a definite statement of the views which you express a wish to be furnished at an

receive from you satisfactory assurance. hope and believe that I shall be privileged οţ

I remain, dear Lord Granville most faithfully yours (signed) Mori

乙號 十六年十一月十二日附英外務卿回答譯文

公

グランヴヰル

本件ハ目下我政府ニ於テ熟議最中ニ付遠カラス議決ノ程申 税條約ノ期限ヲ御通知可致旨御中越相成正ニ承知致候扨テ 成度且ツ遠カラス東京ニ於テ談判ヲ再開スルノ期望アル關 ニ關スル日本ノ權利ニ付我政府ノ意見ヲ速ニ確然御承知相 去月三十一日附貴簡ラ以テ目下商議中ナル關稅條約ノ期限

千八百八十三年十一月十二日

進スへキ運ヒニ至ルヘシト希望致候右回答マデ草々敬具

於

(右原文)

Foreign Office,

November 12, 1883.

My dear Minister;

consideration of renewed at Tokio. is decided. matter is at the negotiations for which will, it is hoped, be shortly notice of termination of the the question of the right claimed by Japan to give held by Her Majesty's Government in regard to that I hope soon to be able to let you know what In reply I beg leave to assure you that this Her present time under the careful Majesty's Government and Yours Sincerely Tariff Treaty the

(signed) Granville

二四九 明治去年10十日 井上外務卿宛森駐英公使ヨリ

デイリーニユウス新聞切拔送致ノ件

附屬書 十六年十一月二十八日、二十九日デイリー ウス切状

機密信 第七十八號

別紙切拔差進候也 同社通信者東京ヨリノ電報兩回掲記有之ニ付御一覧ノ爲メ 條約改正ニ關スル議ニ付當府刊行デイリーニユース新聞ニ

明治十六年十一月三十日

特命全權公使 森 有

外務卿井上馨殿

附屬書

デリー ニュウス十一月廿八日所載

JAPAN.

INTERVIEW WITH THE JAPANESE FOREIGN MINISTER

(FROM OUR TRAVELLING CORRESPONDENT.) TOKIO, Nov. 27.

Foreign Minister. I have had a long interview with the Japanese

opening up of the interior of Japan availing themselves of the privilege should be under anxious The Minister spoke freely on the subject of the He represents his Government as being most for it, stipulating only that to foreign foreigners

> involve a revision of the treaties and the abolition the jurisdiction of the Japanese courts. This would of foreign legal jurisdiction in the open ports.

同 廿九日所載

FOREIGN TRADE WITH JAPAN

(FROM OUR TRAVELLING CORRESPONDENT.) TOKIO, Nov. 27.

terior, up in foreign interests, be accepted by the Powers, answered. ted to the Western Powers. rity. The scheme has been confidentially submit-Appeal, in which foreign judges will have a majowhich, in the event of the opening up of the inelaborate the whole of Japan will forthwith be opened to answer. If the scheme, which is liberally drawn awaited. express favourable views. These will be mixed tribunals, with a Court of The Japanese Government have drawn up an cases concerning foreigners may be tried. It is understood that he brings the British scheme creating The arrival of Mr. Plunket is anxiously England has not yet Courts of Justice America and Germany at

foreign traders

三五〇 明治六年一星十日 井上外務卿 宛ョリ

新通商條約 、終期ニ關スル件

附屬書 ル件) (條約ノ期限ニ關スル 英國政府ノ 態度ニ關ス 十六年十一月二十六日發森公使來電

= 十六年十一月二十八日到花房公使ョリ森公使

第七十九號

政府へ通信シタルコト更ニ無之尤不件ハ略ホ内決ニ付近日 頭外務卿不在中ニ付大輔「ポンスホー 議ヲ開クヘキ用意ニ有之旨公然承知シタリト 條約重修ノ義に關シ英國政府ハ獨逸政府ヨリ發案ノ通リ新 中確定スヘク其事柄ハ銀テ外務卿ヨリ約束之通早速通知可 ル處同人ノ卽答ニ英政府ニ於テハ未夕決議セサルユへ獨逸 通商條約終期ノコトヲ肯諾シ英獨兩政府トモ速ニ於東京商 致要スルニ英政府ノ考案ハ日不ノ為メ友好ノ意ニ出ツル者 公使ヨリ電報有之ニ付其事實確知ノ爲メ早速當外務省へ出 ノ旨內話有之候倘又爲念獨逸大便へ面會彼ノ內情 ト」ニ面シ開談シタ ノ趣過日青木

> 寫ヲ靑木蜂須賀兩公使へ送付イタシ候 青木公使へハ通報致置候へ共尚御來示ニ從ヒ早速甲號電文 之ニ付其次第ハ速ニ可致電報候へ共此段一應

> 理鑑世 省中ノ議事ニ參與致居候樣子ニ相聞へ候何レ不日回答可有 使ブロンケツト氏ニモ近來日不二對スル友情ヲ顯 以電信報告致候末乙號ノ通御電命有之候處右ノ主意ハ巳ニ 一、英政府即今ノ意向ハ我カ爲メ大ニ好都合ニ被察新任公 探偵致候處英政府未決ニ付獨政府へ通信シタル ハーポンスホ ト」所陳ニ相遠無之因テ別紙甲號ノ通リ ベハシ外務 **→** ナ +

特命全權公使 森 有 禮

明治十六年十一月卅日

附屬書

外務卿井上馨殿

十六年十一月二十六日發森公使來電

(條約ノ期限ニ鶋スル英國政府ノ態度ニ鶋スル件) TELEGRAM.

Dispatched on the

Nov., 1883.

From Mori to Hanabusa

will be favorable. reason to expect as arrived at respecting Granville promises to inform me decision as soon British attitude this in a few days and that it termination clause. now very friendly. Have

1 在露公使館ヲ經由シタルニ付此ノ宛名ヲ存スルナリ

十六年十一月三十八日著花房公使ョリ森公使宛待電

TELEGRAM

Received on the 28th. Nov., 1883.

From Hanabusa to Mori

Hachisuka do so at once. From Inouye. instant not communicated If the purport of your telegram of ಕ both Aoki and

五 明治士等三季四日 伊藤外務卿代理宛森駐英公使ヨリ

條約重修ニ關スル英國外務卿ノ覺書送付ノ件

附屬書一 十六年十二月十三日發森公使來電

非上外務卿時代 對英交涉

X

-十六年十二月十一日附英政府憂書譯文幷原文十六年十二月十一日附英外務卿來翰 (英政府ノ各國政府宛同文要領報告ノ件)

機密信 第八拾三號

書翰寫幷覺書一本ヲ進呈致シ候尤右ハ重要ノ事柄ニシテ詳 約ノ如ク一昨夜密信ヲ以覺書ヲ本使へ內送アリ因テ茲ニ其 條約重修一件ニ關シ英政府意見一決ニ付銀テ外務卿ヨ 頃ハ本邦参着スヘシト プロンケツト氏ハ來一月五日米國ニ向ヒ發船ノ 於當地斡旋スヘキ順序ハ先ツ一段落ト可相成存候新任公使 確知可致積ニ付其次第ハ追テ詳報可致此事ヲ畢リタル上ハ レハ其要旨ハ疾ニ御領知相成タル事ト存候偖テ覺書中含有 細急報ヲ要シタル爲メ不取敢昨日別紙寫ノ通以電信中進タ ノ意味瞭然解了シ難キ廉有之英外務卿へ質問シ彼ノ意向ヲ 存候 趣二付三月 IJ

此段不取敢申進候也

明治十六年十二月十四日

特命全權公使 有

外務卿代理伊藤博文殿

追テ本文認了ノ後プロ ンケツ ト氏來訪其咄ニ 日同人義

家事ノ都合ニ依リ米國經過ヲ見合セ印度洋ヲ經テ赴任 スヘシト此段御含迄中添候也 ノ事ニ變シタリ因テ當府出發ハ多分一月下旬マデ遷延

(英政府ノ各條約國政府宛囘文要領報告ノ件) 十六年十二月十三日發森公使來電

despatched on the 13th, Dec., from Mori to Hanabusa Telegram

subject to possible modifications of detail, on conaccept in principle tariff proposed in Conference, applied to improving currency. assurances that additional revenue will be first deference to strong wish of Japan, relying on British Government agree ment Memorandum confidentially communicated. dition that foreigners have extended freedom of communication with dealers in interior protecting them from combination injurious to trade. To Inouye. Abbreviated text of British Governto increase of tariff, British Government British in

sion to passport system and for foreign vessels to Japan shall have opened Empire about three years Powers, would justify Japan in claiming tariff aucarry cargo between ports not yet open. British Government would therefore ask for extenitate intercourse between foreigners and Japanese. appreciated and Japan in return will at once facilpreviously under agreed arrangements which tracting parites may terminate by 12 months' notice after, say ten or twelve years either of the Contonomy, that opening whole Empire on terms agreed with Convention at once. British Government recognize friendly spirit dictating these concessions will be worked satisfactorily. British Government trust that before will authorize British Representative to conclude a question be settled, without waiting for other points, Government accede to Japanese proposal that tariff -otherwise Treaty to remain in force—but provided proposals in if other Powers consent, Revised tariff exercising this right of termination, for establishment of treaty. stipulating would insert courts Regarding have

propose to refer them for an early settement to a drawbacks, harbour and light dues, British Govt, disposed to agree to modify 23 Article of Treaty speedily dealt with. Committee of Japanese and foreign Delegates. Prorelating to favoured treatment. leted and translated. express opinion till new laws and procedure compment desire to meet Japanese wishes, but cannot foreign judges having jurisdiction, British Governand trade regulation, ð marks, patents should also British Government are not bonded warehouses, Regarding Custom-

Dated December II.

十六年十二月十一日附英外務卿來翰

Confidential

My dear Minister,

herewith for your confidential information reply to yours of the 31st October, I beg to enclose pleasure of addressing to you on the 21st ultimo in In continuation of the letter which I had the ы copy

> of a Memorandum which I have sent to the British at that conference. consideration of the questions which were discussed Majesty's Government have arrived after further and which embodies the conclusions at which Her which took part in the late conference at Tokio, Representatives accredited ð the Governments

and that the closer relations which it is now hoped ernment have had to meet the wishes of Japan ciate the friendly desire which Her Majesty's to equally to the advantage of both. I trust that the Japanese Government will appre-

(signed) Granville Yours Sincerely

Jushie Mori

附屬書三

十六年十二月十一日附英政府覺書

覺書譯文

December II, 1883 Foreign Office

府ハ此増税ニ同意セント欲ス = 紙幣價格挽回ノ用途ニ充ツヘシトノ保證アルカ故ニ英政 不政府ハ海關稅ノ增加ヲ切望シ右增加ノ收額ハ先ツ第一

英政府ハ豫議會ニ於テ提議セラレ タル改正税目ノ大要ヲ承

外ヲ防キ以テ之ヲ保護スルコトヲ同意スルノ約束ニ因ルモ地商人トノ通商ノ自由ヲ附與シ外國貿易ノ妨害タル聯合ノルヘシ尤モ右改正稅目ヲ承諾スルハ日不國ニテ外國人ニ内認スヘシ但シ細目ノ修正ヲ要スルモノハ尚ホ變更スル所ア

ヲ承諾セント欲スシテ税目ノ論題ヲ可成速ニ決定スヘシトノ日不政府ノ發案シテ税目ノ論題ヲ可成速ニ決定スヘシトノ日不政府ノ發案英政府ハ豫議會ニ於テ討議シタル他ノ件目ノ同意ヲ待タス

ニ下命スベシ故ニ上述ノ旨趣ヲ以テ速ニ條約ヲ締結スヘキコトヲ英公使

> ペキハ勿論ナリ但シ日不國ニテ改稅條約終了ヲ告知スルノ 本の別別ののでは、 本の別別ののでは、 本の別別ののでは、 は理ヲ行フヲ得ルハ締盟各國於テ承諾シ且ツ實施ノ上滿足 を國ヲ外國人ノ爲メニ開キタル後チタルヘシ此等ノ譲與ヲ 全國ヲ外國人ノ爲メニ開キタル後チタルヘシ此等ノ譲與ヲ 全國ヲ外國人ノ爲メニ開キタル後チタルヘシ此等ノ譲與ヲ なが、 本の方と、 本の方に 本の方と、 本の方と 、 本の方と 本の

第二十三條ノ改正ニ同意スルコト能ワス英政府ハ日本國ト締結シタル條約中最惠國ノ待遇ニ關セ,

税關規則、貿易規則、借庫規則、拂戾、港則幷ニ燈稅ノ論

ニ付シ成ル丈速ニ之ヲ定**ムヘシ** 題ニ闘シテハ英政府ノ意見ハ之ヲ日本人幷ニ外國人ノ委員

スヘシ 外國商標、專賣免許及ヒ發明ヲ保護スル問題モ亦速ニ決定

一千八百八十三年十二月十一日

外務

(右原文)

Memerandum,

Her Majesty's Government are willing to agree to an increase of the customs duties, out of deference to tee strongly expressed wish of the Japanese Government, and in reliance upon their assurances that the addititional revenue thus obtained will be applied, in the first instance, to placing the currency on a more satisfactory tooting.

They will accept in principle the Revised Tariff proposed in the Conference, subject to any further modifications of detail that may be found necessary, on the condition that Japan will agree to give to foreigners such extended freedom of communication

with dealers in the interior as may protect them from combinations injurious to foreign trade.

Her Majesty's Government are willing to accede to the proposal of Japan, that the Tariff question should be settled as soon as possible, without waiting for an agreement upon the other points descussed in the Conference.

They will therefore be prepared to authorize Her Majesty's Representative to conclude at once a Convention to the above effect.

either of the Contracting Parties should be free to pulating that after to admit a clause in the Revised Tariff Treaty, stitherefore be prepared, if other Powers also consent, joyment justify Japan in claiming to be admitted to the enviously agreed upon with the foreign Powers, would right of holding real property there, on terms preforeign throwing open of the whole Empire of Japan to (say, ten or twelve) from the date of ratification, Her Majesty's commerce, travel, and residence, with the of Tariff autonomy, Government recognize a term of years, and they to that bе would

give twelve months' notice of termination, it being understood that, in the absence of any notice, the Treaty should continue in force until twelve months after such notice has been given: provided, however, that, before Japan can exercise this right of giving notice of termination of the Tariff Treaty, she shall already have thrown open for a certain period (say, three years) the whole Empire to foreigners, under arrangements which the Powers shall have found to work satisfactorily.

Her Majesty's Government trust that the Japanese Government will appreciate the friendly spirit which dictates these concessions, and that they will in return at once do what is possible to facilitate greater intercourse between foreigners and Japanese. With this view they would ask the Japanese Government to give greater extension to the Passport system, and to allow foreign vessels to carry cargoes between ports not at present open to foreign trade.

With reference to the proposals laid before the Conference by Japan for the establishment of Courts

with foreign Judges having jurisdiction over foreigners, with a view to the eventual abolition of Consular jurisdiction, Her Majesty's Government have every desire to meet in a friendly spirit the views and wishes of the Japanese Government; but they do not see their way to expressing an opinion on these proposals until the new Laws and Rules of Procedure for the proposed Courts have been completed and translated.

Her Mejesty's Government are not disposed to agree to any modification of the XXIIIrd Article of their Treaty with Japan relating to most-favoured-nation treatment.

With regard to the Custom-house and Trade Regulations, the question of bonded warehouses and drawbacks, harbour and light dues, Her Majesty's Government consider early arrangement as possible. The question of the protecion to be given to

The question of the protection to be given to foreign trade-marks, patents, and inventions should also be dealt with at an early date.

Foreign Office,

December II, 1883

二五二 明治大年三三二 仲族外務卿代理宛

Ż.

英外務卿覺書ノ文意ニ關スル件

言ノ要旨ヲ左ニ掲ケテ御考端ニ供ス 電ノ要旨ヲ左ニ掲ケテ御考端ニ供ス に二數回面晤シ彼ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面晤シ彼ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面晤シ彼ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面晤シ彼ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面晤シ彼ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面晤シ彼ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面・次ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面・次ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面・次ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面・次ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面・次ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面・次ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面・次ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面・次ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面・次ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋 大二數回面・次ノ意思ヲ明確ニスルコトヲ得タリ同氏釋

一 外國貿易ニ有害ナル連合云々

ル覺書中ニ記載アル横濱町會所連合ノ如キヲ云英政府望ムシテ卽東京預議會ノ末ニ方リ「パークス」氏ヨリ提出シタ右ハ日本商人仲間ニテ結黨シ內外通商ノ道ヲ妨碍スル者ニ

一 現時未開港ノ間ニ於テ荷物運搬ノ事ヲ外國船舶ニ所ハ嗣後日不政府ノ干渉ヲ以之ヲ防歇スルニ在リ

便良ノ方法ヲ以テスルカノ論題ニ至テハ將來双方ノ協議ニ日本入ヨリ外國船舶ヲ雇入此業ニ從事セシムルカ或ハ其他其方法ハ東京會議ノ時日本政府ヨリ提出アリシ考案ソ如クルノ權ヲ外國船舶ニ許與スルコトニシテ卽沿海貿易ナリ尤右ハ日本未開ノ港ロニ物貨ヲ輸入シ或ハ輸出スルコトヲ得

ノ意ナシ云々 - 最惠待國ノ事ニ付テハ現存條約第二十三條ヲ變更スルー 最惠待國ノ事ニ付テハ現存條約第二十三條ヲ變更スル

テ決定セント欲ス

定スへキ事項一切ニ波及セシメント欲スル也ハ雷ニ税則或ハ通商事項ノミニ止ラス凡諸種ノ條約ヲ以議右ハ將來締結セントスル所ノ條約ニ掲載スヘキ來例ノ特典

於英政府ハ左程關係ノ深遠ナルコトハ未夕預想セサリシ様ヨリ辯明シ的例ヲ引證シテ更ニ彼ノ注意ヲ促シタル處實ハ不都合ヲ惹起シ實行ヲ得ヘカラサルノ事情アルコトヲ本使諸項ニマテ悉皆連及スヘキ者也ト約定スル時ハ嗣後許多ノ附云一ノ條約中ニ最惠待國ノ條款ヲ加記スルヲ以他ノ條約

蓋シ英政府ノ望意ニ符合スヘシ ル所ノ ニ連及セサ ヘキモノニシテ其効力ハ決シテ他ノ條約書中ニ所定ノ事 時ハ之ニ關スル條約書每トニ最惠待國ノ一條ヲ 最惠待國ノ特典ハ其條約ニ所定ノ事項ニノミ適用ス 諾否ハ姑ク之ヲ語ル事 ルモノトシ若シ特典ヲ享有セント欲スル | ホ熟考スヘシトノ意ヲ示 ヲ欲セス但一ノ シタリ 條約二記 因テ本使云 加記 事柄ア 入 セ 項 我 ズ ハ

サニ其手段ヲ施サントス
思想ヲ破リ之ヲシテ實際當サニ行ハルヘキコトト否トヲ悟思想ヲ破リ之ヲシテ實際當サニ行ハルヘキコトト否トヲ悟恰モ霧中ニ迷フカ如キ情實アルヲ免レス故ニ彼ノ漠然タル尤本件ニ付テハ彼ノ意見仍ホ曖昧ニシテ未夕瞭然確定セス

ル密話ナリト云々
政府ニテ公然タル閣議ヲ經サル者ニシテ唯兩氏ノ私考ニ係話中裁判權ノコトニ及ヘリ其要旨ヲ左ニ揭ク尤是ハ未夕英一 外務大輔ポンスホート氏プロンケツト氏共ニ本使ト談

ヲ日本法延ニ譲與スルモ蓋シ妨ナカルヘシ後ハ英政府ハ英國臣民カ内地ニ於テ犯シタル輕罪懲罰ノ權第一 日本政府ニ於テ內地旅行免狀ノ規則ヲ寬大ニシタル

以之ヲ信シテ可ナリ 情アルコトハ兩氏ノロ 欲スルノ意也但重罪ハ領事法廷ニ附セサルヘカラスト考フ ル = シ 從前 ラ懲罰 應スヘキ決意アルコトヲ開示シタリ尤英政府カ我ニ對ス 友厚ノ誠意アルコトヲ反覆說述シ可成的日本政府ノ要求 シ考案ノ中若干ノ區域マテハ日本政府ノ望意ニ應セ ポンスホー ノ政略ヲ一變シ專ラ懇篤ノ友交ニ改メント欲スル 外國船舶乘組日本水夫幷日 ŀ 井プロンケツト兩氏共英政府カ日本ニ對 ジテハ日本政府ヨリ 氣顔色及他ノ友人ニ發シタル 本船舶乘組外國水夫ノ 東京預議會 = 言端 提出ア ント 7

任ノ由同氏ヨリ承知シタリ プロンケツト氏來一月廿日馬耳塞港ヨリ佛船ニ搭シ赴

此段中進候也電信ヲ以中進タルコトハ疾ニ御領知相成タル義ト存候電信ヲ以中進タルコトハ疾ニ御領知相成タル義ト存候カスヘキコトハ一結局ニ至リタリト存シ一昨日別紙寫ノ通一 巳上ノ次第ニ付條約重修事件ニ關シ本使於當府斡旋盡

明治十六年十二月廿一日

特命全權公使 森 有

外務卿代理伊藤博文殿

註 1次號|五三附屬書|來電ナルニ付参看

||五|| 明治十年 月十七日 伊藤外務卿代理

英政府覺書ノ諸項ニ付內談方ノ件

|| 十七年一月七日附森公使ョリ英外務卿へノ私附屬書| 十七年一月七日附森公使ョリ英外務卿へノ私

密信 第三號

三月十一日

沿海貿易ノコト最惠待國例ノコト等ノ諸點ニ付我異見ノ次 棄權實行前三年間開國ノコト 條約重修ニ關シ英政府ヨリ友好ノ取扱アルコト 面晤シ御電令ノ旨ヲ達センコトヲ希ヒ居シニ 面シテ謝意ヲ述ベ且同政府提出覺書中ニアル通商條約廢 リ貴意ノ所在ヲ瞭知スルコトヲ得タリ就テ 訓令ニ變更ヲ加ヘシムヘキ様盡力スヘシト ヲ好機會ニ投シ内密同卿へ說述シプロンケツト氏 7 期旣二 , 一會スル 近キニ コトヲ得ス然ルニ 在レハ徒然外務卿 内地旅行冤狀規則擴充ノ 「プロンケツト 府 ハ早速外務卿 ノ趣御電令ニ 折惡數同卿 ヲ俟ッ ヲ英外務卿 へ付與 \sim ı カ ŀ

> 示スヘシト ヲ抱カ ッ 一徴候アル 我望意 ス因テ本月七日私信ヲ同卿ニ贈リ以テ我意ヲ通シ 々ア 7 其寫一通ヲ進呈スレハ御一讀被下度候將又過日 打合セー致盡力 氏卜 ハ シノ通り 須ク英政府ノ内幕ニテ今一層ノカヲ盡シテ其實ヲ トノコトヲ略示シ且云同氏果シテ日本ノ爲メ友情 ルニ於テハ シテー鞭ヲ加置タレハ其後周旋中ナラン乍去若 晤ノ節英政府ヨリ ゚゙゚゚゚゚゚ プ心得 ンケツト氏ヘノ 更ニ他ノ考案 = 有之候 ノ提出案ハ我之ヲ肯諾シ難 ヲ要スヘキ 訓令變更ノ効 ニ付青木公使 プロン ラ得サ タリ 丰 ケ

右及內啓候也

明治十七年一月十七日

特命全權公使 森 有 禮

外務卿代理伊藤博文殿

註 1外務卿ヨリ森公使へノ訓電見當ラズ

附屬書

十六年十二月十九日發森公使來電

From Mori to Hanabusa

To Gaimkio. Plunkett starts by French mail the middle of January. He explained certain points in

recent British Government memorandum. He and Pauncefote make me believe that British Government now desire to satisfy Japan as much as possible in the most friendly spirit both as to commerial and judicial matters. Under the circumstances of the case, my services in London respecting Revision seem no longer necessary, unless you entertain different views.

London Dec. 19, 1838

附屬書二

十七年一月七日附森公使ョリ英外務卿へノ私信

Сору

Confidential

Japanese Legation Jan., 7, 1884.

Dear Lord Granville,

In consequence of Your absence from London I have the pleasure to inform you by letter that my Government have instructed me to express their sincere thanks for the friendly disposition which has been exhibited by the British Government in

the memorandum respecting Treaty Revision which you were so good as to hand me with your letter of the 11th of December.

At the same time I am instructed to state to you confidentially that it appears to my Government (if they understand the memorandum correctly) that certain modifications of detail will still be required in order to work out the proposed changes in complete harmony, and I am to name expecially the extreme advisability of arriving at a preliminary understanding on these points before Mr. Plunkett leaves for his post.

My Government take note of the recognition of the British Government that "the throwing open of the whole Empire of Japan to foreign commerce, travel and residence, with the right of holding real property there, on terms previously agreed upon with the foreign Powers, would justify Japan in claiming to be admitted to the enjoyment of Tariff autonomy", but I am to point out to you that while Japan has every wish that the Empire should be thus opened it would appear unprecedented, inad-

not to exercise the right of Tariff autonomy until that a stipulation binding the Imperial Government be thus created throughout the Empire. ment to autonomy within its own territory might result in either case that the right of my Governperiod would have to be entered upon, with the have to be closed again or a further probationary system unsatisfactory, either the Powers were eventually to pronounce the agreed in making permanent arrangements, and if any of Neither the Japanese nor foreigners would be safe necessarily create a very undesirable state of affairs. admitted to exist in the matter, it would ipso facto at, and if any subsequent uncertainty were to be be opened till a proper understanding as to the juridical treatment of foreigners has been arrived during a probationary period. the accepted arrangements had worked satisfactorily way contingent on any considerations as to whether each right of autonomy should be made in any missible and impracticable that the recognition of again questioned and excessive dissatisfaction the country would The country cannot It appears

the country had been opened might sufficiently meet the circumstadces of the case and be agreed to by Japan.

As regards the question respecting most favoured nation treatment by Government adhere to the view that it would be better, particularly in the interest of foreigners, that a clause somewhat similar to the one which appears in the Treaty of 1880 between Germany and China should be adopted. If the clause at present in force were continued in all the new Treaties, cases might probably arise connected with such questions as trade marks, copy right, patents etc., in wich the Imperial Government might be unable to conclude arrangements with any of the Powers on account of the liability that some of them might claim the right to any benefits conceded without granting the corresponding advantages in return.

In respect to the other subjects alluded to in the British Memorandum I an able to assure you of the earnest desire of my Government to meet the wishes of the Her Majesty in the most-liberal

spirit, and with the intention of giving them practical effect without further delay than is required to settle the incidental questions which might arise in connection with them as to the juridical treatment of the persons and property of British Subjects.

and casioned if the suggestions of my Government were prevent the further delay the departure of Mr. Plunkett for Japan as would ble such arrangements should be arrived at before unnecessary proposals, and secondly, that if possishould not be lessened by the introduction of any friendly disposition now evinced by Great Britain instructing me to address you thus confidentially on not in exact conformity with his instructions. the sincere conclusion let points is firstly, that the effect of the very wish me assure you that the object of my which might be Government <u>.</u> in

I place any further assistance that I could render entirely at you disposal.

I am, dear Lord Granville.
Sincerely Yours
(signed) Mori.

三五四

明治十二十三十五日

伊藤外務卿代司

英政府ノ覺書ニ關スル件

機密信 第四號 三月十一日到
 三月十一日到

書翰寫ヲ封入進呈致シ候電介ノ旨ニ從ヒ英外務卿へ私信ヲ以申入タル事ハ巳ニ前號電介ノ旨ニ從ヒ英外務卿へ私信ヲ以申入タル事ハ巳ニ前號條約重修ニ關シ英政府ヨリ提出ノ覺書ニ付我異論ノ次第御條約重修ニ關シ英政府ヨリ提出ノ覺書ニ付我異論ノ次第御

朝可致心得ニ候 様相考候因テ御電令ノ旨ニ從ヒ時機見計ヒ不遠當地出發歸發赴任イタシ候已上ハ本使當府ニ駐留ノ義最早必要ニ無之一 前文ノ如ク英政府ノ意向回答有之新任英公使ハ旣ニ出

右申進候也

明治十七年一月廿五日

特命全權公使 森 有 禮

外務卿代理伊藤博文殿

钰 1及2兩電共見當ラス

附屬書

Copy

十七年一月二十一日附英外務卿ョリノ回答

Jan., 21. 1884

Freign Office.

Monsieur le Ministre.

I have had the honour of receiving your note of the 7the instant relative to the question of the revision of the Treaties between Japan and Foreign Powers, and I have been much gratified at the friendly terms in which you have been instrcted by your Government to express thir satisfaction at the contents of the Memorandum which I communicated to you on the 11th ultimo.

I can assure you that the views and wishes of the Jaapnese Government in regard to the proposed probationary period will be carefully considered by Her Majesty's Representative in conjunction with those of the other Powers, but some such period appears to Her Majesty's Government to be desirable with the view of ascertaining, before the arrangements in regard to jurisdicton are finally

concluded, whether they are adapted to Japanese and European interests.

The reason given in your note against the existing form of the most favoured nation clause do not appear to be altogether applicable to the present case and Her Majesty's Government see grave objections to any modification of it which would affect its general sense.

In conclusion I beg to renew my assurance of the cordial feeling entertained towords Japan by Her Majesty's Governments and of their earnest hope that the approaching negotiations at Tokio may lead to a settlement which shall be satisfactory to both Countries and shall still further strengthen the friendly relations which have so long and so happily existed between them.

I have the honour to be with the highest consideration.

Monsieur le ministre,
Your must obedient
humble servant
(signed) Granville

二五五 明治士·宪月十六日 井上外務興宛

帝國政府ノ覺書ニ關シ英外務大輔ト內談ノ件

二 十七年九月十三日來電二二 十七年九月十三日發大山代理公使來電二 十七年九月十二日大山カリー談話概略

リ小官へ送附有之不月七日ニ接到閱讀仕候料ニ八月六日、九日附青木公使宛ノ貴電信寫貳通同公使ョ條約貳修事件ニ付キ八月五日各國公使へ御交附ノ覺書壹級機密信 第三拾貳號 十月三十日到

此旨中進候敬具

明治十七年九月十六日

日等中上》發在英臨時代理公使 大 山 綱 介

外務卿伯爵井上馨殿

2 青木公使宛外務卿電寫見當ラ、註 1 一一九附屬書ニ付参照

附屬書

上ondon, le 12 Septembre, 1884

Conversation entre Philip W. Currie et T. Ohyama.

Ohyama: avait fait comprendre, Inouye avait remise à Mr. Plunkett le 5 Août. de la nouvelle proposition de la Révision que Mr. ment de voir Mr. le Comte de Granville, au sujet Inouye m'a donné par conséquent l'ordre d'exprimer proposition. ses espoires que Mr. le Comte aura la bienveiltion sur les bases de la nouvelle proposition. Mr. authorisé à négocier et à conclure une conven-Inouye m'a fait savoir que Mr. Plunkett lui E. Mr. le Comte de Granville, ses voeux et de considérer J'ai reçu les instruction de mon Gouvernfavorablement le 29 Août, la nouvelle qu'il serait

Comme le Comte de Granville est absent, je vous prierais de lui communiquer l'espoir de Mr.

Inouye sur sa favorable considération de la nouvelle proposition, et je vous prie aussi de lui ajouter mes prières de nous donner son puissant appui.

Currie: Est-ce l'appui de Mr. le Comte auprès des Puissances que Mr. Inouye lui demande?

Ohyama: Pas tout à fait, les instructions qui j'ai reçues, ne vont pas jusque-là. Mais j'ai voulu dire le puissant appui de Mr. le Comte de Granville pour l'adoption de notre proposition. Si vous avez quelques minutes, j'ai encore à vous parler.

Currie: J'ai quelques dépêehes à voir, mais nous pourrons en parler.

Ohpama: Comme je sais que votre influence et votre appui sont considérables auprès de S.E. Mr. le Comte de Granville, je vous prie de me donner vos bonnes offices. Vous savez bien que le Japon a fait des efforts et des sacrifices pour arriver à l'etat d'aujourd'hui, vous savez aussi que le Japon a fait des progrès possibles dans une espace du temps relativement court. Et vous reconnaissez

Puissance comme l'Angleterre; je veux vous prier Si par hasard, nous ne pourrons pas obtenir votre largement ce que vous ne croyez pas excessif. seulement de nous donner et de nous rendre gratitude soit quelque chose pour une grande longtemps. avons faits et le Japon aura une gratitude pour donc la récompence pour les efforts que nous est persuadé que la révision des traîtés principaleadresse une prière si sincère, c'est que le Japon aussi avec la puissance de votre pays. Si je vous efforts avec votre esprit d'equité et de justice, et reconnaître cette difference. Si vous la reconnaisans. Ce que je vous prie, c'est de vouloir bien l'etat d'aujourd 'hui et l'etat d'il y que la defference est devenue incontestable entre cruelle necessité de protester et de gémir. consentement, notre demande. vous comprendrez facilement la justesse de de l'appui de l'Angleterre. Je reconnais parfaitment les progrès mer-Je ne veux pas dire du nous nous trouverons dans Et alors veuillez encourager nos a presque 20 Donnez-nous tout qu'une une

donc pas de difficulté. avant de rédiger la proposition. position, je crois que le Comt de Granville l'aurait M. Plunkett avant la remise de la nouvelle prokett ont étudié ensenble et qu'ils se sont consultés approuvée. Je pense que Mr. Inouye et Mr. Plun-Gronville était en communication constante avec vielleux que vous avez faits. Comme le Comt de Il n'y aurait

Ohyama: Je suis bien aise d'apprendere par vous dit? savez bien, c'est si pénible de faire des efforts votre encouragement pour nos efforts. Vous le sans être encouragés. Je pourrai communiquer l'appui de l'Angleterre. la confirmation de mon espoir que j'avais sur Mr. Inouye en résumant ce que vous m'avez Et je suis content de

Currie: Oui, nous avons indiqué à Mr. Plunkett sont d'accord, il n'y aura pas de dificulté. Du reste, pour faire la proposition. Inouye et Mr. Plunkett ont discuté les affaires détails, il pourra les arranger. Je pense que Mr. les principales lignes de conduites. Si les autres Puissances Quant

m'avez dit. etc. êtes venu, et je lui communiquerai ce que vous j,ecrirai à Mr. le Comte de Granville que vous

(帝國政府ノ覺書ニ關シ英外務大輔ト内談ノ件) 十七年九月十三日發大山公使來電

TELEGRAM

From Ohyama To Inouye

these would be cosidered acceptable to England ville before proposal formally made, and he believed had been continually in communication with Granfollowed your instructions. He said that Plunkett Have received new proposals from Aoki. still absent, but saw Currie yesterday and Gran

13 September 1884

附屬書三

十七年九月十三日發大山代理公使來電 TELEGRAM.

From Ohyama To Inouye

to these ports before being tried and punished by nese laws outside the treaty ports, and escaping The case of a foreigner contravening the Japa-

> our tribunals dose not appear defined in new promotives posals. I only mention this from precautionary

13 September, 1884.

二五六 明治士军一月二十吉 吉田外務卿代理宛河瀬駐英公使ョリ

帝國政府ノ覺書ニ基キ商議開始方英政府ニ於テ承諾

Ξ 十七年十一月二十七日發河瀬公使來電十七年十一月二十四日附英外務卿來翰

附屬書一

大山ポンスホート談話覺書

機密

第四十七號

至ナラン」ト申述候處「商事ハカリー氏ノ擔任ナレトモ現 趣ナリ此新發議ヲ基礎トシテ商議調印ス可キ訓令ヲ旣ニプ ランケツト公使へ御附與相成リタリトノ趣ヲ閣下ヨリ承ハ 山氏へノ回答ニ據レハ英政府ハ井上卿ノ新發議ニ御同意ノ 今留守中故ポンスフヲート氏へ御談話有之タシ」ト被答候 リタリト今日日本政府へ通知スルヲ得ハ拙者ニ於テ幸甚ノ 本月十七日當外務卿ト面晤ノ序「過般大輔カリー氏ョリ大

四日大山書記官ヲ以テ返答ヲ促シ而シテ當人ト大輔ト談話 依テ卽日ポンスフヲート氏ニ面會右事件ヲ尋置候末去ル廿 趣ハ別紙甲號覺書ノ通ニ有之候

付別紙乙號寫差進候 右改正事件ニ付去廿四日附外務卿ノ書翰廿五日ニ到來候ニ

明治十七年十一月廿七日

特命全權公使 河 瀬 眞

*外務卿代理外務大輔吉田淸成殿

得共念ノ爲メ別紙丁號寫ノ通不日電報差進置候也 尙々別紙寫英外務卿ノ來翰ニ依レバ改正ニ係ル英政府 ノ意嚮ハ巳ニプランケツト氏ヨリ御聞込ノ筈ト被考候 註 1別紙丁號ハ丙號ノ誤記ト認メラル

附屬書一

甲號

官ト 十一月廿四日外務大輔ポンスフヲート ノ談話覺書 氏ト大山書記

大山 今日 レタル改正一條ヲ承度參候 ハ河獺公使ノ命ヲ受ケ過日同公使ヨ ŋ , 尋ネ置カ

外務卿ノ書翰ハ未夕達セサリシヤ改正一條ハ去土曜

短言スレハ過般カリー氏ョリ貴下へ話セシトコロノ 旨趣ニ候 シ難キコトアレトモ此覺書ニハ英政府モ同意ストノ 井上卿ノ覺書中一二件ハ東京會議ノ節ニ非レハ決定 可ク候間委細ハ右書翰ニテ御瞭知アリタシ其要領ヲ 日二取調置キタリ外務卿記名ノ筈ナリシカ卿モ多忙 際故遲延セシコトト被存候今明日中ニ貴方へ達ス

大山 書ニ同意セントブ趣ラ聞キ然ル上ハ英政府モ疾クニ 曾テカリー氏ョリ聞タル通り英政府 確實ノ事ヲ承知セリ白耳義伊太利等モ既ニ日本ノ覺 書ニ同意相成居ル事トハ信シ居タレトモ今日初メテ 同意相成リシ事ト思ヒ居リシニ案ニ違サリシ事ヲ欣 モ日本政府 1

(以下條約改正三 關係ナキ ヲ以テ略ス)

附屬書二

乙號 十七年十一月二十四日附英外務卿來翰

Foreign Office

November 24, 1884,

(Copy)

Monsieur le Ministre,

furnishing an acceptable basis for negociation. Government on the considered subject to Minister at Tokio has informed I have the honor to acqqaint you that Her Majesty's In reply to your verbal inquiry of the 17th instant. the certain reserves as to the details, he last proposals Treaty Revision questions as of the Japanese Count Inouye that

Powers have received similar instructions. ence whenever the Representatives of the view, and have instructed Mr. Plunkett to proceed Her Majesty's Government have concurred in that the discussion of the these proposals in conferother

Monsieur le Ministre your most obedient

I have

honor

to be with the highest

con-

humble servant, (s.) Granville

Jushie (i.) Kawasé

etc. etc. etc.

附屬書三

七年十一月二十七日發河瀬公使來電

井上外務大臣時代 對英交涉 三五七

> (Copy) TELEGRAM.

FromKawase To Gwaimukio

structions. when the other representatives receive similar instructed to proceed with the discussion in conference and that British Minister to Japan have been infurnishing an acceptable basis for the negotiation, except some that British Government consider your proposal, answer to my inquiry Gwaimukio writes me details to be further descussed, as

二五七 明治大生月十六日 河瀬駐英公使宛井上外務大臣ョリ

阿片輸入取締ニ關スル件

附屬書 貿易規則阿片條款

機密 第四一二號

外務大臣伯爵 井 -E

英國倫敦駐剳

特命全權公使河瀨眞孝殿

今般條約改正ニ付テハ阿片輸入ノ義モ亦從前ノ 弊ヲ除却 シ

八四九

約ニ據リ嚴禁セルヲ以テ明治六年以前ニ在リテハ藥用ニ供 然ルニ當時本邦駐剳英國公使ハ外國人之ヲ逾奉スルニ及ハ 買丼製造規則ヲ布告シ翌十二年五月一日ヨリ之ヲ實施セ 險ナルヲ以テ帝國政府ハ襲ニ明治十一年中前陳藥用阿片賣 テ其後彼我政府ハ評議ヲ遂ケ藥用阿片ノ輸入ヲ特許セリ然 公使ハ同年一月中藥用阿片ノ輸入允可ノ義ヲ請求セリ而 人ハ之カ為メ醫藥ノ用ニ窮乏シ衛生上甚夕不都合ニ付各國 スル小量ノ阿片ト雖モ其輸入ヲ禁止シタル處本邦居留外國 及製造規則ヲ外國人ニ對シテモ亦實施スヘキ樣改正ヲ加 嚴然明治十一年八月九日太政官第廿一號布告藥用阿片賣買 スル事能ハスト雖モ帝國人民ニ對シテハ業已ニ十二年五月 シモ十四年中英國政府遽ニ異論ヲ生シ本件ハ條約改正ノ際 レトモ右ノ如キ毒薬輸入ヲシテ自由ナラシムル事ハ甚タ危 貿易規則案第三十八條末項ニ「藥用阿片ヲ輸入スルノ特權 や極ムヘシトノ回答アリ隨ツテ未タ外國人ニ對シ之ヲ實施 ル旨主張シタルヲ以テ本省ニ於テハ明治十三年中森公使 ルヘカラサルノ次第ニ有之候抑阿片ノ輸入ハ各國ト り嚴重ニ之ヲ實施シ來リ候因テ本大臣ハ今般締結スヘキ シテ本件ヲ英國政府へ掛合ハシメ一時好都合ノ模様ナリ ノ條 ŋ 2

於テ外國人ニ對シ該權ヲ實施スルコトヲ得ヘキ義ニ英國政 己ハ既ニ之ニ同意シタリト雖モ本件ハ從來既ニ數多ノ紛議 本政府ハ発許薬舗ニ於テ一般ニ使用スル充分ノ量目ヲ備へ 月以來實施シ來リ且本邦ニ於テ消費スル藥用阿片ハ一年僅 規則中阿片輸入ニ係ル一項英譯文寫相添此段申進候也 府ノ同意スル樣充分御斡旋相成度別紙規則英譯文寫及貿易 リ此書接收ノ上ハ速ニ其國外務大臣ト開談ノ上帝國政府 政府ニ申通スルコト、存候間貴官ニ於テモ亦右ノ趣旨ニ據 テ其訓示ヲ受ケタル後ニアラサレハ公然確答ヲ爲スコト ヲ生シ且其局未タ結了セサルモノニ付一應本國政府ニ申出 ル 僅六百六十ポンドノ小量ニ有之旨申述ヘタル處同氏モ亦悟 邦委員ヨリ別紙前陳英譯文ヲ指示シ該規則ハ明治十二年五 ハサル旨開陳有之候而シテ同公使ハ必ス本件ノ仔細ヲ本國 ト氏ハ彼我重修委員會ニ於テ當初ハ之ニ異論ヲ唱 處アリ終ニ同氏トノ示談ニ據リ前項ヲ「純然タル藥用阿 日本ノミ之ヲ有ス」ル旨掲載シ置キタリ クヘシ」ト別紙規則案末項ノ通り改ムル事ニ決シ同氏一 ハ日本政府ヲ除クノ外一切之カ輸入ヲ爲ス事ヲ得ス但日 シガブランケ ロヘシモ本

1薬用阿片規則譯文見當ラズ

貿易規則阿片條款

not exceeding 200 yen. fails to report the fact shall be liable to a penalty until the ship shall leave the harbor. The master board shall seal up and take charge of such opium to the Customs and the Custom House officer on be seized and confiscated by the Japanese Authorimedical use on board the ship (thes supply of which, otherwise than opium in transit and opium for the latter case, in limited to three catties) shall All opium on board any ship arriving at a port, Should any ship have opium in transit on vessel having opium in tarnsit on board who the master shall report the fact in writing

smuggle opium shall pay a fine of 20 yen for every fiscation, shall be confiscated, and in addition tempted to be smuggled. All opium smuggled or attempted to be smuggled any person smuggling or catty, so smuggled attempting to to such con-

Pure medical opium can not be imported except

> always by the Japanese Government who undertake to have use to be retailed by licensed Dealers. on hand a sufficient quantity for general

二五八 明治十九年八月三日 河瀬駐英公使宛井上外務大臣ョ

新海關稅則即時實施方ニ關シ英政府ト交渉方訓令ノ

附屬書一 (新關稅/效力發生期ニ關スル 十九年六月二十四日附英國公使宛往翰

十九年六月二十五日附英國公使宛往翰

十九年七月 日附河瀬公使宛往信

外務大臣 伯 Ŀ

在英國倫敦

機密

第四二四號

特命全權公使河瀨眞孝殿

官ニ於テモ最早御承知相成タル事ト存候然レハ英獨兩國ノ 人ニ開キ日本モ亦適當ナル裁判權ヲ領有スへ 全權委員ハ去月十五日ノ會議ニ於テ帝國日本ノ全國ヲ外國 條約改正會議ノ模様ニ就テハ過般旣ニ數回 申進置候得ハ貴 丰 ノ新議案ヲ

提出シ 總テ日本人ト同等ノ權利ヲ享有スルコトヲ得 極ムへ半條約ヲ批准シタル時ョリ二年ノ後ニ於テスヘシト スニ當リテハ是亦獨佛ノ原書ヨリ純粹ナル英ノ法語ヲ能 國裁判官トシテ任用シ目本語ト共ニ英語ヲ以テ我國裁判所 於テ不動産株券、 本政府ハ全帝國ヲ外國人ニ開 ヲ以テ裁判管轄權ヲ領得スルノ利益アリト雖モ之カ爲メ日 國公使サー、 スル人ヲ要ス而シテ今是等ノ要件ヲ準備スルニ就テハ巨額 ニ於テハ條約ヲ履行スル爲凡三十人ニ下ラサル外國人ヲ我 ハ英國人其他外國人ニ對シ其年限中或ハ「コンヂツション」 (尤當日 ノ官語ト爲シ民刑及各法律、 其必要ヲ生ス 新地 出テ之ヲ以テ須要缺ク可ラサル 費金ヲ要ス 開税則ノ實施ハ我裁判管轄權ノ新讓與ト共ニ今般取 位 タリ蓋シ此議案ノ旨意ニ依ルトキハ日本ハ國際 三立. ハ獨公使同行同席ニ於テン然ルニ日本政府ニ於テ フランシス、ブランケツトハ其後彼我内談 一チ歐米諸國ト同等ノ權利ヲ有スヘシ然ル ヘク又其費金ハ條約批准ノ二年後ニ至リ始テ キニアラスシ 公債等ヲ所有 規則ヲ編制シ又之カ飜譯ヲナ テ該條約批准ノ當日 クヘキヲ以テ外國人ハ我國ニ シ諸般ノ營業ニ從事シ其他 ノ條件トナス旨開陳セリ ヘク叉我政府 = 13 其 準 上全 = 力 7

本大臣 ニニハ外國交際ノ面 二ケ年ノ後ニ新税則ヲ施行スルトモ他國政府ニ於ハ非常ノ 書面ニテ表シタル 利益ト云フニアラス又二ケ年前即チ批准ノ後直ニ施行シ得 就テハ新海關稅則ハ條約批准ノ後直ニ之ヲ施行 候蓋シ同氏ノ此請求ヲ爲セシハ全ク本國政府ノ訓示ヲ奉遵 體ナル重要事項ヲモ withdraw スヘキ語氣ヲ生スルニ至 カラシムルノ好 リシテ今日ニ至ル迄延引シ増税ノ利益ヲ受クル能 來條約改正 備ニ著手スルニ非サ 或ハ之カ爲メ十五日會議ニ於テ旣ニ滿足ナル提議案ノ本 テ本件ノ斡旋ヲ爲サシムヘキ旨同公使へ明言イタシ置キ 其節英國政府ニ於テ該訓令ヲ變更スヘキ樣在英我公使ヲ タレハ本大臣ハ止ヲ得ス之ニ承諾ヲ表シタリ尤モ本大臣 時ハ日本政府ニ於テハ第一會計上ノ困難ヲ避クル 増額ヲ以テ之カ費用ニ供セサルヘカラス將又目 タルニ相違ナシト雖英國政府ニ於テブラン ハ同公使ノ請求即チ新税則施行ノ猶豫ニ同意ヲ別封 |ヲ金テシ以來彼是各政府ノ意見合同 意ヲ得ンコトヲ切ニ喜望ニ堪エス然レトモ(マン) ハ本大臣ニ於テ當時强テ之ヲ抗議スル時 レハ右ニケ年中ニ完備ニ至 ヶ ツト氏ニ 'ヲ得 一ラサ 3 (然レト 其海關稅 ハス叉方 本政府從 ヲ得第 サル v 3

大臣 計畫ヲ容易ニ負擔シ滿足ノ結果ヲ得セシムルニ恪ナル 封入差進候間御査收相成度將又右訓示書ハ謄寫ノ上英外務 之アル間敷候就テハ別紙サー、フランシス、ブランケツト 政府ニ對シ曾テ請求シタル事項ノ利益ヲ總テ領收スルヲ得 立タシメ又別段ノ譲與ヲ爲スヘキセノアラサレハナリ 既ニ悉皆ノ譲與ヲナシ外國人ヲシテ内國人ト同等ノ 充分斡旋相成 ニ對スル本大臣ノ陳述書寫壹通及貴官へノ英文訓示書壹通 ニ示スノ場合ニ有之候得ハ吾政府ヲシテ第一經濟上第二此 ヘシ左レハ英國政府ハ右議案ヲ提出シタル好意ヲ日本政府 ハ即今提出セラレタル取極メニ依ルトキ 據ルトキ 際突然海關稅則ノ施行ヲモ裁判管轄權實施 我ノ讓與ヲ議スルニ及ハサルナリ 今般ノ發議案ニテハ全帝國ヲ外國人ニ開ク 介ヲ 御送附相成依テ本件ニ付都合好キ結果ヲ得ラル 與 請求ヲモ ヘシハ全ク十七年ノ覺書ニ根基セリ而 ハ自然彼我ノ讓與ニ付公平ノ取極メヲ要ス ŀ 度候抑ブランケツト公使カ新議案ヲ改正會議 キニ當リテハ同氏ハ海關稅則ノ事項ニ付曾 爲 がつり Ý ニ其後前陳セシ通 何ントナレ ハ英國政府 ŀ ヘケレハ最早 ハ我政府ハ 同樣二條約 ij シテ該覺書 彼我內談 地位 八日 ル様 ノ理 ヘキ 左 本 ν =

> 惟セラルハ方法ヲ以テセラル可ク又可成ハ十月中之ヲ 的ヲ達スル爲メニハ貴官ハ公私ノ別ヲ論セス最モ適當ト思 政府二於テモ容易ニ納得スヘキモノ 自己ノ意見ヲ本國政府ニ申通スヘキ スル様充分御斡旋相成度此 ヲ決スルヲ以テ定例ト爲スニ付一旦同公使ヨリ言出テタル 英國政府ハ海外派遣公使ノ所說ヲ信シ之ニ據リ本國ノ政策 批准後二年間猶豫セラルヘキ旨申出タル次第ナレハ其請 ハ容易ニ之ヲ變更スルコト 仕方モ亦甚夕不當ニ有之候乍去本件ニ就テハ同公使 段中進候也 ナカ ルヘケレハ此請求ハ同國 ŀ ハ勿論ノ義ニシ モ思ハレス因テ此目 テ銀テ モ亦 成

阿屬書

(新關稅ノ效力簽生期ニ關スル件)十九年六月二十四日附英國公使宛往翰

(Сору)

Foreign Office

24,

June
The Hon. Sir Francis R. Plunkett,

With reference to the conversation I had the pleasure of having with you this morning in regard to the date at which the Revised Tariff should

come into force, I have the honor to inform you that I understand the condition you have made in the name of your Government that the Revised Tariff shall not come into force untill the counter-concessions for which the higher Tariff is granted shall equally come into force; and I beg to add that the condition is accepted by my Government. I avail myself of this occasion to

express to Your Excellency the assurrances of my highest consideration.

(Signed) Inouye Kaoru

附屬書二

十九年七月二十五日附英國公使宛往翰

(Copy) Foreign Office July 25th, 1886

Sir;

In pursuance of my promise, I beg to enclose herewith, a copy of the draft note forwarded to Mr. Kawase for transmission to Lord Rosebery.

This note will I am sure possess you of the sense of deep obligation under which we rest for your

recent action in connection with treaty revision and it will also at the same time serve to show you how we rely upon your good offices and powerful influence in the future, to carry the new scheme to an early and successful conslusion.

I remain, Sir, Your most obedient servont

(Signed) Inouye Kaoru

His Excellency

The Honorable Sir Francis R. Plunkett, K. C. M. G. &. &.

附屬書三

十九年七月 日附河瀨公使宛住信

(Copy) Foreign Office, July , 1886.

His Excellency

Kawase Masataka

His Imperial Majesty's Envoy Extraordinary and Minister Plehipotentiary.

London

Sir;

You have already been made acquainted by my

previous despatches with the progress of the negotiations with reference to the Revision of the Treaties.

The initiative taken by the British and German Minister and the submission by them to the Conference, at its sitting of June 15th, of a new project providing for the opening of the Empire and important reforms in the system of judicial administration have, you will not fail to observe entirely changed the situation and will place our international relations altogether upon a different basis.

question of specific footing as that where foreigners are questions of concessions, for, it will be readily seen The opening of the whole Empire to foreign trade cessions on both sides in a fair and equitable manner. doubtedly issued, naturally tried to adjust the conthe instructions to Sir Francis Plunkett were Our memorandum of 1884, in the light of which residence, however, Japanese, there can no longer be the concessions. necessarily removes all placed on the same un-

in the course of the private negotiations which

I have carried on with Sir Francis Plunkett since the 15th of June, he has declared that he could only consent to the new tariff coming into operation contemporaneously with the new jurisdictional arrangements, thereby postponing the application of the increased rates of tariff for the period of two years after the ratifications of the revised treaties.

Sir Francis further observed tht he felt compelled to make this reservation a *sine qua non*, in view of the nature of his instructions.

Under these circumstances, I could not but yield the point, so fare as he was concerned, rather than to endanger the understanding which had already been arrived at in respect to other important matters.

In thus reluctantly conceding the point under review, I not unnaturally felt a regret that the Government which is so conciliatory in other respects should be unwilling to grant us what, in my judgment, seems to be but fair and equitable. Believing that Sir Francis Plunkett's instructions had been prepared before the creation of the

new situation, I reserve to myself, in his presence, the liberty of trying through you to induce the British Government to reconsider the question and to modify their instructions.

authoritative translations of the same; and your the codification of several bodies of laws and language of the Courts side by side with Japanese; foreigners as judges; mahing the English the official important obligations, such as, the engagement of cation of the status quo would carry with it several jurisdiction over British subjicts, but this modifithat Japan would besides be enabled to resume her increased rates of customs duties. It is quite true of material value, which Japan will secure is Japan; whilst on the other hand the only advantage or which she obtain all the advantages which she has ever asked arrangement in contemplation, discharge of these obligations, large expenses will particular attention is called to the fact that in the be incurred, not two years after the ratification of You will readily perceive that according to the could ever expect to obtain from Great Britain will the

the treaties, but immediately upon the conclusion of the new arrangement.

It appears to me, moreover, that the benefit which would result to the Treaty Powers from this long delay in putting the new tariff into operation would be comparatively insignificant, while on the other hand, the immediate enforcement of the tariff would enable H. I. M's Govt. largely to mitigate their financial difficulties and at the same time render it easier for them to carry out, in perfect good faith, the obligations imposed by the great scheme by virtue of which their international relations will be placed upon an entirely new footing.

The manifest sympathy and goodwill which has been shown by Her Britannic Majesty's Government in connection with the question of Treaty Revision encourages His Imperial Majesty's Government to approach on this subject with the confident hope that they will give it the same friendly consideration; and if it lies in their power, and we are convinced that such is the case, that they will willingly consent to the enforcement of the new

tariff contemporaneously with the new arrangement, that is to say, immediately after the ratification of the Convention.

You are tharefore instructed to seek an interview with Principal Secretary of State for Foreign Affairs, and after reading to him this despatch and leaving a copy if desired, request him to give an earnest and favourable consideration to this subject. I beg to enclose herewith a copy of my note to Sir Francis Plunkett by which I have yielded to him the concession on which he deemed it his duty to lay much stress and to which I have referred in this communication.

I have the honor to be Yours Respectfully (signed) Inouye Kaoru

二五九 明治大年月十七日 并上外務大臣宛

政府ニ謝意傳達方ノ件條約改正會議ニ於ケル英公使ノ好意的努力ニ對シ英

井上外務大臣時代 對英交涉 二五九

附屬書 十九年九月四日附英外務卿來翰

機 第三十四號 十月二十八日到

答有之候ニ付右ニテ委曲御承知相成度候書門・一號ヲ以テ外務尚書へ可遣書管案添御來訓ニ從ヒ大ル八月三十日イデスレー伯ニ乞面唔候處折柄バルガリヤ大ル八月三十日イデスレー伯ニ乞面唔候處折柄バルガリヤ大ル八月三十日イデスレー伯ニ乞面唔候處折柄バルガリヤ大ル八月三十日イデスレー伯ニ乞面唔候處折柄バルガリヤ大の八月三十日イデスレー信を別紙の「過書管案添御來訓ニ從ヒ機第四一一號ヲ以テ外務尚書へ可遣書管案添御來訓ニ從ヒ

右申進候敬具

明治十九年九月十七日

特命全權公使 河 瀨 眞 孝

外務大臣伯井上馨殿

ト存スル云々ノ語有之候と対し、ファンシス之提出書ハ同氏ノ起衆ニ有之候放飲サー、フランシス之提出書ハ同氏ノ起衆ニ有之候故般サー、フランシス之提出書ハ同氏ノ起衆ニ有之候故事は「大力」とリプ、カレート談話中同氏ノ言ニ今

附屬書

十九年九月四日附英外務卿來翰

Copy

September 4, 1886. Foreign Office

Monsieur le Ministre,

vision of Treaties in Japan, connection with the question taken by Your note of the 30th ultimo, relative to the action Western Powers. I have the honor to acknowledge the receipt of Sir F. Plunkett, Her Majesty's Minister existing between Japan of the Reand

Currie on the 30th ultimo. same effect which you made verbally to Sir Philip note, as also at the frienly of Her Majesty's Government at the terms of Your In reply I have to express to you the gratification communication to the

I have the honor to be, with the highest con-

Monsieur le Ministre Your most obedient (Signed) Iddesleigh humble servant

> 二六〇 明治式完月十七日 井上外務大臣

阿片輸入取締ニ關スル件

際取締規則御確定相成度ニ付サー、フランシス、ブランケ 機第四一二號ヲ以テ御指令ノ阿片一件卽今回ノ條約改正ノ 機第三十五號 令ノ次第一々拜承致候依テ去ル八月三十日外務尚書代理サ ツトエ御應接ノ趣丼ニ從テ當外務尚書へ談判可致模樣御細 歸着候事殆ト疑念ヲ可挾之康ヲ不見樣被存候尚後日 プ、カレート談判ノ模様丼來書ノ意ヲ推考致候ニ事滿足ニ 細檢ノ後ニ無之而ハ確答難致趣申越候右ニ付サー、 好意ヲ以テ熟考可致尤同件ニ屬スル書類極テ多數有之候故 ー、フヒリ 相分次第早速御報道可致候 Ⅰ伯ヨリノ來書ニテ右阿片一件日本政府ノ望ニ就テハ充分 プ、カレーニ面談委細相傳置候處其後イデスリ 十月二十八日到 フヒリ

右申進候敬具

明治十九年九月十七日

特命全權公使 河 瀨 眞 老

外務大臣伯井上馨殿

再陳(略ス)

註 1 二五七文書二付參照

2「イデスリー伯ヨリノ來信」寫ハ添付サレ居ラ

ズ

=

事ヲ歸着爲致度ハ英政府ノ深ク希望スル件ニ付成丈ノ盡 申越ノ次第モ有之旁飽迄考慮ヲ可加如何ニモ日本ノ滿足

右申進候敬具

明治十九年九月十七日

特命全權公使

河

瀨

眞

力可致トノ義ニ有之候

明治大学月十 -U E 井河 **开上外務大臣宛** 阿瀬駐英公使ョ IJ

新關稅規則即時實施方ニ關スル

機第三十六號

機送第四二四號ヲ以テ御訓令ノ貿易新規則實施ヲ條約確定 ノ上直チニ擧行相成候樣當政府ヨリサー、フランシスへ改 十月二十八月到

政府ノ滿足ヲ大成スルノ緊要重事ニシテ事成ラバ日本政府 處同尚書ハ目下バルモラル宮於テ女皇へ伺候中ニテ尚數日 訓令相成候樣斡旋可致御下命二從ヒ外務尚書へ面接可致之 カレーニ面會御書面相示シ本件ハ目下ノ條約改正ニ付日本 間彼地滯留ノ筈ニ付不日同尚書ノ次官サー、フヒリツプ、

相成度旨請求致候處同氏ノ答ニ裁判權ヲ日本政府ニテ回復 政府ノ好意ヲ以テ再考有之サー、フランシスへノ訓令改正 ハ固ヨリ國人一般長ク忘却シ得ベカラザル義ニ付格別ニ英 ル ハー大重事ナリ然レ共請求ノ趣ハサ フラ シ ス 3

井上外務大臣時代

對英交涉

二六一、二六二

飪 1二五八文書ナルニ付参照 外務大臣伯井上馨殿

三六二 明治十九年十月二日 井上外務大臣中河瀬駐英公使 宛ョ

新海關稅則ノ實施ニ關スル件

附屬書 私信 十九年九月二十八日附英外務次官宛河瀨公使

- = 十九年九月二十七日附河瀬公使覺書
- 四 Ξ 十九年九月二十九日附英外務次官回答
- (新關稅ノ實施ニ關スル英國意向回電方ノ 十九年九月二十日附河瀬公使宛往電 件
- 六 五 十九年九月二十七日發河瀨公使來電 十九年九月二十三日發河瀬公使來電

八五九

機密第三十九號

十一月八日到

條約定決ト同時ニ實施相成度旨委縷陳述致候處尚書回答ノ 可致旨回答有之候ニ付同日時出頭對晤ノ上稅則施行ヲ改正 歸府相成候ニ付早速面晤ヲ請求致候處廿七日午後三時來省 去廿二日當外務尚書イデスレー伯バルモラル宮駐輦所ヨリ 大意左ノ通ニ有之候

ever, as far as in our power, and will communihave expressed.) cate to sir Francis the letter, and of those you ンシス」ニ通告スペシ(We shall do our best, how-分ニ盡力スベク書簡幷貴官開陳ノ旨趣ハ「サー、フラ 去日本政府懇望ノ點ニ付テハ我輩ノ權内ニ在ル限ハ十 澁ヲ有ス (The difficulty with sir F. Plunkett) 乍 付テハ「サー、フランシス、ブランケツト」ノ爲メ難 我輩ノ滿足スルトコロナリ乍併本稅則施行期限ノ事 助力スルハ深ク希望スル所ニシテ日本近來ノ進步ハ最 次第ハ詳悉セリ英政府ニテ日本ノ繁榮ヲ加フルコト 書簡(即閣下ヨリ小官へノ御書簡)ノ旨趣幷ニ陳述 == =

右答詞中「サー、 フランシス」ノ為メ難澁ヲ有スル云々

> extent, by our Representative in Tokio)トノ辭アリタ レバ右ト同旨意ナラント致思考候 レー」ト談判ノ節同氏ニモ(As we are guided, in great 語ハ別ニ推問ハ不致候ヘドモ過日「サー、フイリツプ、 カ

セ之ニ添削ヲ施シ以テ陳述ノ本據ト致候 本談判ニ付テハ前以レーン氏ニ命ジ我請求 1 理由ヲ認メ サ

通回答有之候因テ右寫兹ニ封入呈御閲覧候 右外務尚書ト面談後ノ外務次官「サー、フイリツプ、カレ ニ製シテ之ニ添へ尚同氏ノ斡旋介助ヲ致請求置候處丙號ノ 」へ甲號ノ通私書ヲ送リ且ツ前件ノ旨意ヲ乙號ノ通覺書、***>>

承諾有之候趣同公使ヨリ通知有之候 尚品川公使ハ内訓ニ依リ獨政府へ該件請求ニ及候處都合克

右申進候敬具

明治十九年十月二日

特命全權公使 河 瀨 眞

外務大臣伯井上馨殿

逐而本件ニ關シ去廿日閣下ョリノ來電及廿三日、 日小官ョリ差立候電信寫各一葉寫相添候也 廿 七3

註 123夫々附屬書門、五、六參照

附屬書一

Confidential

甲號 十九年九月二十八日附英外務次官宛河瀨公便私信

Japanese Legation

September 28, 1886. London.

Dear Sir Philip Currie,

with Lord Iddesleigh yesterday, and learnt with hinge the opening of the country. ation, without wating for the conclusion of the that the new Tariff should come into early operpower to meet the extreme desire of my Government much pleasure that he would do all that is in his jurisdictional arrangements on which necessarily I had the honor of a most satisfactory interview

to be sent to Sir Francis Plunkett should not be attach to the subject. based on any insufficient explanations from me as paramount importance to both Empires which they to the views held by my Government and as to the I am extremely anxious that the instructions And as I am aware that my

> showing some of the more salient grounds on which me to feel sure that I have made these points per-I confidently ask the cooperation of the British fectly clear, I have had a Memorandum drawn up knowledge of English is not sufficient to enable Government.

to place the question before Lord Iddesleigh in a Imperfect presentation of it might otherwise have Memorandum for you confidential per usual in the possibly occasioned way to counteract any hope that before leaving town you may find time for my country, and I therefore now submit this I am well aware of the friendry interest you feel shortcomings which my

(signed) Kawase Sincerely Yours Dear Sir Philip Believe me

附屬書一

乙號 十九年九月二十七日附河瀬公使覺書

Сору

Confidential

Memorandum respecting the date at

which the new Japanes: fariff is to come into operation.

- i. The opening of Japan to foreign residence and trade and questions respecting jurisdiction over foreigners are essentially connected and must be treated together. The New Customs Tariff is a distinct subject and there is no reason why it would become effective contemporaneously with the above named arrangements. It would indeed have been settled independently, if a solution as to opening the country had not been arrived at.
- 2. This view of the case has been repeatedly taken by the British Government during the course of the negotiations, and has been specially and authoritatively laid down in a Memorandum dated December 11, 1883 which was handed to Mr. Mori in a confidential note of the same date, as embodying the conclusions of the British Government after full cosideration of the questions discussed at the Tokio Conference. In this Memorandum it is stated.

"That Her Majesty's Government are willing to accede to the proposal of Japan that the Tariff question should be settled as soon as possible, without waiting for an agreement upon the other points discussed in a Conference. They will therefore be prepared to authorize Her Majesty's Representatives to conclude at once a convention to the above effect."

This consent of Her Majesty's Government to increase of the Customs Duties and to the principle of the Revised Tariff (subject to modifications of detail since arranged) was given on the sole condition that combinations injurious to foreign trade should be guarded against, and in reliance on the assurance that the additional revenue thus obtained should be applied in the first instance to placing the currency on a more satisfactory footing. Such combinations are now practically impossible and the paper currency is at par.

3. It will be observed that the increased Customs Tariff was thus to operate as soon as possible

after 1883—and it cannot therefore be considered that the Japanese Government are unduly pressing forward the settlement when they regard with the greatest reluctance any suggestions for further delay.

- the legitimate course of trade. the first to recognize the desirability, to which ment towards a speedy solution of the question and consumers. objectionable in the interest both of importers nounced. into force, all precedents point, of an ealry operation of any had not been thus assured, they would have been the lower rates of duty-thus injuriously affecting might profit by it to lay in excessive stocks at chants, to the injury of others and of the revenue, country suffer from any delay-as passing of the Budget in which they are an-Tariff changes. In England such changes come But even if the assistance of the British Govern-Any long interval of delay is eventually so to say, simultaneously with Trade and the revenue of the some the
- 5. Any delay in the operation of the new Tariff

- would also seriously affect the whole fiscal system of the Empire. In Japan, direct taxation is already far greater than indirect taxation, and one of the chief remedies for this state of things lies in the increase of Customs duties. It will moreover be manifest that even the present excise duties on such articles as tobacco, sake, or spirits can not be adjusted without reference to the import duties charged on such articles. Thus a delay in putting the Tariff into operation would create considerable inconvenience in respect to home taxation.
- Few things would be more unpopular in Japan than any temporary tax necessitated by any persistent opposition of Foreign Powers to the immediate change in the Tariff. It would in itself be likely to create active opposition to the new arrangements with Foreigners. Yet inasmuch as there are already more than sufficient demands on the present sources of revenue, some increase will have to be sought for to meet the considerable additional expenditure involved in the ar-

those for whose benefit such outlay is made should most legitimate manner of the revenue thus recertainly not wish to delay the procuring in the other matters relating to foreigners will neces-The expences in connection with these Courts and rangements for the Special Territorial Courts. an immediate outlay. It will be felt that

duty were high enough to check consumption. fall on the inporters unless the increase in ard Authorities whatever it may be, has according to the Standpears to be imaginary, for as the import duty, be caused by an early change in the Tariff apfact the increase would not affect the eventually borne by the consumers, no loss would exchange which frequently occur from month to goods so much as the rise or fall in the rates of the progress of material prosperity, accelerated The idea that any injury to foreigners would is not likely to be the case for in point of The probability on the contrary is that no Political Economy, cost of to be the

> prices incident on the slightly increased duties. tion would more than compensate for the rise of by a satisfactory solution of the Revision, Ques

 $\dot{\infty}$ thrown open, it becomes of greater importance son or apparent advantage to any one, just at ing against foreigners were created without reaand it would be highly regrettable if a bad feelthat the decision arrived at will much serutinized, The Tariff question has been so much discussed proof that a settlement had at last been reached. operation of the new Tariff would be a palpable of foreigners—while on the contrary, the early and want of sympathetic confidence on the part It would be interpreted as showing disapproval ment could assign no satisfactory reasons, would and foreigners. the question on the relations between Japanese can be no doubt as to the important bearing of in a speedy change in the Custom Duties, there the time when, have a very unfavorable effect on public opinion. Independently of the material interests of Japan The delay, for which the Governas the country is about to be

to cultivate kindly and hospitable sentiments.

paramount importance of which on so many to the wishes of Japan in the cooperation of the other Powers to accede ber 11, 1883 and on other occasions, and to induce declarations made in the Memorandum of Decemstruct Sir F. Plunkett to act in the spirit of the grounds cannot well be overestimated that the British Government will consent to in-For these and other reasons it is sincerely hoped this particular, the

September 27, 1886.

丙號 十九年九月二十九日附英外務次官回答

Sept. 29.

Foreign Office

My dear Minister,

sideration and we are communicating on the subject come into operation is under Lord Iddesleigh's conquestion of the time at which the new tariff should with Sir F. Plunkett. I am much obliged for your memorandum. The

(signed) Philip W. Currie Yours very truly

附屬書四

(新關稅ノ實施ニ關ヌル英國ノ意向回答方ノ件) 十九年九月二十日附河瀬公使宛往電

From Inouye to Kawase

of your action will entail serious consequences. what attitude British Government hold. Any lack forcement of new tariff, telegraph immediately third, in With reference to my confidential letter dated the connection with the question of en-

September 20th, 1886.

附屬書五

十九年九月二十三日發河瀬公使來電

From Kawase to Inouye

disposed; but could not give any definite inforabsent, but returns shortly. mation. I will telegraph directly I can learn any despatch, I had an interview with Under Secretary thing about probable attitude of British Government. (Currie) respecting tariff. Minister for Foreign Affairs (Lord Iddesleigh) is He appeared friendly On receipt of your

September 23rd, 1886

附屬書六

十九年九月二十七日發河瀬公使來電

From Kawase to Inouye

I had an inteview with the Minister for Foreign Affairs (Lord Iddesleigh) to-day. He appears well disposed, but could express no decided opinion till he had again communicated with British Minister in Japan (Plunkett) on the tariff question.

September 27th, 1886.

二六三 明治士年月二三 邦上外務大臣宛

新關稅規則即時實施方ニ關スル件

一十九年十月十三日簽河瀨公使來電附屬書一 十九年十月十一日附河瀨公使宛往電

機密第四十三號

十一月三十日到

シテ不月更ニ書ヲ伯林ニ送レリ就テハ其回答ヲ接スル迄ハクルヤ税則ニ關係ヲ有セリ目下右ニ付獨乙政府ト往復中ニノ答ニ條約改正上裁判事件ニ就キ困難ノ點アリ而シテ其點別施行期限ノ義ニ付御指示ノ旨ニ從ヒ及談判候處同氏 報越次官「サー、ジユリヤン、ポンスフオート」ニ面會シ 張ル十二日別紙甲號ノ通貴電接到候ニ付翌十三日外務省へ 去ル十二日別紙甲號ノ通貴電接到候ニ付翌十三日外務省へ

速ハ會議ニ大關係ヲ有スレバ格別盡力アー度旨ヲ述ベシ處 號ノ通電信差立候義ニ候 貴意承知セリ可成速カニ運ブ様可致要之不事件ノミニ止ラ ヲ以テ深ク重要ノ一事トスレバ隨テ英政府ヨリノ訓令ノ遲 シテ訓令(インストラクション)ノ手續ニ至ル 障碍ヲ生スルコト 如ク駿速ニ不運トモ會議(コンフエレンス) 達スルモ不日内ニ有之ベケレバ有之次第東京へ電通致ス impossible to say any thing definitely) 乍併右回答 ハ通告ヲ受ケ度旨申述ベ其承諾ヲ得引取候右應接ノ大意乙 ガ如キ取除法ヲ要スルハ當然ノ事ニシテ此等ハ實地ノ安排 リ尤税則實施ニ付施行前ニ輸出セシ品物ニ新税ヲ課セザル ズ概シテ日本政府ノ希望ニ應ズル様致度ハ英政府ノ主意ナ レバ不得已義ナレトモ我政府於テハ右稅則實施期限ノ決定 == ク要之當二十日前ニハ多分可相運ト思考ス將タ假令希望 何トモ確信シ難シ(Before reciving she answer 歸スベシトノ答ニ付尚ホ小官ヨリ獨乙政府ノ回答來着セ 付小官ヨリ獨乙政府ト往復中ニ付確言ナリ難シトノ事ナ モ有之間敷何レニモ多數ノ日子ヲ要セズ ノ爲メ格別 ベシトノ言

右申進候敬具

明治十九年十月廿三日

特命全權公使 河 瀨 虞 孝

外務大臣伯井上馨殿

附屬書一

甲號 十九年十月十一日附河瀨公使宛往電

From Inouye to Kawase

that he may have an opportunity of meeting Japa-I would say for your private information that the and request him to be decided to our proposition Minister for Foreign Affairs immediately and urge Such being the case, you are instructed to tion should have been settled before that date on 20th instant, and it is very important that quesnese demand, but the Conference will meet (?) again answer pleading want of instructions although stated penses to carry out obligations which new treaty considering the fact that we have to incur an ex-British Minister to that effect. would impose, Referring to time of enjoyment of the new tariff, Minister and send definite instructions to the has not yet given any definite see

Oct. 11th, 1886.

附屬書

乙號 十九年十月十三日發河瀨公使來電

From Kawase to Inouye

posal not speak definitely. specific proposal, that until reply arrived they could difficulties existed on jurisdiction matters ever, that British Government will accept our pro-Government were connected with tariff question, that British with some modifications. Government about these, At interview to-day Pauncefote stated that some as to the time when tariff becomes operative had communicated On the whole, I believe, howand to-day made them with German which

Oct. 13th, 1886.

二六四 明治太年月二日 非上外務大臣宛

關スル件 法典編纂顧問傭聘問題及新關稅規則即時實施問題ニ

附屬書一 干九年十月十九日ポンスフオート及レーン

1 十九年十月二十一日發河瀨公使來電一

一十九年十月二十一日同來電二

更ニ新規ノ難題ヲ提出スルノ意味ニハ有之間敷蓋シ「ポ 譯出セシ者ニシテ同氏モ深ク同人ノ獨乙譯書ヲ稱賛シ其書 同氏ョリ對話有之候件ニシテ 第六葉中ニアル Mr. Draye 纂上ニ係ル分ハ過目小官「サー、ジュリアン」ニ面晤ノ節 候ニ付寫呈御閲覧候右ノ內第一葉ニ載スルトコロノ法律編 ンスフオート」トノ談話ニ付レーン氏ョリ 去十九日 ソナル、ステータス」即英政府代表者ヨリ提出ノ案ニシテ ヲ指スヤ判然不致候得共前後ノ語勢ニ依テ之ヲ揣摩スレバ ル義ニ有之將タ條約改正ノ問題ニ轉ジテ第十二 葉ニアル 我政府モー旦同意アリシモノヲ英政府ニテ再ヒ變換ヲ要望 「サルテン、モデイフイケーション」ノ語ハ愈ョ何等ノ點 同氏 ルヤ現ニ當外務省備用書籍ノーニ列スル位ナリトノコト テ御望ニ適當ノ人物ニ可有之樣相考候ニ付更ニ話ニ及へ ナイスト」ニ親炙シ法理ヲ考究シ後伊西獨諸國ノ法律ヲ サルヲ得ザルノ場合ニ陷ヰリシ爲メニハナキカト被臆測 ョリ指名ノ法律家ニテ獨國有名ノ學士「ドクトル、 「レーン」氏ト外務次官 「サー、ジュリアス、 別紙覺書ヲ差出 一月三十日到 ル

ト想像被致候

ト想像被致候

ト想像被致候

ト想像被致候

New tariff arrangement connected with jurisdiction Question ト有之候處其「コネクション」ヲ有スル所以ハ全ク裁判事件ノ「モデフワイ」ヲ要スルガ爲メ我請求ノ「タリフ、オペレーション」ヲ直ニ同意致シ得ズ我請求ノ、「タリカ、・ノ・ション」トヲ交換センガ爲メ右關係(コネクション)ケーション」トヲ交換センガ爲メ右關係(コネクション)・ノ語ヲ用ヒ候樣ニ被存候

モ日埃兩國ニ於ケル法律ノ精神大ニ差異アリテ彼ニ要スル獨兩公使ノ提出案ハ埃及立合裁判ノ組織ニ主據セリト雖ト本覺書中ニハ記載無之候得共レーン氏ノ承リ候處ニテハ英

隨而 致希望候末葉ニ公使ヘノ返答云々ト有之ニ付テハー丁サ スルコトヲ希望ノ餘レー 我政府へ英政府ノ底意ヲ內々十分ニ知ラシメ事ノ滿足ニ歸 **ニ有之候且ツ「サー、ジユリアン」ョリ明言ハ無之候得共** 當外務省ノ遺憾トスルトコロタリトノ語氣有之候樣承候趣 シク覺書中ニハ明載無之候得共新税則施行期限 ノ 義 ニ 付 年五千磅以上ノ特別費用ヲ要ス云々ノ話モ有之候趣且ツ同 領事干渉ノ條項ヲ存シオカンニハ英政府ニテハ夫カ爲メ每 ジュリアンニョリノ 「サー、フランシス」ト本省ノ間ニ見込ニ差異有之候ニ付 「サー、フランシス」ニ於テ强テ閣下ノ請求ニ抵抗セシ ン)ニ非ラスシテ方案ヲ計畫シタルニ坐ス依然無益ナル 此二施スベカラザル件アリ即領事干渉ノ條項ノ如キ是ナ シ此等ノ誤見ハ全ク法律專業者(ブロフェショナル ルモノ、様被存候ニ付右ノ覺書ハ特ニ御熟讀相成度 日イデスレー伯ノ "We hove some difficulty with Plunkett" ノ語アリシコトヲ思合候得者自ラ前後 回答不書相添差出候間右ニテ御承 ン氏ニ態ト内話有之候事ト被存候 知相 *>*\

尙右ニ付差立候電信寫甲乙號二葉相添候

右申進候敬具

明治十九年十月二十三日

特命全權公使 河 瀨 眞 孝

外務大臣伯井上馨殿

Confidential

十九年十月十九日ボンスフォ

1

Ļ

ν 1

ン會談覺書

Memorandum

of

a conversation at the Foreign Office

between

Sir Julian Pauncefote

Mr. R. Stuart Lane October 19, 1886.

Lane. The Japanese Minister told me that you would like to see me to explain your views as to the proposed appointments of English Barristers to assist in preparing the new Code.

Pauncefote. Yes, I thought I could make my views

clear to you more rapidly, and I also wished to speak to you on another matter. I told the Minister that it seemed to me easier to have the Code prepared here than to send lawyers out to Japan to do it there. It seems to me so important to get the Code drafted by first rate hands, and very difficult to get the best men to go out. What do you think about this?

Lane. I quite agree with the object you have in view, but I think it might perhaps be arrived at better in another way. First of all, I assume considerable progress has already been made with the Code, and from the way in which the Criminal Code was prepared I should imagine the Government has at its disposal some first class jurists.

Pauncefote. That of course makes it different. hear the Criminal Code well spoken of.

ane. It is probably the most perfect in the world, that was the opinion I heard expressed at the International Law Conference. But there are two other points I should like to name. If the Code

would be necessary. finishing touches put on. But I hardly think this further advise be required it might be obtained might think English lawyers were conspiring to by sending the draft code to Europe to have the as far as possible in Japan, and then, should any be best attained by having the work completed is a smaller matter, though of course very imporfor Japan, and after all their effect on foreigners could probably advise as to what is best suited connected with social relations. only be carried out on the spot, such as laws be many points requiring discussions which could it would be practically impossible. out of the country, and even if palatable I think ly unpalatable to Japan to have her Code prepared chief ground is that I think it would be extremeinjure her interests. (Pauncefote laughed) But my bly give rise to jealousies. France for instance were prepared in England, it would very proba-I think the object you have in view could No one There would

Pauncefote. I quite see the force of what you say.

I had no idea the Government had the assistance of good jurists already. I was only thinking of the barristers going out; for you will hardly succeed in getting men of long legal experience to give up their practice for a short appointment. If the barristers you send out are only wanted as assistants, and to translate correctly into technical English you will no doubt find them.' In any case it is no longer such a difficult matter as Stephen had in India, there are several good codes now to act as guides. The Egyptian (Mixed Court) Code is a capital one, it is in the Courts themselves that the difficulties arise. Please tell the Minister I quite modify my opinion and no longer advise the preparation of the Code here.

After some conversation as to the possibility of securing the services of Mr. Drage, who has written a commentary and translation of the German Criminal Code. Pouncefote said; We have had some difficulty about the jurisdiction Convention (Mr. Lane understood him to add that he was not able to agree with Sir Francis Plun-

kett's views on the matter). I wish you would tell me what you think about it. It refers to the personal status of foreigners in Japan under the new régime. It is proposed in the convention that question affecting their (the foreigners) personal status should be referred for settlement to the Consular Courts. I cannot approve of this.

Lone. I am afraid some of the Consular Courts would be at a loss to understand such questions at all.

Pauncefote. Quite so, besides it seems to me absurd to talk on the one hand of abolishing Consular Courts, and on the other of referring such cases to them, which would be perpetuating them. It may work well enough in Egypt, where the Mixed Courts and the Consular Courts are permanently acting, but the case of Japan is quite different. Do you know anything about this matter?

Lane. I have not been consulted about it, all the negotiations as you know have taken place in Japan. But I have considered the matter as long ago as when I worked out the scheme of Special

in all points analogous to the European Codes. in such matters, at least for a time, until the in Japan, they would still retain their nationality tions, as defined by the laws of the foreigners mission to Japan. We then of course considered Japanese laws affecting their personal status were that even if foreigners became really domiciled introduce no new element. of the principle of the law of domicile, and would concerned. This would only involve an extension Japanese Courts themselves to treat all such questo answer, if I remember rightly, was for the this sort of matters. What was considered likely Territorial Courts with Travers Twiss for transbearing of Japanese Laws on foreigners in It might be agreed

Pauncefote. I like that idea. I think it would meet the difficulty entirely, and it would certainly be more agreable to Japan than the continuance of Consular Courts. It would in fact be only carrying out what is the *practice in Europe*, where a foreigner retains his nationality in questions like marriage, wills etc.. The Japanese Courts would

themselves decide the cases after learning from experts, if necessary, what were the laws of the foreigners interested in relation to these special points. I am much obliged to you for the idea, and will take a note of it.

ane. Of course I am only expressing a personal opinion. I have not the least knowledge of what the Government may desire. But I think Twiss agreed with me on the subject, and I think it would leave the Japanese much more free to deal with certain social laws for themselves. Foreigners would then have no interest in these particular laws.

After discussion in different subjects.

Pauncefote said: I have received a private note, from your Minister inquiring if we had heard from Germany as to the modifications in the Convention. I am not in a position to write fully in an official way, so I can only reply to the Minister that we are still waiting for communications from Germany, and so on, but I can speak more openly to you, of course unofficially.

Lane. The Minister was much pleased by the assurance you gave him the other day that the views of Japan about the tariff were being favorably considered.

Pauncefote. you. The Government is desirous to meet the recognize that Japan has a right to claim an by your Minister have had great weight with us. We at once that the arguments so clearly put forward views of Japan as far as possible, and I may say Government will be prepared to consent to the is perfectly fair, but as we are going to ask the tariff being changed almost immediately. This reasons, and as soon as the jurisdiction convenexpenses about to be incurred and for other early change of tariff, so as to meet the additional wise no connection between the two subjects. tariff matter is formally arranged. There is othercourse wish these questions settled before the fications in the jurisdiction convention, we of Japanese Government to consent to certain modifinally agreed and signed, the British I can now speak more positively to

ane. I am very glad to hear what you say, and I may assure you that the Japanese Government attach much importance to this tariff question, and will feel great satisfaction at this friendly attitude on your part. The change in the tariff will be at once a palpable proof to everyone that something definite has been done at last.

Pauncefote. I am very glad your Minister has put the question before us, and that we shall be able to meet his views. Even about the jurisdiction question I do not see why it should not come into operation sooner than proposed, if the changes suggested are made. We should not object, I think.

Lane. I do not know when the Government would be ready as regards the Courts and Code etc.. I imagine that the preparations must take some considerable time.

Pauncefote. You will explain to the Minister why I say so little in my reply to him. Of course what I have said is from *me* to *you* confidently. Lane. Yes, but I may report it to my Minister.

Pauncefote. but only telling him that it is from me to you, and not at present official. Certainly, I should wish you to do so,

&c. &c.

甲號 十九年十月二十一日發河瀨公使來電

From Kawase to Inouye

it would perpetuate Consular Jurisdiction, Course, tions affecting personal status of foreigners. This relates to the reference to Consular Courts of quesproposed modifications, but believe principal change operation of new tariff. signed, they would agree Convention with some proposed modifications was tice of my urguments and directly jurisdiction positively that British Government recognized juscommunicating officially, but Pancefote requested law by Japanese Courts. pears ready to substitute applications of foreign British Government awaits German replies before British Government thinks undesirable as call and inform him unofficially Cannot state positively to almost immediate but apbut

Oct. 21st, 1886

附屬書二

乙號 十九年十月二十一日發河瀨公使來電 From Kawase to Inouye

In reference to my telegram of to-day, full report

will be dispatched 23 October by American mail. Oct. 21st, 1886.

二六五 明治大学一月二日 井上外務大臣宛河瀬駐英公使ョリ

レーン氏意見覺書進達ノ件

附屬書 レーン氏覺書

機密 前信巳ニ開中致候通過日レーン氏サー、ジユリアン、ポ 第四十七號 十二月十三日到

見ヲ詳記候様申聞置候處別紙寫ノ通覺書相認差出候右ハ巳 開陳致シ其中尤ニ相聞へ候點モ不尠様相覺候ニ付試ニ其意 被加度候 候へトモ鬼モ角御參考ノ一端トモ可相成存候ニ付御一閱ヲ ニ時期ニ後レ候點モ可有之又實際難被行條モ可有之相考へ テ兼テ秘置候會議錄レーン氏ニ相示候處種々自己ノ意見ヲ スフオートノ望ニ依り晤談中事條約改正一件ニ及ヒシヲ以

右申進候敬具

明治十九年十一月二日 特命全權公使 河 瀬 眞 老

外務大臣伯井上馨殿

附屬書

(Copy) 十九年十月二十八日附レーン氏覺書

to the Francis Plunkett and Mr. von Holleben on Japanese jurisdiction presented by Sir Memorandum on the Draft Convention June, 1886. Treaty Conference on the 15th

Article I. vided that such rights are or shall be accorded to subjects of the Japanese Empire by the Governwords at the conclusion of the Article, as: the rights named are not accorded to aliens. In ment of....." à titre de réciprocité, by the insertion of such this case it may be desirable to limit such rights, There are some countries in which all -ord,,

Article III. The condition that the Imperial Government should bring to the notice the Governments

from ignorance of the language or otherwise they delay as regards natives might be very objectionhaving been suspended to permit such new laws mergency, been made in a few days to meet In England changes in the law have quite lately permitted under their change their laws by the most speedy process tries Governments dition would not be reciprocal, for in most counon their own subjects. themselves as regards the incidence of such laws Government can equitably be expected to find but it may fairly be questioned if the Japanese might not have cognizance of such alterations, on foreigners or this course as regards the effect of alterations some modification. There may be grounds for before they come into force, appears to require of the Powers all alterations in the laws 6 months It is not difficult to suggest cases in which any to receive the assent of Parliament without delay. the standing their interests, inasmuch as rightly reserve the power to If thus extended the conrespective constitutions. orders of Parliament cases of e-

able. The difficulty might be met by inserting at the end of the Article such words as: "As regards the subjects or citizens of.....(or their interests)."

Article V. (clause K). Article IV. This Article implies, though it does It would always be a matter of opinion who were provided with competent advocates' appears likely shall also be taken that every Court shall be not state so specifically, that Consular Jurisdiction the attendance of such at every Court. be very difficult for the Government to ensure 'competent' advocates, and in any case it would outside the usual practice in Western Countries. to give rise to difficult questions, and also to be from any cause the Convention were not ratified. ject, and its admission might be objectionable, if This opinion is not held by Sir Travers Twiss at present extends beyond the Treaty Limits. absence as this Article is framed might invalidate the action of the Courts. was consulted some years ago on the sub-The stipulation that 'care In England advocates

are supplied quite independently of the Courts, or Government, except in special cases where advocates are requested by the Court, in order to assist the administration of justice, to undertake the duties of an advocate, in the defence of a prisoner or otherwise. Clause (h) in this Article does not seem open to the same object, as the word 'competent' is omitted.

Article VIII. Foreign Governments are perhaps in the circumstances entitled to stipulate that their consent should be obtained for any change in the *judicial system* fixed by this convention, but it appears eminently desirable that any change should not be made dependent on the consent of *each* individual Power. Not only would this involve great delay, but in some cases from one reason or another, it might be difficult to secure the assent of some power, and a deadlock might ensue. It would appear very preferable if the alterations were made contingent an the assent of not less than.....of the foreign representatives in Japan.

Article X. This appears to have been badly con-Article IX. to even a slight alteration in the Police Laws, require the unanimous consent of all the Powers Codes &c. that such Sanction is not claimed as regards the England some time ago, and it is to be remarked that the Sanction of the Powers to such laws is upon' in reference to the Police and Adminismatter would be one for diplomatic treatment, be considered to affect foreigners injuriously, the Laws should be recognized. In case any Laws should importance that no right to veto any Japanese natives themselves. and that even as regards their application to requisite. This position has been abandoned by trative Laws jected to it, as much in the interest of Japan as writer that the British Government strongly obceived, and Sir Julian Pauncefote stated to the but on the grounds of comity and not as a right of England. The words 'as shall have been agreed The clause as now He pointed out that it would be imappear undesirable. It appears of the very highest framed might They imply

dictory practicable to refer all matters involving the regards many Consular Courts they would not be torial Courts to the Consular Courts, the main in any cases brought before the Special Terripersonal status of foreigners which might arise should be ascertained by the Courts if necessary by the Territorial Courts themselves, points inbe far better for all such matters to be decided of foreigners. deciding on cases involving the personal status this plan would perpetuate it for the purpose of of the Consular Jurisdiction at 3 years, whereas and lastly he objected to the proposal as contracompetent to decide on such intricate matters, Territorial Courts. issue remaining to be tried subsequently by the conformity with the foreigner's own laws, which volving such personal status to be work in Western Countries, with its that would only be carrying out the system at on the evidence of experts. He pointed out that to Article IX, He seemed of opinion that it would Further he stated that as which fixes the duration treated in extension

have become domiciled in Japan. to the rare cases when foreigners might actually

might claim the rights granted by the Convention perial Government, and revocable at their pleasure dependent on the special permission of the Imthe state of transition to extend freely the passpermitted to claim. obtain advantages which others might not be themselves to Japanese Civil Jurisdiction, to the advantages would probably lead many to submit first to secure desirable property mines or other Jurisdiction would very probably arise and give detriment of others, or some nationalities might Article, or in any case to make the right system rather than adopt that suggested in to complications. were ready. the XI. Under this Territorial Courts and the various (signed) R. Stuart Lane Questions involving criminal The inducement to be the It might be better during Article any foreigners

London October 28, , 1886.

> 二六六 明治大学一月三十一 **并上外務大臣宛** 河瀬駐英公使ョ

新條約期限到來ト同時ニ治外法權即時撤廢方ノ件

附屬書 國ノ意向回電方ノ件) (改訂條約 終期ニ於ケル 其保障ニ關スル 十九年十一月十六日發河瀬公使宛往電 爽

十九年十一月十八日發河潮公使來電 十九年十一月十八日發河瀬公使宛往電

別紙寫甲號御電訓ニ依リ本月十七日外務尚書並次官ニ面 第五十二號

趣ニテ御訓令ノ大意モヒニ承知ノ上尚書ト細談中ニ有之小 次官サー、ポンスフオート氏ニ面會ノ事ヲ致請求候處同氏 半私半公ノ談ヲ盡シ而シテ公然尚書へ面談可致爲メ最初 官ニ面晤請求ノ事モ尚書ハ巳ニ承知相成居タルカ爲メ細縷 モ御訓令ト同事件ニ付サー、フランシスヨリ電信ニ 今般ノ御訓令ハ特ニ重要ノ事件ト存候ニ付先ツ次官ニ面 政府ノ冀望ニ可成文ノ助力致度ハ我輩ノ本意ナリト 云フ日本ノ現實進步ハ我政府ノ尤注目スルトコロニテ日 最初小官ヨリ御訓示ノ旨意ヲ外務尚書ニ相述候處尚書ハ唯 概略ハ丙號ノ通以電信申進候得共更ニ左ニ其詳細致御報候 接セシ 木

右ノ前次官ニ致面會候其大略如左 ノ談ハ次官ニ任カセラレタル事ト致思考候

提示スルニハアラス十七年後少數年間假令ハ五ケ年間 熟議中ニアリシカ爲メナリ我等ニ於テハ「タフリ」一件 リ激烈ノ攻撃ヲ來タスハ必然ノ事ナルカ故ニ格別ニ難題ヲ テ如何様ノ變政ヲナシ又ハ裁判官ノ進步充分ニ達セス外人 約束ナクシテ重要ノ裁判事項ヲ放擲セバ千萬一日本政府 地ヲ與ヘラレ度切望スルハ理ノ然ル 於テ不十分ノ事アラハ外國裁判官ヲ尚繼續採用相成夫レモ ルノ備ナキ條約ヲ定結セハ他日其書ノ公布ニ際シ商人等ョ 前日モ内々爲御洩致セシ通無異議ト雖トモ新條約十七年後 フランシスヨリ來電アリ御待タセ致セシモ同事件ヲ尚書ト 小官ヨリ先ツ御訓令ノ大意ヲ開示セシニ次官云折角サー 一日本裁判官ノ其職務施行上ニ於テ又ハ其英語解明ノカニ 意ヲ滿タシムルニ不足事アルトキハ何ヲ以テ我政府ハ之 事ニ至テハ太夕苦慮セリ如何トナレ 當ルコトヲ得ン已ニ當ルヘキノ權ヲ拋擲シ又不意ニ應ス 下開港諸地ノ如キ外國人ノ格別多數居留セル地ニ限リ ト思考ス是レ即チ「タフリ」一件ニ付未タ確答ヲナ トコロナリ(ルイゾネ ハ十七年後更ニーノ ハ萬 =

得サル所以ナリ

政府已ニ同意セシ案件ノ缺點ヲ示談ニ及ヒショリ右政府 偖右ニ付當政府ヨリ獨逸政府へ英獨兩公使ノ提出シテ日本 致セシ事ノ樣被察云々且云前條十七年後ノ約東大意ハ御面 我輩ノ意想ニ落チサル處アリ何カ「ミスオンドルスタンド」 日上意外ニ澁滯ヲ生セリ昨今東京ヨリ來著ノ電報ハ少シク テハ特ニ心配ヲ生セシ模様アリテ未タ決答ヲ爲サス爲ニ時 信ス何トナレ 別ニー己ノ感觸ヲ有シ實ニ事ノ同意ナシ得ヘカラサル 商民ノ點ヨリ思考ヲ下セハ非理ノ事(アンルイゾネブル) 約束ニ依テ外國法官ヲ採用スル事ヲ希望ノ意ヲ推察シ英國 小官云御望ノ點ニ付テハ明カニ貴意ヲ了セリ十七年外更ニ ノ異論ハアレト 語ヲ英ニ限ルハ不可然英佛兩國語ハ並用セサル 會前尚書ト 此一點ニシテ日本政府ノ認諾アラハ他事ハ殆ト苦慮スへ 思考シ小官二於テモ平常ノ訓令二依テ御懸合致ストハ格 ハ存セス然レ共日本政府ニ於テハ此一點ハ至重至大ノ件 ノコトナシ目下佛政府ニテイフトコロノ日本裁判所ノ用 細議ノ事ニテ尚書モ卑見(次官ノ見)ニ同意セ ハ本件ニ モ此等ハ格別ノ難件ニモアルマシク云々 關スル 十七年ノ際限 我國ニテ ヘカラス ヲ深 ŀ

異ナキノ權利ヲ與フル事ハ國人中ヒニ之ヲ不可スル者鮮少 改正ヲ切望スル精神即基礎(フワンダミンタル、クエツシ 備サシ地位ヲ易ヘテ思考アラハ我政府ノ貴意ニ同シ得サル = 日本政府ハ終ニ其根據ヲ壞裂スヘシ己ニ一方ニ於テハ外人 點アリテ之二當ルヲ得ルト雖トモ萬一貴方ノ望ノ如クセハ タルノ實ヲ得有シ又他ノ關涉ヲ內政ニ加フル事ナシトノ一 ニアラスト雖トモ十七年ノ約期終結ニ至ラハ眞正ノ獨立國 ル)ノ比ニアラス夫レ企國ヲ開キ外人ヲシテ殆内國人ト差 ヨン)ニシテ他ノ細條件(ノツト、マタル、 ハ眞ニ不得已ノ實ナルヲ御了解可相成ト存候 特約束縛ノ決行ヲセハ我政府ハ又民人ノ苦訴ニ應スル 與へ得へキ限ヲ盡シテ之ヲ與へ一方ニ於テハ約期又外更 オフ、デテー ,

カ調停ノ手段ハナキヤ 事ニハアラスト雖トモ英政府ノ情實モ亦タ推察アリ 次官云日本政府特ニ右一件ヲ確執アルハ敢テ非議スヘキ タシ 何 ノ

共自己ノ私意ヲ以テスレハ幾分カ調和 小官云フ予ハ右前言ノ外別ニ發言スヘキ權ヲ得有セ 叉日不政府ニテ十七年間盡スヘキトコロノ勉力ハ必ス外國 政府ヲシテ滿足ヲ得セシムヘキ事疑ナシ夫ハ必ス十七年後 ノ趣向モアル ヘシ且 ス然

> 限ラス多少外人採用ノ事ハ我國利ヲ加フル爲メ自ラ不可止 更ニ期ヲ設ケテ自ヲ束縳スルコトハ我政府ノナシ能フヘカ ラサルコトト確信スト トト思考ス然共目下改修ノ條約書中ニ明文ヲ揭ケ其期外 トイフニハアラス今日全般ノ様ヲ以テ之ヲ推スニ法廷ニ 外國法官ヲ全ク除去シ日本人ノミヲ以テ法廷ノ組織ヲナ

望ス 次官云貴官ヨリモ我政府ノ旨意ヲ日本政府へ通知有之度希

右申進候敬具 小官右ノ語ヲ承諾シテ談ヲ終ヘリ

明治十九年十一月二十三日

特命 全權公使 河

外務大臣伯井上馨殿

逐テ御往復電信寫甲乙丙號相添

附屬書

甲號 (改訂條約終期に 於ける英保障に關 する英國の意向回答方 ノ件) 十九年十一月十六日附河瀬公使宛往電

From Inouye To Kawase

respect of judicial administration and also of Tariff tion of Convention, it obtains full independence Affairs at once on the subject, and inform him that of said Convention. Sound Minister for Foreign Autonomy. Japanese Government must insist that after expiracondition that guarantees are given after expiration will only accept jurisdictional Convention under I have reason to believe that English Government After a conversation with English Minister today, Answer immediately.

Nov., 16th, 1886.

附屬書二

十九年十一月十八日附河瀬公使宛往電

乙號 From Inouye To Kawasé

for, believing British Government will only accept the purpose of sounding him that reason I have conversation with British Minister, I told him for to in above telegram, is based on report from you. Jurisdictional Convention under condition referred Therefore when you are asked by British Govern-With reference to my telegram of 16th in the

> ment, reply that you made that report to me from graph, if possible, till Saturday. private information. Get reply from them, and tele-

Nov., 18th, 1886

附屬書三

丙號 十九年十一月十八日發河瀨公使來電

From Kawasé To Inouye

maining under discussion with German Government. me very openly. and Pauncefote. of 17 years native Judges should not be fully compeplied that they wished to be safe, that if at the end end of Convention. sudden change in the jurisdictional system at when published contained no security against any the part of British Merchants if the Convention possible, but feared outbreak of public feeling on to promote views of Japanese Government as far as He expressed strong desire of British Government Conventions had been agreed. Only this one re-I saw yesterday both Minister for Foreign Affairs He said almost all points in both The latter discussed question with The word guarantees only im-

read me despatch about to be sent to British Minisus separately from the conventional agreement. He would be quite satisfied if this were accorded by the chief ports, Judges might still be retained for, say, 5 years more vious instruction had been somewhat misunderstood. ter to instruct him that views of British Government tent for administering Justice, some superintend some as he had stated them to me, and that prefor instance. of most important Courts at I understood that few foreign he

ル

Nov., 18th, 1886

7

二六七 明治大年二月三日 井上外務大臣宛河瀬駐英公使ョリ

治外法權撤廢條件ニ關スル件

十九年十一月二十六日發河瀬公使宛往 十九年十一月二十五日發河瀨公使來電 十九年十一月二十四日河瀬公使宛往電 十九年十二月一日發河瀬公使來電 十九年十一月二十一日發河瀨公使宛往電

機密 第五十三號

一月二十一日到

甲號

十九年十一月二十四日發河瀨公使宛往電

From Inouye To Kawasé

(your telegram goes much further than ours) 五ケ年 ラ示セシニ氏云貴電ノ旨意ハ我方へノ通報外ノ事ニ及へリ 裁判事件ノ談判整ヒタリ日本ヨリノ通信ヲ得シカト被尋タ 明ニ付翌廿五日外務次官ポンスフオートヲ訪候處同氏ヨリ 敷日ノ後ナル 字ノ尓明モアリ別ニ取調中ノ事モアレハ公然通告ニ及フ 然今更ラニ此言ヲ發スル所以ヲ測知ナシ得スト雖トモ當日 テ前日ノ談話中氏ノ發言ニ五ケ年ノ語アリシニ拘ハラス突 ヲ以テ期ヲ裁スルハ爲シ得ヘカラサル(インポツシブル) セシカ是ハ眞ノ簡單ノ敷語ニテ只一件ノ調停ヲ報スルニ止 セリ又ブランケツトヨリノ電文ハ如此ト其最初ノ分ヲ流讀 カ爲メナリト氏云佛公使ノ佛語ノ論ハ停止(ウイスドロー) ナルモノアルニ因リ取調中ニ有之本日面晤ヲ請ヒシモ夫レ 去月廿四日甲號貴電接到候處當政府へノ通知方取計ノ義不 ヘキニモ非サレハ小官ハ別ニ辯明ヲモナサス只云電音中 ノ事ナリト此最終ノ一言ハ深ク小官ノ驚異セシトコロニシ 談ハ华私ノ事ニ リ委細ハ日本公使ヨリ通告スヘシトノ意ナリシ於是貴電 ニ付小官云折角電信ヲ接手セリト雖トモ其内數語ノ不明 ヘシト告ケテ相別レ候右次官ノ語ハ甚重要 モアリヒニー旦調定セシ談ヲ再ヒ動カス

採用ヲ要スル一條ハ氏ノ發見ニ出テ遂ニ氏ノ意ノ如クナリカ故此邊ノ事ニハ特ニ注意厚ク卽十七年ノ後更ニ外國法官 獨リ其滿足ヲ得サ シモ少數年ノ望ニ換フルニ五ケ年ノ定期ヲ以テセ 考候全體氏ハ外交官タルヨリモ寧ロ裁判上ノ經驗ニ富メル 重ネテ述へタレハ其意ハ少數年ノ文字ヲ望ミシモノ乎ト被 五ケ年トノミ鰤言セスシテ「假令ハ五年又ハ七年」ト 至リ更ニ細考候へハ全ク左様ニテハ無之矢張其精神ハ前日 何カ異論ニテモ生セシニ依レルカト臆測致タレトモ今日ニ ト異ナラサル樣思考致候然ル所以ハ氏ノ前日ノ語ニモ必ス 右次官ノ語ヲ最初承リシトキハ驚異ノ餘或ハ獨逸政府ヨリ ヲ請求シ其末稍ク去月三十日公然ノ照會ヲナスニ至リ候 ルヲ以テ他政府ノ情況ヲ先ツ承知致度又一 ルノ所以ナルカ如ク相見候 方ニハ貴訓 シハ蓋シ 語ヲ

右申進候敬具

明治十九年十二月三日

孝

外務大臣伯井上馨殿

逐テ別紙甲乙丙丁戊號往復電信寫相添候

附屬書一

井上外粉卿時代

對英交涉

ニホセ

特命全權公使 泂 瀬

乙號 十九年十一月二十五日發河瀬公使來電 judges of foreign nationality for a further term not

Government will continue to employ some cially in the protocol attached to it that Japanese

few

may seem desirable.

exceeding

five years

in such superior Courts

as

Nov., 24, 1886

at the time of signature of the treaty, declare offithat the Japanese Minister for Foreign Affairs will,

ter to the following effect.

I have promised to him

amicably today between myself and English Minis-

jurisdictional convention

has been

The question of period after the expiration of

From Kawasé To Inouye

in the term of coversation with Pauncefote today found difference Regarding your telegram of yesterday in a private years employing foreign judges.

Repeat last telegram and let me know whether I am authorised to communicate you telegram to British Government.

Nov., 25, 1886

附屬書三

號 十九年十一月二十六日附河瀬公使宛往電

You are hereby communicated my last telegram to British Government adding that after I communicated to Plunkett that telegram, he has accepted in writing, the arrangement therein described and as meeting wishes of Her Majesty's Government on the point in question.

Nov., 26, 1886.

附屬書四

T號 十九年十一月二十一日附河瀨公使宛往電

On our part the question of jurisdictional independence after seventeen years is of the greatest importance to us, also as far as public opinion in

Japan are concerned. I cannot therefore accept any arrangement which binds us over that period. Tell Minister for Freign Affairs that I hope he will meet our wishes. Our political object in view being simply to obtain full independence of jurisdiction. No fear need be entertained that this would cause any injury to foreign interest.

Nov., 21st, 1886.

附屬書五

戊號 十九年十二月一日發河瀨公使來電

From Kawasé To Inouye

Although you stated matters settled, it may interest you to receive following copy of instructions to Plunkett Nov. 18 which Minister for Foreign Affairs handed me. You may reassure Japanese Government we do not desire revival of Consular jurisdiction nor insist on permanence of foreign judges. But we should like some undertaking that such judges shall be continued for a term if the native judges should not prove equal to their duties. This could be done by exchange of notes. It should

be made clear in Convention, that existing treaty rights will not revive at expiration of Convention. We are awaiting opinion of German Government on the above points. We think claim of French Minister inadmissible.

Dec. 1, 1886.

二六八 明治大年二月三日 沖上外務大臣宛

治外法權撤廢條件ニ關スル件

機密第五十四號

一月二十一日到

三其寫ヲ交付致候處 電音ヲ通讀ノ上後電ニハ「コンフイデンシヤル」ト記シ共去月廿四日幷廿六日ノ貴電ニ付三十日外務尚書ニ面晤シニ

尚書云 I hope the settlement is satisfactory.

旨謝意ヲ述ベシ處小官英政府ノ友情厚ク終ニー大難關ノ調定スルニ至リタル

负据的 Our only wish is to increase the friendly feeling in Japan.

右ニテ談他事ニ及ヒ懸念致居候年期論ノ再發可致模様モ不

相見候

ヤルノ文字ヲ付シテ渡シ置候義ニ有之候ニハ後電ノ束縛力格別ニ硬碓ナル様覺候故コンフイデンシ踏致候得共次官ノ前語深ク懸念被致萬一ノ思想ヲ預防スル將又貴電兩通ノ寫ヲ交附スルニ付後電ノ爲メニハ少シク躊

右申進候敬具

明治十九年十二月三日

特命全權公使 河 瀨 眞 孝

外務大臣伯井上馨殿

二往電ナルニ付参看 二十一月廿四、廿六日附電信ハ前掲二六六附屬書

二六九 明治大年二月三日 押上外務大臣宛

治外法權撤廢條件ニ關スル件

附屬書 十九年十一月十八日英外務卿發在本邦英公使

機密第五十五號

一月二十一日到

別紙英外務尚書ヨリブランケツトへノ往電ハ巳ニ去一日發

ト存候ニ付差出候 下存候ニ付差出候 トイフ義ニシテ折目ノ一格ニ「コツピー」云々トアルハ搜 トイフ義ニシテ折目ノ一格ニ「コツピー」云々トアルハ搜 トイフ義ニシテ折目ノ一格ニ「コツピー」云々トアルハ搜 トイフ義ニシテ折目ノー格ニ「コツピー」云々トアルハ搜 トイフ義ニシテ折目ノー格ニ「コツピー」云々トアルハ搜 トイフ義ニシテ折目ノー格ニ「コツピー」云々トアルハ搜 トイフ義ニシテ折目ノー格ニ「コツピー」云々トアルハ搜 ・イフ義ニシテ折目ノー格ニ「コツピー」 コストアルハ搜 ・存候ニ付差出候

右申進候敬具

明治十九年十二月三日

特命全權公使 河 瀨 眞 老

外務大臣伯井上馨殿

註 1二六七附屬書五來電參照

附層

(Copy)

十九年十一月十八日英外務卿緩在本邦英公使へノ訓電

tel. No. 14 (Cypher)

EARL OF IDDESLEIGH TO SIR F. PLUNKETT.

17 17 1. 0.

Nov. 18. 1886.
Your telegram No. 16. You may reassure Japanese Government. We do not desire revival of Consular jurisdiction nor insist on permanence of

foreign judges. But we should like some undertaking that such judges shall be continued for a term, if the native judges should not prove equal to their duties. This could be done by exchange of notes. It should be made clear in Convention, that existing Treaty rights will not revive at expiration of Convention. We are awaiting opinion of German Government on the above points. We think claim of French Minister inadmissible.

弗三節 對 佛 交 涉

二七〇 明治士三十一旦士育 鮫鳥駐佛公使宛

條約改正交渉方針ニ關スル訓令ノ件

在巴里全權公使鮫島尙信へ訓條案

(本文省略)

三文書参照 一工年十一月十九日森駐英公使宛訓令同文ナ

二七一 明治士三十二月三日 鮫鳥駐佛公使宛

條約改正交渉ニ關スル件

在佛鮫島公使へ內信案

内訓狀ノ儀ハ外務卿其他へ御視示不被成方可然只今後於常

通今便貴兄へノ内訓狀トタリーフノ略目トヲ進呈仕候尤モ

通今便貴兄へノ内訓狀トタリーフノ略目トヲ進呈仕候尤モ

同氏トモ御會話我國ノ近況且近來條約改正ニ付テ政府方向
同氏トモ御會話我國ノ近況且近來條約改正ニ付テ政府方向

實ニ從來各國派出領事ヨリ製造價ノ報告モナキ故困難ヲ極 スヘク只當時苦ム所ハ製造所ノ價ト保險料運送賃手敷料等 分チ或ハ百斤又ハ壹斤ニ付何程ト區別セルタリーフヲ差出 六時迄諸氏ノ勉勵ニテ多分本月二十日頃迄ニハ精密ナルス 左樣御承知有之度候當節ハ實ニ午前九時ョリ午後五時或ハ 收税ノ高點ヨリ無税ノ部迄ノ歩合ヲ相定シモノニ御座候間 來稅則ノ制限未夕各國政府へ判然不中出候故其部類ヲ別チ 地公然談判ラ開キ候時ハ右ノ大意ト手順ニテ相運ヒ候覺悟 約中附錄ニ致度他ノ港則水先規則等ノ如キハ時日ノ都合ニ **丼ニ税關規則等併セ添差出可申候右稅關規則ハ航海貿易條** ノ外手間取申候右税目ト航海ト貿易トラ会結セシ條約草案 ョレハ或ハ半價又ハ三分ノ一等ニテ更ニ引當ニ不相成故殊 メ候且運上所へ從來外人デクラールドシタル元價ハ市價ニ ペシフヰツク、ヂユチー、トアドバリユームモ充分ニ之ヲ 又ハ場合ノ模様ニョリテ變換スル事アル故附錄トシ云バウ 御座候故其都合ニテ御地政府へモ御申立有之度候第一從